仙台市文化財調査報告書第421集

長町駅東遺跡第5･6･7･9次調査

―仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅸ―

［第２分冊］

2014 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

独立行政法人　都市再生機構

第２分冊　目次

第５章　検出遺構と出土遺物 …… 1
第３節　弥生時代の遺構と遺物 …… 1
（1）弥生土器 …… 3
（2）石器 …… 15
第４節　縄文時代の遺構と遺物 …… 78
（1）縄文土器 …… 81
第６章　自然科学分析 …… 82
第７章　総括 …… 86
第１節　古墳時代～古代の出土土器について …… 86
第２節　古墳時代～古代の集落について …… 106
（1）竪穴住居跡 …… 106
（2）特殊建物跡 …… 117
（3）掘立柱建物跡 …… 119
（4）材木列跡 …… 120
（5）集落の変遷 …… 120
第３節　まとめ …… 129
（1）縄文～弥生時代 …… 129
（2）古墳時代～古代 …… 130
（3）中世～近世 …… 130

引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

第２分冊 挿図目次

第217図　弥生時代包含層調査範囲…… 1
第218図　第9次調査区Ⅳ層遺物出土状況図 …… 2
第219図　第5次調査出土弥生土器 …… 4
第220図　第6次調査出土弥生土器(1) …… 5
第221図　第6次調査出土弥生土器(2) …… 6
第222図　第6次調査出土弥生土器(3) …… 7
第223図　第9次調査区Ⅳ層弥生土器出土状況図 … 8
第224図　第9次調査(Ⅳ層)出土弥生土器(1) …… 9
第225図　第9次調査(Ⅳ層)出土弥生土器(2) … 10
第226図　第9次調査(層位不明)出土
弥生土器(1) …… 11
第227図　第9次調査(層位不明)出土
弥生土器(2) …… 12
第228図　第9次調査(層位不明)出土
弥生土器(3) …… 13
第229図　第9次調査(層位不明)出土
弥生土器(4) …… 14
第230図　第5次調査(Ⅳ層)出土石器 …… 15
第231図　第5次調査(層位不明)出土石器(1) … 16
第232図　第5次調査(層位不明)出土石器(2) … 17
第233図　第5次調査(層位不明)出土石器(3) … 18
第234図　第6次調査(層位不明)出土石器(1) … 20
第235図　第6次調査(層位不明)出土石器(2) … 21
第236図　第6次調査(層位不明)出土石器(3) … 22
第237図　第9次調査(Ⅳ層)出土石器(1) …… 24
第238図　第9次調査区Ⅳ層石器出土状況図 …25・26
第239図　第9次調査(Ⅳ層)出土石器(2) …… 27
第240図　第9次調査(Ⅳ層)出土石器(3) …… 28
第241図　第9次調査(Ⅳ層)出土石器(4) …… 29
第242図　第9次調査(Ⅳ層)出土石器(5) …… 30
第243図　第9次調査(Ⅳ層)出土石器(6) …… 31
第244図　第9次調査(Ⅳ層)出土石器(7) …… 32
第245図　第9次調査(Ⅳ層)出土石器(8) …… 33
第246図　第9次調査(Ⅳ層)出土石器(9) …… 34
第247図　第9次調査(層位不明)出土石器(1) … 36
第248図　第9次調査(層位不明)出土石器(2) … 37
第249図　第9次調査(層位不明)出土石器(3) … 38
第250図　第9次調査(層位不明)出土石器(4)
……39・40
第251図　第9次調査(層位不明)出土石器(5) … 41
第252図　第9次調査(層位不明)出土石器(6) … 43
第253図　第9次調査(層位不明)出土石器(7) … 44
第254図　第9次調査(層位不明)出土石器(8) … 45
第255図　第9次調査(層位不明)出土石器(9) … 46
第256図　第9次調査(層位不明)出土石器(10)… 47
第257図　接合資料1～4 …… 49
第258図　接合資料5～7・9 …… 50
第259図　接合資料(Ⅳ層)出土状況図……51・52
第260図　接合資料8・10・11…… 54
第261図　接合資料12～14 …… 55
第262図　接合資料15～18・20-1 …… 56
第263図　接合資料19～21 ……57・58
第264図　接合資料22・24…… 60
第265図　接合資料23・25…… 61
第266図　接合資料26・27…… 63
第267図　接合資料28～31 …… 64
第268図　接合資料32～34 …… 65
第269図　接合資料35～38 …… 67
第270図　接合資料39～44 …… 68
第271図　接合資料45～47・49～51 …… 70
第272図　接合資料48・52…… 71
第273図　接合資料53～57 …… 73
第274図　接合資料58～61 …… 74
第275図　接合資料62～64 …… 76
第276図　接合資料65～70 …… 77
第277図　第9次調査区縄文土器出土状況図
・下層調査区基本層序 ……79・80
第278図　第6次(Ⅳ層)・第9次(Ⅸ・XV層)調査区出土
縄文土器…… 81
第279図　第5次調査土層柱状図
・火山ガラス比ダイヤグラム …… 84
第280図　竪穴住居跡重複関係模式図…… 91
第281図　竪穴住居跡出土土器集成図－1期
・2期(1) …… 92

第282図　竪穴住居跡出土土器集成図－2期(2)
…… 93
第283図　竪穴住居跡出土土器集成図－2期(3)
…… 94
第284図　竪穴住居跡出土土器集成図－2期(4)
・3期 …… 95
第285図　竪穴住居跡出土土器集成図－4期(1)
…… 96
第286図　竪穴住居跡出土土器集成図－4期(2)
・5期(1) …… 97
第287図　竪穴住居跡出土土器集成図－5期(2)
…… 98
第288図　竪穴住居跡出土土器集成図－5期(3)
・6期(1) …… 99
第289図　竪穴住居跡出土土器集成図－6期(2)
…… 100
第290図　竪穴住居跡出土土器集成図－6期(3)
…… 101
第291図　竪穴住居跡出土土器集成図－6期(4)
・時期不確定(1) …… 102
第292図　竪穴住居跡出土土器集成図
－時期不確定(2) …… 103
第293図　竪穴住居跡出土土器集成図
－時期不確定(3)・時期不明 …… 104
第294図　掘立柱建物跡・溝跡出土土器集成図 … 105
第295図　竪穴住居跡集成図(1)－1期 …… 112
第296図　竪穴住居跡集成図(2)－2期 …… 113
第297図　竪穴住居跡集成図(3)－3期 …… 114
第298図　竪穴住居跡集成図(4)－4期 …… 115
第299図　竪穴住居跡集成図(5)－5期 …… 116
第300図　竪穴住居跡集成図(6)－6期 …… 117
第301図　長町駅東遺跡の特殊建物跡…… 118
第302図　SB37・38、SD266
および周辺の掘立柱建物跡…… 119
第303図　第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図
(1期:引田式期) …… 121
第304図　第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図
(2a期:6世紀初頭～前葉) …… 122
第305図　第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図
(2b期:住社式期) …… 123
第306図　第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図
(3期:栗囲式期古段階) …… 124
第307図　第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図
(4期:郡山Ⅰ期官衙期) …… 125
第308図　第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図
(5期:郡山Ⅱ期官衙期) …… 126
第309図　第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図
(6a期:8世紀前葉) …… 127
第310図　第5・6・9次調査古墳時代～古代集落変遷図
(6b期:8世紀中葉～末葉) …… 128

第２分冊 写真図版目次

写真図版1　調査地遠景・基本層序(1)
写真図版2　基本層序(2)
写真図版3　中世～近世面全景(第5次調査区)
写真図版4　中世～近世面全景(第6次調査区－1)
写真図版5　中世～近世面全景(第6次調査区－2)
写真図版6　中世～近世面全景(第7次調査区)
写真図版7　中世～近世面全景(第9次調査区)
写真図版8　掘立柱建物跡(中世～近世)
第7次調査
写真図版9　小溝状遺構群A・B群　第5・6・9次調査
写真図版10　小溝状遺構群C・D群　第5・9次調査
写真図版11　小溝状遺構群E～K群　第6・7次調査
写真図版12　溝跡(中世～近世)(1)　第5・6次調査
写真図版13　溝跡(中世～近世)(2)　第6次調査
写真図版14　溝跡(中世～近世)(3)　第6次調査
写真図版15　溝跡(中世～近世)(4)　第6次調査
写真図版16　溝跡(中世～近世)(5)　第7次調査
写真図版17　溝跡(中世～近世)(6)　第7次調査
写真図版18　溝跡(中世～近世)(7)・井戸跡
第5・6・7・9次調査

写真図版19　土坑（中世～近世）（1）　第5次調査
写真図版20　土坑（中世～近世）（2）　第6次調査
写真図版21　土坑（中世～近世）（3）　第6・7次調査
写真図版22　土坑（中世～近世）（4）　第7次調査
写真図版23　土坑（中世～近世）（5）　第7次調査
写真図版24　土坑（中世～近世）（6）　第7・9次調査
写真図版25　土坑（中世～近世）（7）　第9次調査
写真図版26　土坑（中世～近世）（8）　第9次調査
写真図版27　土坑（中世～近世）（9）　第9次調査
写真図版28　ピット（中世～近世）（1）
第5・6・次調査
写真図版29　ピット（中世～近世）（2）　第6次調査
写真図版30　ピット（中世～近世）（3）　第7次調査
写真図版31　ピット（中世～近世）（4）　第9次調査
写真図版32　性格不明遺構（中世～近世）（1）
第7・9次調査
写真図版33　性格不明遺構（中世～近世）（2）
第6・9次調査
写真図版34　古墳時代～古代面全景（第5・6次調査）
写真図版35　古墳時代～古代面全景（第9次調査）
写真図版36　竪穴住居跡（1）　第6・9次調査
写真図版37　竪穴住居跡（2）　第5次調査
写真図版38　竪穴住居跡（3）　第5次調査
写真図版39　竪穴住居跡（4）　第5次調査
写真図版40　竪穴住居跡（5）　第5次調査
写真図版41　竪穴住居跡（6）　第6次調査
写真図版42　竪穴住居跡（7）　第6次調査
写真図版43　竪穴住居跡（8）　第6次調査
写真図版44　竪穴住居跡（9）　第6次調査
写真図版45　竪穴住居跡（10）　第6次調査
写真図版46　竪穴住居跡（11）　第6次調査
写真図版47　竪穴住居跡（12）　第6次調査
写真図版48　竪穴住居跡（13）　第6次調査
写真図版49　竪穴住居跡（14）　第6次調査
写真図版50　竪穴住居跡（15）　第6次調査
写真図版51　竪穴住居跡（16）　第9次調査
写真図版52　竪穴住居跡（17）　第9次調査
写真図版53　竪穴住居跡（18）　第9次調査
写真図版54　竪穴住居跡（19）　第9次調査
写真図版55　竪穴住居跡（20）　第9次調査
写真図版56　竪穴住居跡（21）　第9次調査
写真図版57　竪穴住居跡（22）　第9次調査
写真図版58　竪穴住居跡（23）　第9次調査
写真図版59　竪穴住居跡（24）　第9次調査
写真図版60　竪穴住居跡（25）　第9次調査
写真図版61　竪穴住居跡（26）　第9次調査
写真図版62　竪穴住居跡（27）　第9次調査
写真図版63　竪穴住居跡（28）　第9次調査
写真図版64　竪穴住居跡（29）　第9次調査
写真図版65　竪穴住居跡（30）　第9次調査
写真図版66　竪穴住居跡（31）　第9次調査
写真図版67　竪穴住居跡（32）　第9次調査
写真図版68　竪穴住居跡（33）　第9次調査
写真図版69　竪穴住居跡（34）　第9次調査
写真図版70　竪穴住居跡（35）　第9次調査
写真図版71　竪穴住居跡（36）　第9次調査
写真図版72　竪穴住居跡（37）　第9次調査
写真図版73　竪穴住居跡（38）　第9次調査
写真図版74　竪穴住居跡（39）　第9次調査
写真図版75　掘立柱建物跡（古墳時代～古代）（1）
第9次調査
写真図版76　掘立柱建物跡（古墳時代～古代）（2）
第9次調査
写真図版77　掘立柱建物跡（古墳時代～古代）（3）
第9次調査
写真図版78　材木列跡　第9次調査
写真図版79　溝跡（古墳時代～古代）（1）
第6・9次調査
写真図版80　溝跡（古墳時代～古代）（2）　第6次調査
写真図版81　溝跡（古墳時代～古代）（3）　第6次調査
写真図版82　溝跡（古墳時代～古代）（4）
第6・9次調査
写真図版83　土坑（古墳時代～古代）（1）
第6・9次調査
写真図版84　土坑（古墳時代～古代）（2）　第9次調査
写真図版85　土坑（古墳時代～古代）（3）　第9次調査
写真図版86　ピット（古墳時代～古代）（1）
第6・9次調査

写真図版87　ピット(2)・性格不明遺構
(古墳時代～古代)　第9次調査
写真図版88　第9次調査Ⅳ層遺物出土状況
(弥生時代)(1)
写真図版89　第9次調査Ⅳ層遺物出土状況
(弥生時代)(2)
写真図版90　第9次調査Ⅸ層遺物出土状況
(縄文時代)
写真図版91　小溝状遺構群・溝跡・井戸跡・土坑
・ピット出土遺物
写真図版92　性格不明遺構・竪穴住居跡出土遺物(1)
写真図版93　竪穴住居跡出土遺物(2)
写真図版94　竪穴住居跡出土遺物(3)
写真図版95　竪穴住居跡出土遺物(4)
写真図版96　竪穴住居跡出土遺物(5)
写真図版97　竪穴住居跡出土遺物(6)
写真図版98　竪穴住居跡出土遺物(7)
写真図版99　竪穴住居跡出土遺物(8)
写真図版100　竪穴住居跡出土遺物(9)
写真図版101　竪穴住居跡出土遺物(10)
写真図版102　竪穴住居跡出土遺物(11)
写真図版103　竪穴住居跡出土遺物(12)
写真図版104　竪穴住居跡出土遺物(13)
写真図版105　竪穴住居跡出土遺物(14)
写真図版106　竪穴住居跡出土遺物(15)
写真図版107　竪穴住居跡出土遺物(16)
写真図版108　竪穴住居跡出土遺物(17)
写真図版109　竪穴住居跡出土遺物(18)
写真図版110　竪穴住居跡出土遺物(19)
写真図版111　竪穴住居跡出土遺物(20)
写真図版112　竪穴住居跡出土遺物(21)
写真図版113　竪穴住居跡出土遺物(22)
写真図版114　竪穴住居跡出土遺物(23)
写真図版115　竪穴住居跡出土遺物(24)
写真図版116　竪穴住居跡出土遺物(25)
写真図版117　竪穴住居跡出土遺物(26)
写真図版118　竪穴住居跡出土遺物(27)
写真図版119　竪穴住居跡出土遺物(28)
・掘立柱建物跡出土遺物
写真図版120　溝跡出土遺物(1)
写真図版121　溝跡出土遺物(2)
写真図版122　溝跡出土遺物(3)・ピット・性格不明遺構
・河川跡・低位面トレンチ出土遺物
写真図版123　遺構外出土遺物(1)
写真図版124　遺構外出土遺物(2)
写真図版125　弥生土器(1)
写真図版126　弥生土器(2)
写真図版127　弥生土器(3)
写真図版128　弥生土器(4)
写真図版129　石器(1)
写真図版130　石器(2)
写真図版131　石器(3)
写真図版132　石器(4)
写真図版133　石器(5)
写真図版134　石器(6)
写真図版135　石器(7)
写真図版136　石器(8)
写真図版137　石器(9)
写真図版138　石器(10)
写真図版139　石器(11)
写真図版140　石器(12)
写真図版141　石器(13)
写真図版142　石器(14)
写真図版143　石器(15)
写真図版144　石器(16)
写真図版145　石器(17)・接合資料(1)
写真図版146　接合資料(2)
写真図版147　接合資料(3)
写真図版148　接合資料(4)
写真図版149　接合資料(5)
写真図版150　接合資料(6)
写真図版151　接合資料(7)
写真図版152　接合資料(8)
写真図版153　接合資料(9)
写真図版154　接合資料(10)
写真図版155　接合資料(11)
写真図版156　接合資料(12)・縄文土器

第 5 章　検出遺構と出土遺物

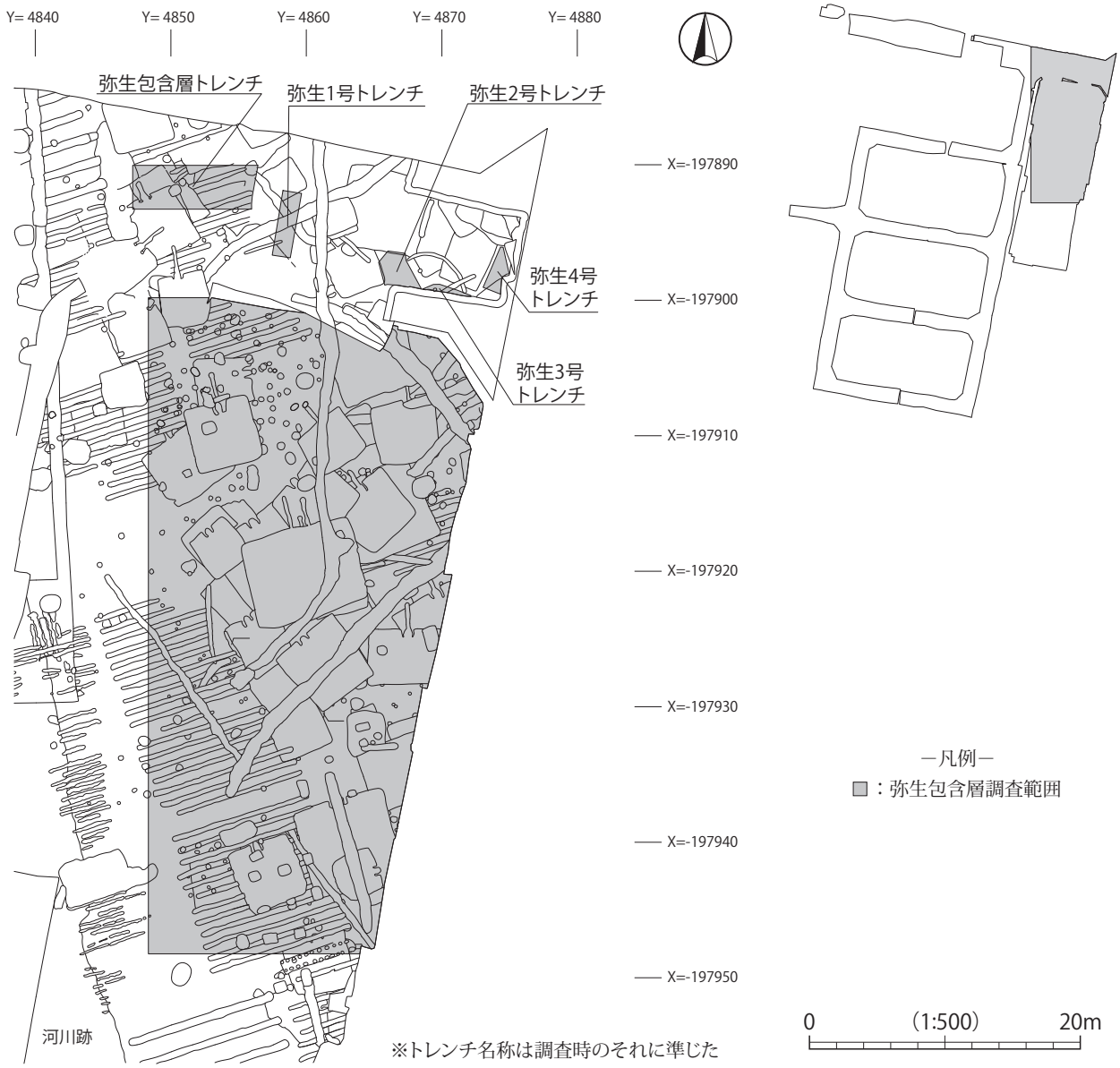
第 3 節　弥生時代の遺構と遺物

第 5・6・9 次調査において、古墳時代～古代の遺構調査終了後に弥生時代以前の遺構・遺物を確認するため基本層Ⅳ層以下の調査を行った。これらの調査区では、基本層Ⅳ層上面における遺構検出時に弥生土器や石器の出土が頻繁にみられ、基本層Ⅳ層が弥生時代の包含層であることは明白であった。このため、第 5・6 次調査ではトレンチ調査を、第 9 次調査では基本層Ⅳ層全体の調査を実施した。

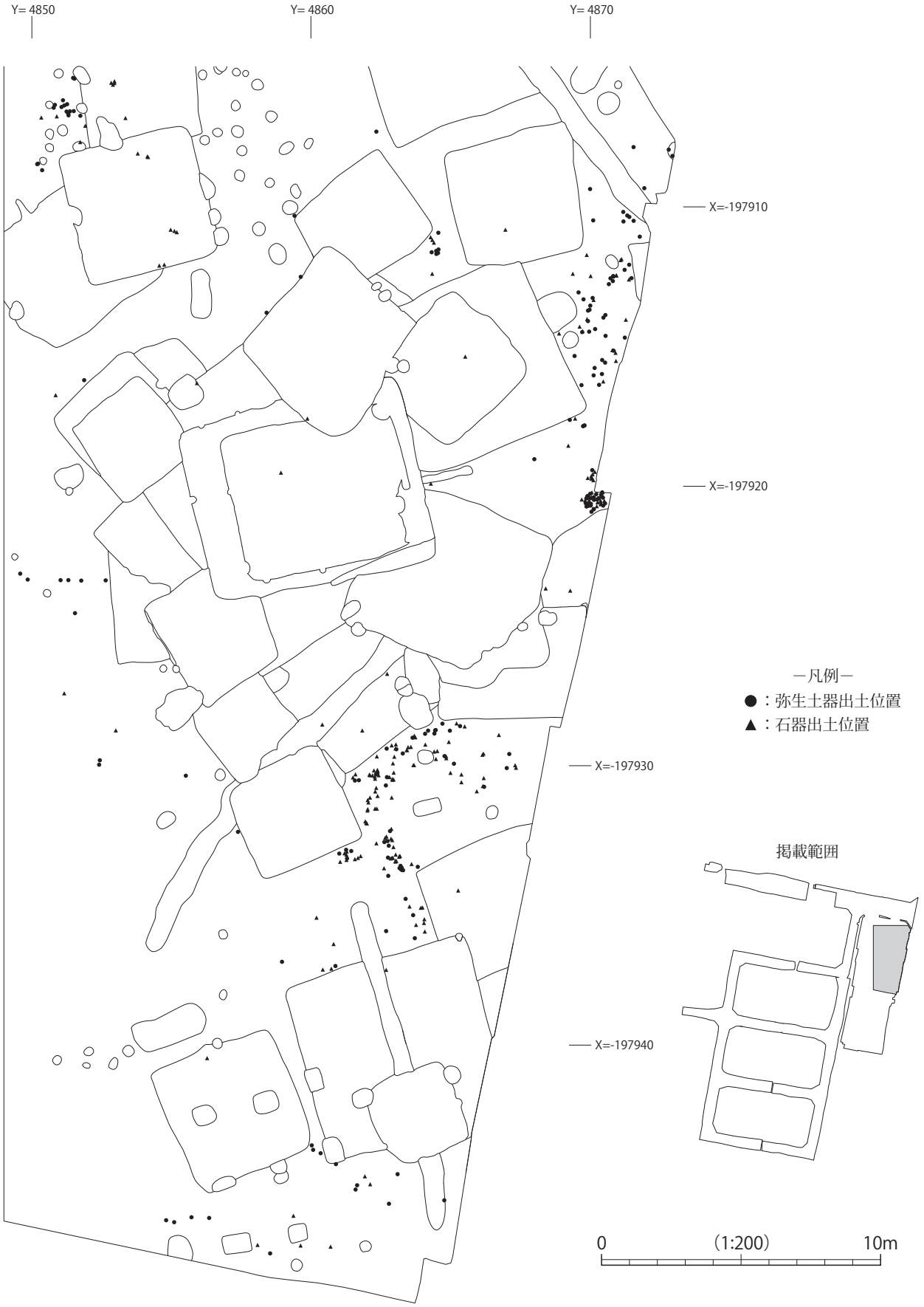
第 5 次調査の概要

調査区（北区）の東側に、東西 9m ×南北 3m 程のトレンチを 1 箇所設定した。層位は基本層Ⅳ層上面から深さ 60cm 前後までを掘削し、基本層Ⅴb 層の中位まで検出した。

遺構は検出されず、基本層Ⅳa 層中より弥生土器が僅かに出土したが、図化できるものはなかった。



第 217 図　弥生時代包含層調査範囲



第 218 図　第 9 次調査区Ⅳ層遺物出土状況図

第 6 次調査の概要

調査区（北区）の西側と、南側から東側にかけて 4 箇所のトレンチを設定した（弥生 1 ～ 4 号トレンチ）。

弥生 1 号トレンチは調査区の西側に設定し、東西 1.5m ×南北 4.8m の範囲を掘削した。基本層Ⅳ層上面から約 60cm の深さまで掘り下げ、基本層Ⅴb 層の下位を検出した。遺構は検出されず、遺物は弥生土器が少量出土したが、図化できるものはなかった。

弥生 2 号トレンチは調査区の中央南側に設定し、SI283 と SI284、SI289 の間の基本層Ⅳ層残存部分を対象とした。東西 2.1m ×南北 2.8m の不整五角形状の範囲を、基本層Ⅴa 層上面まで掘り下げた。掘削深度は 30cm 前後である。遺構は検出されず、遺物は弥生土器が少量出土したが、図化できるものはなかった。

弥生 3 号トレンチは、2 号トレンチの東隣に設定した。東西 3.6m ×南北 0.5m の不整三角形状の範囲を、基本層Ⅴa 層上面まで掘り下げた。掘削深度は 2 号トレンチと同じく、30cm 前後である。遺構は検出されず、遺物は弥生土器が少量出土したが、図化できるものはなかった。

弥生 4 号トレンチは、調査区の東側に設定した。SI4 と SI287 の中間、基本層Ⅳ層残存部分が対象である。範囲は東西 1.9m ×南北 3.5m の不整三角形状を呈する。やはり基本層Ⅴa 層上面まで掘り下げ、25cm 前後で同層を検出した。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

第 9 次調査の概要

個別のトレンチは設定せず、遺構と遺構の間に残存する基本層Ⅳ層部分を、全体にわたって調査した。西側および南側は河川跡に向かう傾斜地となっているため、調査の対象から外した。遺構は検出されなかったが、特に基本層Ⅳa 層部分を中心に弥生土器、石器などが多量出土した。

このように、いずれの調査でも当該期の遺構は全く検出されておらず、遺物が出土したのみであった。しかしその点数は相当数あり、コンテナで 10 箱以上におよぶ。

以下、当該期の出土遺物について報告する。なお、事実記載は各年次順に行うこととしたい。

（1）弥生土器（第 219 ～ 229 図）

第 5 次調査（第 219 図）

掲載した弥生土器は、全て古墳時代以降の遺構堆積土、もしくは遺構検出時に出土したものである。図化した土器は深鉢 1 点、鉢 3 点、甕 3 点、蓋 2 点である。

第 219 図－ 1 は深鉢である。底部から体部にかけて大きく開き、口縁部と体部の境に括れを持ち、口縁部が内湾気味に外傾する器形である。口縁部には区画内に 2 条の横位直線文が施される四角文、体部上端には 2 条の横位直線文が施文されている。また、口縁部内面には 1 条の横位直線文が施文されている。口唇部および体部には地文として単節 LR 縄文が施文されている。内外面に炭化物が付着している。

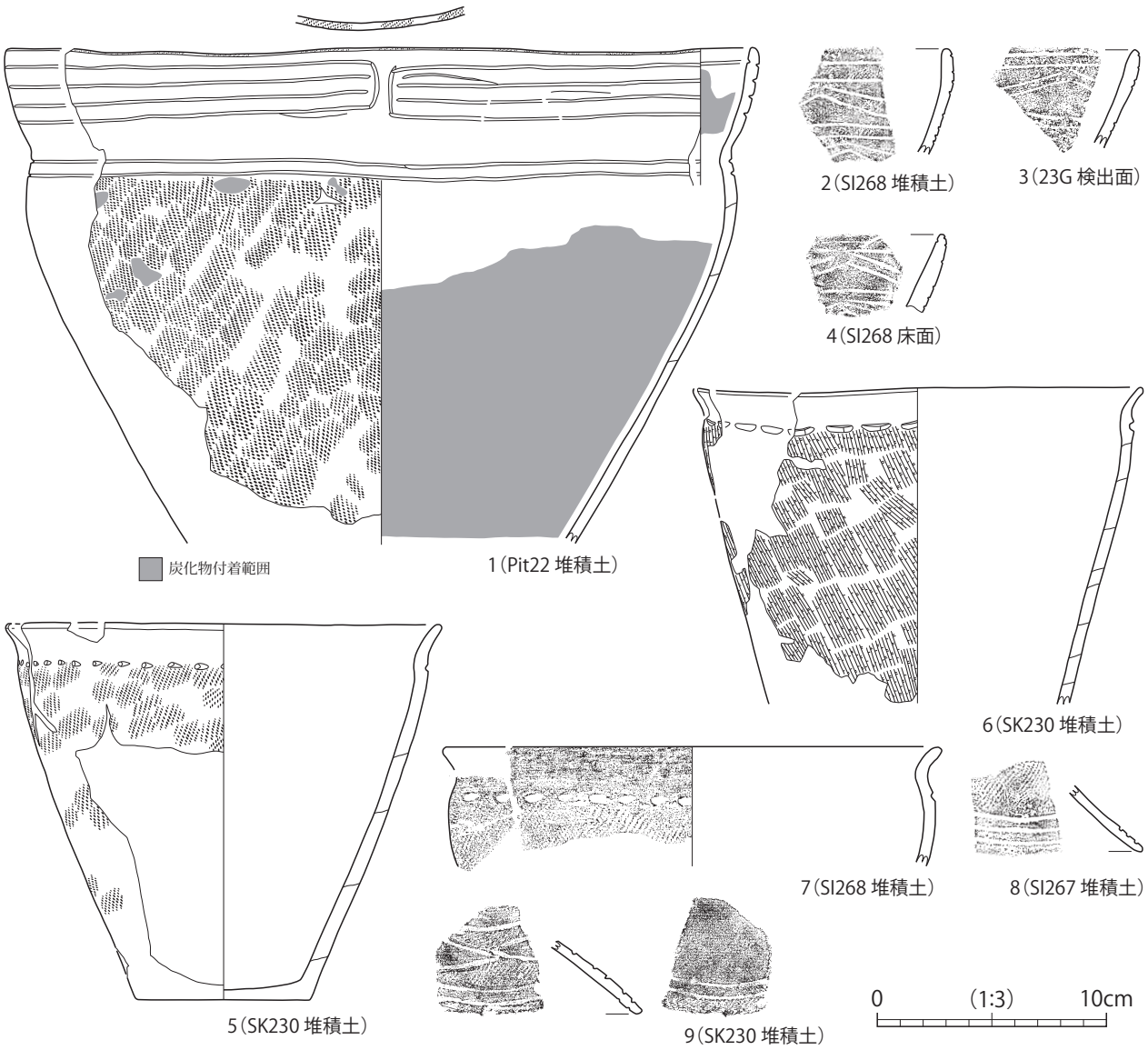
2 ～ 4 は鉢である。これら鉢の器形には、体部から口縁部にかけて内湾する 2・3、直線的に外傾する 4 がある。横位直線文と連弧文・連続山形文の組み合わせが施文され、文様内には縄文が充填される 2・3 と無文の 4 がある。2・3 の地文は単節 LR 縄文である。

5 ～ 7 は甕である。いずれも口縁部と体部の境に括れを持つ器形で、口縁部に最大径を持ち括れが緩やかな 5・6、口縁部と体部上半に最大径を持ち括れが鈍角な 7 がある。いずれも口縁部には明瞭なヨコナデが施され、体部上端に列点刺突文が施されている。これら甕の地文は、5・7 が単節 LR 縄文、6 が植物茎回転文である。

第 219 図－ 8・9 は蓋である。第 219 図－ 8 は体部が外反気味に開き、第 219 図－ 9 は体部が内湾気味に開く

器形である。3条の横位直線文や横位直線文と連弧文様の組み合わせが施文され、地文はともに単節LR縄文である。

これらの弥生土器は、中期中葉の桝形囲式に比定されるものと考えられる。

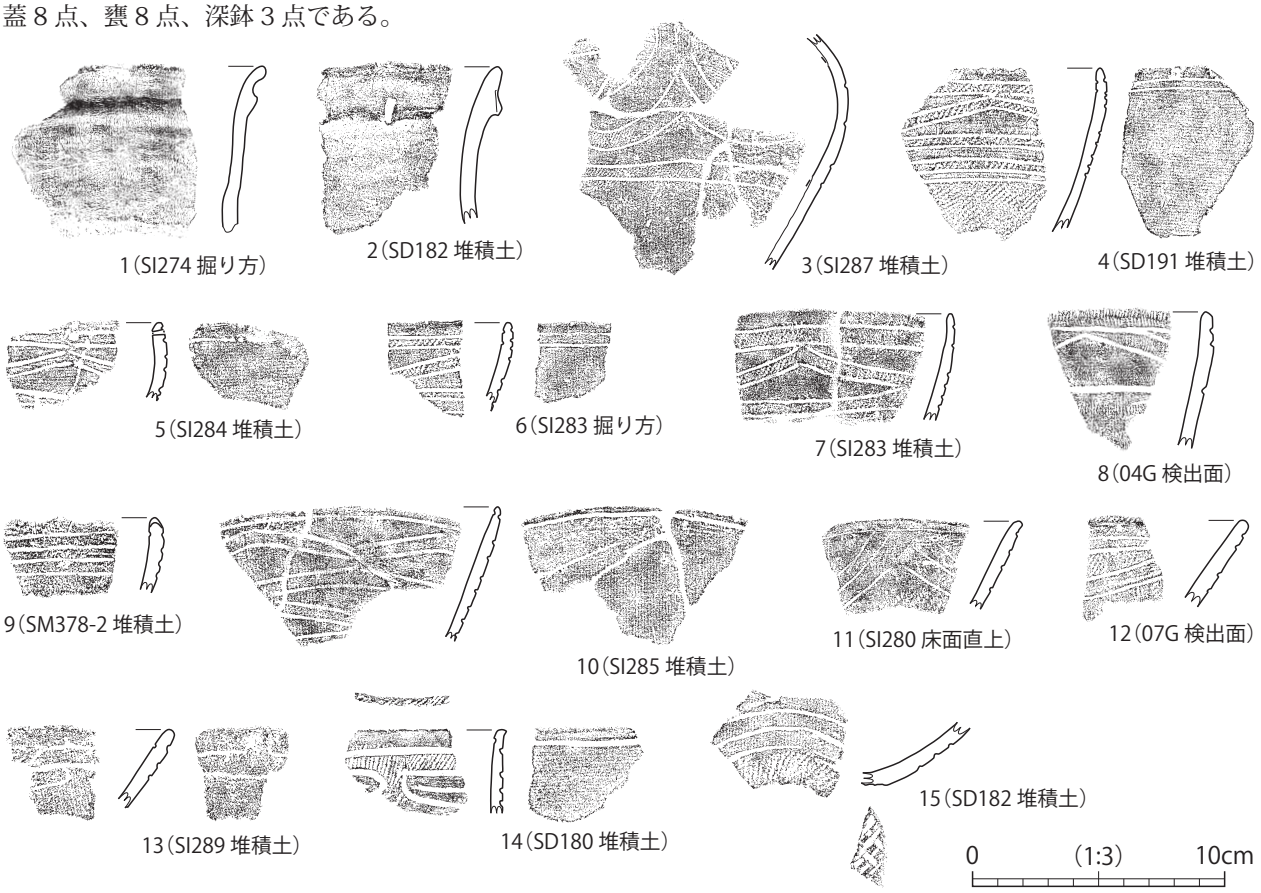


図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考	写真図版
1	B-056	第5次	Pit22	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁～体部	口唇：LR縄文横位回転 口縁：沈線→ミガキ（横位直線文＋四角文） 体部：LR縄文斜位回転	口縁：沈線→ミガキ（横位直線文）	口径：（32.6）㎝ 内外面炭化物付着	125
2	B-016	第5次	SI268	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文）	横位ミガキ		125
3	B-057	第5次	23G	検出面	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→LR縄文?→沈線（横位直線文＋連弧文）		内外面摩滅	125
4	B-027	第5次	SI268	床面直上	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→ミガキ（横位直線文＋連続山形文）	口縁：沈線（横位直線文）	内外面やや摩滅	125
5	B-044	第5次	SK230	堆積土	弥生土器	甕	口縁～底部	口縁：ヨコナデ　体上端：列点刺突（右→左） 体部：LR縄文横位回転　木葉痕	ナデ	口径：（19.0）㎝ 底径：（7.6）㎝ 器高：16.5㎝	125
6	B-046	第5次	SK230	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体部	口縁：ヨコナデ　体上端：列点刺突（左→右） 体部：植物茎回転文	ミガキ	口径：（19.6）㎝	125
7	B-018	第5次	SI268	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁：ヨコナデ　体上端：列点刺突（右→左） 体上半：LR縄文横位回転		口径：（21.6）㎝	125
8	B-013	第5次	SI267	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口縁：沈線（横位直線文） 体下半：LR縄文横位回転		内外面摩滅	125
9	B-038	第5次	SK230	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口縁：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文?）	口縁：LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文）	口縁部内外面炭化物付着	125

第219図　第5次調査出土弥生土器

第 6 次調査（第 220 ～ 222 図）

第 6 次調査でも、包含層中からは図化できるような遺物が出土しなかった。ここに掲載したのは、第 5 次調査と同じく遺構堆積土もしくは遺構検出時に出土したものである。掲載した遺物は、壺 3 点、鉢 12 点、高坏 1 点、蓋 8 点、甕 8 点、深鉢 3 点である。

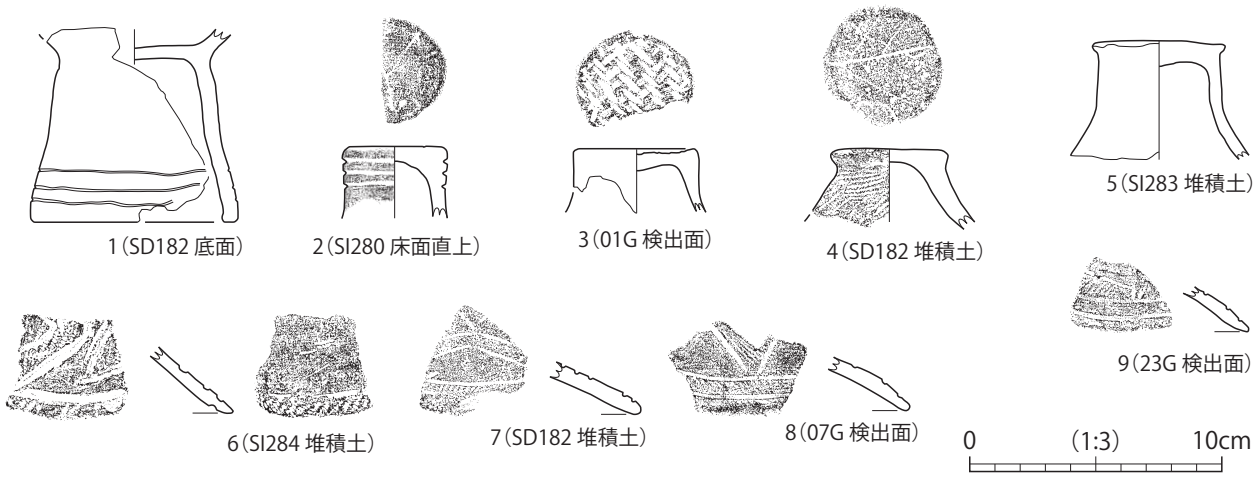


図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考	写真図版
1	B-005	第6次	SI274	掘り方	弥生土器	壺	口縁～頸部	口縁：横位隆帯貼付→ミガキ	ナデ?	内面摩滅	125
2	B-072	第6次	SD182	堆積土	弥生土器	壺	口縁～頸部	口縁：横位隆帯貼付→刺突→ミガキ	ミガキ		125
3	B-054	第6次	SI287	堆積土	弥生土器	壺	体部	体上半：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋錨形文）	ナデ		125
4	B-080	第6次	SD191	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体部	口縁～体上半：LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋山形文）	口縁：沈線→ミガキ（横位直線文）		125
5	B-050	第6次	SI284	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→ミガキ（横位直線文＋山形文）	口縁：沈線→ミガキ（横位直線文）	口縁部焼成前穿孔 孔径：3.0～4.0㎜	125
6	B-043	第6次	SI283	掘り方	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋山形文）	口縁：沈線→ミガキ（横位直線文）		125
7	B-027	第6次	SI283	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文）	ミガキ		125
8	B-031	第6次	04G	検出面	弥生土器	鉢	口縁～体部	口縁～体部：沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文＋山形文）	ミガキ	内面やや摩滅	125
9	B-062	第6次	SM378-2	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁：波状口縁・沈線（横位直線文）	口縁：沈線→ミガキ（横位直線文）	外面やや摩滅	125
10	B-052	第6次	SI285	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体部	口縁～体部：沈線→LR縄文?→沈線（横位直線文＋連弧文）	口縁：沈線→ミガキ（横位直線文）	内外面摩滅	125
11	B-023	第6次	SI280	床面直上	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：LR縄文・沈線（横位直線文＋連弧文?）	横位ミガキ		125
12	B-099	第6次	07G	検出面	弥生土器	鉢	口縁～体下半	口縁～体上半：沈線→Ｌ縄文?→沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文?）	ナデ		125
13	B-056	第6次	SI289	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文＋工字文?）	口縁：沈線・ナデ（横位・縦位直線文）		126
14	B-065	第6次	SD180	堆積土	弥生土器	鉢?	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋四角文）	口縁：沈線→ミガキ（横位直線文）		126
15	B-075	第6次	SD182	堆積土	弥生土器	鉢	体下半～底部	体下半：沈線→ミガキ　体下端：LR縄文横位回転 底面：網代痕	ミガキ		126

第 220 図　第 6 次調査出土弥生土器（1）

第 220 図－ 1 ～ 3 は壺である。1 は頸部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反し、2 は頸部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がる器形である。ともに頸部上端に横位の隆帯が貼り付けられ、2 の隆帯頂部には刺突が施されている。3 は体部の破片で、体部上半に最大径を持つ器形である。横位直線文と錨形文の組み合わせが施文され、文様内には単節 LR 縄文が充填されている。

4 ～ 15 は鉢である。これら鉢の器形は多様で、体部から口縁部にかけて内湾する 4 ～ 9、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する 10 ～ 13、体部から口縁部にかけて直立する 14 がある。横位直線文と連弧文・連続山形文の組み合わせが施文されるほか、変形工字文が施文される 13 や区画内に 1 条の横位直線文が施される四角文が施文される 14 がある。これら鉢の地文は、4・6・7・10・11・14・15 が単節 LR 縄文、12 が無節 L 縄文、8 が植物茎回転文である。15 は施文部位が体部下半にまで及んでおり、底面には網代痕が観察される。

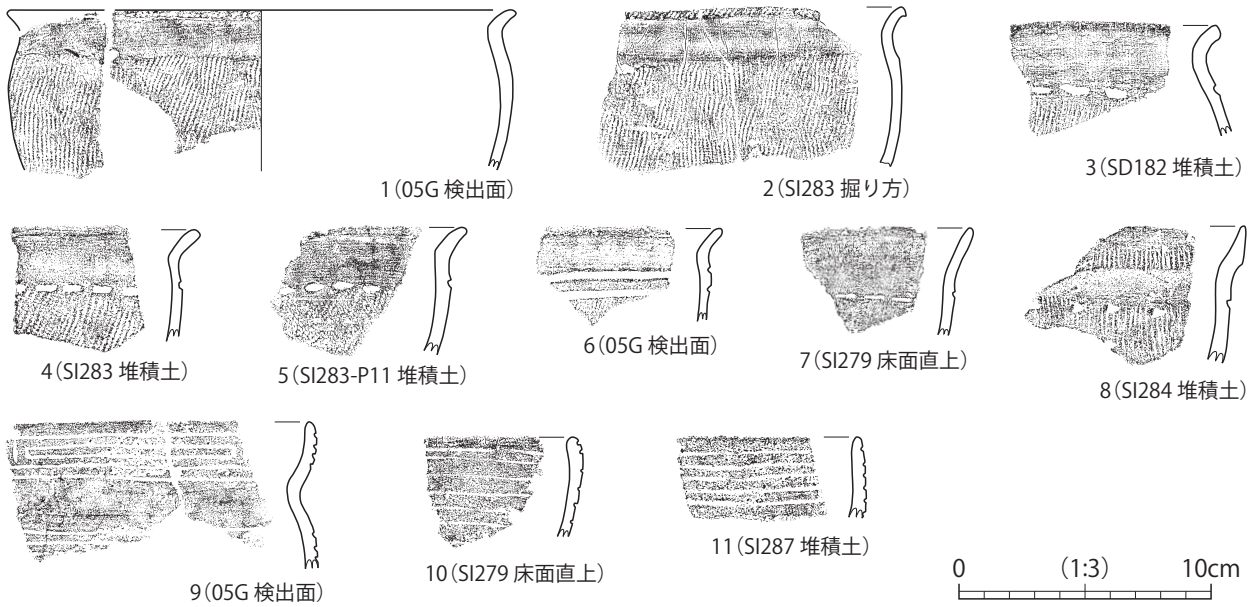


図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考	写真図版
1	B-079	第6次	SD182	底面	弥生土器	高坏	坏底部～脚部	坏底部～脚部：ミガキ 脚下端：沈線（横位直線文）	ナデ	蓋の可能性有	126
2	B-022	第6次	SI280	床面直上	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井：網代痕　体上半：沈線→ミガキ（横位直線文）	天井：ナデ 体上半：ミガキ		126
3	B-108	第6次	01G	検出面	弥生土器	蓋	天井～体上端	天井：網代痕　体上端：ナデ	ナデ		126
4	B-076	第6次	SD182	堆積土	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井：木葉痕　体上半：LR縄文斜位回転	ミガキ		126
5	B-040	第6次	SI283	堆積土	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井：ナデ　体上半：ミガキ	ミガキ		126
6	B-048	第6次	SI284	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口縁～体下半：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋幾何学文）	口縁：LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文）	口縁部内面炭化物付着	126
7	B-071	第6次	SD182	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口縁～体下半：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文→連弧文）	ミガキ	口縁部内面炭化物付着	126
8	B-093	第6次	07G	検出面	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口縁：沈線→RL縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋幾何学文?）	ミガキ		126
9	B-096	第6次	23G	検出面	弥生土器	蓋	口縁～体上半	口縁～体上半：LR縄文→沈線→ミガキ（横位・縦位・斜位直線文）	横位ミガキ		126

第 221 図　第 6 次調査出土弥生土器（2）

第 221 図－ 1 は蓋の可能性もあるが、ここでは高坏として扱った。脚部は台形状を呈し、脚部下半に 3 条の横位直線文が施文され、ミガキ調整が施されている。

2 ～ 9 は蓋である。これら蓋の器形は多様で、天井部側縁の形態では、張り出しを持たない 2、上方に向かって盛り上がる 3、外側に向かって張り出す 4・5 があり、体部から口縁部にかけての形態では、外反気味に開く 6、直線的に開く 7、内湾気味に開く 8・9 がある。横位直線文や横位直線文と幾何学文・連続山形文などの組み合わせが施文されるほか、無文の 3・5 や地文のみの 4 がある。これら蓋の地文は、4・6・7・9 が単節 LR 縄文、8 が単節 RL 縄文である。2・3 の天井部には網代痕、4 の天井部には木葉痕が観察される。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考	写真図版
1	B-090	第6次	05G	検出面	弥生土器	甕	口縁～体部	口縁：ヨコナデ　体部：LR縄文横位・斜位回転	横位ミガキ	口径：(19.8)㎝	126
2	B-044	第6次	SI283	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇：LR縄文横位回転　口縁：ヨコナデ 体上半：LR縄文横位・斜位回転	ミガキ		126
3	B-073	第6次	SD182	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇：植物茎回転文　口縁：ヨコナデ 体上端：列点刺突（左→右）　体上半：植物茎回転文	横位ミガキ		126
4	B-026	第6次	SI283	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁：ヨコナデ　体上端：列点刺突（左→右） 体上半：LR縄文横位回転	ミガキ		126
5	B-042	第6次	SI283 P11	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁：ヨコナデ　体上端：列点刺突（右→左） 体上半：LR縄文横位回転	横位ミガキ		126
6	B-102	第6次	05G	検出面	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁：ヨコナデ　体上端：沈線（横位直線文） 体上半：LR縄文横位回転	横位ミガキ		126
7	B-019	第6次	SI279	床面直上	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁：ヨコナデ　体上端：列点刺突（左→右） 体上半：植物茎回転文	横位ミガキ		126
8	B-051	第6次	SI284	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁～体上半：植物茎回転文 頸部：ヨコナデ　体上端：列点刺突（右→左）	ミガキ		126
9	B-095	第6次	05G	検出面	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→ミガキ（横位・縦位直線文＋四角文）	横位ミガキ	外面やや摩滅	126
10	B-014	第6次	SI279	床面直上	弥生土器	深鉢	口縁	口縁：沈線（横位直線文）	ミガキ	内外面炭化物付着	126
11	B-053	第6次	SI287	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁	口縁：沈線→ミガキ（横位直線文）	横位ミガキ	外面摩滅 内面炭化物付着	126

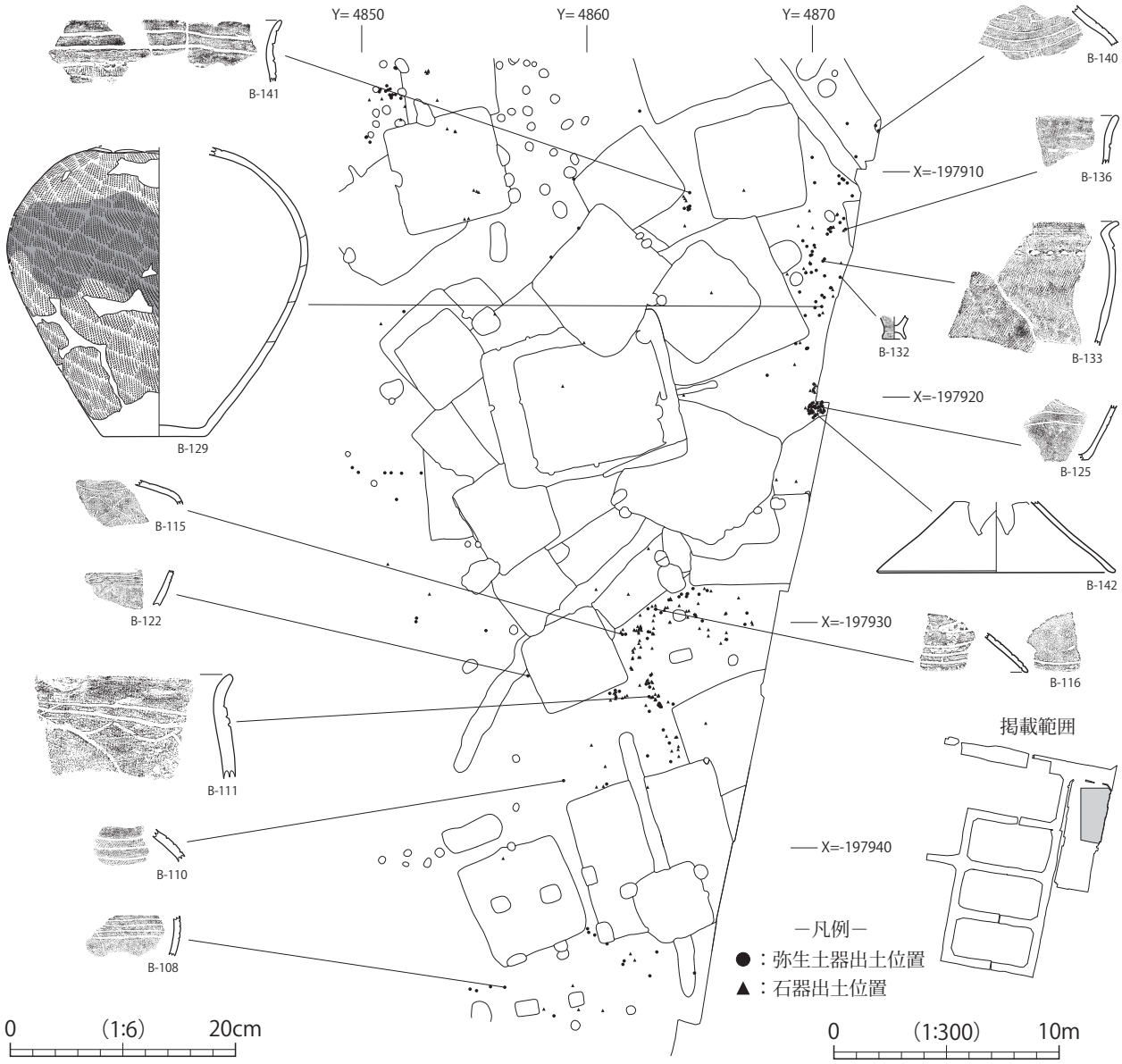
第 222 図　第 6 次調査出土弥生土器（3）

第 222 図－ 1 ～ 8 は甕である。いずれも口縁部と体部の境に括れを持つ器形である。1・2・4 ～ 8 は口縁部に最大径を持ち、3 は体部上半に最大径を持つ。口縁部に明瞭なヨコナデ調整が施され、体部上端に列点刺突文が施文されるほか、2 条の横位直線文が施文される 6 や無文の 2 がある。これら甕の地文は、1・2・4 ～ 6 が単節 LR 縄文、3・7・8 が植物茎回転文である。

9 ～ 11 は深鉢である。口縁部と体部の境が括れ、口縁部が内湾する器形である。9 は口縁部に横位直線文と縦位直線文・四角文の組み合わせが施文され、10・11 は数条の横位直線文が施文されている。10・11 の内外面には炭化物が付着している。

第 9 次調査（第 223 ～ 229 図）

第 9 次調査では、遺物包含層である基本層Ⅳ層から多量の弥生土器が出土している。また、遺構堆積土への混入も頻度が高く、他の調査区とは異なる様相を呈している。このため、本次調査出土の弥生土器については、包含層出土のものとそれ以外に分割して報告する。



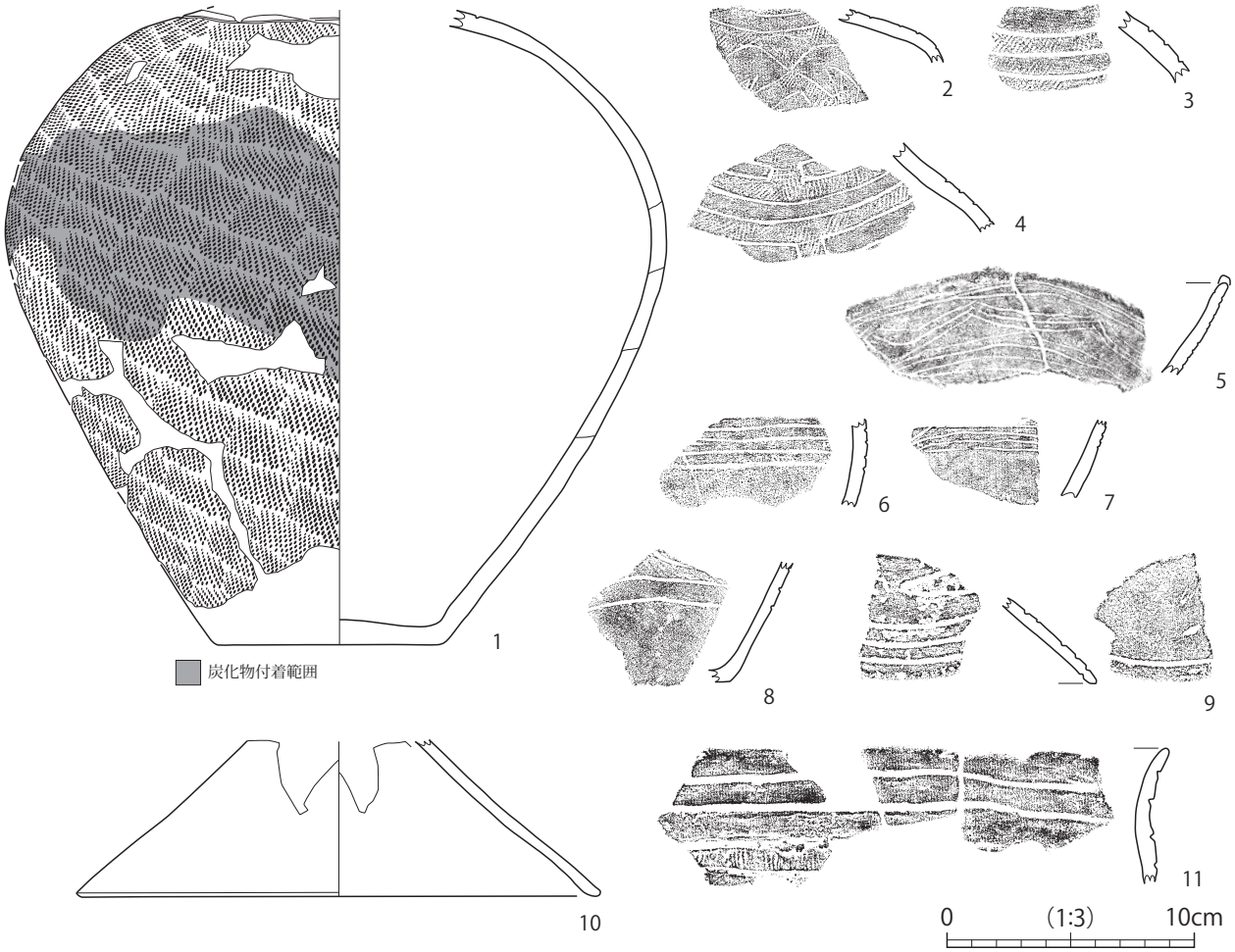
第 223 図　第 9 次調査区Ⅳ層弥生土器出土状況図

①Ⅳ層出土弥生土器（第 224・225 図）

壺 4 点、鉢 4 点、蓋 2 点、深鉢 1 点、甕 3 点、小型土器 2 点を掲載した。

第 224 図－ 1 ～ 4 は壺である。1 は体部上半に最大径を持つ器形で、器高 30cm 前後の中型品と推定される。頸部と体部の境に横位直線文が施文され、体部には単節 RL 縄文を斜位回転施文し、縦走縄文を施している。最大径付近の外面には炭化物が付着している。2 ～ 4 は体部上半の破片である。横位直線文と錨形文、四角文の組み合わせが施文され、文様内には縄文が充填されている。これら壺の地文は、1 が単節 RL 縄文、2・3 が単節 LR 縄文、4 が植物茎回転文である。

5 ～ 8 は鉢である。5 は体部から口縁部にかけて内湾気味に外傾する器形で、平口縁に 2 個 1 対の突起を持つ。口縁部の残存状況から 4 単位の突起と推定される。口縁部から体部上半にかけて横位直線文と連弧文の組み合わせが施文され、口縁部内面に 1 条の横位直線文が施されている。6・7 は体部の破片で、3 ～ 4 条の横位直線文が施文されている。8 は底部から直線的に外傾する器形で、横位直線文と連弧文の組み合わせが施文されている。文様内には縄文が充填される 8 と無文の 6 ～ 7 がある。8 の地文は単節 LR 縄文である。

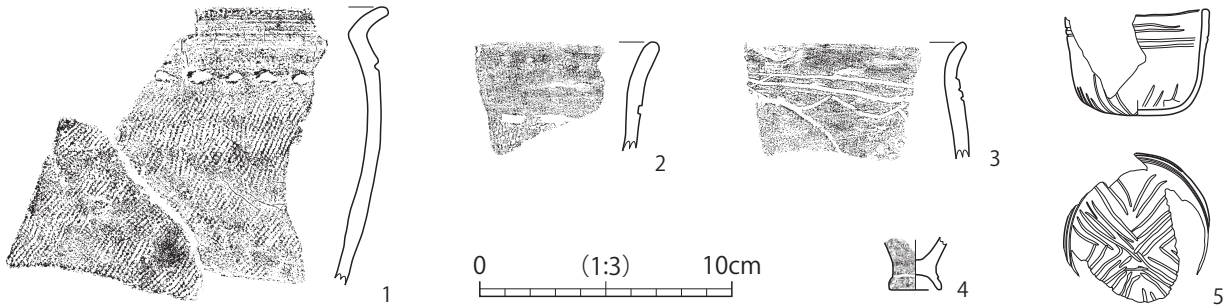


図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考	写真図版
1	B-129	第9次	15G	Ⅳ層	弥生土器	壺	体部～底部	体上端:沈線(横位直線文) 体部:RL縄文斜位回転　底面:網代痕	ミガキ	底径:(9.2)㎝ 炭化物付着	126
2	B-115	第9次	33G	Ⅳ層	弥生土器	壺	体上半	体上半:LR縄文→沈線→ミガキ(横位直線文＋錨形文)	ナデ		126
3	B-110	第9次	36G	Ⅳ層	弥生土器	壺	体部	体部:LR縄文→沈線→ミガキ(横位直線文)	ナデ		126
4	B-140	第9次	10G	Ⅳ層	弥生土器	壺	体上半	体上半:沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ(横位直線文＋四角文)	横位ミガキ		126
5	B-128	第9次	19G	Ⅳ層	弥生土器	鉢	口縁～体部	口縁:2個1対の突起　沈線→ミガキ(横位直線文) 体部:沈線→ミガキ(横位直線文＋連弧文)	口縁:沈線(横位直線文) ミガキ		126
6	B-108	第9次	44G	Ⅳ層	弥生土器	鉢	体部	体部:沈線(横位直線文)	横位ミガキ		126
7	B-122	第9次	32G	Ⅳ層	弥生土器	鉢	体部	体部:沈線→ミガキ(横位直線文)	ミガキ		126
8	B-125	第9次	25G	Ⅳ層	弥生土器	鉢	体下半～底部	体下半:LR縄文→沈線→ミガキ(横位直線文＋連弧文?)	ミガキ		126
9	B-116	第9次	29G	Ⅳ層	弥生土器	蓋	口縁～体部	口縁:沈線→ミガキ(横位沈線文) 体部:沈線→ミガキ(変形工字文)	口縁:沈線(横位直線文) 横位ミガキ		126
10	B-142	第9次	20・24G	Ⅳ層	弥生土器	蓋	口縁～体部	口縁～体部:ミガキ	口縁～体部:ミガキ	口径:(20.8)㎝	126
11	B-141	第9次	14G	Ⅳ層	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口縁:沈線(横位直線文) 体上半:沈線・LR縄文→ミガキ(横位直線文)	横位ミガキ	外面やや摩滅 炭化物付着	126

第 224 図　第 9 次調査（Ⅳ層）出土弥生土器（1）

9・10 は蓋である。ともに体部から口縁部にかけて直線的に開く器形である。9 は横位直線文と斜位直線文が施文され、残存部から変形工字文と推定される。口縁部内面に 1 条の横位直線文が施されている。10 は無文でミガキ調整されている。

11 は深鉢である。口縁部と体部の境が僅かに括れ、口縁部が外反する器形である。口縁部から体部上半にかけて幅 3mm 前後の沈線による横位直線文が施文されている。体部の文様内には単節 LR 縄文が施されているが、摩滅のため充填縄文か磨消縄文かは不明である。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考	写真図版
1	B-133	第9次	15G	Ⅳ層	弥生土器	甕	口縁～体部	口唇:LR縄文横位回転　口縁:ヨコナデ 体上端:列点刺突(右→左)　体部:LR縄文横位回転	ミガキ	外面炭化物付着	127
2	B-136	第9次	15G	Ⅳ層	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ミガキ　体上端:列点刺突(左→右) 体上半:LR縄文横位回転	ミガキ		127
3	B-111	第9次	33G	Ⅳ層	弥生土器	甕?	口縁～体上半	口縁:ミガキ 体上半:沈線→ミガキ(横位直線文＋連弧文)	ミガキ		127
4	B-132	第9次	15G	Ⅳ層	弥生土器	小型土器	体下半～脚部	つまみ:沈線(横位直線文) つまみ～口縁:ナデ	ナデ		127
5	B-126	第9次	20G	Ⅳ層	弥生土器	小型土器	口縁～底部	口縁:沈線→ミガキ(横位直線文) 底部:沈線	ナデ		127

第 225 図　第 9 次調査（Ⅳ層）出土弥生土器（2）

第 225 図－ 1 ～ 3 は甕である。いずれも口縁部と体部の境に括れを持つ器形である。1・2 は口縁部に最大径を持つ。口縁部に明瞭なヨコナデ調整が施され、体部上端に列点刺突文が施文されている。これら甕の地文は、単節 LR 縄文である。3 は体部上半に最大径を持つ。体部上半に横位直線文と連弧文の組み合わせが施文されている。大型の鉢の可能性も考えられる。

4・5 は小型土器である。4 は高坏形または蓋形と思われる小型土器で、脚部上端に 1 条の横位直線文が施文されている。5 は鉢形の小型土器であるが、蓋の可能性もある。体部上端に 2 条の横位直線文、底部には多条沈線による「＋」字状文が施文されている。

これらの弥生土器は、中期中葉の桝形囲式に比定されるものと考えられる。

②層位不明弥生土器（第 226 ～ 229 図）

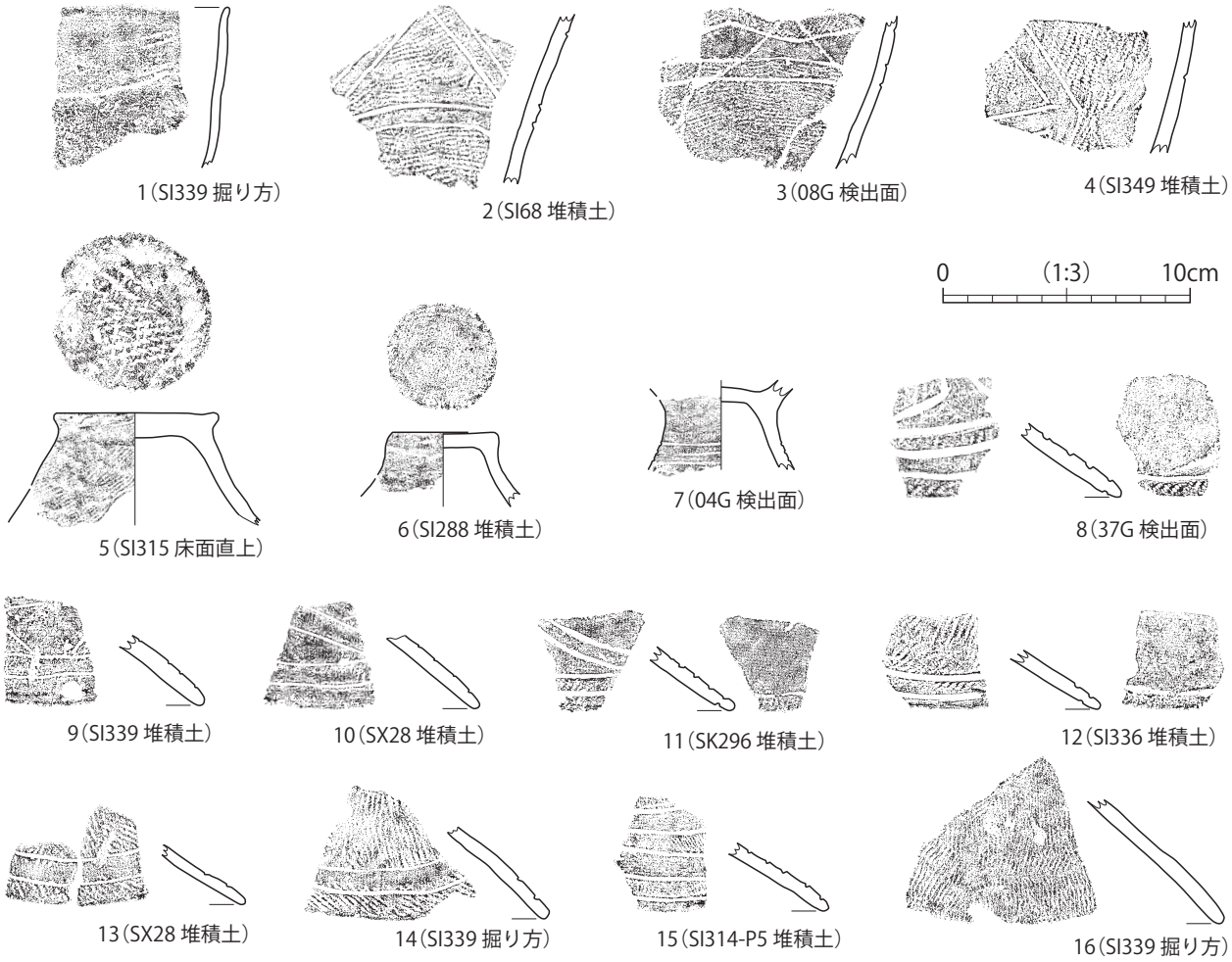
壺 7 点、鉢 16 点、蓋 12 点、甕 13 点、深鉢 5 点、高坏 1 点、小型土器 1 点を掲載した。

第 226 図－ 1 ～ 7 は壺である。1 は口径 18cm 前後の大型品で、頸部が内湾気味に直立し、口縁部が受口状を呈する。2･3 は頸部が直立し、口縁部が外反する器形である。3 の頸部上端には横位の隆帯が貼り付けられている。4 は頸部が外傾し、口縁部が内湾するもので、口唇部と口縁部に単節 LR 縄文が施文され、頸部はミガキ調整されている。5 は頸部と体部の境に横位直線文が施文されている。6・7 は体部上半の破片で、横位直線文と四角文の組み合わせが施文され、文様内に単節 LR 縄文が充填されている。

第 226 図－ 8 ～ 19、第 227 図－ 1 ～ 4 は鉢である。これら鉢の器形は多様で、体部から口縁部にかけて内湾する第 226 図－ 8・10 ～ 13、直線的に外傾する体部から口縁部が強く内湾する 9、体部から口縁部にかけて緩やかに外傾する 14 ～ 19･第 227 図－ 2 ～ 4､体部から口縁部にかけて直立する第 227 図－ 1 がある。第 226 図－ 8･11・12・19 は数条の横位直線文、9・10・13 ～ 17、第 227 図－ 2・3 は横位直線文と弧線文・連弧文・連続山形文・波状文の組み合わせ、4 は幾何学文が施文されている。第 226 図－ 12・16 は口縁部内面に横位直線文が施文されている。これら鉢の地文は、第 226 図－ 10・12・16・17・19、第 227 図－ 2 ～ 4 が単節 LR 縄文、第 226 図－ 9 が無節 L 縄文、15 が無節 R 縄文、8 が植物茎回転文である。9 の口縁部と 19 の体部上半には焼成前の穿孔が穿たれている。

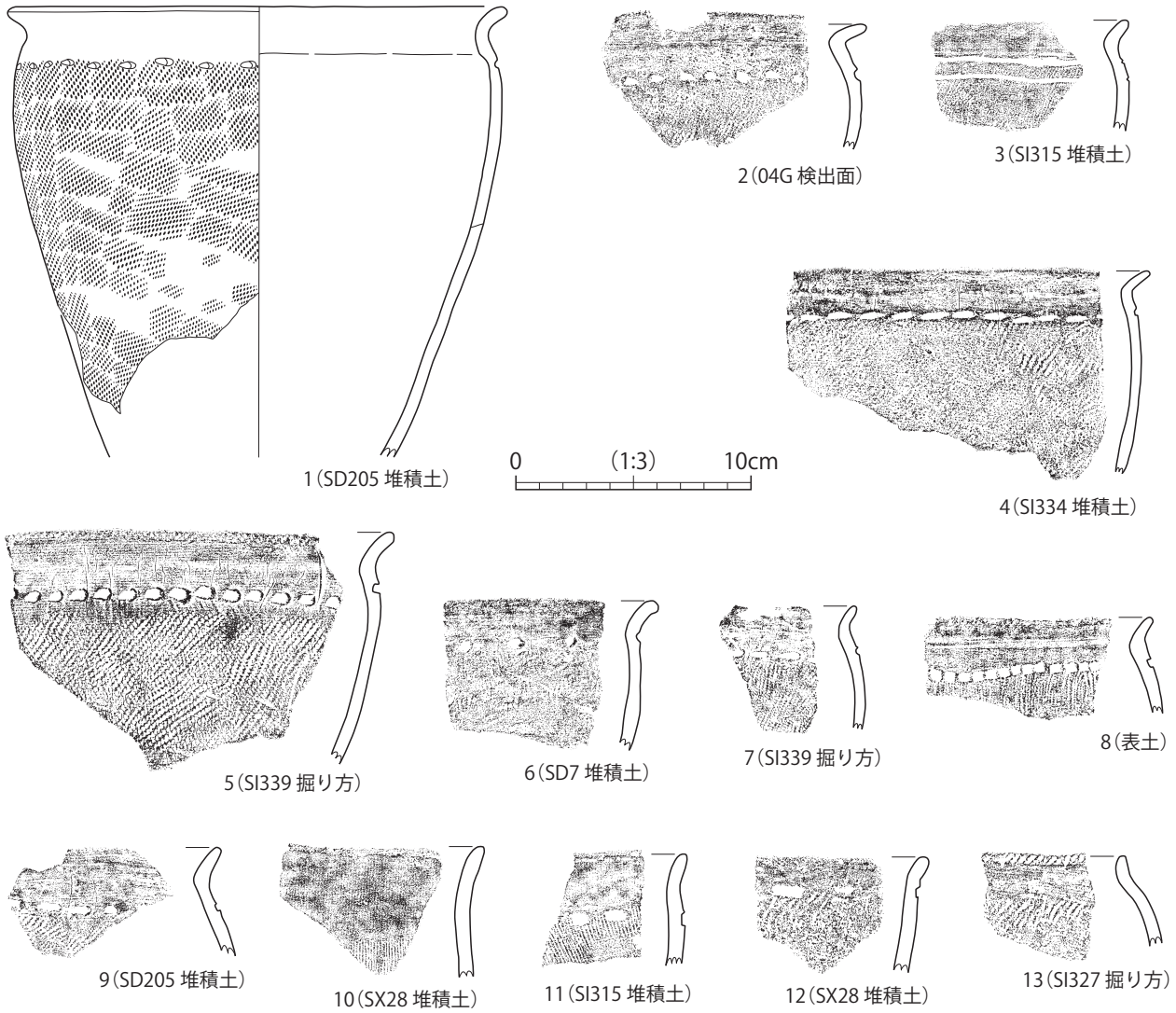
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考	写真図版
1	B-188	第9次	37G	Ⅲ層	弥生土器	壺	口縁～体上端	口縁～体上端：ミガキ	ミガキ	口径（17.8）㎝	127
2	B-086	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	壺	口縁～頸部	口縁～頸部：ミガキ	ミガキ		127
3	B-084	第9次	SX27	堆積土	弥生土器	壺	口縁～頸部	口縁：横位隆帯貼付→ミガキ	ミガキ		127
4	B-150	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	壺	口縁～頸部	口唇～口縁：LR縄文横位回転 頸部：ミガキ	横位ミガキ		127
5	B-098	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	壺	頸部～体上半	体上端：沈線（横位直線文）	ナデ?	内外面摩滅	127
6	B-097	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	壺	体部	体部：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（四角文）	ナデ		127
7	B-081	第9次	SK311	堆積土	弥生土器	壺	体部	体部：沈線→LR縄文→ミガキ（四角文）	ミガキ		127
8	B-040	第9次	SI334	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～底部	口縁：沈線→ミガキ（横位直線文） 体部：植物茎回転文　底面：網代痕	ミガキ		127
9	B-057	第9次	SI339	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：L縄文?→沈線→ミガキ	ミガキ	口縁部焼成前穿孔 孔径：3.0㎜	127
10	B-100	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文）	ミガキ	内外面炭化物付着	127
11	B-172	第9次	08G	検出面	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→ミガキ（横位直線文）	横位ミガキ		127
12	B-035	第9次	SI328	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口唇：LR縄文横位回転　口縁：突起? 口縁～体上半：沈線→ミガキ（横位直線文）	口縁：沈線（横位直線文） ミガキ		127
13	B-031	第9次	SI324	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋連続山形文）	横位ミガキ	内外面炭化物付着	127
14	B-095	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体部	口縁～体部：沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文）	ナデ		127
15	B-067	第9次	SB39P1	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体部：沈線→R縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文）	横位ミガキ		127
16	B-003	第9次	SI268P1	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（横位直線文＋連続山形文）	ナデ		127
17	B-021	第9次	SI319	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文）	ナデ		127
18	B-104	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：LR縄文→沈線→ミガキ（四角文）	ミガキ		127
19	B-146	第9次	23G	古代遺構検出面	弥生土器	鉢	口縁～体上半	口縁：LR縄文横位回転 体上半：沈線（横位直線文）	ミガキ	体部上半焼成前穿孔 孔径：5.0㎜	127

第 226 図　第 9 次調査（層位不明）出土弥生土器（1）



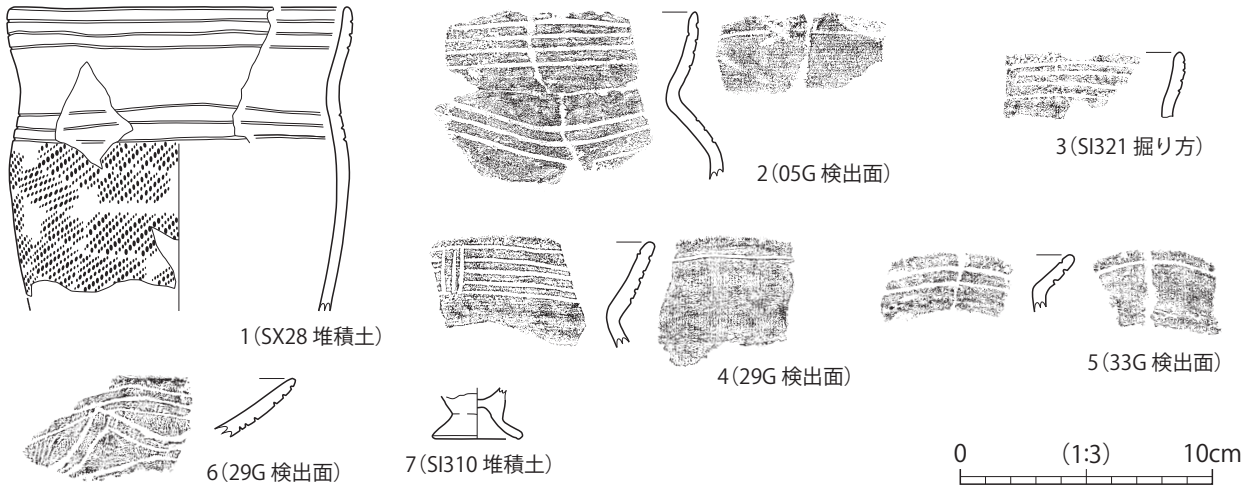
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考	写真図版
1	B-055	第9次	SI339	掘り方	弥生土器	鉢or深鉢	口縁～体上半	口縁～体上半：ミガキ	ミガキ		127
2	B-002	第9次	SI268	堆積土	弥生土器	鉢?	体部	体部：LR縄文斜位回転→沈線→ミガキ（横位直線文＋連続山形文）	ミガキ		127
3	B-149	第9次	08G	検出面	弥生土器	鉢	体部	体上半：LR縄文→沈線→ミガキ（波状文?） 体下半：LR縄文斜位回転	ミガキ		127
4	B-063	第9次	SI349	堆積土	弥生土器	鉢	体部	体部：沈線→LR縄文→沈線→ミガキ（幾何学文）	ミガキ		127
5	B-016	第9次	SI315	床面直上	弥生土器	蓋?	体下半～底部	体上半：植物茎回転文　体部上端：ナデ 底面：網代痕→周縁部ユビオサエ	ミガキ		127
6	B-004	第9次	SI288	堆積土	弥生土器	蓋	天井～体上半	天井～体上半：植物茎回転文→ミガキ	ミガキ		127
7	B-159	第9次	04G	検出面	弥生土器	蓋	つまみ～体上半	つまみ：沈線（横位直線文）→ミガキ	ナデ		127
8	B-168	第9次	37G	検出面	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口唇：LR縄文　口縁～体下半：沈線→LR縄文→ミガキ（横位直線文＋幾何学文?）	口唇：LR縄文　口縁：沈線（横位直線文）ミガキ		127
9	B-048	第9次	SI339	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口縁～体下半：沈線→ミガキ（横位直線文＋連続山形文）	ミガキ		127
10	B-101	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口縁～体下半：植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文＋山形文）	ミガキ		127
11	B-078	第9次	SK296	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口縁～体下半：LR縄文横位回転→沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文）	口縁：LR縄文→沈線 体下半：ミガキ		127
12	B-043	第9次	SI336	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口縁：LR縄文→沈線→一部ミガキ（横位直線文） 体下半：LR縄文横位回転	口縁：沈線（横位直線文） ミガキ	口縁部内面炭化物付着	127
13	B-102	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口縁～体下半：R縄文→沈線→ミガキ（横位直線文）	ミガキ		127
14	B-060	第9次	SI339	掘り方	弥生土器	蓋	口縁～体部	口縁：沈線→R縄文→沈線→ミガキ（横位直線文） 体部：R縄文横位回転	ミガキ		128
15	B-011	第9次	SI314P5	堆積土	弥生土器	蓋	口縁～体下半	口縁～体下半；沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ（横位直線文＋連弧文）	横位ミガキ		128
16	B-054	第9次	SI339	掘り方	弥生土器	蓋	口縁～体部	口縁～体部：植物茎回転文	ミガキ		128

第 227 図　第 9 次調査（層位不明）出土弥生土器（2）



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考	写真図版
1	B-073	第9次	SD205	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体部	口縁:ヨコナデ　体上端:列点刺突(左→右) 体部:LR縄文横位・斜位回転	ミガキ	口径(21.2)㎝	128
2	B-158	第9次	04G	検出面	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ヨコナデ　体上端:列点刺突(右→左) 体上半:LR縄文(附加条LR＋R)横位回転	ミガキ		128
3	B-015	第9次	SI315	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ヨコナデ　体上端:沈線(横位直線文) 体上半:LR縄文	ミガキ		128
4	B-041	第9次	SI334	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:沈線→ミガキ(横位直線文) 体上半:LR縄文?→沈線→ミガキ	ミガキ	外面炭化物付着	128
5	B-061	第9次	SI339	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体部	口唇:LR縄文横位回転　口縁:ヨコナデ 体上端:列点刺突(左→右)　体部:LR縄文横位回転	ミガキ	外面炭化物付着	128
6	B-070	第9次	SD7	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ヨコナデ　体上端:列点刺突(左→右) 体上半:LR斜位横位回転	ミガキ		128
7	B-059	第9次	SI339	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ヨコナデ　体上端:列点刺突(右→左) 体上半:LR縄文横位回転	ミガキ		128
8	B-144	第9次	―	表土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:LR縄文(附加条LR＋R)横位回転 口縁:ヨコナデ　体上端:列点刺突(右→左) 体上半:LR縄文(附加条LR＋R)横位回転	横位ミガキ		128
9	B-072	第9次	SD205	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ヨコナデ　体上端:列点刺突(左→右) 体上半:LR縄文横位回転	ミガキ		128
10	B-092	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ミガキ　体上半:植物茎回転文	ミガキ		128
11	B-018	第9次	SI315	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ミガキ　体上端:列点刺突(左→右) 体上半:植物茎回転文	ミガキ		128
12	B-087	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	甕	口縁～体上半	口縁:ミガキ　体上端:列点刺突(左→右) 体上半:L縄文横位回転文	ミガキ		128
13	B-034	第9次	SI327	掘り方	弥生土器	甕	口縁～体上半	口唇:L縄文横位回転　口縁:ミガキ 体上半:L縄文横位回転	口縁:ヨコナデ→ミガキ 体上半:ミガキ		128

第 228 図　第 9 次調査（層位不明）出土弥生土器（3）



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考	写真図版
1	B-094	第9次	SX28	堆積土	弥生土器	深鉢	口縁～体部	口縁～体上半:沈線→ミガキ（横位直線文） 体下半:LR縄文横位・斜位回転	ミガキ	口径:（13.6）㎝ 口縁部内外面炭化物付着	128
2	B-164	第9次	05G	検出面	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口縁～体上半:沈線→ミガキ（横位直線文）	口縁:沈線（横位直線文） ミガキ		128
3	B-029	第9次	SI321	掘り方	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口唇:LR縄文横位回転 口縁～体上半:沈線（横位直線文＋四角文）	横位ミガキ		128
4	B-154	第9次	29G	検出面	弥生土器	深鉢	口縁～体上半	口縁:沈線→ミガキ（横位直線文＋縦位直線文） 体上半:ミガキ	口縁:沈線（横位直線文） 横位ミガキ		128
5	B-166	第9次	33G	検出面	弥生土器	深鉢	口縁～体上端	口縁:沈線→ミガキ（横位直線文） 体上端:ミガキ	口縁:沈線（横位直線文） ミガキ		128
6	B-152	第9次	29G	検出面	弥生土器	高坏?	口縁～体上半	口縁:沈線→植物茎回転文→沈線→ミガキ （横位直線文＋連弧文）	ミガキ		128
7	B-006	第9次	SI310	堆積土	弥生土器	小型土器	体下端～脚部	つまみ～口縁:ナデ	ナデ		128

第 229 図　第 9 次調査（層位不明）出土弥生土器（4）

第 227 図－ 5 ～ 16 は蓋である。5・6 は天井部側縁が外側に向かって僅かに張り出し、7 は天井部の側縁に高いつまみが付く器形である。7・12 ～ 15 は横位直線文、8 ～ 11 は横位直線文と幾何学文・斜位直線文・連続山形文・連弧文の組み合わせが施文され、16 は地文のみである。これら蓋の地文は、8・11・12 が単節 LR 縄文、13・14 が無節 R 縄文、5・6・10・15・16 が植物茎回転文である。5 は天井部に網代痕が観察され、周縁部がユビオサエ調整されている。6 の天井部は地文施文後にミガキ調整されている。

第 228 図－ 1 ～ 13 は甕である。1 ～ 6・10 ～ 12 は口縁部に最大径を持ち、7 ～ 9・13 は体部に最大径を持つ。口縁部に明瞭なヨコナデ調整が施され、体部上端に列点刺突が施文されるほか、2 条の横位直線文が施文される 3 や無文の 10・13 がある。これら甕の地文は、1 ～ 7・9 が単節 LR 縄文、8 が附加条縄文、12・13 が無節 L 縄文、10・11 が植物茎回転文である。

第 229 － 1 ～ 5 は深鉢である。いずれも口縁部と体部の境に括れを持ち、1 ～ 4 は口縁部が内湾気味に直立または外傾し、5 は口縁部が直線的に外傾する器形である。1 ～ 3・5 は横位直線文、4 は横位直線文と縦位直線文の組み合わせが施文され、2・5 は口縁部内面に 1 条の横位直線文が施文されている。これら深鉢の地文は、単節 LR 縄文である。

6 は高坏である。内湾気味に大きく開く器形である。横位直線文と連弧文の組み合わせが施文され、文様内に植物茎回転文が充填されている。

7 は高坏形の小型土器である。内外面ともにナデ調整が施されている。

これら弥生土器は、概ね中期中葉の桝形囲式に比定されるが、第 226 図－ 9 は弥生時代前期末から中期前葉と考えられる。

（2）石器（第 230 ～ 276 図）

第 5 次調査（第 230 ～ 233 図）

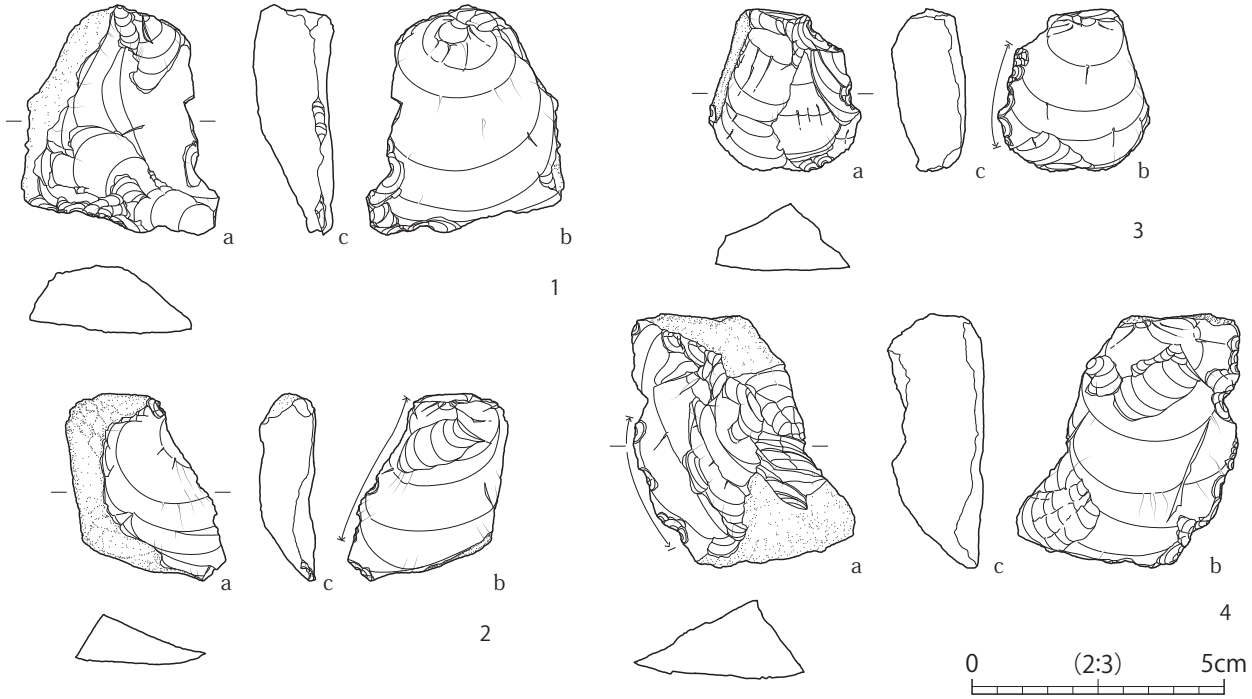
第 5 次調査で出土した石器は、殆どが層位不明である。包含層の遺物と思われる石器は基本層Ⅳa 層から 4 点出土したが、グリッド単位での取り上げのため詳細な出土位置は不明である。下層調査トレンチからは石器は出土しなかった。

①Ⅳ層出土石器（第 230 図）

二次加工のある剥片 1 点、微細剥離のある剥片 3 点を掲載した。

第 230 図－ 1 は二次加工のある剥片である。a 面の左側縁部に自然面を残し、a･b 面の下端部に二次加工を施す。石材は流紋岩である。

2 ～ 4 は微細剥離のある剥片である。2 は a 面の左側縁部に自然面を残し、b 面の左側縁部に微細剥離が認められる。3 は a 面の左側縁部に自然面を残し、b 面の左側縁部に微細剥離が認められる。4 は a 面の上下端部に自然面を残し、同面の左側縁部に微細剥離が認められる。石材は 2 が黒色安山岩、3・4 が流紋岩である。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-189	第5次	11G	Ⅳa層	打製石器	二次加工のある剥片	4.6	4	1.6	22.2	流紋岩	a面左側縁部自然面、a･b面下端部二次加工	129
2	Ka-209	第5次	12G	Ⅳc層	打製石器	微細剥離のある剥片	3.7	3.2	1.1	9.6	黒色安山岩	a面左側縁部自然面、b面の左側縁部微細剥離	129
3	Ka-211	第5次	11G	Ⅳc層	打製石器	微細剥離のある剥片	3.2	3	1.5	11.7	流紋岩	a面左側縁部自然面、b面の左側縁部微細剥離	129
4	Ka-210	第5次	18G	Ⅳc層	打製石器	微細剥離のある剥片	5.1	4.4	1.9	30.3	流紋岩	a面上下端部自然面、a面左側縁部微細剥離	129

第 230 図　第 5 次調査（Ⅳ層）出土石器

②層位不明石器（第 231 ～ 233 図）

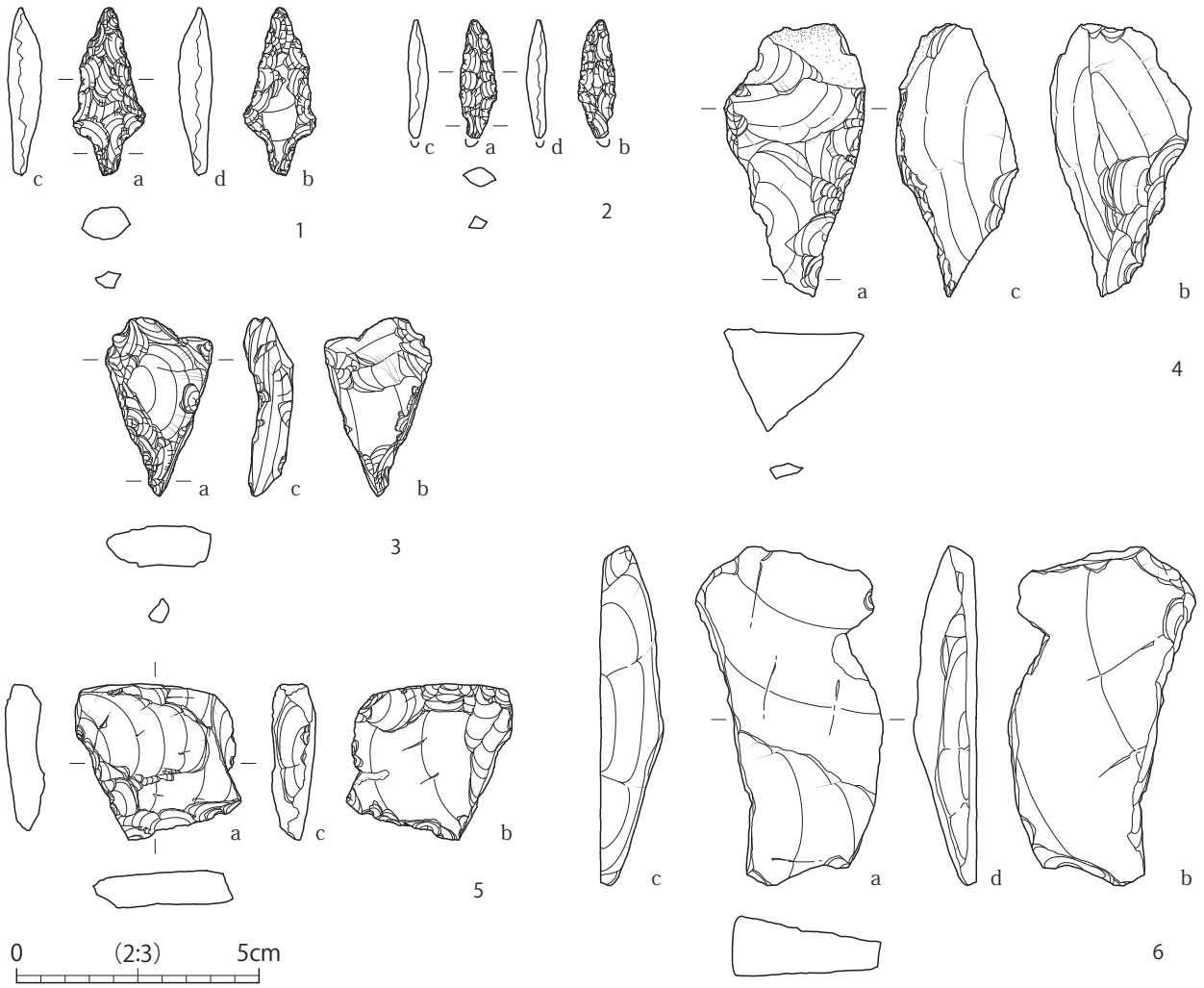
石鏃 2 点、石錐 2 点、楔形石器 1 点、板状石器（?）1 点、二次加工のある剥片 2 点、石核 3 点、石庖丁 1 点、磨製石斧 1 点を掲載した。遺構堆積土からの出土が多く、もともとは基本層Ⅳ層に包含されていたと考えられるが、遺構の構築によって原位置を失い、遺構堆積土に混入したものと思われる。そのほか遺構検出時に出土した石器も

ある程度認められたが、帰属層位を確定するまでには至っていない。この状況は第 6 次調査においても同様であり、いずれも基本層Ⅳ層のトレンチ調査では出土遺物が僅かしか認められなかったことなどから、遺物が包含されていた層位は削平などにより大半が失われてしまったと考えられる。

しかしこれら層位不明石器も出土量は多く、本来は第 9 次調査の例が示す通りある程度の密度をもって包含されていたものと思われる。また、第 5 次調査においては調査区北東寄りの 13・14・20 グリッドから出土した石器が大半を占め、ここを中心に包含されていた可能性が考えられる。

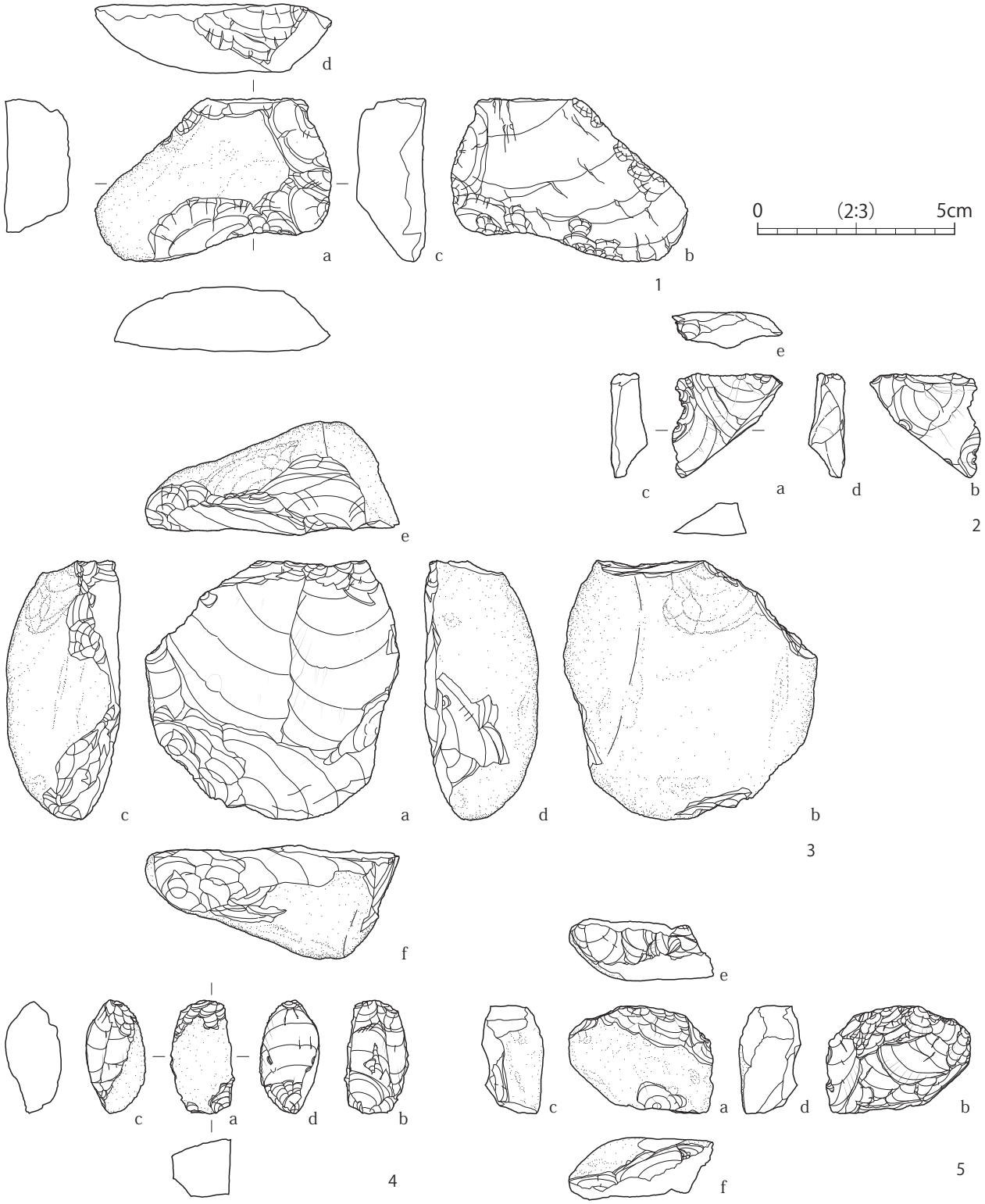
第 231 ～ 233 図に掲載した石器は残存状態が比較的良好な製品類を主に抽出し、剥片や一部の石核などは割愛した。この点は第 6 次および第 9 次調査の層位不明石器についても同様で、第 5 次と第 9 次調査では微細剥離のある剥片についても図化しなかった。

第 231 図－ 1・2 は石鏃で、ともに有茎鏃である。1 は完形品で、b 面に素材面を残す。2 は基部を欠損し、平面形状が「し」字状に歪む。いずれも入念な調整にて整形される。石材はともに流紋岩である。



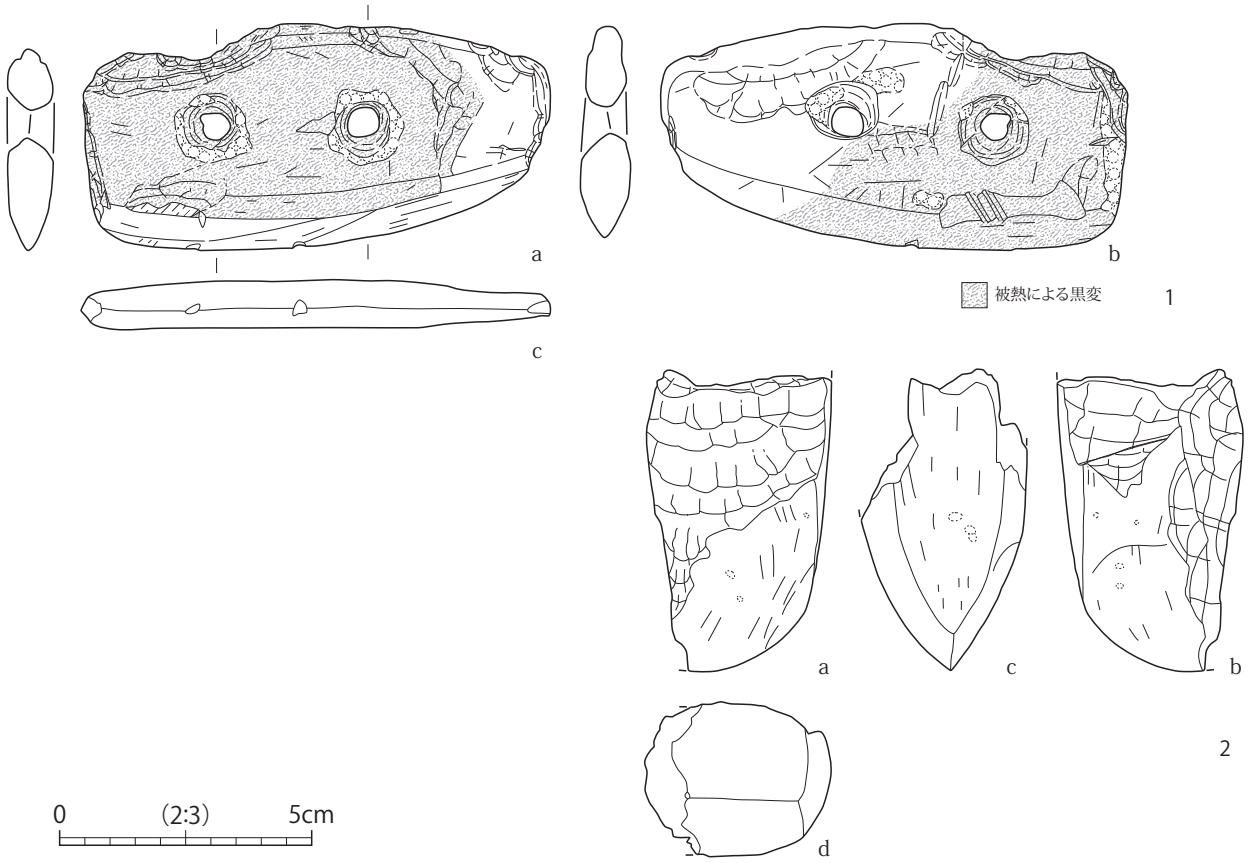
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-253	第5次	SK231	上層	打製石器	石鏃	3.5	1.5	0.7	2.6	流紋岩	完形、a･b面入念な調整、b面素材面	129
2	Ka-254	第5次	河川跡	上層	打製石器	石鏃	2.4	0.8	0.4	0.6	流紋岩	基部欠損、a･b面入念な調整	129
3	Ka-265	第5次	SI266	掘り方	打製石器	石錐	3.7	2.2	1	5.8	珪質頁岩	a面左側縁二次加工、先端部使用痕	129
4	Ka-266	第5次	河川跡	堆積土	打製石器	石錐	5.6	2.9	2.5	26.5	流紋岩	a･b面右側縁部連続する二次加工、先端部使用痕	129
5	Ka-261	第5次	SM347	堆積土	打製石器	楔形石器	3.2	3.4	0.9	11.7	黒色安山岩	上下端部ツブレ状の剥離	129
6	Ka-282	第5次	SI265	堆積土	打製石器	板状石器	7	3.9	1.3	33.9	片岩	板状石器破片	129

第 231 図　第 5 次調査（層位不明）出土石器（1）



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-286	第5次	SK230	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	4.2	6	1.8	42.2	流紋岩	a面自然面、a・b面二次加工(b面部分的)	129
2	Ka-287	第5次	SI265	床面直上	打製石器	二次加工のある剥片	2.7	2.8	0.9	4.6	流紋岩	a・b面上端部・一側縁不連続な二次加工	129
3	Ka-240	第5次	SK223	堆積土下層	打製石器	石核	6.6	6.4	2.9	121.9	流紋岩	剥片素材、a面のみ剥離作業、打面転移180°、b面全体自然面	130
4	Ka-241	第5次	20G	検出面	打製石器	石核	2.9	1.6	1.5	7.6	黒曜石	両極剥離剥片素材、b・c面剥離作業、打面転移180°、a面自然面	129
5	Ka-242	第5次	SK230	堆積土	打製石器	石核	2.8	3.7	1.6	16.8	黒曜石	b面同一方向の細かい剥離作業、a面自然面	130

第 232 図　第 5 次調査（層位不明）出土石器（2）



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Kb-008	第5次	SI265	堆積土	磨製石器	石庖丁	4.6	9.3	1.1	56.3	片岩	紐孔外径1.5cm・内径0.6cm、敲打・剥離→磨整形、刃部顕著な光沢痕、大半被熱	130
2	Kb-001	第5次	SK230	堆積土	磨製石器	太型蛤刃石斧	(6)	(3.7)	(3.2)	87.3	黒色頁岩	刃部、折損→剥離、a～c面線状痕	130

第 233 図　第 5 次調査（層位不明）出土石器（3）

3・4 は石錐で、ともにやや大型の製品である。3 は a 面の左側縁部を中心に入念な二次加工を施し、先端部には使用時の微細剥離が認められる。4 は a 面の上端部に自然面を残し、a・b 面とも右側縁部を中心に連続する二次加工を施す。やはり先端部には使用時の微細剥離が認められる。石材は 3 が珪質頁岩、4 が流紋岩である。

5 は楔形石器である。上下端部にはツブレ状の剥離が認められる。石材は黒色安山岩である。

6 は板状石器の一部と考えられる。石材は片岩とみられる。

第 232 図－ 1・2 は二次加工のある剥片である。1 は a 面に自然面を残し、b 面とともに二次加工を施すが、b 面の加工は部分的な剥離に留まる。2 は a・b 面の上端部および一側縁部に不連続な二次加工を施す。石材は 1・2 ともに流紋岩である。

第 232 図－ 3 ～ 5 は石核である。3 は大型の剥片素材の石核で、剥離作業は a 面のみに行われ、打面を 180°転移させている。b 面は全体が自然面である。4 は両極剥離による剥片素材の石核で、剥離作業は b・c 面を中心に行われ、途中で打面を 180°転移させている。a 面には自然面を残している。5 は b 面にて同一方向からの細かい剥離作業が行われている。a 面には自然面を残す。石材は 3 が流紋岩、4・5 が黒曜石である。

第 233 図－ 1 は石庖丁である。板状節理の素材周縁部を敲打・剥離し、その後磨整形される。紐孔は 2 箇所あり、孔部分を両面とも敲打し、その後回転穿孔を行う。刃部には顕著な光沢痕が認められ、大半が被熱する。石材は片岩である。

第 233 図－ 2 は磨製石斧で、太型の蛤刃石斧である。刃部破片で、欠損後に折れ部分に剥離が行われる。石材は黒色頁岩と思われる。

第 6 次調査（第 234 ～ 236 図）

石鏃 1 点、削器 2 点、楔形石器 1 点、二次加工のある剥片 8 点、微細剥離のある剥片 5 点、石核 3 点を掲載した。本調査区ではⅣ層出土の資料がなく、このため微細剥離のある剥片を含む全ての器種を図化した。

第 234 図－ 1 は石鏃である。有茎鏃で形状は細長い三角形を呈し、先端部を欠損する。入念な調整にて整形されている。石材は流紋岩である。

2・3 は削器である。2 は半月状の形状を呈し、a 面全体と b 面の周縁部に二次加工を施す。3 は横長の剥片を素材とし、a・b 面の周縁部に二次加工を施す。著しく摩耗し、a・b 面に二重パティナが認められる。石材は 2 が黒色安山岩、3 が安山岩である。

4 は楔形石器である。a 面に自然面を残し、上下両端部にツブレ状の剥離が認められる。c 面は両極剥離である。石材は流紋岩である。

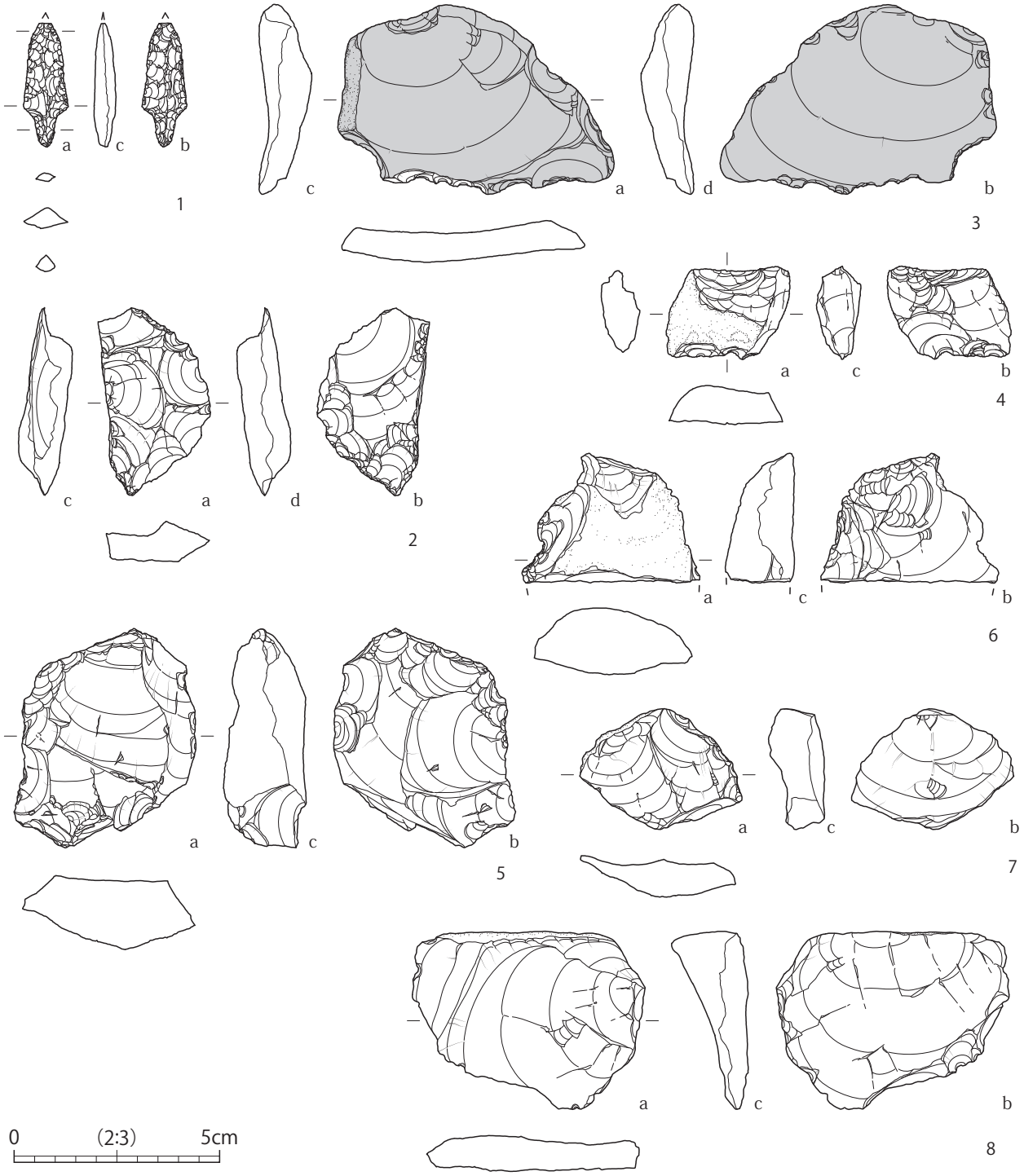
第 234 図－ 5 ～ 8、第 235 図－ 1 ～ 4 は二次加工のある剥片である。第 234 図－ 5 は a・b 面の周縁部に二次加工を施し、a 面の稜上にはツブレ状の微細剥離が認められる。6 は下半部を欠損し、a 面の広い範囲に自然面を残す。二次加工は a・b 面ともに左側縁部に施す。7 は a 面の右側縁部に二次加工を施し、b 面には素材面をそのまま残している。8 は上端部に自然面を残し、b 面の周縁部に不連続な二次加工を施す。第 235 図－ 1 は大型の剥片を素材とし、a 面の周縁部に不連続な二次加工を施す。2 は a・b 面の両側縁部に細かい二次加工を連続して施す。3 は a 面の一部に二次加工を施し、その後折れが生じている。4 は a 面の広い範囲に自然面を残し、同面の両側縁部に二次加工を施す。右下部には折れが生じている。石材は第 234 図－ 5 ～ 8、第 235 図－ 1・4 が流紋岩、第 235 図－ 2・3 が頁岩である。

第 235 図－ 5 ～ 9 は微細剥離のある剥片である。5 は鉤状の形状を呈し、その括れ部の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲はともに僅かである。6 は a 面の両側縁部および b 面の右側縁部に微細剥離が認められる。両面剥離部分は剥離範囲が a・b 面ともほぼ同じである。7 は厚みのある素材で、a・b 面の上端部を中心に微細剥離が認められる。b 面では剥離範囲が左側縁の上部にまで達している。8 は a 面の下端部と、b 面の右側縁部から下端部にかけて微細剥離が認められる。9 は上端部に自然面を残し、一側縁部の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲は b 面の方が狭い。石材は 5 ～ 7・9 が流紋岩、8 が頁岩である。

第 236 図－ 1 ～ 3 は石核である。1 は剥片素材の石核で、断面形状は船底形を呈する。剥離作業はほぼ全面にて行われ、b 面の右上方と e 面の左上方には細かな剥離が認められる。自然面を b 面の一部に残し、e 面には節理面が形成されている。2 は亜角礫を素材とする石核で、各面に自然面を残す。剥離作業は上半部に集中して行われる。剥離作業中、打面を 90°転移させている。3 も亜角礫素材と考えられ、下面から c 面にかけて自然面を残す。剥離作業は a・b・d の 3 面で行われ、剥離面は幅広である。自然面には被熱痕が認められ、加熱処理後に剥離作業が行われたことが判る。石材は 1 が頁岩、2 が流紋岩、3 が石英岩である。

第 9 次調査（第 237 ～ 256 図）

第 9 次調査では基本層Ⅳ層中からの出土が多く認められ、本書ではこのうち 53 点を掲載した。ただし第 238 図に示したようにⅣ層の大半部分が遺構によって失われ、断片的な出土状況しか把握できなかった。雑駁に見れば 33 グリッド、特に SX28 の周辺に集中する傾向が窺え、SX28 堆積土の石器も出土量が他の遺構を上回っている点が注意される。そのほか本調査区では出土層位不明の石器も多く、これらについても 50 点を掲載した。

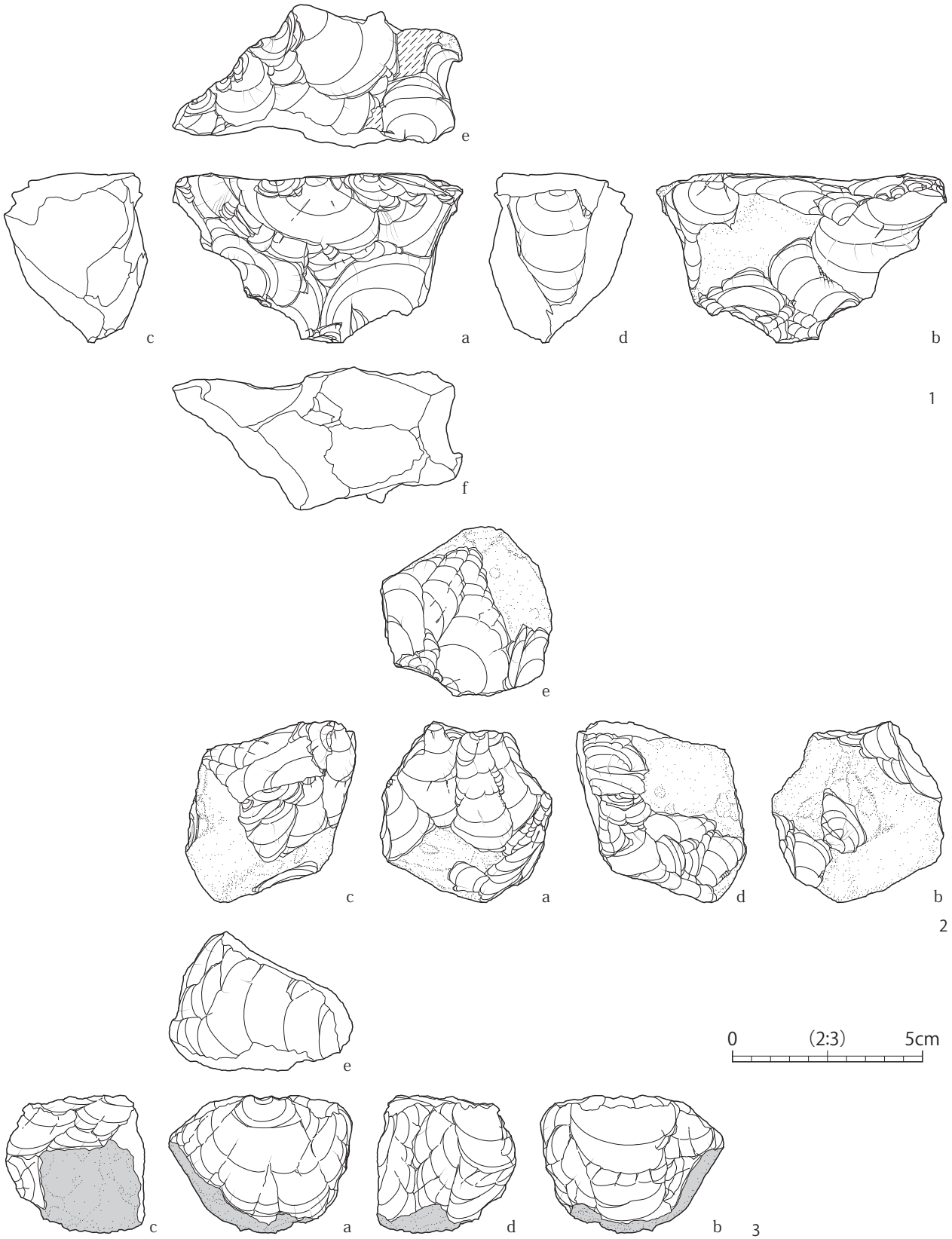


図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-174	第6次	20G	検出面	打製石器	石鏃	3.1	1.1	0.6	1.3	流紋岩	先端部欠損、a・b面入念な調整	130
2	Ka-263	第6次	SD182	堆積土	打製石器	削器	4.6	2.7	1.3	11.4	黒色安山岩	a面全体・b面周縁部二次加工	130
3	Ka-264	第6次	SI282	堆積土	打製石器	削器	4.6	6.7	1.3	31.4	安山岩	a・b面周縁部二次加工、摩耗よる二重パティナ	130
4	Ka-262	第6次	SD191	堆積土	打製石器	楔形石器	2.3	3	1.1	6.7	流紋岩	a面自然面、上下端部ツブレ状剥離、c面両極剥離	131
5	Ka-190	第6次	05G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	5.4	4.4	2	45.1	流紋岩	a・b面周縁部二次加工、a面稜上にツブレ状微細剥離	131
6	Ka-191	第6次	23G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	3.2	4.3	1.7	19.9	流紋岩	下半部欠損、a面自然面、a・b面左側縁部二次加工	131
7	Ka-193	第6次	03G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	3	3.9	1.4	11	流紋岩	a面右側縁部二次加工、b面全体素材面	131
8	Ka-194	第6次	23G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	4.3	5.7	1.9	30.2	流紋岩	上端部自然面、b面周縁部不連続な二次加工	131

第 234 図　第 6 次調査（層位不明）出土石器（1）

図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-195	第6次	07G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	7.2	6.2	2	52.6	流紋岩	a･b面周縁部不連続な二次加工	131
2	Ka-288	第6次	SI273	掘り方	打製石器	二次加工のある剥片	2.5	1.8	0.8	2.8	頁岩	a･b面両側縁部細かい二次加工	131
3	Ka-289	第6次	SM375	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	2.6	3.5	1.2	9.2	頁岩	a面一部二次加工、c面折れ	131
4	Ka-290	第6次	SI279	床面直上	打製石器	二次加工のある剥片	3.4	4.1	1.1	11.9	流紋岩	a面自然面、a･b面両側縁二次加工、c面折れ	131
5	Ka-212	第6次	23G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	2.8	2.5	0.7	3.4	流紋岩	括れ部両面微細剥離	131
6	Ka-213	第6次	03G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	3.8	2.5	0.8	5.1	流紋岩	a面両側縁部･b面右側縁部微細剥離	131
7	Ka-214	第6次	23G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	2	3	1.4	5.9	流紋岩	a面上端部･b面上端部～左側縁部微細剥離	131
8	Ka-215	第6次	06G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	2	2.5	0.4	1.4	頁岩	a面下端部･b面右側縁部～下端部微細剥離	131
9	Ka-216	第6次	01G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	3	3.7	1.6	9.6	流紋岩	上端部自然面、一側縁部両面微細剥離	131

第 235 図　第 6 次調査（層位不明）出土石器（2）



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm)			重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-180	第6次	23G	検出面	打製石器	石核	4.5	7.6	3.8	102	頁岩	剥片素材、断面船底形、全面剥離作業、一部自然面・節理面	132
2	Ka-179	第6次	07G	検出面	打製石器	石核	4.8	4.5	4.5	87.7	流紋岩	亜角礫素材、各面自然面、上半部剥離作業、90°打面転移	132
3	Ka-243	第6次	SI288	堆積土	打製石器	石核	3.6	4.8	3.7	67.8	石英岩	亜角礫素材、下面～c面自然面、a・b・d面剥離作業、加熱処理	132

第 236 図　第 6 次調査（層位不明）出土石器（3）

①Ⅳ層出土石器（第 237・239 ～ 246 図）

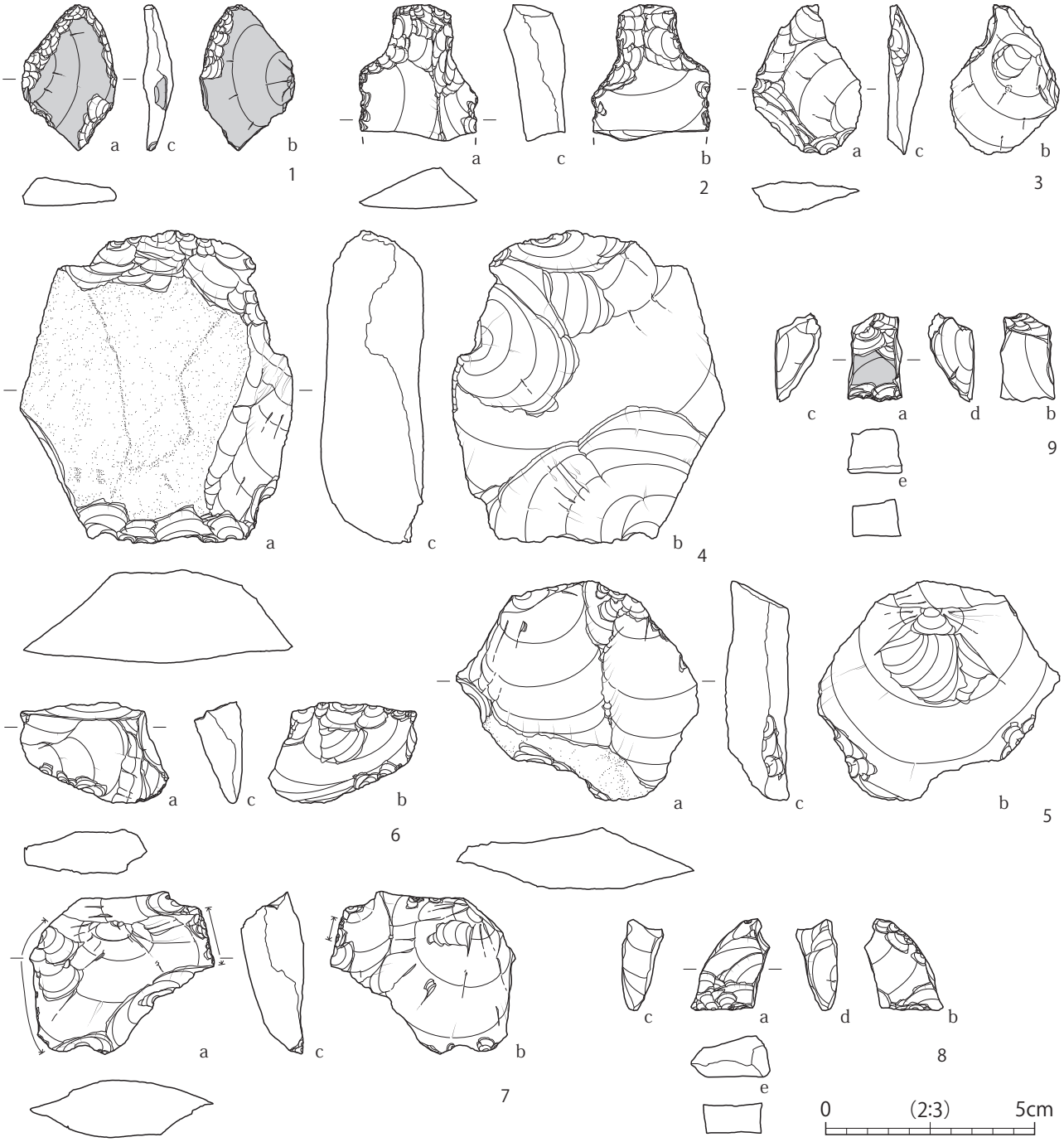
石鏃 1 点、石匙 1 点、二次加工のある剥片 15 点、微細剥離のある剥片 23 点、石核 8 点、磨製石斧 1 点、磨石 3 点、敲石 3 点、石皿 1 点、台石 1 点を掲載した。

第 237 図－ 1 は石鏃の未成品である。a・b 面に素材面を残し、a 面の周縁部と b 面の左上側縁部に調整を加えている。a・b 面ともに加熱処理による二重パティナが認められる。石材は鉄石英である。

2 は石匙である。つまみ部のみが残存し、a・b 面の両側縁部に調整を加えて凸状のつまみ部に整形する。調整は直接打撃で行っており、製作時に欠損したものと思われる。石材は頁岩である。

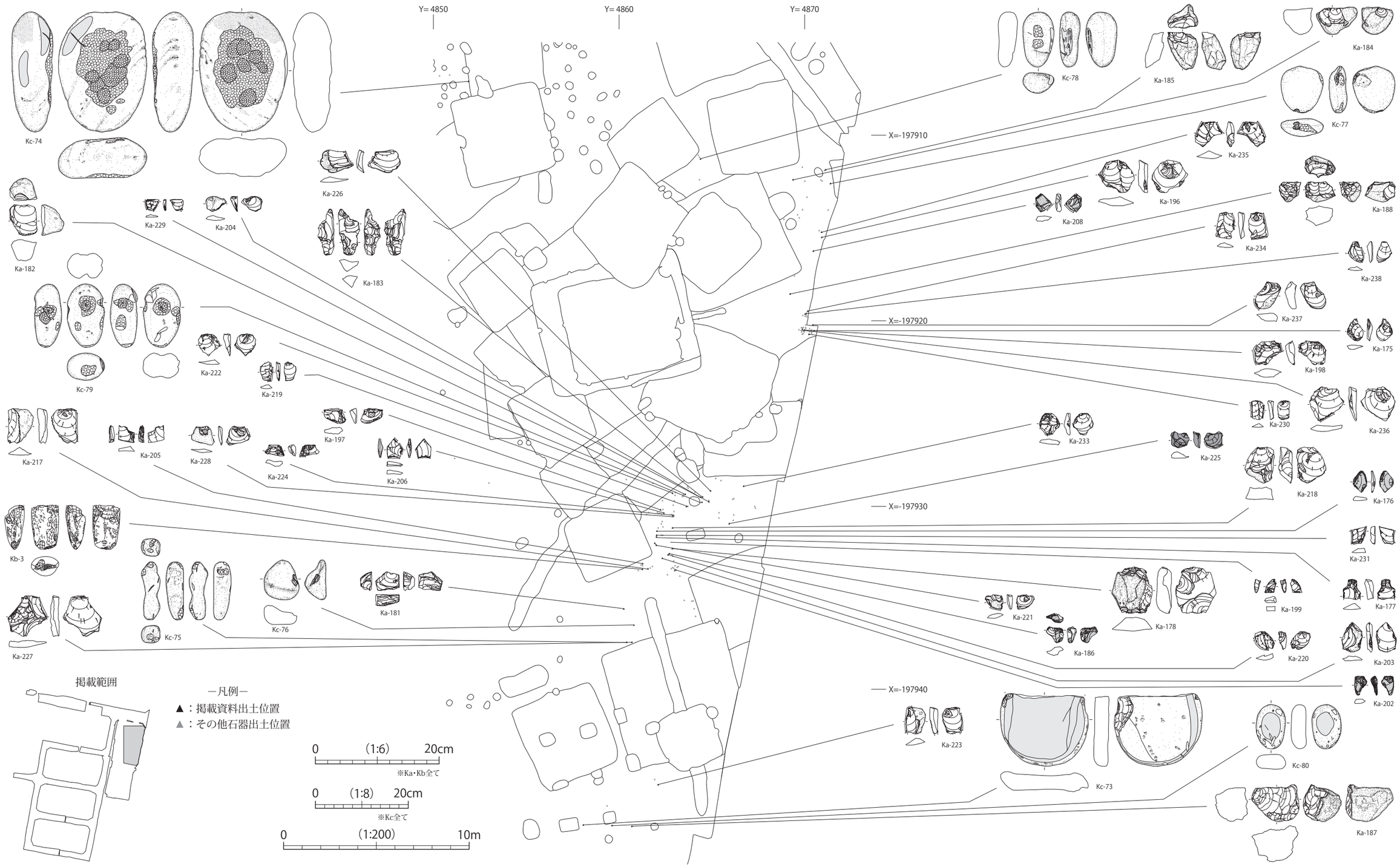
第 237 図－ 3 ～ 9、第 239 図－ 1 ～ 8 は二次加工のある剥片である。第 237 図－ 3 は a 面の右側縁部から下端部にかけて二次加工を施す。4 は大型の剥片素材を用い、a 面の広い範囲に自然面を残す。a・b 面ともに上下端部に二次加工を施し、a 面には細かい加工を連続して施す。5 は a 面の下端部に自然面を残し、a・b 面ともに部分的な二次加工を施す。6 は上部、両側縁部ともに折れており、a・b 面の下端部と b 面の上端部に二次加工を施す。7 は素材が a・b 面ともにポジ面となっており、a 面の周縁部を中心に二次加工を施すほか、a 面の両側縁部と b 面の左側縁部には微細剥離が認められる。b 面の微細剥離が確認できるのは僅かな範囲である。8 は両側縁部を切断調整し、a・b 面の下端部と b 面の上端部に二次加工を施す。9 は両側縁部を切断調整し、a 面の上下端部に二次加工を施す。a 面には加熱処理による二重パティナが認められる。第 239 図－ 1 は a・b 面ともに周縁部に二次加工を施す。2 は a 面の右側縁部に二次加工を施す。3 は横長の剥片を素材とし、二次加工は a 面の自然面部分を中心に施され、下端部には細かい剥離が連続する。a・b 面ともに被熱による二重パティナが認められ、剥片状態で加熱処理されたと考えられる。4 は a 面の周縁部と b 面の上端部に二次加工を施し、a・b 面ともに加熱処理による二重パティナが認められる。5 は a 面の右側縁部に自然面を残し、二次加工はその自然面を中心に施す。6 は a・b 面の下端部と a 面の左側縁の一部、a 面の上端部に二次加工を施し、同時に微細剥離も認められる。刃部以外の周縁部は切断調整時の折れ面で構成される。7 は a 面の全体に自然面を残し、その右側縁部から下端部にかけて二次加工を施す。8 は a 面に自然面を残し、a 面の下半部と b 面の上半部を中心に二次加工を施す。a・b 面の下半部には微細剥離も認められる。a・b 面には加熱処理による二重パティナが認められる。a 面には加熱処理前の二次加工も残る。a 面の左側縁部には折れ面が認められる。石材は、第 237 図－ 1 が鉄石英、第 237 図－ 2、第 239 図－ 8 が頁岩、第 237 図－ 8・9、第 239 図－ 3・6 が珪化凝灰岩、第 239 図－ 4 が珪質頁岩、第 239 図－ 5・7 が黒色頁岩、その他は流紋岩である。

第 239 図－ 9･10､第 240･241 図は微細剥離のある剥片である。第 239 図－ 9 は a 面の下端部に自然面を残し、b 面の左側縁部に微細剥離が認められる。剥離範囲は僅かである。10 は a 面の右半部に自然面を残し、微細剥離は b 面の右側縁部に認められる。下端部は同時割れを起こしている。第 240 図－ 1 は a 面の右側縁部から下端部にかけて微細剥離が認められる。2 は a 面の左側縁部から下端部にかけて微細剥離が認められる。3 は a 面の大半に自然面を残し、微細剥離は a 面の下端部に認められる。4 は a 面の右側縁部に微細剥離が認められ、剥離範囲は狭い。5 は a 面の 1/2 程に自然面を残し、一側縁部の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲は a 面の方が広く、上端部に達する。6 は b 面の下端部に微細剥離が認められ、剥離範囲は狭い。7 は a 面の左側縁部に自然面を残し、b 面の下端部を中心に微細剥離が認められる。全体が被熱し、a 面には火ハネの痕跡を有する。8 は a 面の左側縁部から下端部にかけて自然面を残し、一側縁部の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲は a 面の方が広く、側縁部全体におよぶ。9 は a 面の右側縁部に微細剥離が認められる。10 は a 面の大半に自然面を残し、b 面の右側縁部に微細剥離が認められた。第 241 図－ 1 は a 面の両側縁部と b 面の下端部に微細剥離が認められる。b 面の微細剥離は下端部の一部のみに形成されている。2 は a 面の左側縁部に微細剥離が認められる。3 は一側縁部の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲は両面ともほぼ同じである。4 は a 面の両側縁部に微細剥離が認められる。5



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-176	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石鏃	3.5	2.3	0.7	4.5	鉄石英	未成品、a面周縁部・b面左上側縁部入念な調整、二重パティナ(加熱処理)	132
2	Ka-177	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石匙	3.3	2.8	1.5	10.1	頁岩	凸状つまみ部破片、つまみ部直接打撃の調整 ※製作時欠損?	132
3	Ka-175	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	3.6	2.7	0.9	5.9	流紋岩	a面右側縁部～下端部二次加工	132
4	Ka-178	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	7.5	6.5	2.5	125.1	流紋岩	大型剥片素材、a面自然面、a・b面上下端部二次加工、a面細かい剥離連続	133
5	Ka-196	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	5.3	5.8	1.5	39.3	流紋岩	a面下端部自然面、a・b面部分的な二次加工	133
6	Ka-197	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	2.4	3.6	1.2	7.9	流紋岩	上部・両側縁部折れ、a・b面下端部・b面上端部二次加工	133
7	Ka-198	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	3.9	4.4	1.5	20.7	流紋岩	a・b面ポジ面、a面周縁部中心二次加工、a面両側縁部・b面左側縁部微細剥離	133
8	Ka-199	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	2.2	1.9	1	2.7	珪化凝灰岩	両側縁部切断調整、a・b面下端部・b面上端部二次加工	133
9	Ka-200	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	2.1	1.3	1.1	2.4	珪化凝灰岩	両側縁部切断調整、a面上下端部二次加工、a面二重パティナ(加熱処理)	133

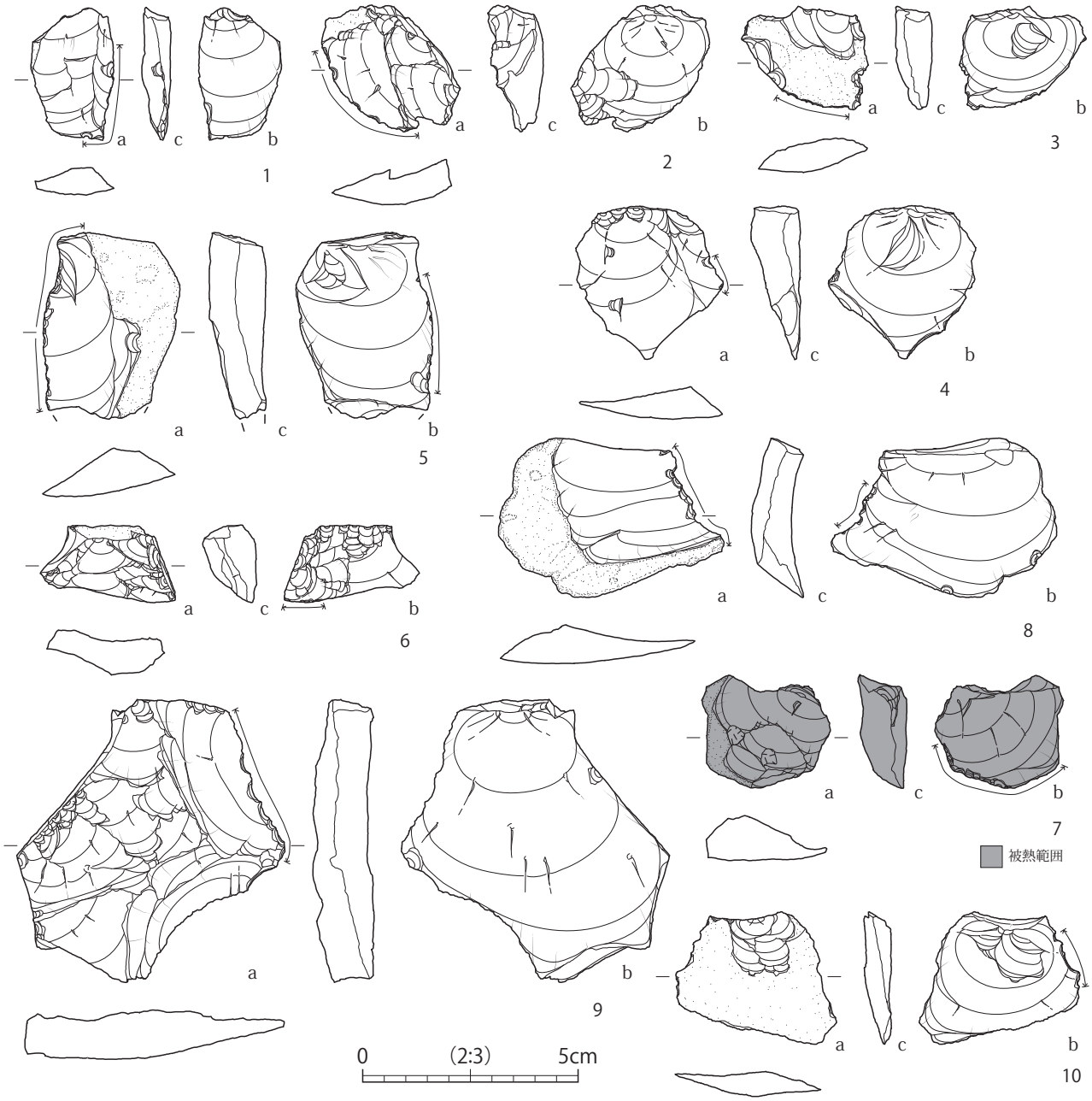
第 237 図　第 9 次調査（Ⅳ層）出土石器（1）



第 238 図　第 9 次調査区Ⅳ層石器出土状況図

図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-207	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	5.7	5.3	1.9	50.1	流紋岩	a・b面周縁部二次加工	133
2	Ka-205	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	2.8	2.6	0.9	5.6	流紋岩	a面右側縁部二次加工	133
3	Ka-201	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	2.1	3.4	0.6	4	珪化凝灰岩	a面自然面部分中心二次加工・下端部細かい剥離連続、a・b面二重パティナ(加熱処理)	133
4	Ka-202	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	3.1	2	1.1	5.1	珪質頁岩	a面周縁部・b面上端部二次加工・二重パティナ(加熱処理)	133
5	Ka-203	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	3.8	3.3	1	13.6	黒色頁岩	a面右側縁部自然面・二次加工	133
6	Ka-206	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	3.1	2.5	0.8	5.3	珪化凝灰岩	a・b面下端部・a面左側縁一部・a面上端部二次加工・微細剥離、刃部以外は切断調整時の折れ面で構成	133
7	Ka-204	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	2.5	3.3	1.2	7.1	黒色頁岩	a面全体自然面・右側縁部～下端部二次加工	133
8	Ka-208	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	二次加工のある剥片	3	2.6	1	6.6	頁岩	a面自然面、a面下半部・b面上半部二次加工、a・b面微細剥離・二重パティナ(加熱処理)、a面加熱処理前の二次加工	133
9	Ka-218	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	5.8	4.8	2.2	61.1	流紋岩	a面下端部自然面、b面左側縁部微細剥離	133
10	Ka-217	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	5.6	4.2	1.6	28	流紋岩	a面右半部自然面、b面右側縁部微細剥離、下端部同時割れ	134

第 239 図　第 9 次調査（Ⅳ層）出土石器（2）



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-219	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	3.1	1.9	0.7	3.9	流紋岩	a面右側縁部～下端部微細剥離	134
2	Ka-220	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	3	3.2	1.3	7.2	流紋岩	a面左側縁部～下端部微細剥離	134
3	Ka-221	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	2.4	3	0.9	4.9	流紋岩	a面大半自然面、a面下端部微細剥離	134
4	Ka-222	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	3.6	3.4	1.2	8.7	流紋岩	a面右側縁部微細剥離	134
5	Ka-223	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	4.3	3.2	1.3	12.9	珪化凝灰岩	a面1/2程自然面、一側縁部の両面微細剥離	134
6	Ka-224	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	1.8	3.1	1.3	4.4	珪化凝灰岩	b面下端部微細剥離	134
7	Ka-225	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	2.6	3	1.1	8.3	珪化凝灰岩	b面下端部中心微細剥離、全体被熱、a面火ハネ	134
8	Ka-226	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	3.7	5.2	1.2	16.3	頁岩	a面左側縁部～下端部自然面、一側縁部両面微細剥離	134
9	Ka-227	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	6.7	6.2	1.9	45.4	流紋岩	a面右側縁部微細剥離	134
10	Ka-228	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	3.1	3.7	0.6	5.3	流紋岩	a面大半自然面、b面右側縁部微細剥離	134

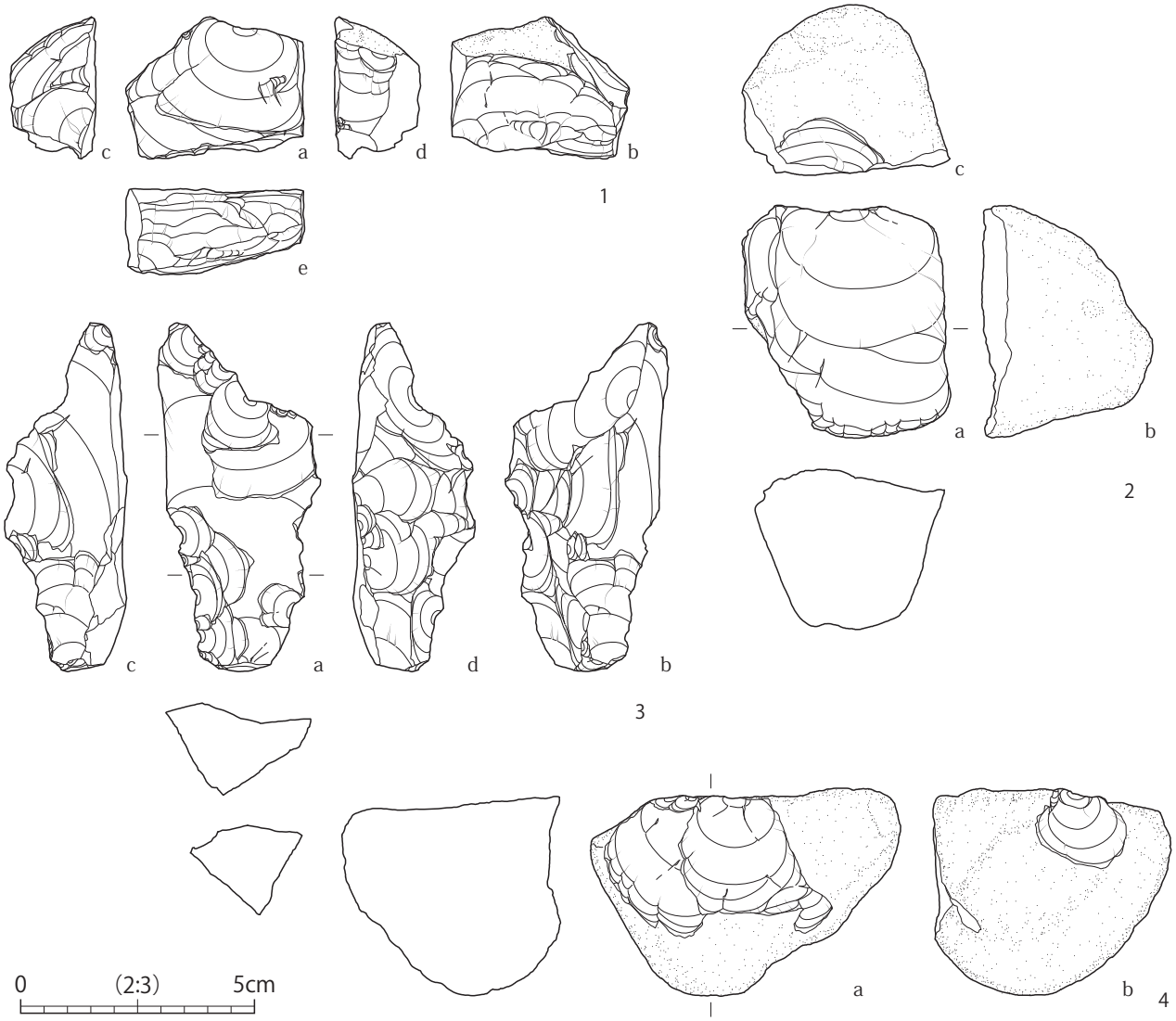
第 240 図　第 9 次調査（Ⅳ層）出土石器（3）

図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-229	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	1.8	2.2	0.5	1.7	流紋岩	a面両側縁部・b面下端部微細剥離	134
2	Ka-232	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	1.9	3	0.9	3.3	流紋岩	a面左側縁部微細剥離	134
3	Ka-231	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	2.9	2.4	0.8	5.5	黒色頁岩	一側縁部両面微細剥離	134
4	Ka-230	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	3.1	2	1	4.3	流紋岩	a面両側縁部微細剥離	134
5	Ka-234	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	4.3	3	1	9.8	流紋岩	一側縁部両面・b面下端部微細剥離	134
6	Ka-233	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	3.6	3.3	1	8	流紋岩	a面左側縁下部～下端部微細剥離	134
7	Ka-235	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	4.1	4.3	1.3	13.2	流紋岩	両側縁部両面微細剥離	134
8	Ka-236	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	5.6	5.6	1.3	27.4	流紋岩	a面下端部微細剥離	134
9	Ka-237	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	4.4	4.2	1.8	22.6	流紋岩	a面右側縁部～下端部・b面上端部付近自然面、a面左側縁部微細剥離	135
10	Ka-238	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	3.4	2.4	0.9	4.7	流紋岩	a面右側縁部微細剥離	135
11	Ka-239	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	微細剥離のある剥片	1.9	2.4	1	2.7	流紋岩	一側縁部両面微細剥離	135

第 241 図　第 9 次調査（Ⅳ層）出土石器（4）

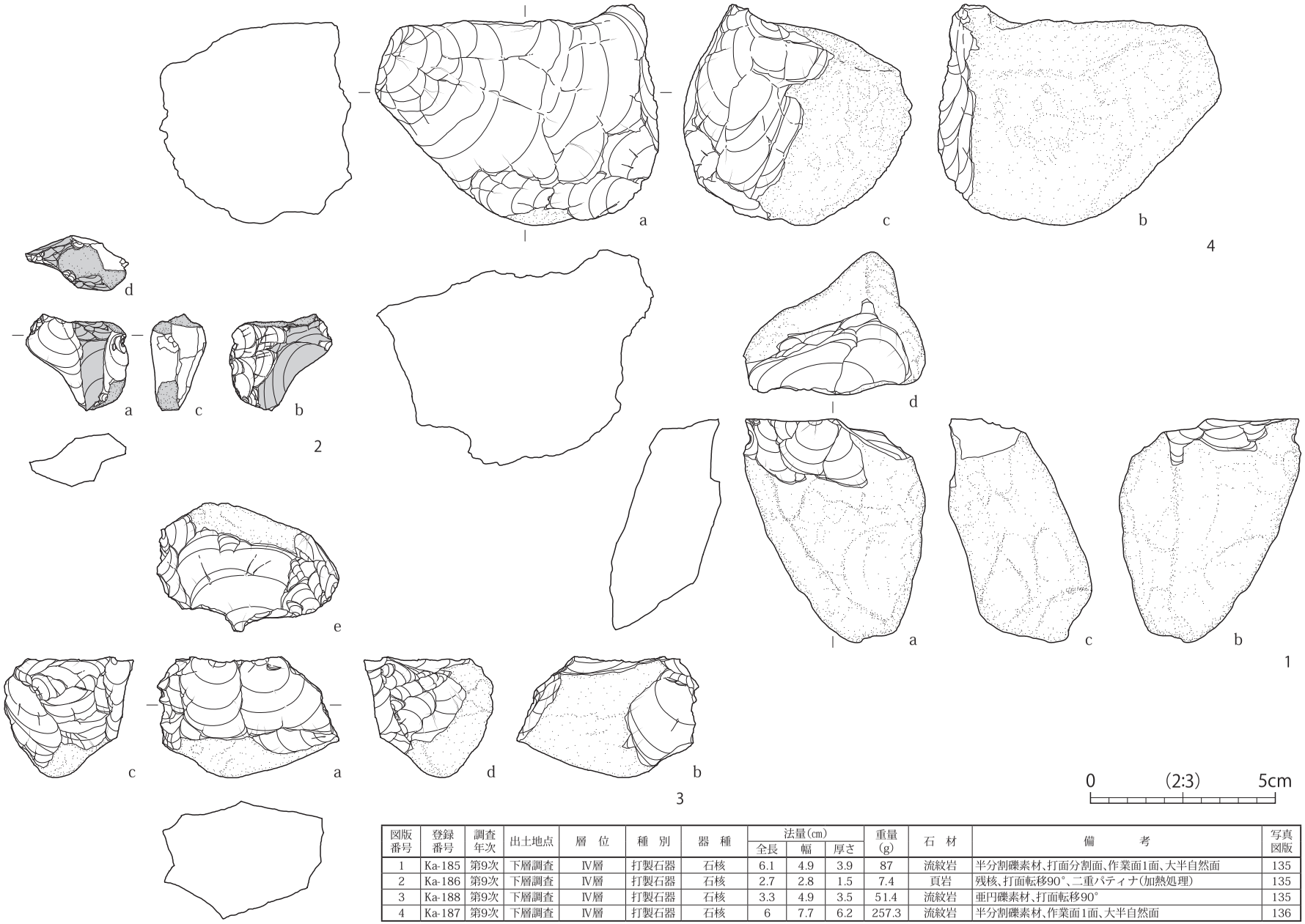
は一側縁部の両面とｂ面の下端部に微細剥離が認められる。側縁部の剥離範囲はｂ面の方が広い。6はａ面の左側縁部の下部から下端部にかけて微細剥離が認められる。7は両側縁部の両面に微細剥離が認められる。8はａ面の下端部に微細剥離が認められる。9はａ面の右側縁部～下端部とｂ面の上端部付近に自然面を残し、ａ面の左側縁下部に微細剥離が認められる。10はａ面の右側縁部に微細剥離が認められる。11は一側縁の両面に微細剥離が認められる。剥離範囲はａ・ｂ面ともほぼ同じである。このように本器種の微細剥離は殆どが片側だけに認められ、これに該当しないのは第241図－１・４・７の３点のみである。石材は第240図－５～７が珪化凝灰岩、同図－８が頁岩、第241図－３が黒色頁岩、その他は流紋岩である。

第242･243図は石核である。第242図－１は､同時割れを起こした残核と考えられる。上端部に自然面を残し、ここを打面としている。２は半割したブランクと考えられる。剥離作業は行われていない。３は厚手の剥片を素材とし、断面形状は船底形を呈する。作業面は３面ある。４の作業面は２面で剥離回数は少ない。このため全体に自然面が良く残っている。



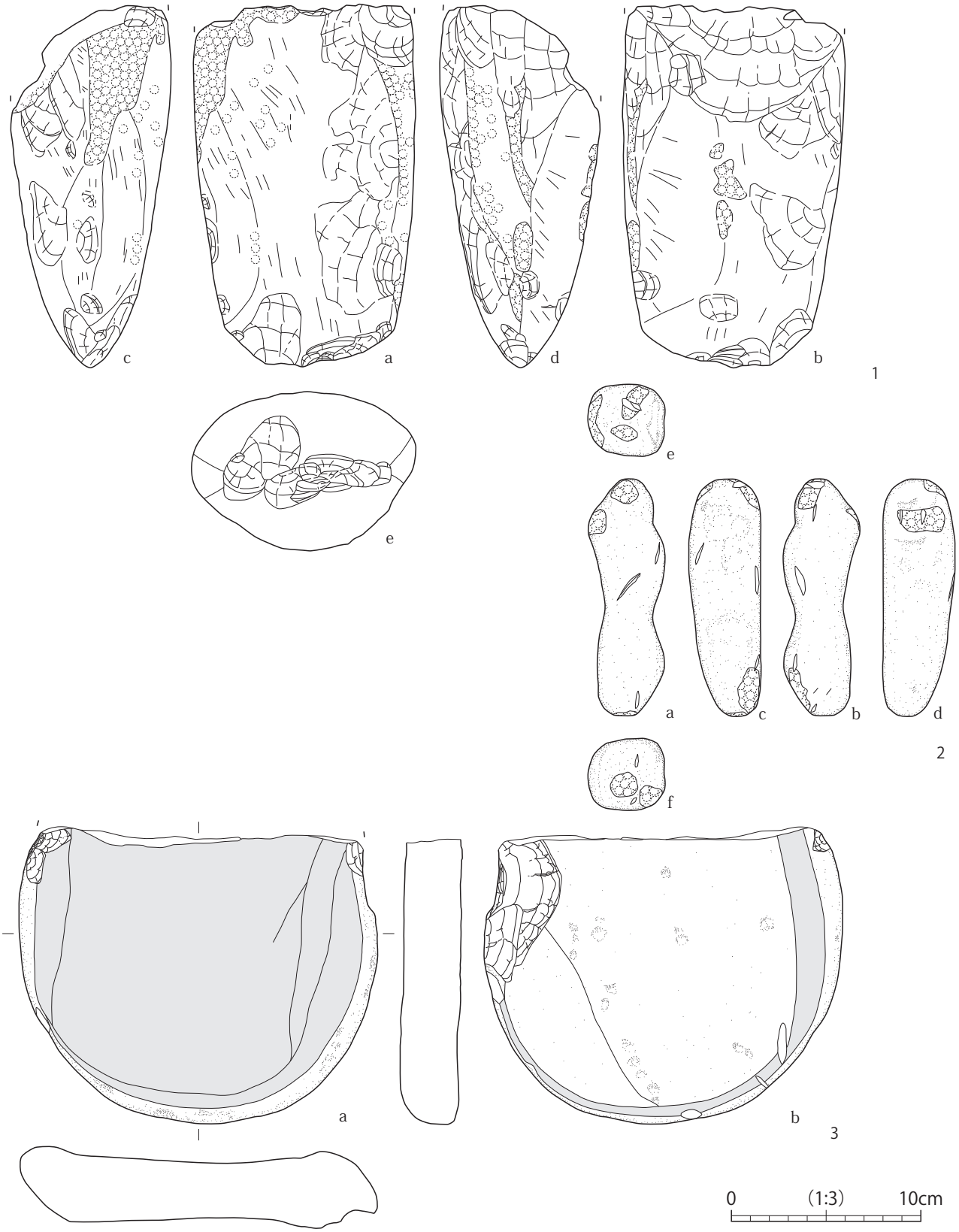
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-181	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	3.1	3.8	1.8	22.6	流紋岩	端部同時割れ､打面自然面	135
2	Ka-182	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	5	4.5	3.7	88.8	流紋岩	半割礫(ブランク)､c面1箇所剥離	135
3	Ka-183	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	7.4	3.5	2.6	41.7	流紋岩	厚手剥片素材､断面船底形	135
4	Ka-184	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	4.5	6.6	5.1	133.5	流紋岩	作業面2面､大半自然面	135

第242図　第９次調査（Ⅳ層）出土石器（5）



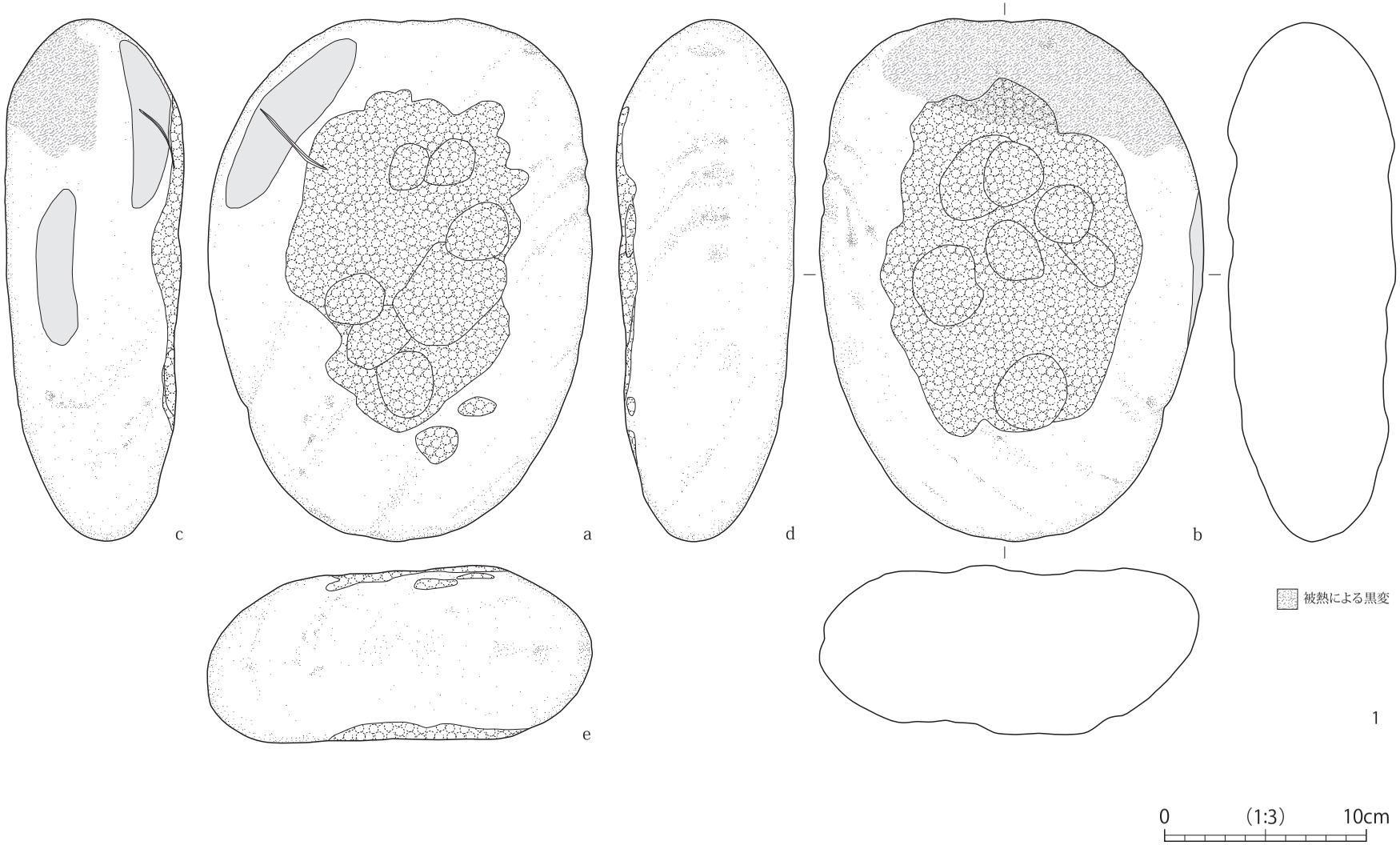
第243図　第9次調査（Ⅳ層）出土石器（6）

図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-185	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	6.1	4.9	3.9	87	流紋岩	半分割礫素材、打面分割面、作業面1面、大半自然面	135
2	Ka-186	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	2.7	2.8	1.5	7.4	頁岩	残核、打面転移90°、二重パティナ(加熱処理)	135
3	Ka-188	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	3.3	4.9	3.5	51.4	流紋岩	亜円礫素材、打面転移90°	135
4	Ka-187	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	6	7.7	6.2	257.3	流紋岩	半分割礫素材、作業面1面、大半自然面	136



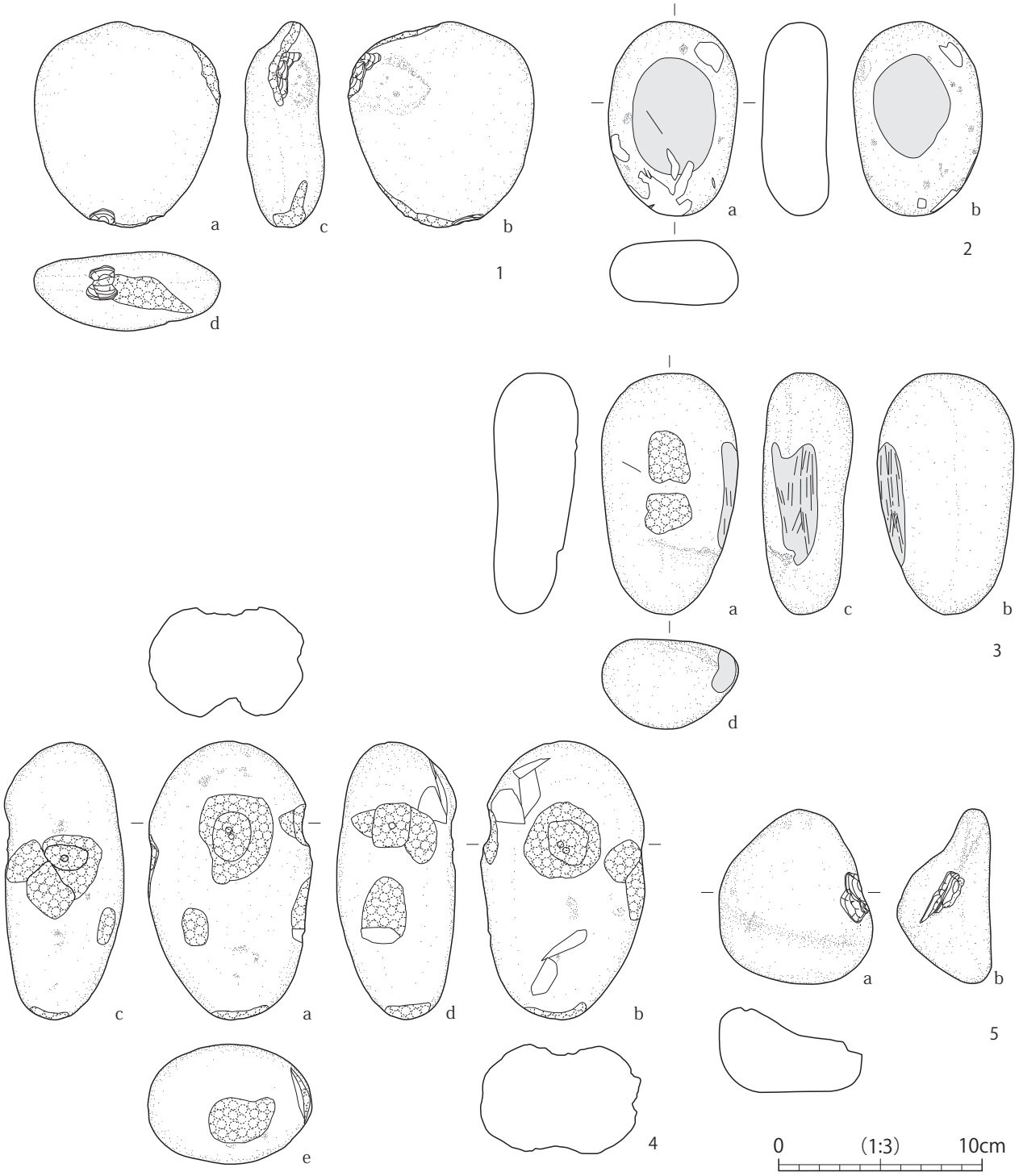
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Kb-003	第9次	下層調査	Ⅳ層	磨製石器	太型蛤刃石斧	(9.5)	(5.9)	(4.2)	298.1	泥岩	中央部付近で折損→剥離、刃部剥離、c・d面敲、a～d面線状痕	136
2	Kc-075	第9次	下層調査	Ⅳ層	礫石器	敲石	12.5	3.6	3.8	270	安山岩	上下端部敲(弱)、a～d面線状・溝状痕	136
3	Kc-073	第9次	下層調査	Ⅳ層	礫石器	石皿	15.6	18.9	3.2	1028	凝灰岩	a面全体・b面周縁部磨、上部欠損	136

第 244 図　第 9 次調査（Ⅳ層）出土石器（7）



第245図　第9次調査（Ⅳ層）出土石器（8）

図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Kc-074	第9次	下層調査	Ⅳ層	礫石器	台石	26	19	8.3	3450	凝灰岩	a・b面敲(弱・中)+凹(各7箇所)、c面磨+溝状痕、上部被熱	137



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Kc-077	第9次	下層調査	Ⅳ層	礫石器	敲石	10.1	9.2	3.9	421.7	凝灰岩	c+d面敲(弱)+敲打時の剥離	136
2	Kc-080	第9次	下層調査	Ⅳ層	礫石器	磨石	9.5	6.3	3.2	148.9	凝灰岩	a・b面磨、a面線状痕	137
3	Kc-078	第9次	下層調査	Ⅳ層	礫石器	磨+敲石	11.9	6.7	4.4	374.3	流紋岩	a面敲(弱)、c面磨+線状痕	137
4	Kc-079	第9次	下層調査	Ⅳ層	礫石器	敲+凹石	13.7	8	5.9	400	凝灰岩	a～e面敲(弱・中)、a～d面凹(各1箇所)	137
5	Kc-076	第9次	下層調査	Ⅳ層	礫石器	敲石	7.6	8.6	4.7	324	安山岩	b面敲(弱)+敲打時の剥離	137

第 246 図　第 9 次調査（Ⅳ層）出土石器（9）

第 243 図－ 1 はやや扁平な円礫を半分割し、その分割面を打面として剥離作業を行う。作業面は 1 面で、剥離回数は少ない。自然面が良く残る。2 は残核で、剥離作業の途中で打面を 90°転移させている。二重パティナが認められ、加熱処理されたと考えられる。3 は円礫の上部を打ち欠き、そこを打面として剥離作業を行う。作業途中

で打面を 90°転移させている。4 は円礫を半分割し、その面に対して剥離作業を行う。剥離回数も少なく、自然面が良く残る。石材は第 243 図－ 2 が頁岩であるほかは、全て流紋岩である。

第 244 図－ 1 は磨製石斧である。各面には製作時の敲打痕や擦痕が認められる。中央部付近から基部にかけて欠損している。折れ部分と刃部に転用によると考えられる剥離痕が観察される。石材は泥岩である。

第 244 図－ 2、第 246 図－ 1・4・5 は敲石である。第 244 図－ 2 は細長い棒状礫を用い、上下両端部に弱い敲打痕が形成されるほか、a ～ d の各面にはまばらに線状痕や溝状痕が認められる。第 246 図－ 1 は円盤状の円礫を用い、上下端部から一側縁部の途中（c 面）にかけて弱い敲打痕が形成される。一部敲打時に剥離を起こしている。4 は扁平な円礫を用い、表裏両面と両側面に凹部も観察される。敲打痕は a ～ e の各面に形成されるが、凹部周辺を除き全体的に弱い。凹部は a ～ d の 4 面で 1 箇所ずつ認められ、a 面のものが最も深く形成されている。5 は一側縁部（b 面）に敲打痕が観察されるが、敲打範囲は狭い。敲打時に剥離を起こしている。石材は第 244 図－ 2 が安山岩、第 246 図－ 1・4 が凝灰岩、5 が安山岩である。

第 244 図－ 3 は石皿である。円盤状の礫を用い、皿部は緩やかに窪む。a 面はよく使い込まれ、a 面の全体と b 面の周縁部に磨痕が形成される。石材は凝灰岩である。

第 245 図－ 1 は台石である。大型の扁平な礫を用い、a・b 面には弱い敲打痕が形成されている。c 面には磨痕が形成されており、上部の磨痕には溝状痕が 1 箇所重なる。上部は被熱している。石材は凝灰岩である。

第 246 図－ 2・3 は磨石である。3 は敲石の機能を併せ持ち、扁平な礫を用いている。a 面には弱い敲打痕が 2 箇所形成され、c 面には著しい磨痕と、その上には多数の線状痕が重なる。線状痕は a 面にも 1 箇所認められる。2 も同様の扁平な礫を用いており、a･b 両面に弱い磨痕が形成される。a 面の磨面上には、線状痕が 1 箇所重なる。石材は 2 が凝灰岩、3 が流紋岩である。

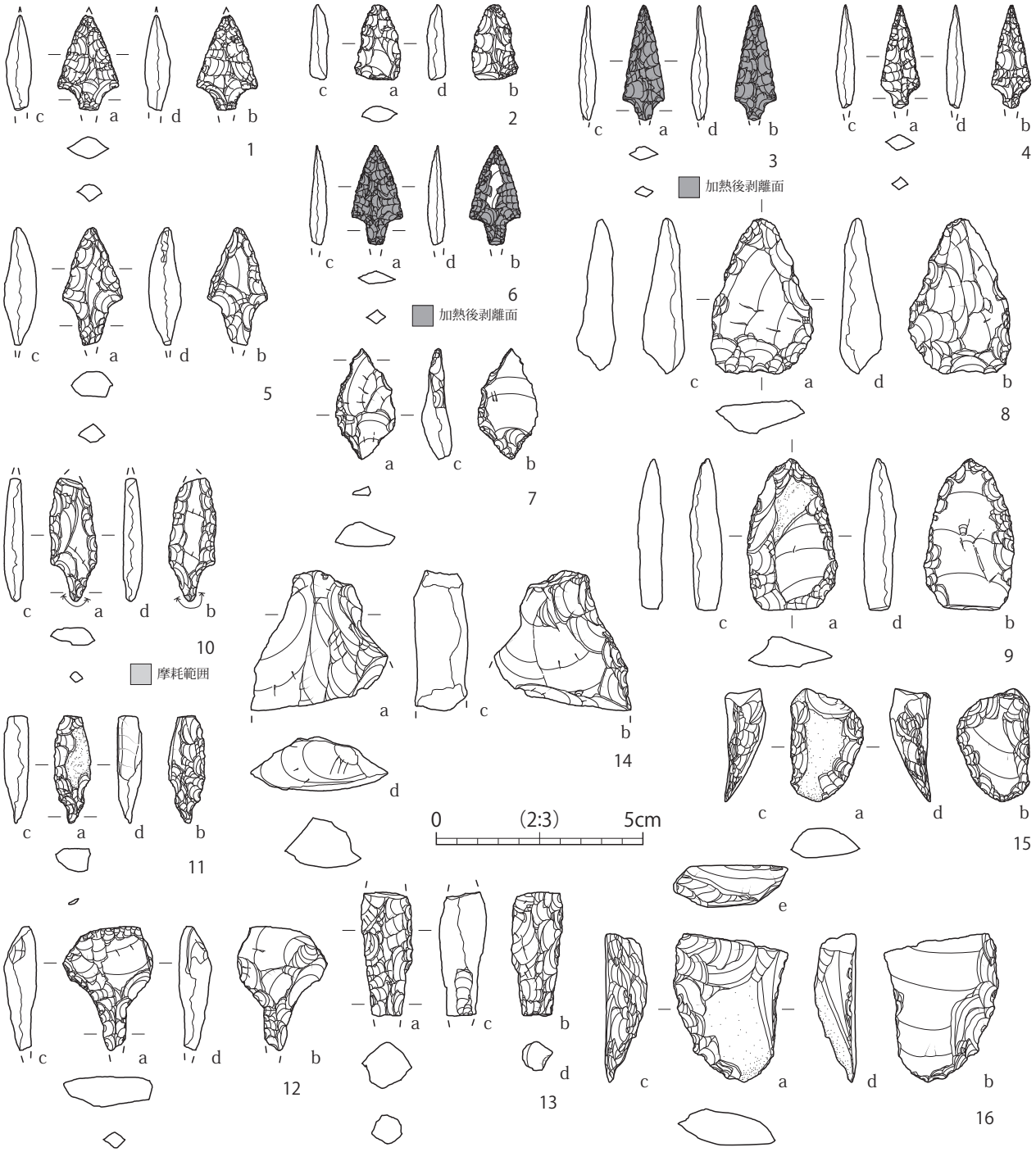
②層位不明石器（第 247 ～ 256 図）

石鏃 9 点、石錐 4 点、石匙 1 点、削器 5 点、二次加工のある剥片 10 点、板状石器等 4 点、石核 9 点、石庖丁 2 点、磨製石斧 5 点、独鈷石 1 点を掲載した。

第 247 図－ 1 ～ 9 は石鏃である。2・7 ～ 9 は未成品、ほかは有茎鏃に分類される。完成品はいずれも入念な調整にて整形されている。1 は尖端部と基部を欠損し、縦断面の形状はやや「く」字状に歪む。3 は基部末端を欠損し、全体が加熱処理による著しい光沢をもつ剥離面に覆われている。4 ～ 6 も基部末端を欠損し、このうち 5 は b 面の一部に素材面を残す。調整は粗く、他の石鏃よりもやや歪んだ形状を呈する。6 は b 面の一部に素材面を残し、全体に加熱処理による著しい光沢が認められる。未成品のうち 2 は a 面の一部に素材面を残す。7 ～ 9 はいずれも a･b 両面あるいは片面に素材面を残し、二次加工や調整は 7 が a 面の左側縁部および b 面の左側縁部中心、8 が a 面の周縁部と b 面のほぼ大半、9 が a・b 面の周縁部に施され、9 の a 面には自然面が残る。8・9 は 7 と比べ一回り以上大きい。石材は 1 が凝灰岩、2･9 が頁岩、3 が珪化凝灰岩、4 が珪質頁岩、5 が黒色頁岩、6 が碧玉、7・8 が流紋岩である。

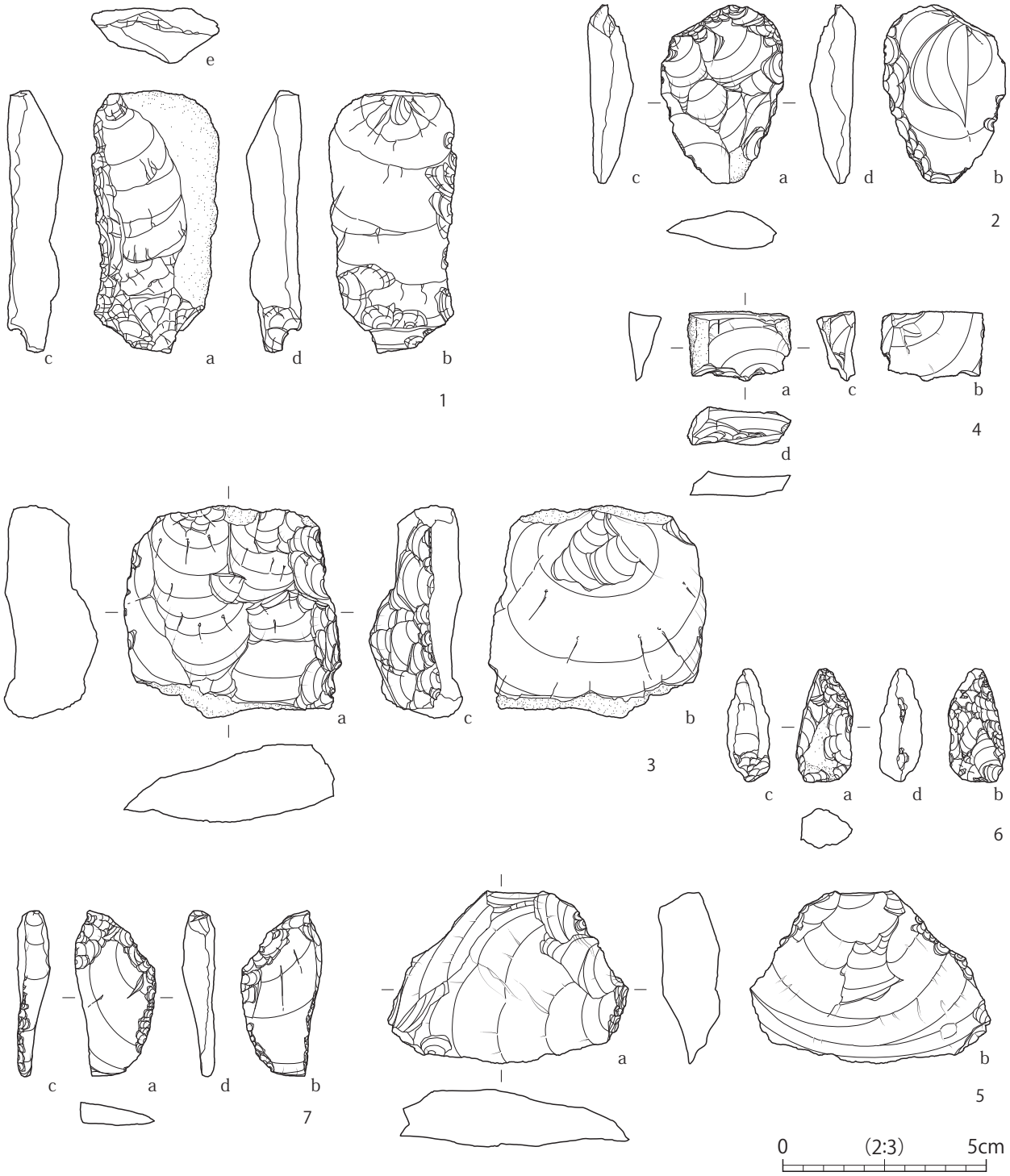
10 ～ 13 は石錐である。10 は基部を欠損し、b 面の一部には素材面を残す。尖端部には使用による著しい摩耗が認められる。11 は尖端部を中心に調整を施し、a 面に自然面、b 面に素材面をそれぞれ一部に残す。12 は銀杏の葉状に広がる基部をもち、尖端部を欠損する。基部調整は a 面の方が入念であり、b 面は粗く、素材剥片の打点部を残す。尖端部調整は両面ともに入念である。13 は尖端部を欠損し、厚みのある剥片素材を用いている。両側縁部に細かな調整を施す。石材は 10 が頁岩、11 が珪化木、12 が黒色頁岩、13 が流紋岩である。

14 は石匙である。a 面の右側縁部と b 面の右側縁部に二次加工を施す。製作途中で折損、廃棄されたものと考えられる。石材は頁岩である。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-255	第9次	29G	検出面	打製石器	石鏃	2.3	1.5	0.6	1.4	凝灰岩	尖端部・基部欠損、a・b面入念な調整	138
2	Ka-256	第9次	SI8	掘り方	打製石器	石鏃	1.8	1.1	0.5	0.6	頁岩	未成品、入念な調整、b面一部素材面	138
3	Ka-257	第9次	SX28	堆積土	打製石器	石鏃	2.8	1	0.4	0.7	珪化凝灰岩	基部末端欠損、a・b面入念な調整、加熱処理	138
4	Ka-258	第9次	SX28	堆積土	打製石器	石鏃	2.5	0.9	0.5	0.7	珪質頁岩	基部末端欠損、a・b面入念な調整	138
5	Ka-259	第9次	SI346	堆積土	打製石器	石鏃	2.9	1.5	0.8	1.9	黒色頁岩	基部末端欠損、a・b面入念な調整、b面一部素材面	138
6	Ka-260	第9次	13G	検出面	打製石器	石鏃	2.4	1.2	0.4	0.8	碧玉	基部末端欠損、b面一部素材面、加熱処理	138
7	Ka-271	第9次	03G	検出面	打製石器	石鏃	2.7	1.4	0.7	1.8	流紋岩	未成品、a・b面左側縁部二次加工	138
8	Ka-283	第9次	33G	検出面	打製石器	石鏃	3.8	2.5	1	7.6	流紋岩	未成品、a面周縁部・b面大半二次加工	138
9	Ka-284	第9次	SX28	堆積土	打製石器	石鏃	3.7	2.2	0.8	5.8	頁岩	未成品、a・b面周縁部二次加工	138
10	Ka-267	第9次	SM396-1	堆積土	打製石器	石錐	3	1.1	0.5	1.7	頁岩	基部欠損、b面一部素材面、尖端部光沢痕(摩耗)	138
11	Ka-268	第9次	37G	検出面	打製石器	石錐	2.6	0.9	0.6	1.5	珪化木	a面一部自然面、b面一部素材面	138
12	Ka-269	第9次	SK301	堆積土	打製石器	石錐	3	2.2	0.8	3.2	黒色頁岩	尖端部欠損、a面入念な調整、b面打点部残存	138
13	Ka-270	第9次	SX28	堆積土	打製石器	石錐	3	1.2	1.2	4.2	流紋岩	尖端部欠損、入念な調整	138
14	Ka-272	第9次	SX28	堆積土	打製石器	石匙	3.4	3.3	1.3	13	頁岩	未成品、a面右側縁部・b面右側縁部二次加工、製作途中で折損	138
15	Ka-273	第9次	23G	検出面	打製石器	削器	2.7	1.8	1	3.9	頁岩	a・b面周縁部に二次加工、a面一部自然面	138
16	Ka-274	第9次	SI353	掘り方	打製石器	削器	3.6	2.8	1.1	10	黒色頁岩	一側縁部両面二次加工、a面右側縁部微細剥離・一部自然面	138

第 247 図　第 9 次調査（層位不明）出土石器（1）

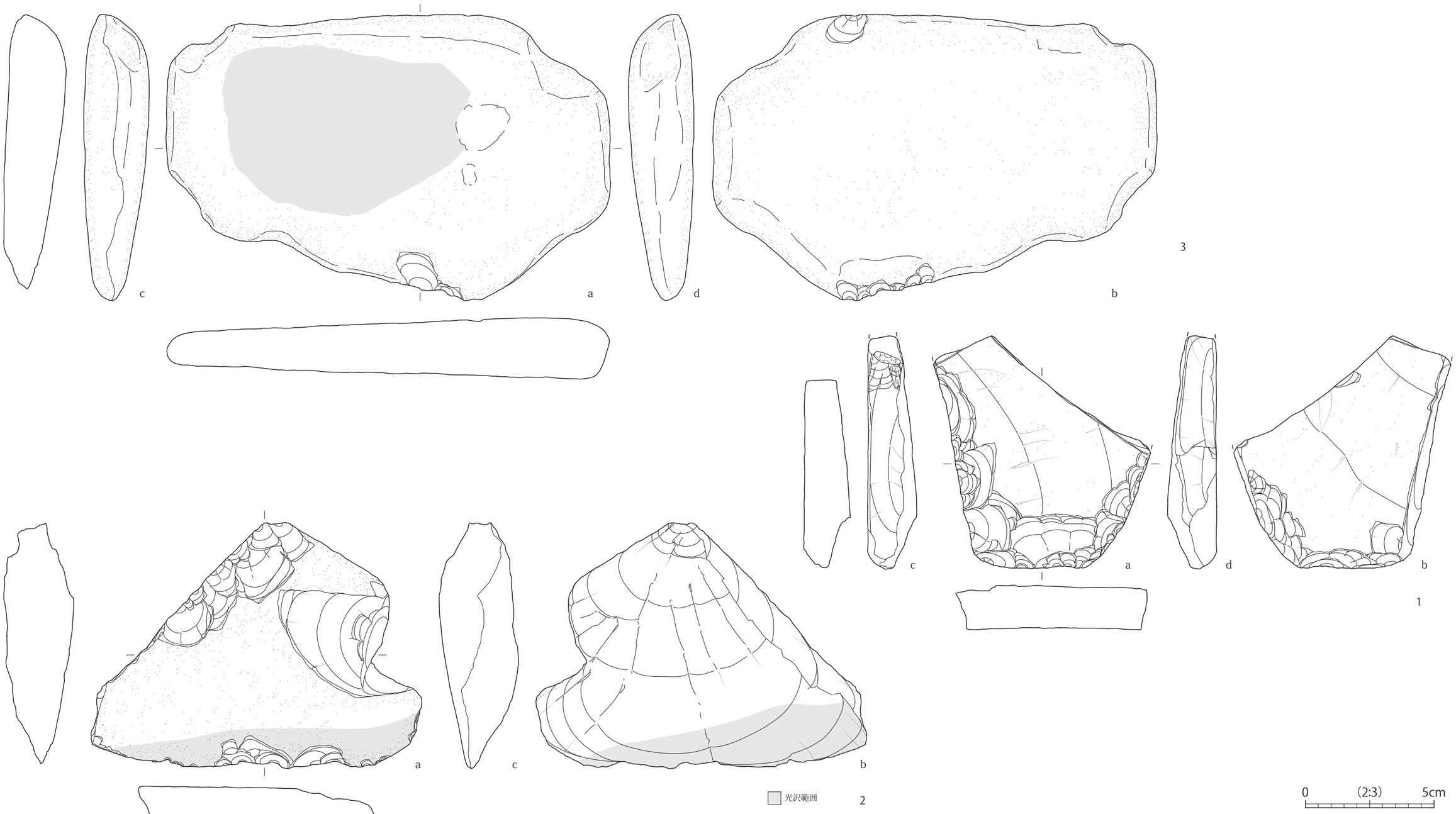


図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-275	第9次	41・45G	検出面	打製石器	削器	6.4	3.2	1.4	25.1	流紋岩	一側縁部～下端部両面二次加工、下端部自然面	138
2	Ka-276	第9次	SI316	掘り方	打製石器	削器	4.4	3	1.1	11.6	頁岩	一側縁部両面二次加工、a面左側縁部微細剥離	139
3	Ka-277	第9次	SM393-10	堆積土	打製石器	削器	5.2	5.3	2.3	62.1	流紋岩	a面右側縁部二次加工、上下端部自然面	139
4	Ka-291	第9次	SM395-8	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	1.7	2.6	0.9	3.1	凝灰岩	a面下端部二次加工・左側縁部自然面	139
5	Ka-292	第9次	03・04G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	4.2	5.9	1.6	35	流紋岩	a面右側縁部・b面両側縁部一部二次加工	138
6	Ka-293	第9次	29G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	2.8	1.4	1.1	4.1	玉髄	両面入念な二次加工+縁辺調整、a面一部自然面	139
7	Ka-295	第9次	SI351	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	4.1	2	0.8	5.6	黒色頁岩	上端部～一側縁部両面二次加工、b面右側縁部微細剥離	139

第 248 図　第 9 次調査（層位不明）出土石器（2）

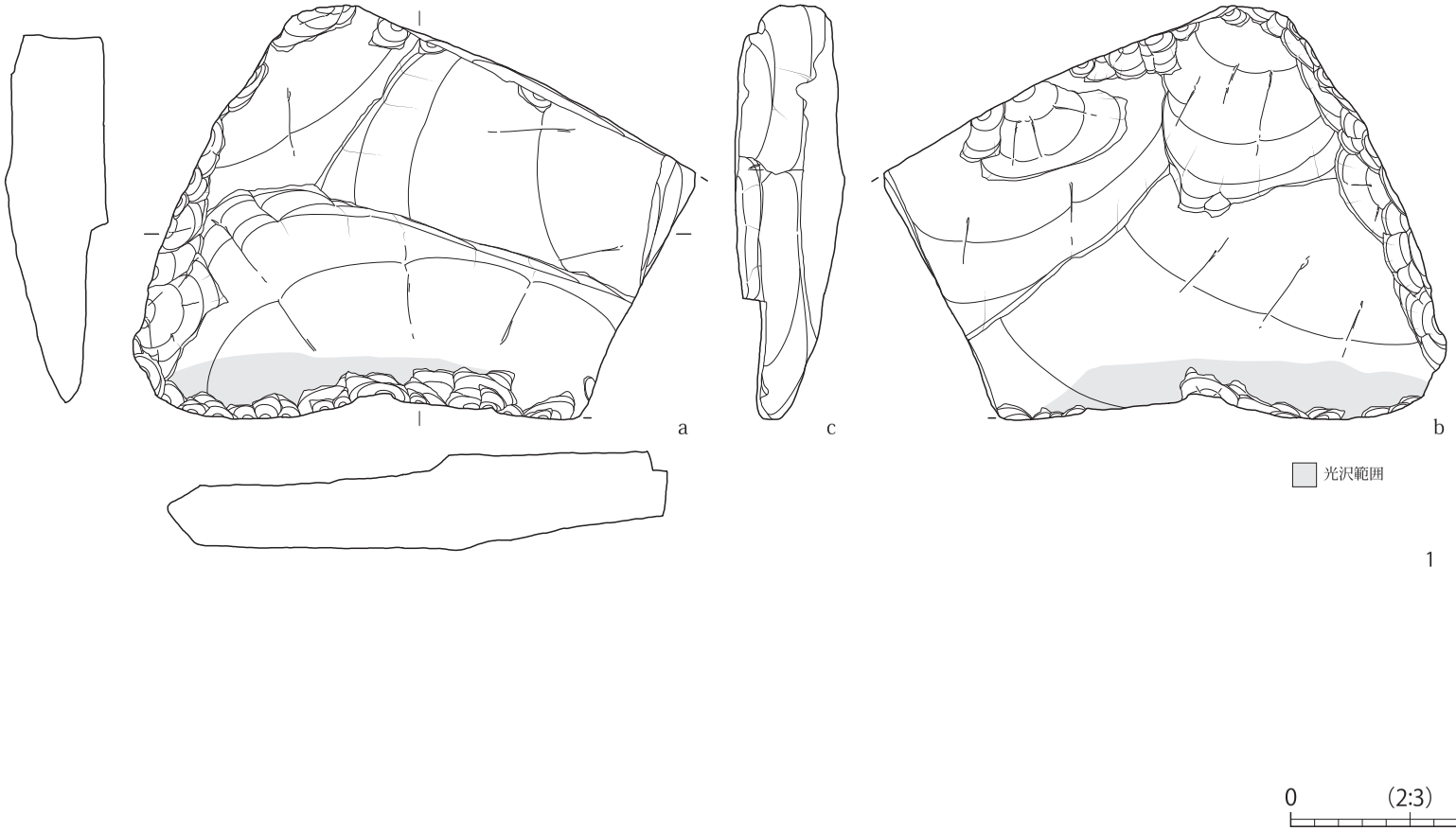
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-294	第9次	SI313	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	4	4.9	1.7	31.3	流紋岩	a面上半部・b面周縁部二次加工(a面自然面を加工)	139
2	Ka-296	第9次	SX28	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	3.5	1.9	1	6.3	流紋岩	a面右側縁部二次加工(加工部以外自然面)、先端部微細剥離	139
3	Ka-297	第9次	SX28	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	2.1	4.3	1.1	9.3	鉄石英	a・b面下半部両面二次加工、a・b面二重パティナ(加熱処理)	139
4	Ka-298	第9次	SM393-2	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	4.5	3.2	1.5	19.9	流紋岩	一側縁部両面二次加工、a面右側縁部自然面	139
5	Ka-299	第9次	23G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	7.9	4.7	2.2	61.5	流紋岩	a面両側縁部・b面打点部付近二次加工(a面加工部以外自然面)	139
6	Ka-300	第9次	SI321	掘り方	打製石器	二次加工のある剥片	5	3.4	1.7	28.3	流紋岩	a面打点部付近～左側縁部・b面全体二次加工(a面加工部以外自然面)、b面縁辺調整	139

第 249 図　第 9 次調査（層位不明）出土石器（3）



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-278	第9次	SI315	掘り方	打製石器	敲打具?	9	8.4	1.9	166.3	安山岩	上部欠損、a面周縁部・b面左側縁部～下端部二次加工	141
2	Ka-279	第9次	SI310	床面直上	打製石器	大型直縁刃石器	9.6	12.8	3.1	334.5	安山岩	a面上下端部二次加工(加工部以外自然面)、刃部光沢痕	140
3	Ka-281	第9次	SI321	堆積土	礫石器	磨石	11.1	17.3	2.5	666.5	安山岩	a面磨、a・b面下端部剥離　※板状石器未成品転用?	141

第 250 図　第 9 次調査（層位不明）出土石器（4）



第251図　第9次調査（層位不明）出土石器（5）

図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-280	第9次	SX28	堆積土	打製石器	板状石器	8.7	11.8	2.3	240	安山岩	1/3程欠損、a・b両面周縁部二次加工、刃部光沢痕	140

第247図－15・16、第248図－1～3は削器である。第247図－15はa・b面の周縁部に細かな二次加工を施し、a面には自然面を残す。16は一側縁部の両面とa面の上端部にかけて二次加工を施す。a面の右側縁部両面には使用痕とみられる微細剥離が認められる。a面には自然面を残す。第248図－1は一側縁部から下端部にかけての両面に二次加工を施す。a面の左側縁部には二次加工後、さらに細かな調整を重ねている。a面には自然面を残す。2は一側縁部の両面とa面の上端部に二次加工を施し、a面の上端部にはさらに細かな調整を重ねる。a面の左側縁部には微細剥離が認められ、下端部には自然面を残す。3はa面の右側縁部に二次加工を施す。b面は素材面のみで、二次加工は施されていない。素材の剥離は自然面を打面とし、下端部にも自然面を残す。石材は第247図－15・第248図－2が頁岩、16が黒色頁岩、第248図－1・3が流紋岩である。

第248図－4～7および第249図の6点は二次加工のある剥片である。第248図－4は楔のような形状を呈する。a面の下端部に二次加工を施し、左側縁部に自然面を残す。右側縁部の上端部にも自然面が認められる。5はa面の右側縁部とb面の両側縁部の一部に二次加工を施す。6はa・b面のほぼ全体に入念な二次加工を施すが、a面の一部には自然面を残す。縁辺には細かな調整を施す。7は上端部から一側縁部にかけての両面に二次加工を施し、切出刀のような形状に加工されている。b面の右側縁部には微細剥離が認められる。第249図－1はa面の上半部とb面の周縁部に二次加工を施す。加工は粗く、特にa面の剥離面は広い。a面は自然面を直接加工している。2はa面の右側縁部に二次加工を施し、加工部以外には自然面を残す。先端部には使用によるとみられる微細剥離が認められる。3は下半部の両面に二次加工を施し、a面では下端部に細かな調整を重ねる。a・b面ともに加熱処理による二重パティナが認められる。4は一側縁部の両面を中心に二次加工を施し、a面の右側縁部には自然面を残す。5は大型の剥片が素材である。a面の両側縁部とb面の打点部付近に二次加工を施し、a面の加工部以外には自然面を残す。加工は粗く、それぞれの剥離面は広いものが多い。6はa面の打点部付近から左側縁部にかけてと、b面の全体に二次加工を施す。b面では縁辺調整も一部認められる。b面の加工は入念であり、素材面をあまり残していない。全体的に楕円形の整った形状を呈する。石材は第248図－4が凝灰岩、6が玉髄、7が黒色頁岩、第249図－3が鉄石英、その他は流紋岩である。

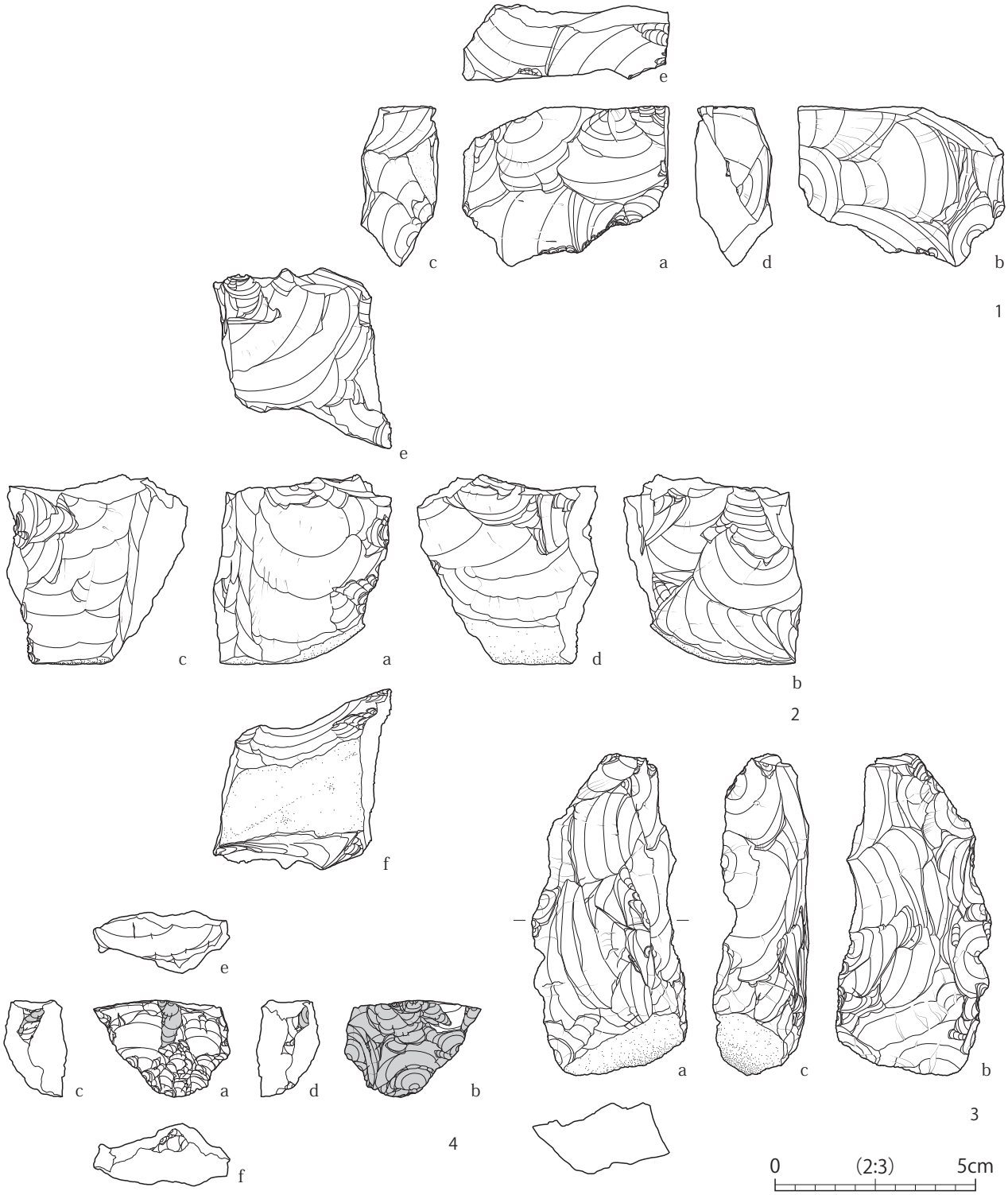
第250図－1は敲打具と思われる。上部を欠損し、a・b面に二次加工を施す。a面の加工は残存部では周縁部の全体におよび、刃部にはさらに細かな調整を重ねる。石材は安山岩である。

第250図－2は大型直縁刃石器、第251図－1は板状石器である。第250図－2はa面に粗い二次加工を施し、加工部以外には自然面を残す。刃部には使用による光沢が認められる。第251図－1は1/3程を欠損し、周縁部の両面に細かい二次加工を連続して施す。刃部には使用による光沢が認められる。石材はともに安山岩である。

第250図－3は磨石である。a面には広い範囲で磨面が認められ、a・b面の下端部は剥離している。石材は安山岩である。板状石器の未成品を転用している可能性もあるため打製石器として登録し、板状石器と同時掲載した。

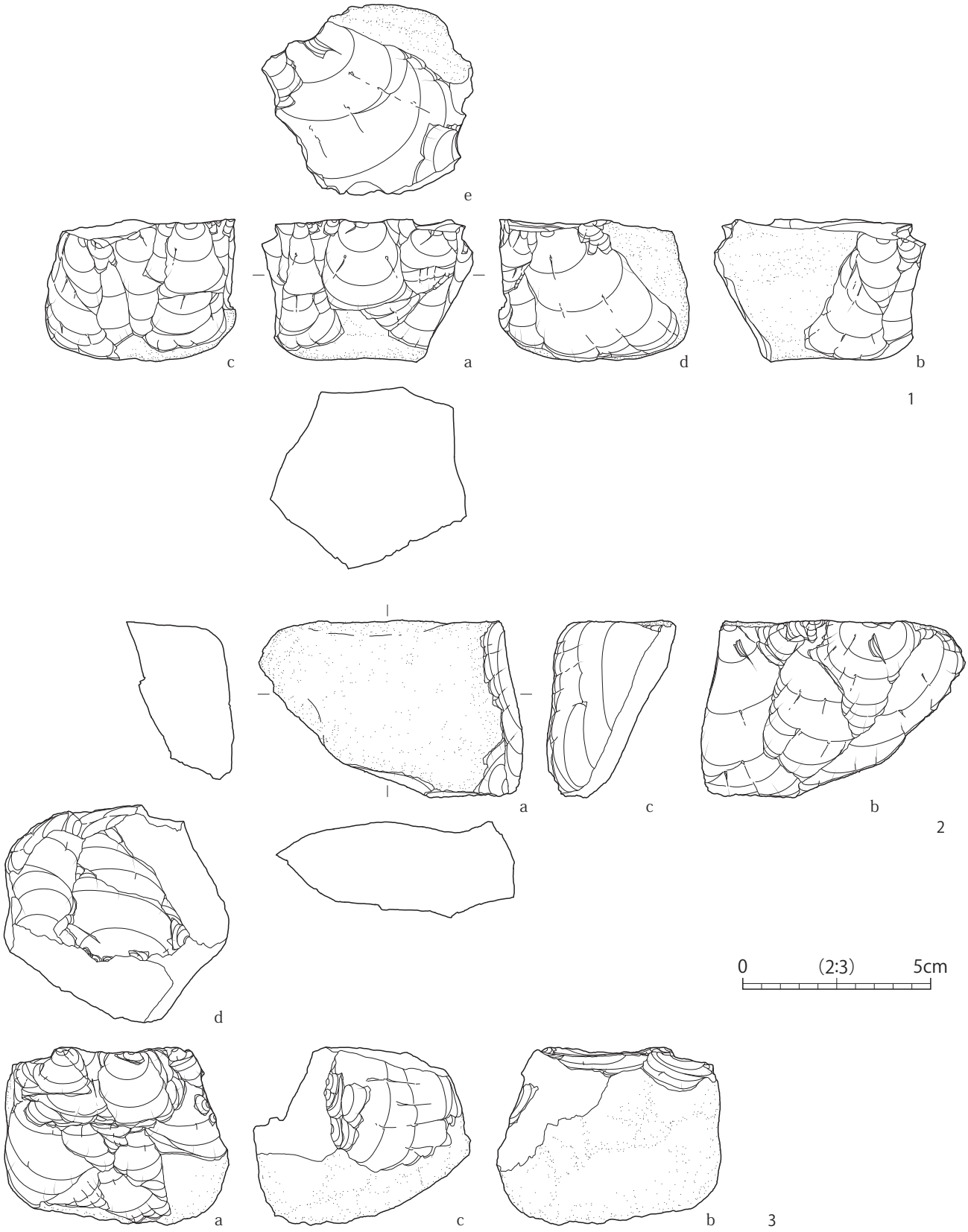
第252～254図は石核である。第252図－1は剥片素材を用い、打面転移をくり返しながら剥離作業を行う。右側面（c面）の一部には自然面を残し、a面の下端部には微細剥離が認められる。2は打面を90°転移させながら剥離作業を行い、下面（f面）には自然面を残す。c面の左側縁部下方には微細剥離が認められる。3は縦長の大型剥片素材を用い、剥離作業は短軸方向から行われる。下面には自然面を残す。4は小型の石核で、a・b面にて多方向から剥離作業を行い、加熱処理による二重パティナが認められる。第253図－1は単設打面で、原石を半分割したその分割面を打面とする。剥離作業は打面の周縁部にて行うが全周はせず、b面から下面にかけて自然面を残す。2は分割礫を素材とし、自然面を打面に一方向からの剥離作業を行うが、作業回数は少ない。このためa面から上面にかけて自然面を残す。3は原石に剥離による打面を作出し、a面を中心に剥離作業を行う。作業途中で打面を90°転移している。打面およびa・c・d面以外は自然面となっている。第254図－1は打面を様々な角度に転移させながら剥離作業を行う。剥離作業は全ての面におよび、自然面を残さない。2は打面を様々な角度

に転移させながら剥離作業を行い、下面（e 面）の一部には自然面を残す。石材は第 252 図－ 4 が玉髄であるほかは、全て流紋岩である。



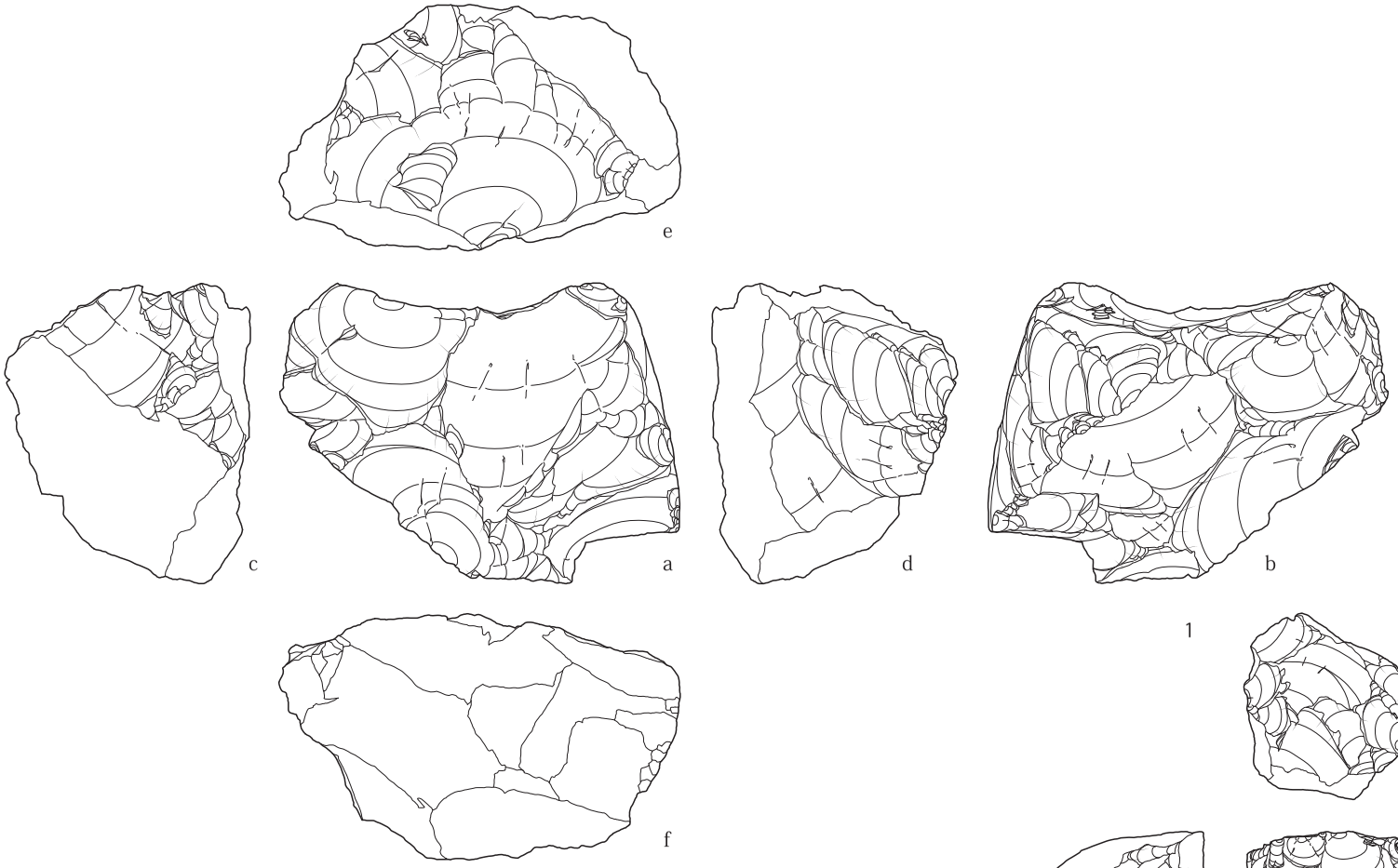
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-244	第9次	SI316	堆積土	打製石器	石核	4	5.1	2	36.7	流紋岩	剥片素材、打面転移多角度、c面一部自然面、a面下端部微細剥離	141
2	Ka-245	第9次	SI314	堆積土	打製石器	石核	4.7	4.5	4.5	94	流紋岩	打面転移90°、f面自然面、c面左側縁下部微細剥離	142
3	Ka-246	第9次	SI345	掘り方	打製石器	石核	8	3.9	2.4	60.2	流紋岩	大型剥片素材、剥離短軸方向、下端部自然面	142
4	Ka-248	第9次	33G	検出面	打製石器	石核	2.4	3.4	1.6	9.8	玉髄	a・b面剥離作業多方向、二重パティナ（加熱処理）	142

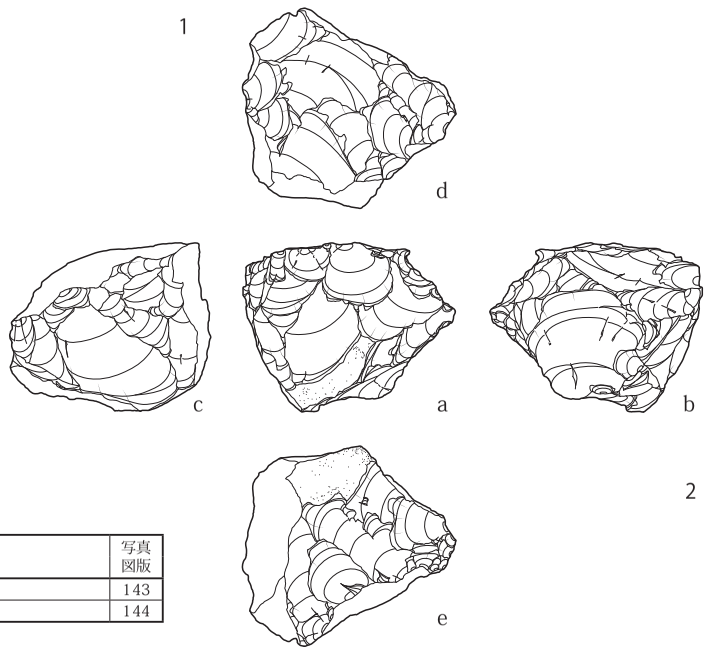
第 252 図　第 9 次調査（層位不明）出土石器（6）



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm)			重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-247	第9次	SD7	堆積土	打製石器	石核	3.8	5.6	5.1	128.6	流紋岩	単節打面(原石分割面)、打面周辺部剥離作業、b面～下面自然面	142
2	Ka-249	第9次	SX28	堆積土	打製石器	石核	4.7	7	3.4	102.5	流紋岩	打面自然面、剥離作業一方向、a面～上面自然面	143
3	Ka-250	第9次	SI324	堆積土	打製石器	石核	4.8	6	5.8	170.3	流紋岩	剥離作業a面中心、打面転移90°、a・c・d面以外自然面	143

第 253 図　第 9 次調査（層位不明）出土石器（7）

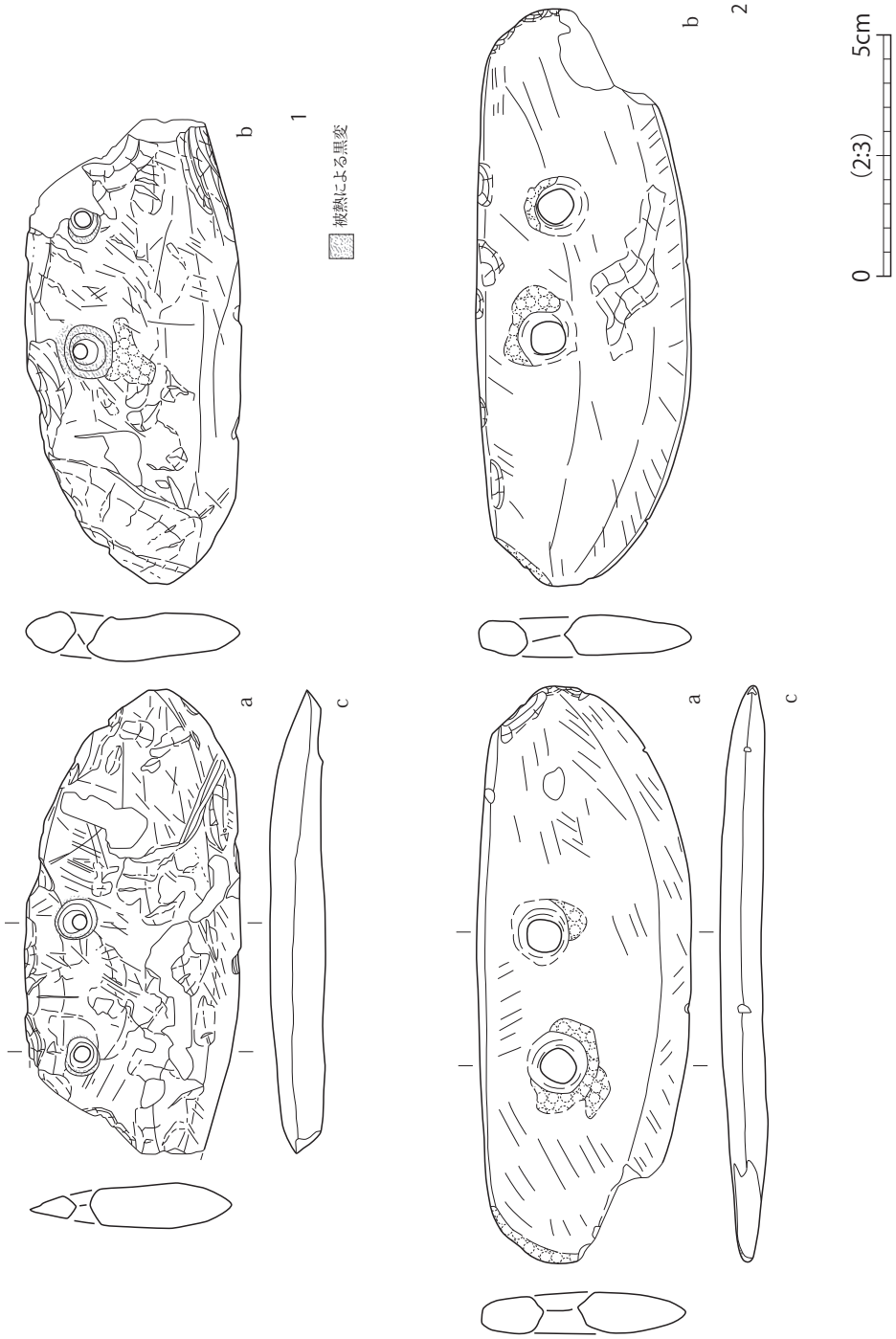




0 (2:3) 5cm

第254図　第9次調査（層位不明）出土石器（8）

図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-251	第9次	SX28	堆積土	打製石器	石核	6.4	8.5	5.3	245	流紋岩	打面転移多角度、全面剥離作業	143
2	Ka-252	第9次	SI314	堆積土	打製石器	石核	3.3	4.2	4	50.6	流紋岩	打面転移多角度、e面一部自然面	144



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Kb-009	第9次	SI316	掘り方	磨製石器	石庖丁	4.5	9.6	1.1	57.2	片岩	紐孔外径1.1cm・内径0.3cm、一部欠損、敲打・剥離→磨整形	144
2	Kb-010	第9次	SI321	カマド袖内	磨製石器	石庖丁	4.5	11.9	1	71.4	砂岩	紐孔外径1.3cm・内径0.7cm、敲打・剥離→磨整形	144

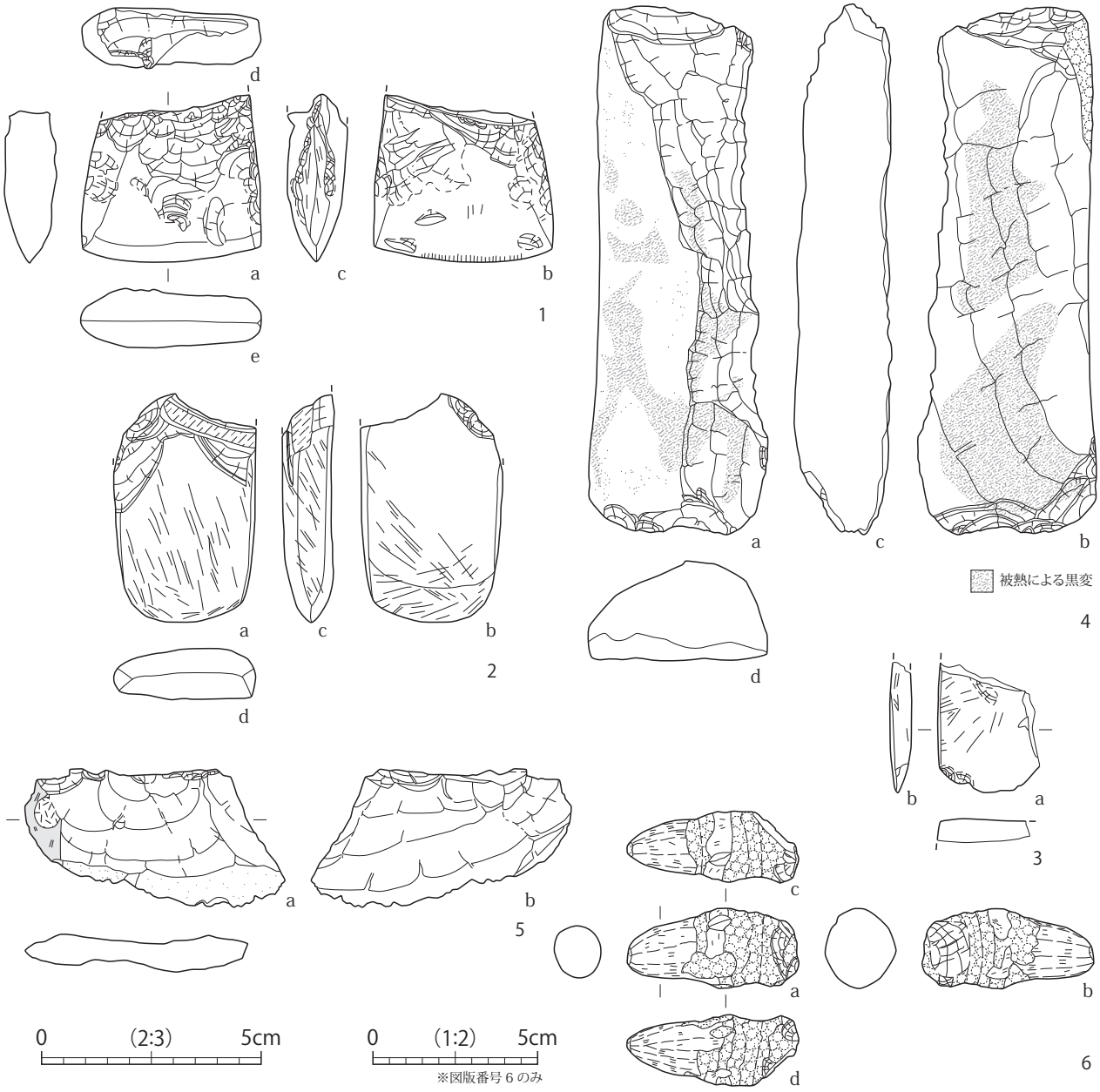
第 255 図　第 9 次調査（層位不明）出土石器（9）

第 255 図－ 1・2 は石庖丁である。1 は一部を欠損する。板状節理によって得られた素材の周縁部を剥離・敲打し、その後研磨整形される。紐孔は 2 箇所あり、紐擦れの痕跡が認められる。孔部分は両面からの回転穿孔である。2 も同様に剥離・敲打・研磨によって製作され、やはり紐孔は 2 箇所ある。孔は両面を敲打後、回転穿孔にて穿たれる。石材は 1 が片岩、2 が砂岩とみられる。

第 256 図－ 1 ～ 5 は磨製石斧で、4･5 は未成品である。他の 3 点は刃部のみが残存する。1 は上半部を欠損後、折れ部分からの剥離が行われる。剥離は一部刃部にまで達している。2 は扁平片刃石斧である。上部は欠損後、折れ部分からの剥離が行われる。残存する各面には、研磨時の多数の線状痕が認められる。3 は小型品で、各残存面

には弱い線状痕が認められる。4 は大型の横長剥片を剥離後、上下端部の両面と a 面の右側面に粗い二次加工を施す。被熱のため、部分的に黒変する。5 は a 面の右側縁部に僅かに磨面が残存する。同面の下端部には自然面が認められ、未成品の破片であると思われる。石材は 1・3 が黒色片岩、2 が凝灰岩、3 が片岩、5 が安山岩とみられる。

6 は独鈷石である。全面を敲打で粗く整形し、その後研磨する。石材は凝灰岩である。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Kb-002	第9次	SI316	P10堆積土	磨製石器	扁平片刃石斧	(3.9)	(4.1)	(1.4)	29.3	黒色片岩	刃部、折損→剥離、a～c面線状痕	144
2	Kb-005	第9次	SI320	堆積土	磨製石器	扁平片刃石斧	(5.2)	(3.2)	(1.3)	15.3	凝灰岩	刃部、折損→剥離、a～c面線状痕	144
3	Kb-006	第9次	SM393-8	堆積土	磨製石器	扁平片刃石斧	(3)	(2.3)	(0.5)	3.7	黒色片岩	刃部破片、a・b面線状痕	144
4	Kb-004	第9次	SI321	カマド煙道部	磨製石器	石斧未成品	12.1	4.1	2.2	129.1	片岩	a面右側縁部・上下端部二次加工、部分的に黒変(被熱)	144
5	Kb-007	第9次	SI268	堆積土	磨製石器	石斧破片	(3.2)	(6)	(0.9)	12.8	安山岩	未成品破片(火ハネ)、a面右側縁部磨面残存・下端部自然面	145
6	Kd-009	第9次	SI319	掘り方	石製品	独鈷石	(5.2)	2.5	2.1	29.2	凝灰岩	1/3程残存、全面敲打→研磨整形	145

第 256 図　第 9 次調査（層位不明）出土石器（10）

接合資料（第 257 ～ 276 図）

接合資料については調査年次をまたぐ接合例や、包含層出土の石器と遺構堆積土出土の石器どうしが接合するなどの例があり、ここに一括して報告する。70 点を掲載し、このうち接合資料 19 ～ 28 は、基本層Ⅳ層出土石器との接合関係をもつ資料である。中でも接合資料 19（第 263 図－ 1）と接合資料 20（同図－ 2）は、第 2 次調査（2001 年度実施）の出土石器との接合関係をもつ。なお第 259 図は、基本層Ⅳ層中の石器出土状況のみを示した。

【接合資料 1】（第 257 図－ 1）

剥片 4 点の接合資料である（Ka-1 ～ 4）。同一方向から剥離され、Ka-1 の観察から打面を 180°転移させていることが判る。Ka-1 ～ 3 は第 6 次調査区 04･06 グリッド、Ka-4 は SI286 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 2】（第 257 図－ 2）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-5・6）。打面は自然面を利用しており、同一方向から剥離される。Ka-5 は第 6 次調査区 04 グリッド、Ka-6 は SI287 掘り方から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 3】（第 257 図－ 3）

二次加工のある剥片と剥片の接合資料である（Ka-7・Ka-8）。同一方向から剥離され、a 面は全て自然面である。Ka-7 は第 6 次調査区 07 グリッド、Ka-8 は SD205 堆積土から出土した。石材は凝灰岩である。

【接合資料 4】（第 257 図－ 4）

剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である（Ka-9・Ka-10）。同時割れを起こしたものと考えられる。a 面には自然面を残す。Ka-9 は第 6 次調査区 03 グリッド、Ka-10 は SI279 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 5】（第 258 図－ 1）

剥片 3 点の接合資料である（Ka-11 ～ 13）。Ka-11・13 は同時割れである。Ka-11 は SI279 床面、Ka-12 は第 6 次調査区 06 グリッド、Ka-13 は SI287 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 6】（第 258 図－ 2）

剥片と砕片の接合資料である（Ka-14・15）。同一方向の加撃で剥離されたものと考えられる。a 面の観察から、打面を転移させながら剥離作業を行っていることが判る。Ka-14 は第 6 次調査区 06 グリッド、Ka-15 は SI283 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 7】（第 258 図－ 3）

石核と剥片の接合資料である（Ka-16・17）。Ka-16 はやや大型の剥片を素材とした石核であり、右側縁部に Ka-17 が接合する。a 面には広い範囲で自然面を残す。Ka-16 は SI279 周溝堆積土、ka-17 は第 6 次調査区 06 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

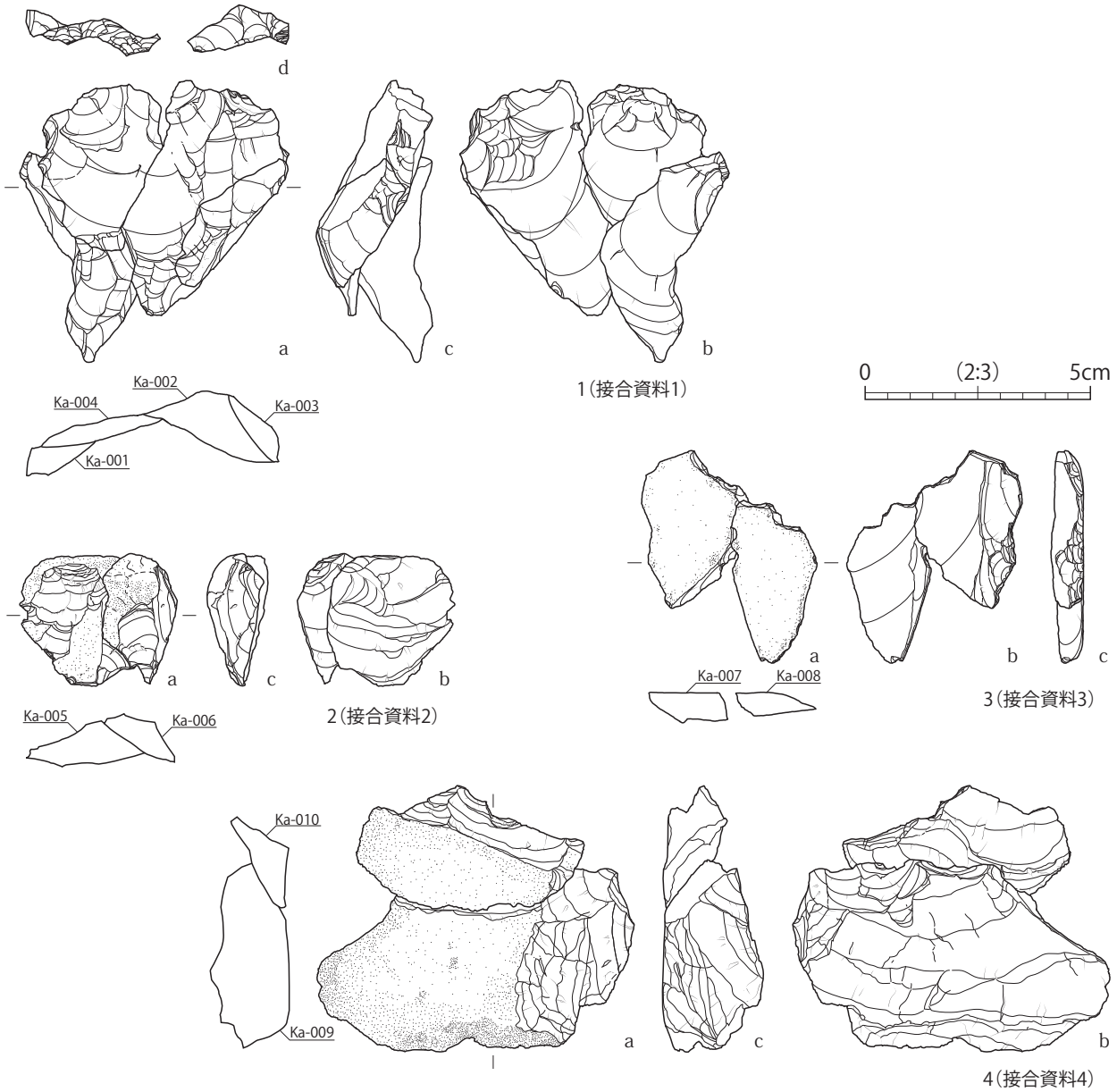
【接合資料 8】（第 260 図－ 1）

剥片 4 点の接合資料である（Ka-18 ～ 21）。Ka-19 ～ 21 は同時割れを起こしたものと考えられ、Ka-18・20・21 は自然面を残す。Ka-18 は第 6 次調査区 03 グリッド、Ka-19 ～ 21 は SI281・287・289 堆積土から出土した。

石材は流紋岩である。

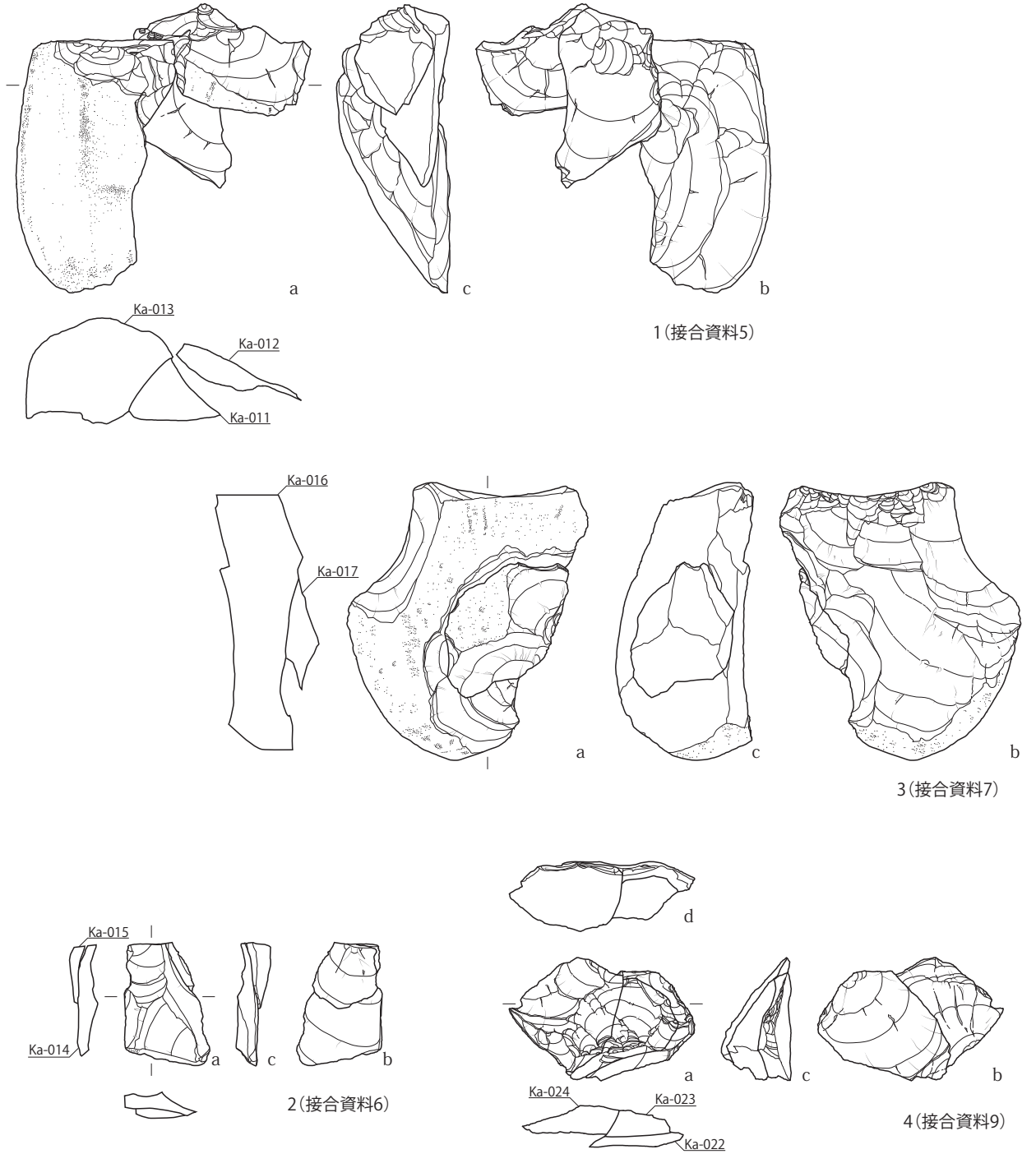
【接合資料 9】（第 258 図－ 4）

剥片 3 点の接合資料である（Ka-22 ～ 24）。a 面の観察から、打面を転移させながら剥離作業を行っているのが



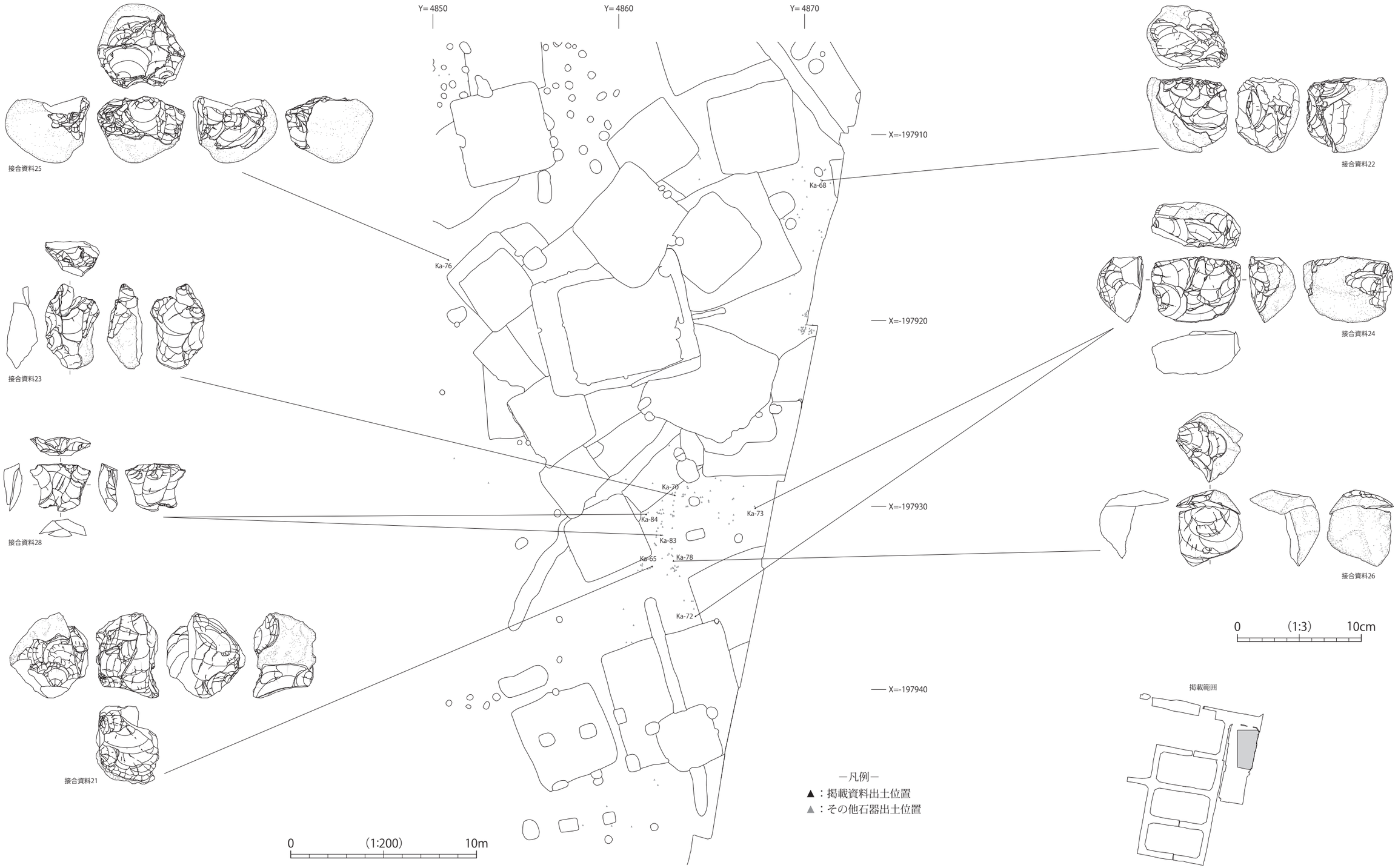
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量（cm）			重量（g）	石　材	備　　考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-001	第6次	04G	検出面	打製石器	剥片	4.7	2.9	0.7	7.3	流紋岩	接合資料1 剥片4点接合、剥離同一方向、180°打面転移	145
	Ka-002	第6次	04G	検出面	打製石器	剥片	5.3	3.8	1.3	14.2			
	Ka-003	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	2.8	2.5	0.5	3			
	Ka-004	第6次	SI286	堆積土	打製石器	剥片	3.7	3	0.6	5.6			
2	Ka-005	第6次	04G	検出面	打製石器	剥片	2.9	2.8	1.2	7.2	流紋岩	接合資料2 剥片2点接合、剥離同一方向、打面自然面利用	145
	Ka-006	第6次	SI287	掘り方	打製石器	剥片	2.9	1.6	0.8	2.9			
3	Ka-007	第6次	07G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	3.5	2.3	0.8	5.5	凝灰岩	接合資料3 二次加工のある剥片+剥片接合、剥離同一方向、a面全体自然面残存	145
	Ka-008	第6次	SD205	堆積土	打製石器	剥片	3.6	1.9	0.6	3.8			
4	Ka-009	第6次	03G	検出面	打製石器	剥片	4.3	7	1.8	50.3	流紋岩	接合資料4 剥片+微細剥離のある剥片接合、同時割れ、a面自然面残存	145
	Ka-010	第6次	SI279	堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	2.7	5	1.3	10.1			

第 257 図　接合資料 1 ～ 4



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-011	第6次	SI279	床面直上	打製石器	剥片	4.4	2.6	1.8	11.7	流紋岩	接合資料5 剥片3点資料、Ka-011・013同時割れ	145
	Ka-012	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	2.7	3.3	0.8	6.8			
	Ka-013	第6次	SI287	堆積土	打製石器	剥片	6.2	3.9	2.1	50.1			
2	Ka-014	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	3	2.1	0.5	2.8	流紋岩	接合資料6 剥片+砕片接合、剥離同一方向、打面転移有	145
	Ka-015	第6次	SI283	堆積土	打製石器	剥片	1.6	1.7	0.4	0.7			
3	Ka-016	第6次	SI279	堆積土	打製石器	石核	6.7	5.9	3.3	90.3	流紋岩	接合資料7 石核+剥片接合、やや大型剥片素材石核、a面自然面残存	146
	Ka-017	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	3.3	3	0.8	9.6			
4	Ka-022	第6次	SI281	堆積土	打製石器	剥片	2.6	3.2	0.7	4.6	流紋岩	接合資料9 剥片3点接合、打面転移多角度	146
	Ka-023	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	2.4	1.8	0.8	3.2			
	Ka-024	第6次	SI287	堆積土	打製石器	剥片	2.8	2.7	0.8	4.7			

第258図　接合資料5～7・9



第 259 図　接合資料（Ⅳ層）出土状況図

判る。Ka-22 は SI281 堆積土、Ka-23 は第 6 次調査区 06 グリッド、Ka-24 は SI287 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 10】（第 260 図－ 2）

石核と剥片の接合資料である（Ka-25・26）。同一方向から剥離され、Ka-25 は一部に自然面を残す。Ka-25 は第 6 次調査区 07 グリッド、Ka-26 は SI276 － P7 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 11】（第 260 図－ 3）

剥片 2 点、微細剥離のある剥片 1 点の接合資料である（Ka-27 ～ 29）。同一方向から剥離され、剥離工程は Ka-28→Ka-27→Ka-29 の順である。いずれも自然面を残す。Ka-27・28 は SI283 堆積土、Ka-29 は第 6 次調査区 04 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 12】（第 261 図－ 1）

剥片と二次加工のある剥片の接合資料である（Ka-30・31）。同一剥片の折れ面で接合する。Ka-31 は折れ面から a・b 両面に二次加工を施す。上部には微細剥離も認められる。第 6 次調査区 03・04 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 13】（第 261 図－ 2）

剥片と二次加工のある剥片の接合資料である（Ka-32・33）。ともに自然面を残し、剥離面の観察から、打面を 90°ずつ転移させていることが判る。ともに第 6 次調査区 04 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 14】（第 261 図－ 3）

剥片 3 点、二次加工のある剥片 1 点の接合資料である（Ka-34 ～ 37）。同一方向から剥離される。Ka-36 の両側縁部には二次加工が認められ、Ka-35 の一部には自然面が残る。Ka-34 は SI283 堆積土、Ka-35 は第 6 次調査区 06 グリッド、Ka-36・37 は SI289 掘り方から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 15】（第 262 図－ 1）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-38・39）。同一剥片が、剥離時の衝撃によって同時割れを起こしたものと考えられる。打面は自然面打面である。第 6 次調査区 04・06 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 16】（第 262 図－ 2）

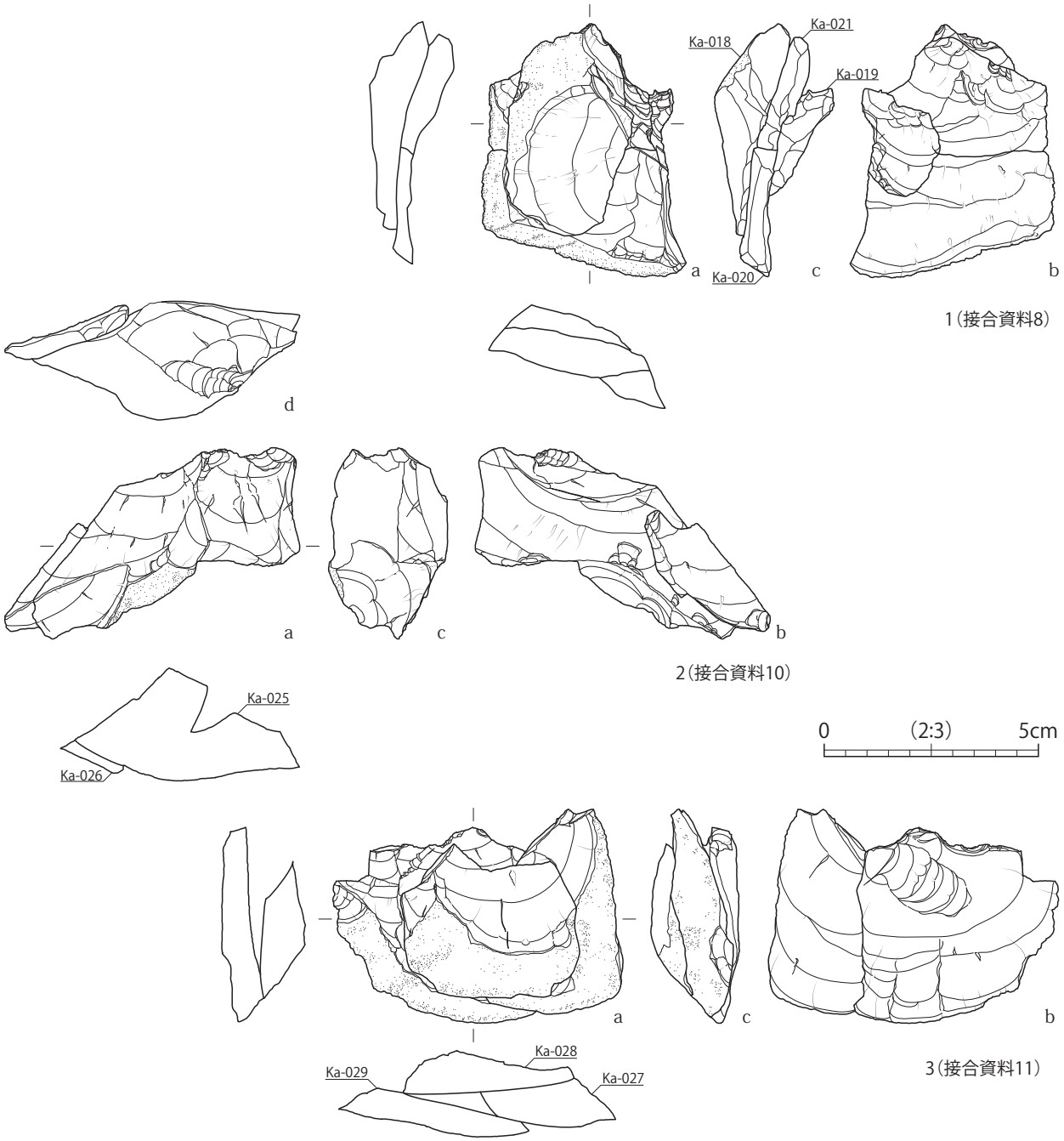
剥片 2 点の接合資料である（Ka-40・41）。2 点とも一部に自然面を残す。a 面の観察から、180°の打面転移が考えられる。Ka-40 は SM378 － 2 堆積土、Ka-41 は第 6 次調査区 06 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 17】（第 262 図－ 3）

剥片 3 点の接合資料である（Ka-42 ～ 44）。剥離工程は Ka-42 を剥離したのち、打面を 90°転移させて Ka-44 → Ka-43 の順で剥離している。Ka-42・43 には一部に自然面が残る。Ka-42 は第 6 次調査区 06 グリッド、Ka-43 は SI287 堆積土、Ka-44 は SI289 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

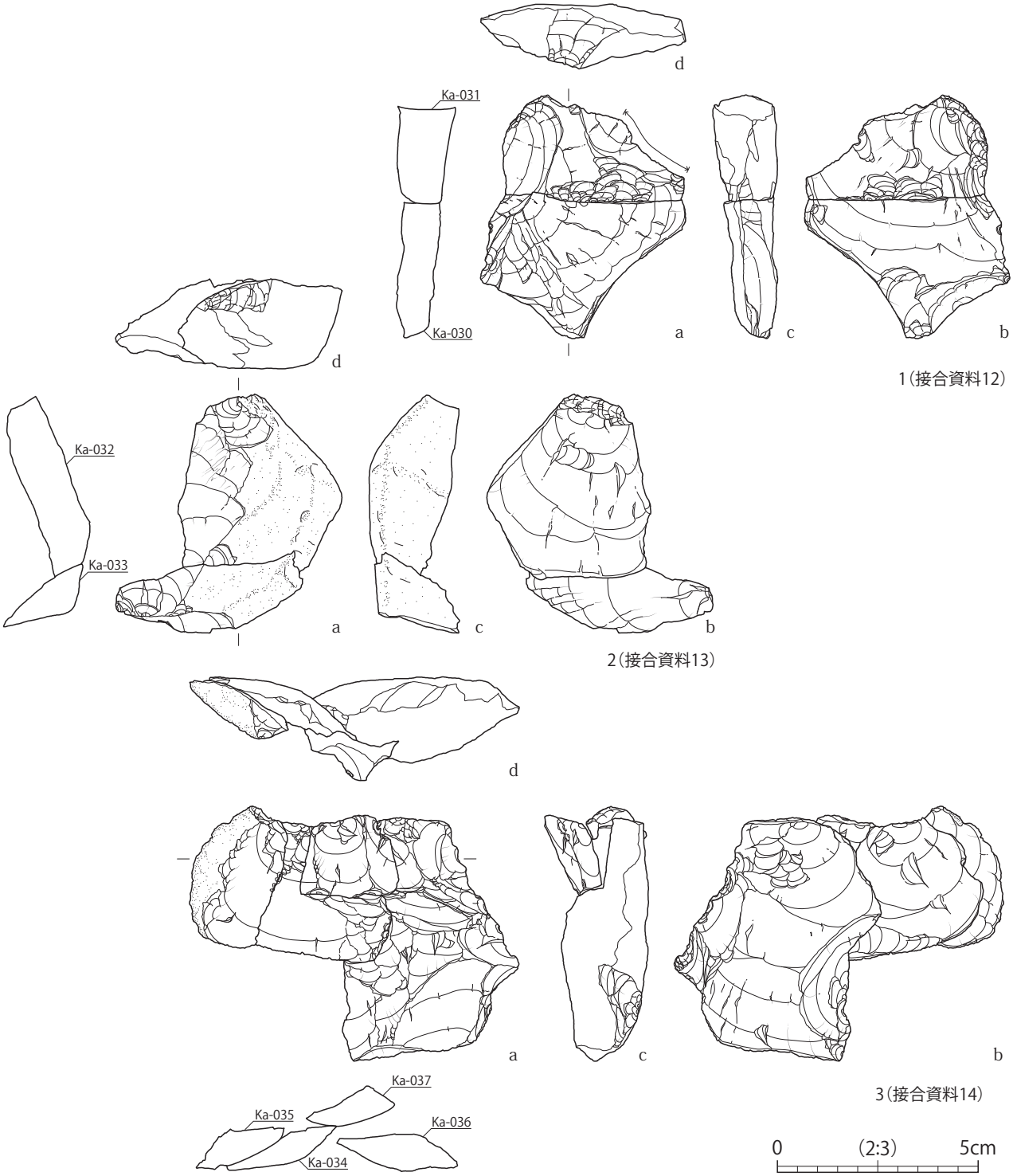
【接合資料 18】（第 262 図－ 4）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-45・46）。同一方向から剥離されるが、打面側がともに折れているため、打面



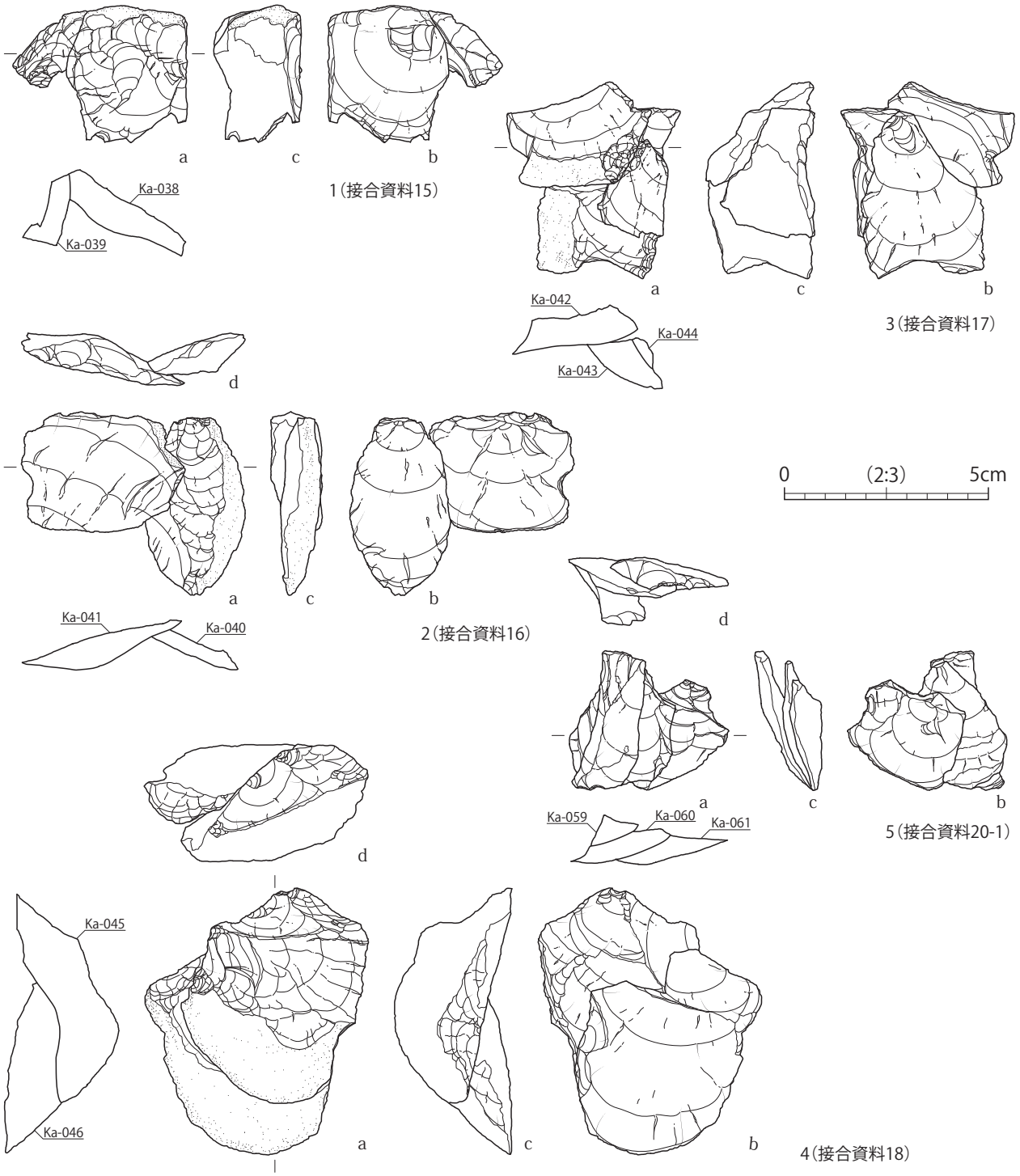
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-018	第6次	03G	検出面	打製石器	剥片	4.9	3	1.1	11.5	流紋岩	接合資料8 剥片4点接合、Ka-019～021同時割れ、Ka-018・020・021自然面残存	146
	Ka-019	第6次	SI281	堆積土	打製石器	剥片	2.5	1.8	0.8	2.4			
	Ka-020	第6次	SI287	堆積土	打製石器	剥片	3	4.8	0.8	10.1			
	Ka-021	第6次	SI289	堆積土	打製石器	剥片	2.8	3.9	0.8	8.7			
2	Ka-025	第6次	07G	検出面	打製石器	石核	4.5	6.2	2.8	38.5	流紋岩	接合資料10 石核+剥片接合、剥離同一方向、Ka-025一部自然面残存	146
	Ka-026	第6次	SI276	P7堆積土	打製石器	剥片	2.8	3	0.4	2.5			
3	Ka-027	第6次	SI283	堆積土上層	打製石器	剥片	4.3	3.3	1.1	16.7	流紋岩	接合資料11 剥片2点+微細剥離のある剥片1点接合、剥離同一方向、剥離工程Ka-028→Ka-027→Ka-029、全て自然面残存	146
	Ka-028	第6次	SI283	堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	3.6	4.1	1	14.3			
	Ka-029	第6次	04G	検出面	打製石器	剥片	4.5	4.7	0.7	18.2			

第 260 図　接合資料 8・10・11



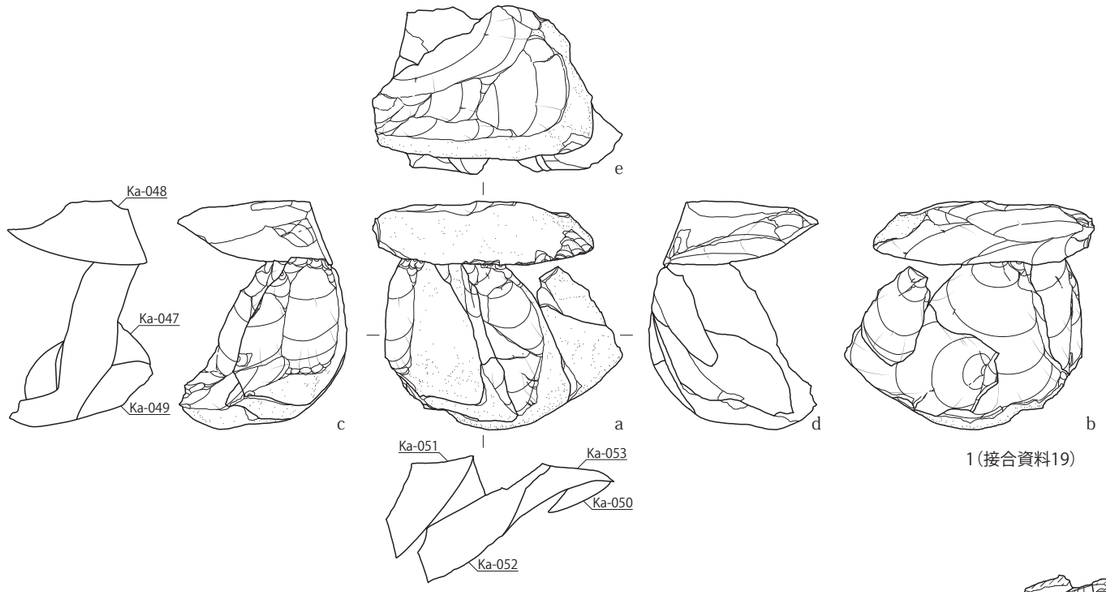
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-030	第6次	03G	検出面	打製石器	剥片	3.6	4.5	1	14.9	流紋岩	接合資料12 剥片+二次加工のある剥片接合、同一剥片の折れ面で接合、Ka-031折れ面からa・b両面に二次加工痕、上部に微細剥離	146
	Ka-031	第6次	04G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	2.7	5.1	1.4	18.6			
2	Ka-032	第6次	04G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	4.6	4.1	2.2	33.2	流紋岩	接合資料13 剥片+二次加工のある剥片接合、90°打面転移、ともに自然面残存	146
	Ka-033	第6次	04G	検出面	打製石器	剥片	4.7	2.1	1	9			
3	Ka-034	第6次	SI283	堆積土上層	打製石器	剥片	3.6	4.1	0.8	10.8	流紋岩	接合資料14 剥片3点+二次加工のある剥片1点接合、剥離同一方向、Ka-036両側縁部二次加工、Ka-035一部自然面残存	147
	Ka-035	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	3.5	2.4	0.8	5.7			
	Ka-036	第6次	SI289	掘り方	打製石器	二次加工のある剥片	6.1	5.2	2.2	50			
	Ka-037	第6次	SI289	掘り方	打製石器	剥片	2	2.4	0.8	3.4			

第 261 図　接合資料 12 ～ 14

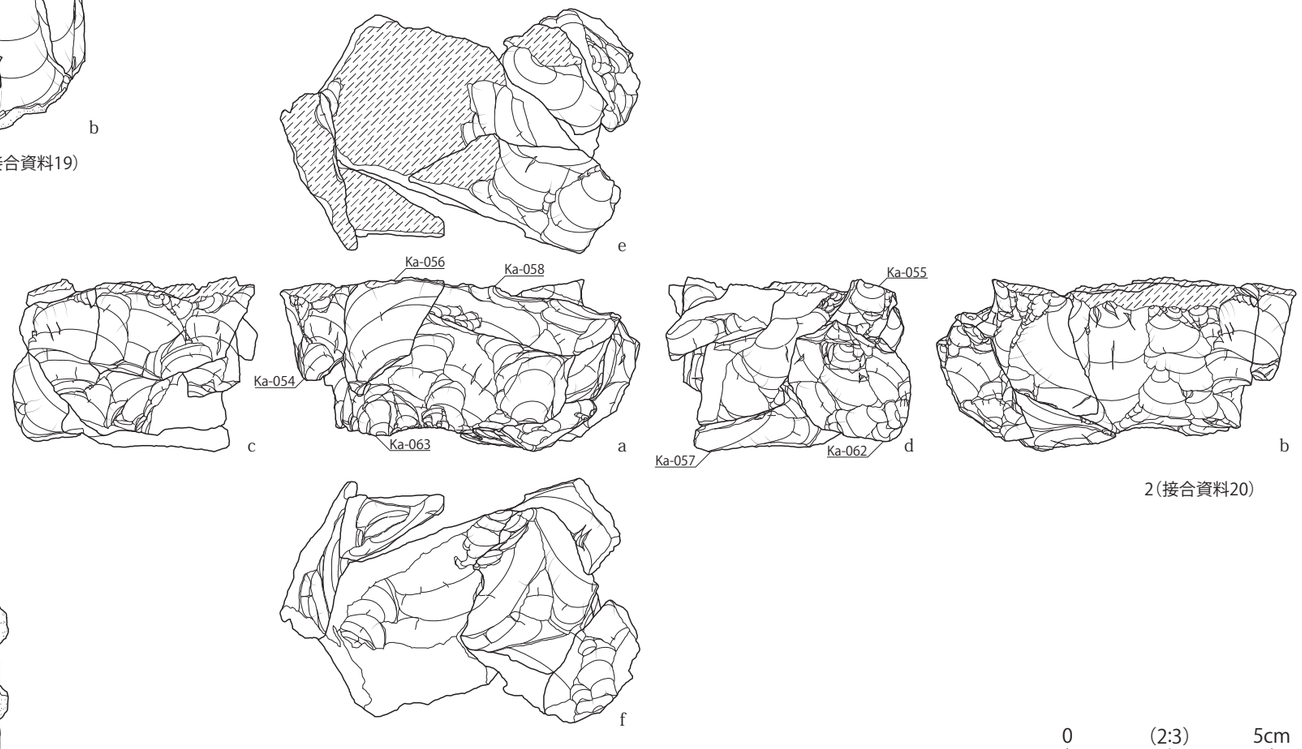


図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-038	第6次	04G	検出面	打製石器	剥片	3.3	3	0.8	9.5	流紋岩	接合資料15 剥片2点接合、同一剥片の同時割れ、打面自然面利用	146
	Ka-039	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	2.3	1.2	0.8	2.9			
2	Ka-040	第6次	SM378-2	堆積土	打製石器	剥片	4.3	3	0.7	7	流紋岩	接合資料16 剥片2点接合、180°打面転移、ともに一部自然面残存	147
	Ka-041	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	3	4	1	8.8			
3	Ka-042	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	2.6	3.5	1.1	8.7	流紋岩	接合資料17 剥片3点接合、剥離同一方向、剥離工程Ka-042→90°打面転移→Ka-044→Ka-043、Ka-042・043一部自然面残存	147
	Ka-043	第6次	SI287	堆積土	打製石器	剥片	4.1	1.8	1	9.5			
	Ka-044	第6次	SI289	堆積土	打製石器	剥片	3.2	2.3	1.3	4.6			
4	Ka-045	第6次	04G	検出面	打製石器	剥片	5.3	4.6	1.9	37.3	流紋岩	接合資料18 剥片2点接合、剥離同一方向、ともに打点部折れ+自然面残存	147
	Ka-046	第6次	SI279	周溝堆積土	打製石器	剥片	5	4.6	1.4	29.5			
5	Ka-059	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	3.4	1.8	0.7	2.5	流紋岩	接合資料20－1 剥片3点接合、剥離ほぼ同一方向、接合資料20同一母岩	147
	Ka-060	第6次	SI276	堆積土	打製石器	剥片	3.1	2.5	0.6	3.8			
	Ka-061	第6次	SI287	堆積土	打製石器	剥片	2.3	2.7	0.6	3.3			

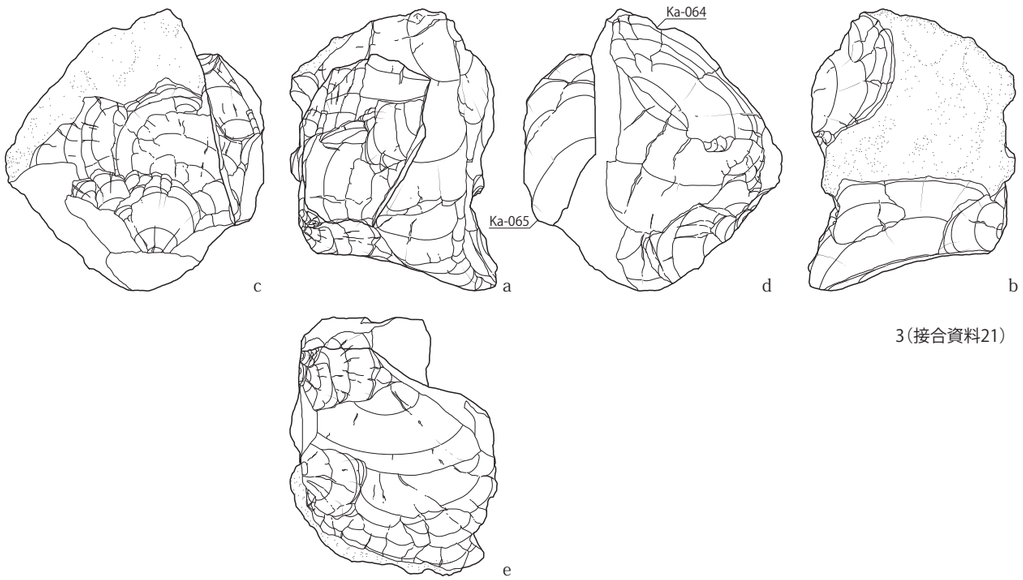
第 262 図　接合資料 15 ～ 18・20-1



1（接合資料19）



2（接合資料20）



3（接合資料21）

0　(2:3)　5cm

図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-047	第6次	SM378-2	堆積土	打製石器	剥片	2.5	1.7	0.8	3.2	流紋岩	接合資料19 剥片7点接合、剥離工程Ka-048→90°打面転移→Ka-051+Ka-047・049(同時割れ)→Ka-052→90°打面転移→Ka-053→90°打面転移→Ka-050、全てに自然面残存	147
	Ka-048	第6次	04G	検出面	打製石器	剥片	5.4	3.8	1.5	28.1			
	Ka-049	第6次	SK231	堆積土	打製石器	剥片	1.6	2.7	1	4			
	Ka-050	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	2.3	1.5	0.4	2.2			
	Ka-051	第6次	SI283	周溝堆積土	打製石器	剥片	3.5	2.8	1.3	15			
	Ka-052	第6次	SI289	堆積土	打製石器	剥片	4.1	4.1	1.8	28.3			
	Ka-053	第2次		Ⅳa層	打製石器	剥片	3.7	2.5	1	8.5			
2	Ka-054	第6次	SI277	床面直上	打製石器	剥片	2.5	4	1.2	9.9	流紋岩	接合資料20 石核(第2次調査出土)+剥片6点接合、剥離工程Ka-062→90°打面転移→Ka-057→90°打面転移→Ka-055+Ka-054+Ka-063→90°打面転移→Ka-058	148
	Ka-055	第6次	03G	検出面	打製石器	剥片	2.9	3.3	1	11.7			
	Ka-056	第6次	04G	検出面	打製石器	剥片	3	2.4	1.4	8.7			
	Ka-057	第6次	SI279	堆積土	打製石器	剥片	4.1	3.3	1.2	11			
	Ka-058	第6次	06G	検出面	打製石器	剥片	3.5	4.4	1.1	11.9			
	Ka-062	第6次	SI289	掘り方	打製石器	剥片	2.9	3	1.1	11.8			
	Ka-063	第2次	18G	Ⅳa層	打製石器	石核	3.7	6.4	4	113.1			
3	Ka-064	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	6.9	5.1	6.3	170.3	流紋岩	接合資料21 石核+剥片接合、Ka-065加撃時の同時割れ	148
	Ka-065	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	剥片	3.2	4.2	1.7	21.1			

第 263 図　接合資料 19 ～ 21

の状態は不明である。2 点とも自然面が残る。Ka-45 は第 6 次調査区 04 グリッド、Ka-46 は SI279 周溝から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 19】（第 263 図－ 1）

剥片 7 点の接合資料である（Ka-47 ～ 53）。うち 1 点は第 2 次調査で出土したものである。いずれの剥片も自然面を残す。剥離工程は Ka-48 を剥離したのちに打面を 90°転移させて Ka-51、同時割れした Ka-47・49、Ka-52 を剥離する。再び打面を 90°転移、Ka-53 を剥離したのちに 90°戻して Ka-50 を剥離する。Ka-47 は SM378 － 2 堆積土、Ka-48・50 は第 6 次調査区 04・06 グリッド、Ka-49 は SK231 堆積土、Ka-51 は SI283 周溝堆積土、Ka-52 は SI289 堆積土、Ka-53 は第 2 次調査区基本層Ⅳa 層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 20】（第 263 図－ 2）

石核と剥片 6 点の接合資料である（Ka-54 ～ 58・62・63）。石核は第 2 次調査で出土した。剥離工程は Ka-62 を節理面方向から剥離したのちに打面を 90°転移させて Ka-57 を剥離、もう一度 90°転移させて Ka-55 を剥離する。Ka-54・63 も節理面の平坦打面から剥離される。Ka-58 は Ka-55 を剥離したのち、打面を 90°転移させて剥離される。Ka-54 は SI277 床面、Ka-55・56・58 は第 6 次調査区 03・04・06 グリッド、Ka-57 は SI279 堆積土、Ka-62 は SI289 掘り方、Ka-63 は第 2 次調査区基本層Ⅳa 層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 20 － 1】（第 262 図－ 5）

剥片 3 点の接合資料である（Ka-59 ～ 61）。接合資料 20 と同一母岩と考えられ、このため枝番を付した。ほぼ同一方向から剥離される。Ka-59 は第 6 次調査区 06 グリッド、Ka-60 は SI276 堆積土、Ka-61 は SI287 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 21】（第 263 図－ 3）

石核と剥片 1 点の接合資料である（Ka-64・65）。Ka-65 は加撃の際に、同時割れを起こしたものと考えられる。ともに基本層Ⅳ層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 22】（第 264 図－ 1）

石核と剥片 2 点の接合資料である（Ka-66 ～ 68）。Ka-66・67 は加撃の際に同時割れしたものである。Ka-66・67 は SI289 堆積土、Ka-68 は基本層Ⅳ層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 23】（第 265 図－ 1）

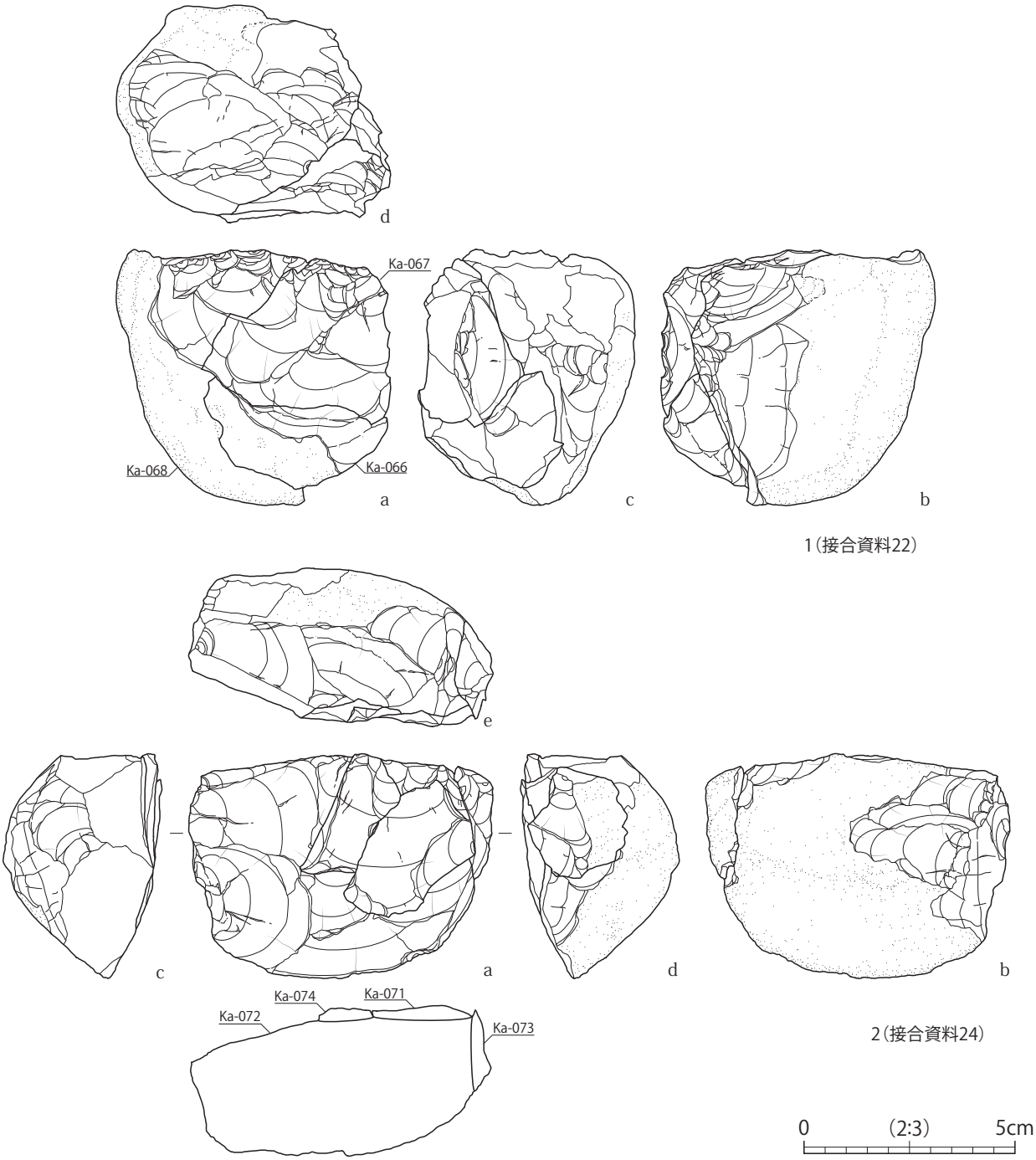
石核と微細剥離のある剥片 1 点の接合資料である（Ka-69・70）。Ka-69 はやや大型の剥片を素材とした石核である。Ka-69 の背面の先端部には、被熱のためやや黒色化した痕跡が確認される。Ka-69 は第 9 次調査区 33 グリッド、Ka-70 は基本層Ⅳ層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 24】（第 264 図－ 2）

石核と剥片 3 点の接合資料である（Ka-71 ～ 74）。石核はやや大振りの剥片を素材とし、自然面を残している。剥片はほぼ同一方向から剥離される。Ka-71 は SI339 堆積土、Ka-72・73 は基本層Ⅳ層、Ka-74 は第 9 次調査区 25 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

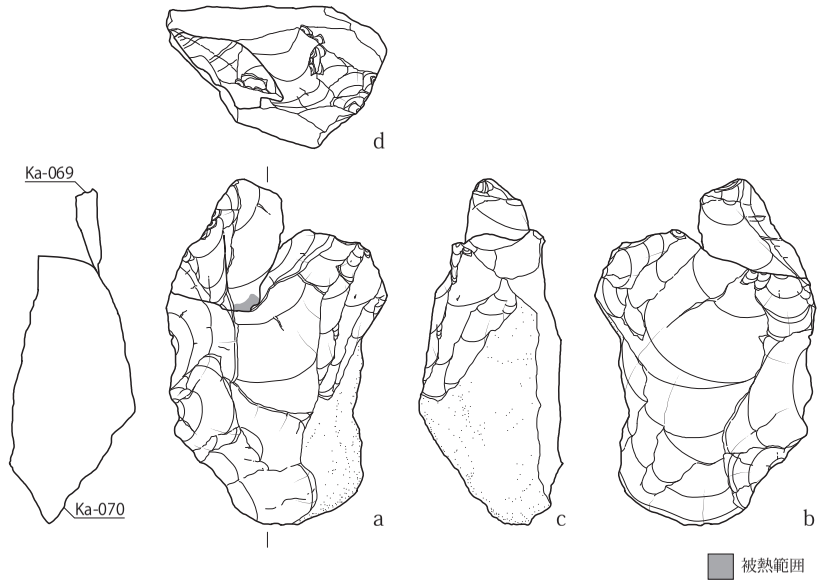
【接合資料 25】（第 265 図－ 2）

石核と剥片 1 点の接合資料である（Ka-75・76）。亜角礫素材の石核であり、90°の打面転移が認められる。Ka-75 は第 9 次調査区 13 グリッド、Ka-76 は基本層Ⅳ層から出土した。石材は流紋岩である。

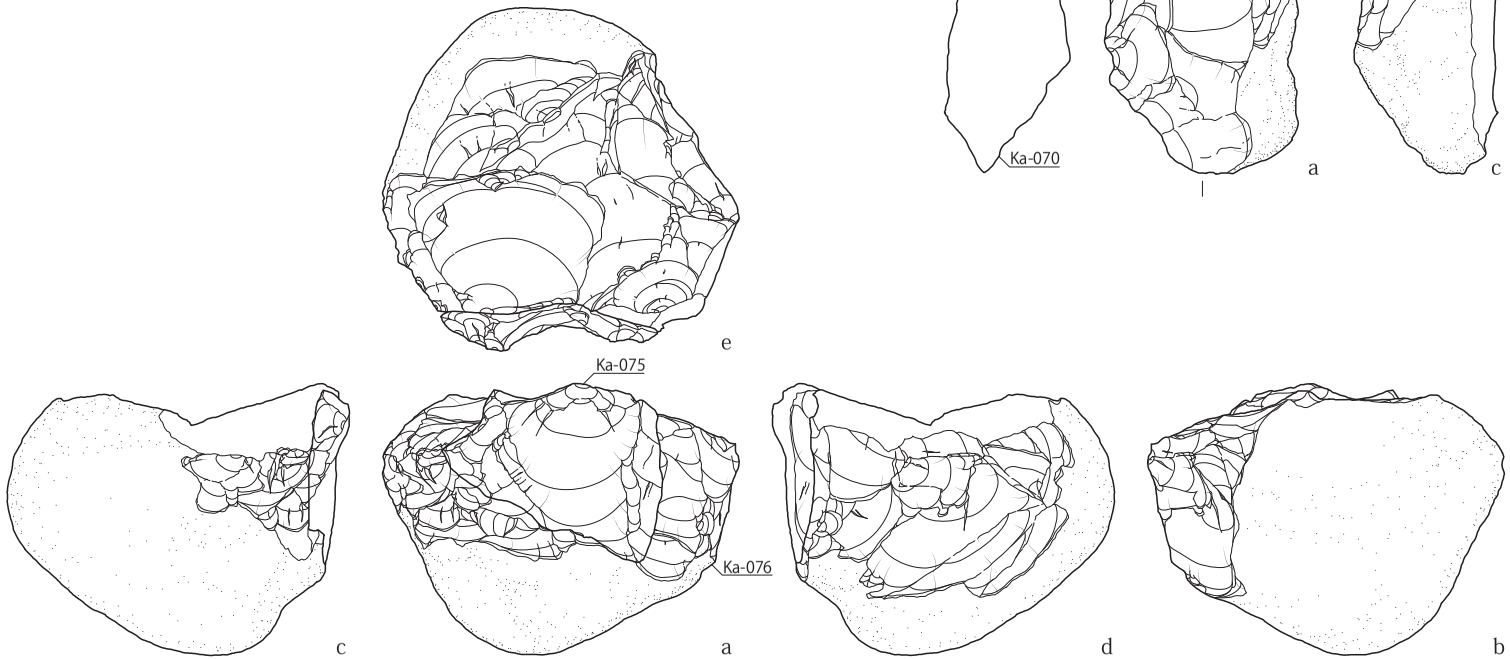


図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-066	第6次	SI289	堆積土	打製石器	剥片	2.8	4.3	0.7	18.2	流紋岩	接合資料22 石核+剥片2点接合、Ka-066・067同時割れ	149
	Ka-067	第6次	SI289	堆積土	打製石器	剥片	4	4.4	1.7	26.5			
	Ka-068	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	6.1	5.8	5	165.7			
2	Ka-071	第9次	SI339	堆積土	打製石器	剥片	3.3	3	0.3	3.5	流紋岩	接合資料24 石核+剥片3点接合、剥離ほぼ同一方向、Ka-072自然面残存	149
	Ka-072	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	5.3	6.8	3.7	140.3			
	Ka-073	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	剥片	2.6	3.6	0.5	4.3			
	Ka-074	第9次	25G	検出面	打製石器	剥片	2.9	2.4	0.7	7			

第 264 図　接合資料 22・24



1（接合資料23）



2（接合資料25）

0　(2:3)　5cm

図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量（cm）			重量（g）	石　材	備　　考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-069	第9次	33G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	2.8	2.3	0.5	3.2	流紋岩	接合資料23 石核+微細剥離のある剥片接合、Ka-069先端部被熱	149
	Ka-070	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	5.8	4.4	2.5	60			
2	Ka-075	第9次	13G	Ⅲ層	打製石器	剥片	3.6	4.4	0.7	7	流紋岩	接合資料25 石核+剥片接合、亜角礫素材、90°打面転移	150
	Ka-076	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	石核	5.3	7.1	6.7	242			

第265図　接合資料23・25

【接合資料 26】（第 266 図－ 1）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-77・78）。Ka-77 を剥離した後作業面を 90°転移させ、Ka-77 の剥離によって形成された剥離面を打面として Ka-78 を剥離している。ともに自然面を残す。Ka-77 は SX28 堆積土、Ka-78 は基本層Ⅳ層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 27】（第 266 図－ 2）

石核と剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である（Ka-79 ～ 81）。Ka-79 の観察から、作業面を転移させながら剥離作業を行っていることが判る。Ka-79 は SI315 掘り方、Ka-80 は第 9 次調査区 33 グリッド、Ka-81 は基本層Ⅳ層から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 28】（第 267 図－ 1）

剥片 3 点の接合資料である（Ka-82 ～ 84）。同一方向からの連続した剥片剥離である。a 面の観察から、打面を 180°転移させていることが判る。Ka-82 は第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 29】（第 267 図－ 2）

石核と剥片の接合資料である（Ka-85・86）。Ka-86 の下端には自然面を残す。各剥離面の観察から、打面を約 90°ずつ転移させていることが判る。ともに SK230 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 30】（第 267 図－ 3）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-87・88）。Ka-87 を剥離後、同時割れによって Ka-88 が剥離されたものと考えられる。ともに SK230 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 31】（第 267 図－ 4）

剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である（Ka-89・90）。同一剥片の折れ面での接合である。Ka-89 は SI272 堆積土、Ka-90 は SK230 堆積土から出土した。石材は黒色頁岩である。

【接合資料 32】（第 268 図－ 1）

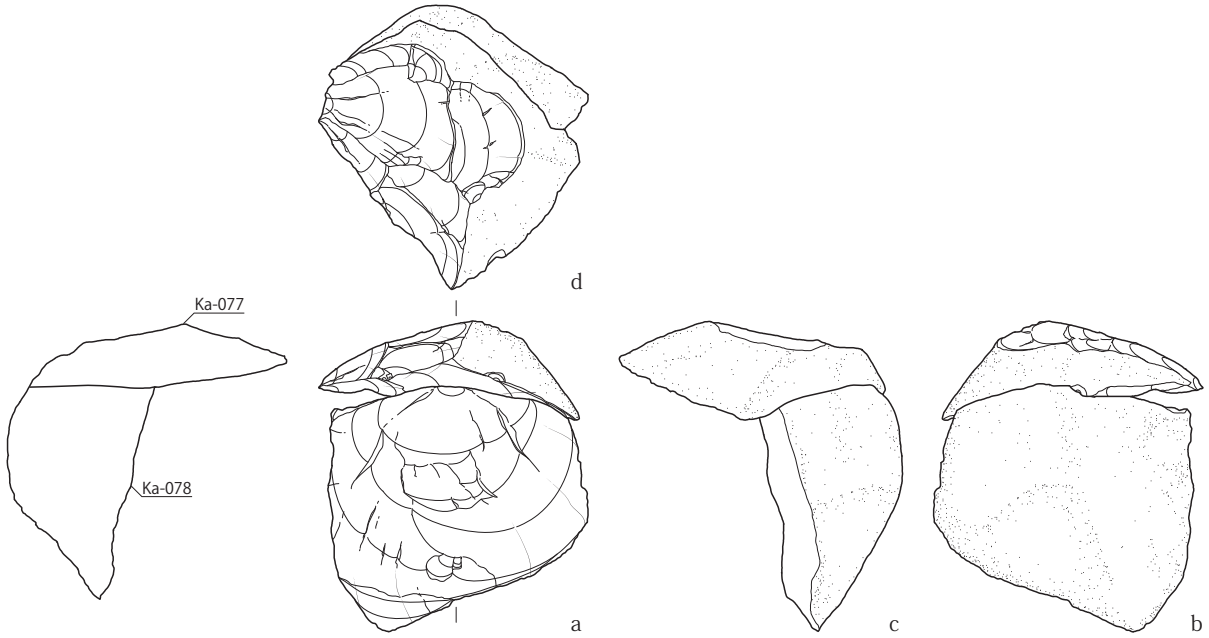
二次加工のある剥片の接合資料である（Ka-91・92）。同一剥片の折れ面での接合である。著しく風化し、二重パティナが認められる。Ka-92 の一部には自然面を残す。ともに SK230 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 33】（第 268 図－ 2）

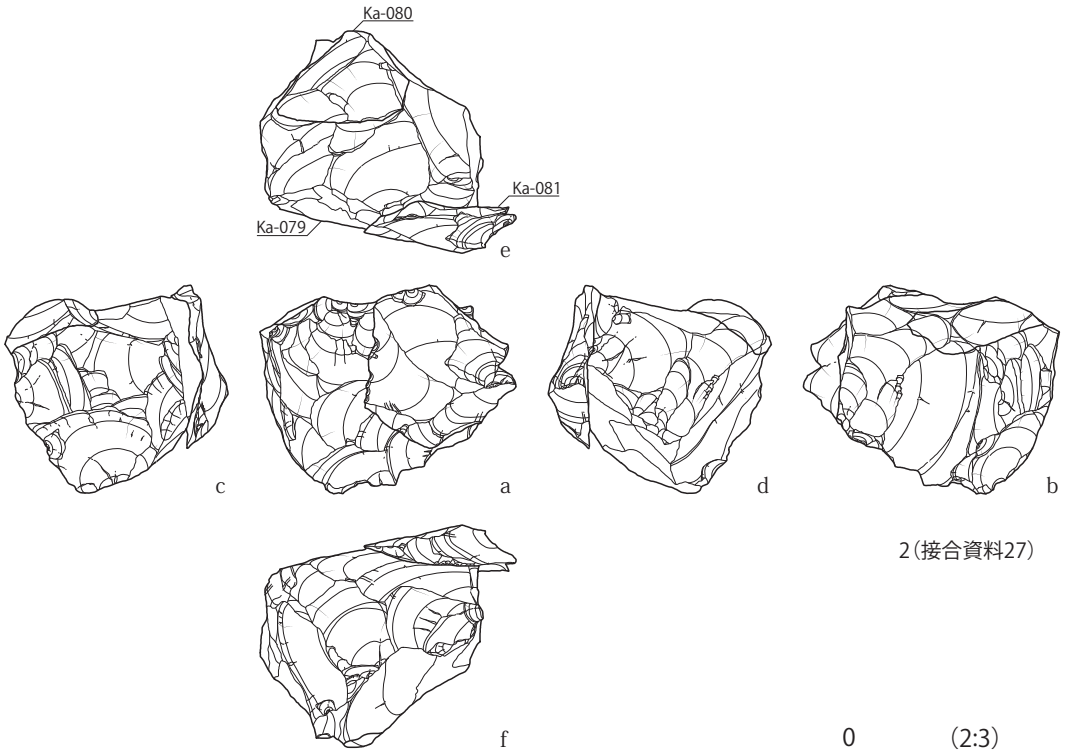
石核と二次加工のある剥片の接合資料である（Ka-93・94）。Ka-93 剥離後に打面を約 90°転移させ、剥離作業を行う。a・c 面は自然面となっている。Ka-93 は SK230 堆積土、Ka-94 は SI279 床面から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 34】（第 268 図－ 3）

石核と剥片の接合資料である（Ka-95・96）。ともに自然面を残し、Ka-95 の剥離面の観察から、90°もしくは 180°打面転移させながら剥離作業を行っているのが判る。Ka-95 は SK223 堆積土、Ka-96 は SD182 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。



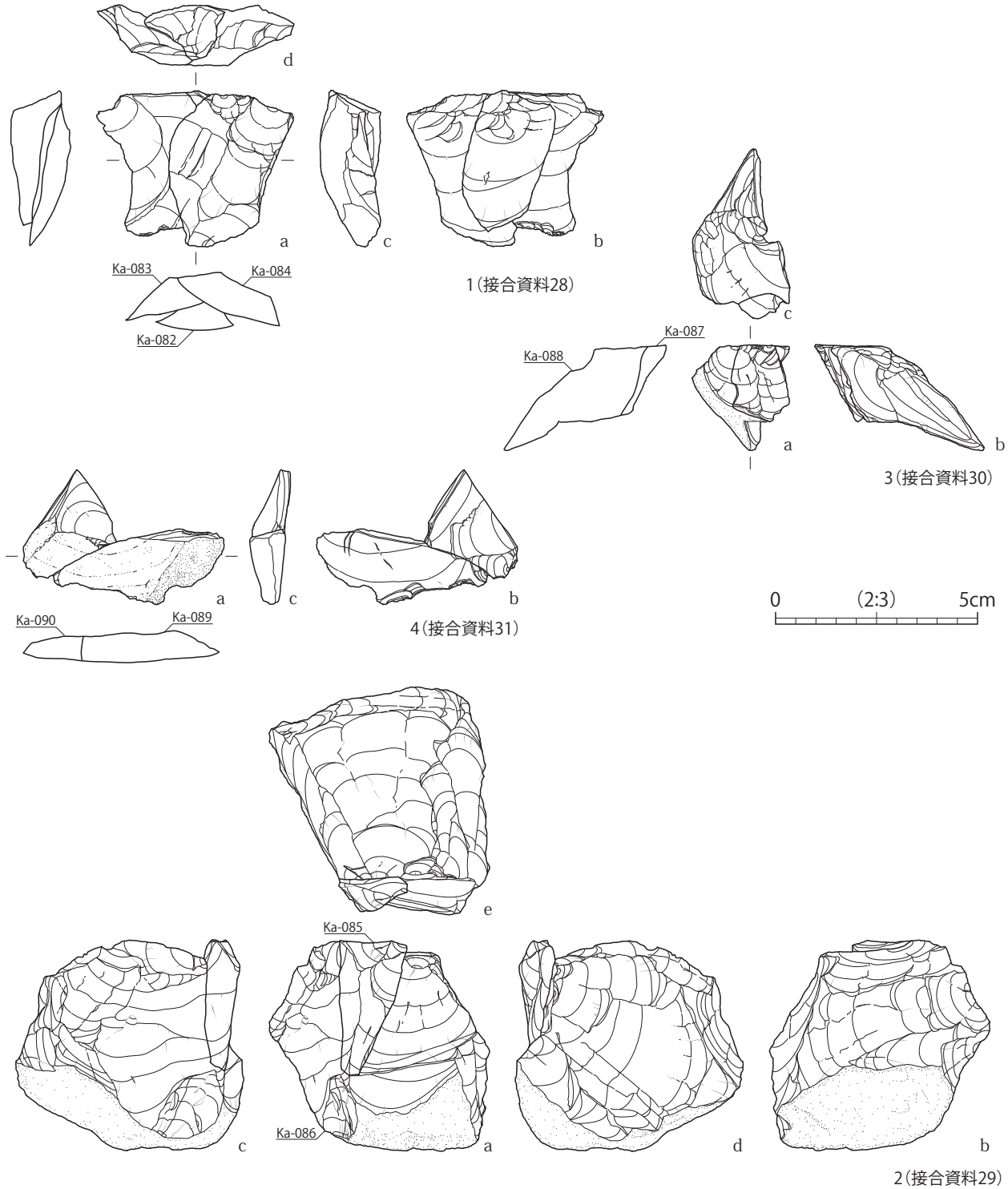
1（接合資料26）



2（接合資料27）

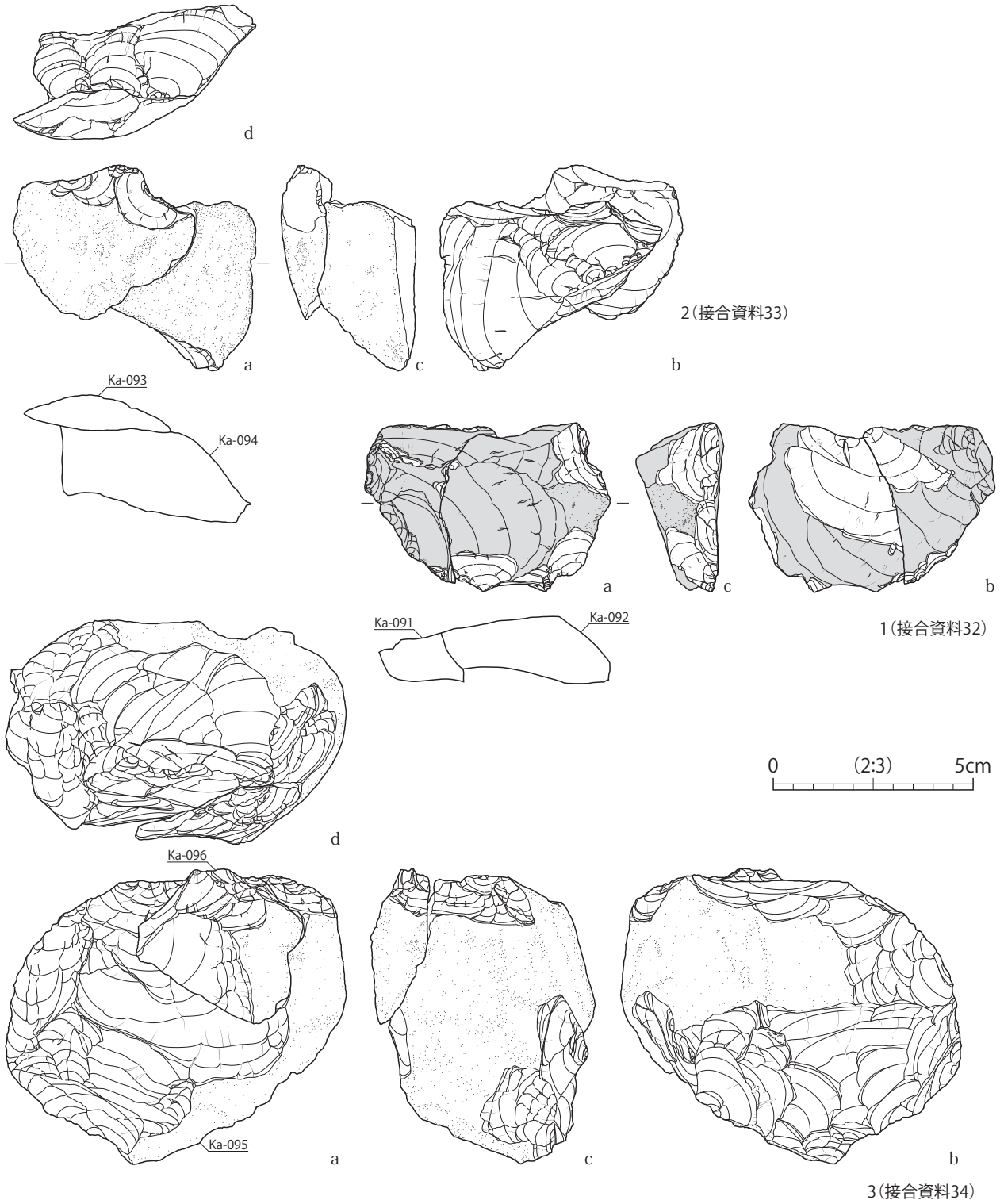
図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-077	第9次	SX28	堆積土	打製石器	剥片	5.2	5.6	1.3	25.3	流紋岩	接合資料26 剥片2点接合、Ka-077剥離→90°作業面転移→剥片剥離、ともに自然面残存	149
	Ka-078	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	剥片	4.9	5.2	2.7	61.4			
2	Ka-079	第9次	SI315	掘り方	打製石器	石核	4	4.4	3.9	59	流紋岩	接合資料27 石核+微細剥離のある剥片+剥片接合、作業面転移	150
	Ka-080	第9次	33G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	1.8	2.6	0.9	2.8			
	Ka-081	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	剥片	3.2	3	0.9	5			

第 266 図　接合資料 26・27



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量（cm）			重量（g）	石　材	備　　考	写真図版
							全長	幅	厚さ				
1	Ka-082	第9次	33G	検出面	打製石器	剥片	3.5	2.4	1.1	5.3	流紋岩	接合資料28 剥片3点接合、剥離同一方向、180°打面転移	150
	Ka-083	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	剥片	3.5	2.7	0.9	6.1			
	Ka-084	第9次	下層調査	Ⅳ層	打製石器	剥片	3.8	3.1	0.9	9			
2	Ka-085	第5次	SK230	堆積土	打製石器	剥片	3.4	1.7	0.9	4	流紋岩	接合資料29 石核+剥片接合、約90°打面転移、Ka-086下端自然面残存	151
	Ka-086	第5次	SK230	堆積土上層	打製石器	石核	5.2	5.7	5.4	142.8			
3	Ka-087	第5次	SK230	堆積土上層	打製石器	剥片	2	1.5	0.6	1.1	流紋岩	接合資料30 剥片2点接合、剥離工程Ka-087→Ka-088（同時割れ）	150
	Ka-088	第5次	SK230	堆積土	打製石器	剥片	2.6	3.8	1.8	10			
4	Ka-089	第5次	SI272	堆積土上層	打製石器	微細剥離のある剥片	1.9	4.2	0.9	5.5	黒色頁岩	接合資料31 剥片+微細剥離のある剥片接合、同一剥片の折れ面で接合	150
	Ka-090	第5次	SK230	堆積土	打製石器	剥片	2.7	2.3	0.7	3.5			

第 267 図　接合資料 28 ～ 31



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-091	第5次	SK230	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	3	4	1.7	15.8	流紋岩	接合資料32 二次加工のある剥片2点接合、同一剥片の折れ面での接合、二重パティナ（風化）、Ka-092一部自然面残存	151
	Ka-092	第5次	SK230	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	4.2	4.3	2.1	31.2			
2	Ka-093	第5次	SK230	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	3.9	4.5	1.3	16.5	流紋岩	接合資料33 石核+二次加工のある剥片接合、Ka-093→約90°打面転移、a・c面自然面残存	151
	Ka-094	第6次	SI279	床面直上	打製石器	石核	5.6	4.2	2.2	43.9			
3	Ka-095	第5次	SK223	堆積土下層	打製石器	石核	7.4	8.6	5.2	341.5	流紋岩	接合資料34 石核+剥片接合、90°～180°打面転移、ともに自然面残存	151
	Ka-096	第6次	SD182	堆積土	打製石器	剥片	3.9	4.2	1.4	14.5			

第 268 図　接合資料 32 ～ 34

【接合資料 35】（第 269 図－ 1）

石核と剥片 3 点の接合資料である（Ka-97 ～ 100）。Ka-98、Ka-99 は同一方向から剥離され、剥離後に打面を 90°転移させて Ka-97 を剥離する。Ka-97 は SK321 堆積土、Ka-98 は SI283 堆積土、Ka-99 は SI287 堆積土、Ka-100 は SK285 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 36】（第 269 図－ 2）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-101・102）。Ka-101 を剥離後、打面を約 90°転移させて Ka-102 を剥離する。Ka-101 は SM377 堆積土、Ka-102 は SI339 － P3 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 37】（第 269 図－ 3）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-103・104）。同一剥片の折れ面での接合である。b 面の観察から、打面を 90°転移させていることが判る。ともに SI275 － P3 堆積土から出土した。石材は頁岩である。

【接合資料 38】（第 269 図－ 4）

剥片 3 点の接合資料である（Ka-105 ～ 107）。Ka-106・107 は一部節理面を残し、剥離の際に同時割れを起こしたものと考えられる。3 点いずれも SI283 堆積土から出土した。石材は頁岩である。

【接合資料 39】（第 270 図－ 1）

剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である（Ka-108・109）。同一方向から剥離される。Ka-108 は SI279 周溝堆積土、Ka-109 は SI289 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 40】（第 270 図－ 2）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-110・111）。a 面の観察から、打面を 90°転移させていることが判る。ともに SI289 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 41】（第 270 図－ 3）

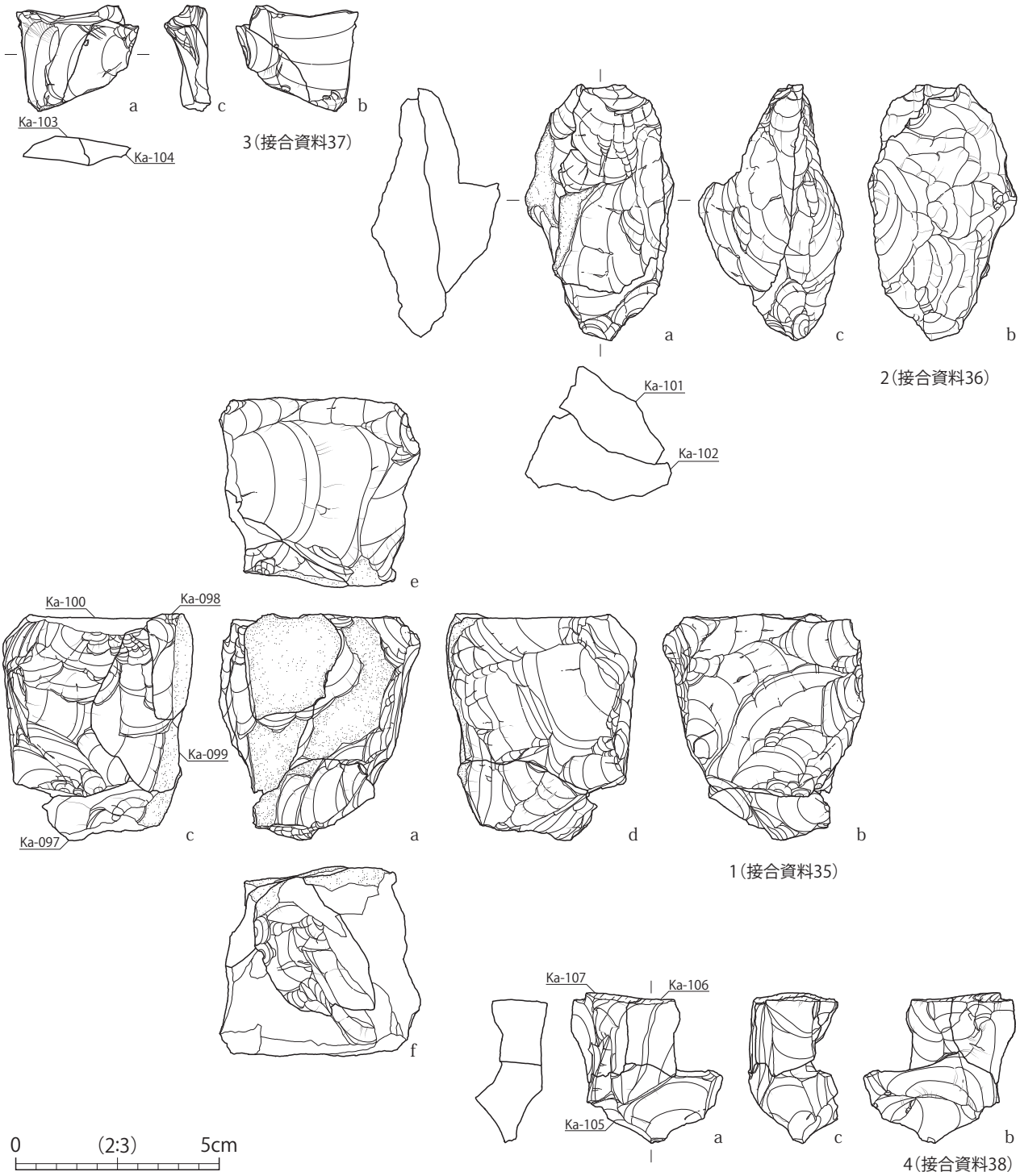
剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である（Ka-112・113）。同一方向から剥離され、a 面の観察から打面を 180°転移させていることが判る。ともに SI287 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 42】（第 270 図－ 4）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-114・115）。垂直方向の同時割れを起こした剥片の接合資料である。ともに SI289 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

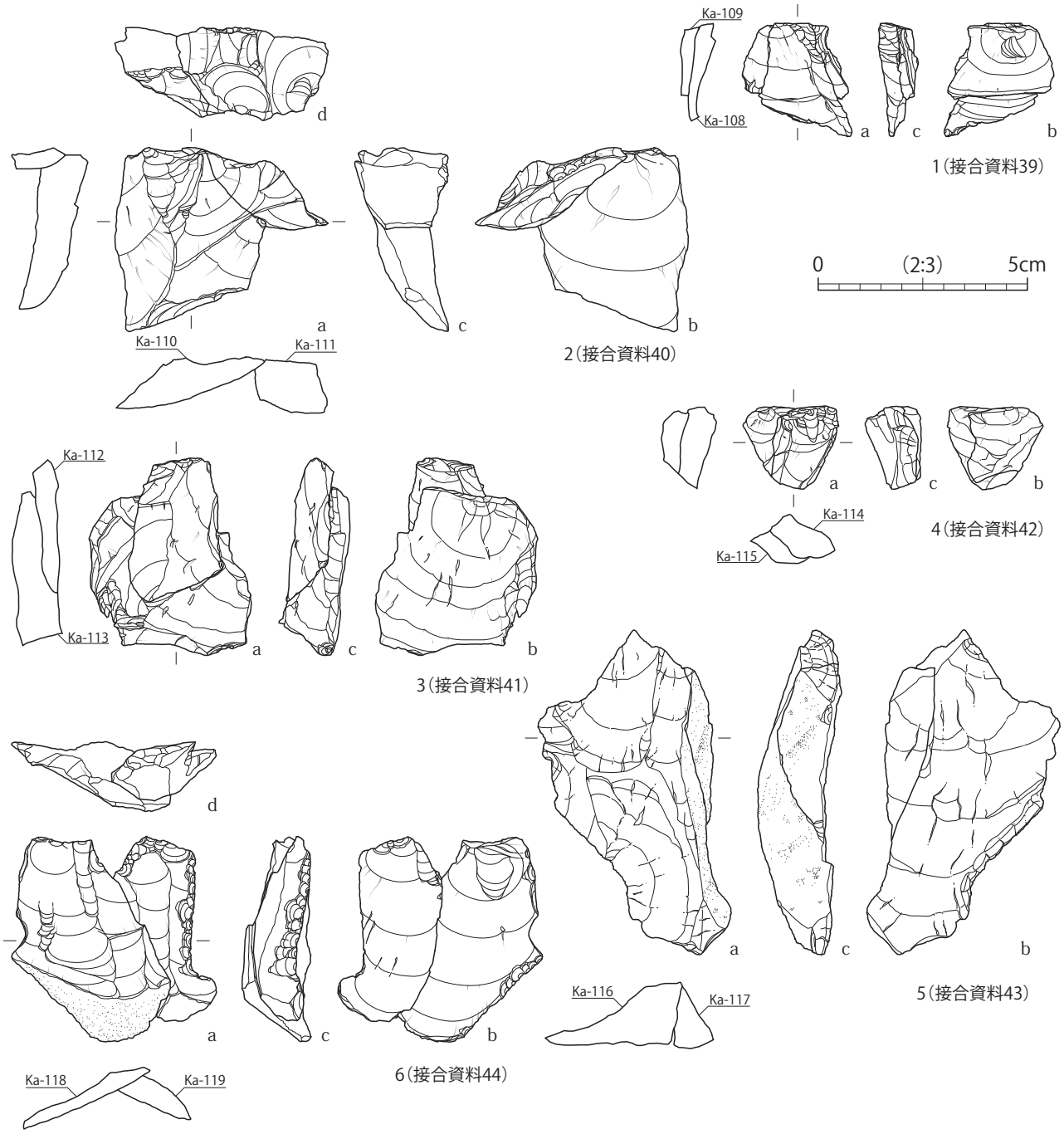
【接合資料 43】（第第 270 図－ 5）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-116・117）。垂直方向の同時割れを起こしている。打面部は折損して不明である。c 面には自然面を残している。2 点ともに SI283 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-097	第6次	SK321	堆積土	打製石器	剥片	3.9	2.4	1.3	12.1	流紋岩	接合資料35 石核+剥片3点接合、剥離工程Ka-098+099→90°打面転移→Ka-097	152
	Ka-098	第6次	SI283	堆積土	打製石器	剥片	2.7	2.4	0.8	4.7			
	Ka-099	第6次	SI287	堆積土	打製石器	剥片	4	3	1.1	9.3			
	Ka-100	第9次	SK285	堆積土	打製石器	石核	4.5	4.9	4.6	116.3			
2	Ka-101	第6次	SM377	堆積土	打製石器	剥片	5.2	2.7	1.7	32.8	流紋岩	接合資料36 剥片2点接合、剥離工程Ka-101→約90°打面転移→Ka-102	152
	Ka-102	第9次	SI339	P3堆積土	打製石器	剥片	6.3	3.7	2	18.2			
3	Ka-103	第6次	SI275	P3堆積土	打製石器	剥片	2.6	2.7	1.1	4	頁岩	接合資料37 剥片2点接合、同一剥片の折れ面で接合、90°打点転移	152
	Ka-104	第6次	SI275	P3堆積土	打製石器	剥片	2	1.9	0.7	1.5			
4	Ka-105	第6次	SI283	堆積土	打製石器	剥片	2.3	3.4	1.7	7.8	頁岩	接合資料38 剥片3点接合、Ka-106・107同時割れ	152
	Ka-106	第6次	SI283	堆積土	打製石器	剥片	1.9	1.4	1.5	3.3			
	Ka-107	第6次	SI283	堆積土	打製石器	剥片	2.2	1.7	2.2	5.5			

第 269 図　接合資料 35 ～ 38



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-108	第6次	SI279	周溝堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	2.8	2.2	0.7	2.1	流紋岩	接合資料39 剥片+微細剥離のある剥片接合、剥離同一方向	152
	Ka-109	第6次	SI289	堆積土	打製石器	剥片	(1.8)	2.5	0.5	1.7			
2	Ka-110	第6次	SI289	堆積土	打製石器	剥片	4.4	3.5	1.1	15.4	流紋岩	接合資料40 剥片2点接合、90°打面転移	152
	Ka-111	第6次	SI289	堆積土	打製石器	剥片	2	3.6	1.4	8.7			
3	Ka-112	第6次	SI287	堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	3.4	2.4	0.9	4.9	流紋岩	接合資料41 剥片+微細剥離のある剥片接合、剥離同一方向、180°打面転移	152
	Ka-113	第6次	SI287	堆積土	打製石器	剥片	4	3.9	1.4	16.7			
4	Ka-114	第6次	SI289	堆積土	打製石器	剥片	2	1.5	0.8	2.9	流紋岩	接合資料42 剥片2点接合、垂直方向の同時割れ	152
	Ka-115	第6次	SI289	堆積土	打製石器	剥片	1.8	1.9	0.6	1.8			
5	Ka-116	第6次	SI283	堆積土	打製石器	剥片	7.8	4.6	1.5	38.4	流紋岩	接合資料43 剥片2点接合、垂直方向の同時割れ、打面部折損、C面自然面	153
	Ka-117	第6次	SI283	堆積土	打製石器	剥片	3.8	1.2	1.5	4.2			
6	Ka-118	第9次	SK296	堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	4.9	3.8	0.8	10.3	流紋岩	接合資料44 微細剥離のある剥片2点接合、剥離同一方向、ともに自然面残存、単設打面、Ka-119周縁部二次加工連続	153
	Ka-119	第9次	24G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	4.4	2.5	0.8	7.2			

第 270 図　接合資料 39 ～ 44

【接合資料 44】（第 270 図－ 6）

二次加工のある剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である（Ka-118・119）。同一方向から剥離され、ともに自然面を残す。a 面の観察から、単設の打面であることが判る。Ka-119 の二次加工は、周縁部に連続して施される。Ka-118 は SK296 堆積土、Ka-119 は第 9 次調査区 24 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 45】（第 271 図－ 1）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-120・121）。剥離の際に同時割れを起こしたうちの 2 個体の接合資料である。ともに自然面を残す。Ka-120 は SI339 掘り方、Ka-121 は第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 46】（第 271 図－ 2）

微細剥離のある剥片 2 点の接合資料である（Ka-122・123）。同一方向から剥離され、Ka-122 は下端部に自然面を残す。Ka-122 は SM393 － 2 堆積土、Ka-123 は SM397 － 7 堆積土から出土した。石材は頁岩である。

【接合資料 47】（第 271 図－ 3）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-124・125）。同一方向からの剥離である。ともに打面は節理面であり、Ka-124 の下端部には自然面を残す。Ka-124 は SD276 堆積土、Ka-125 は SI339 掘り方から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 48】（第 272 図－ 1）

石核と剥片 2 点の接合資料である（Ka-126 ～ 128）。このうち、Ka-126・127 は同一剥片が同時割れを起こしたものである。Ka-126 は SM400 － 3 堆積土、Ka-127 は SI316 堆積土、Ka-128 は第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は黒色安山岩である。

【接合資料 49】（第 271 図－ 4）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-129・130）。同一方向から剥離され、a 面はともに自然面となっている。Ka-129 は SI316 堆積土、Ka-130 は SX28 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 50】（第 271 図－ 5）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-131・132）。同一方向から剥離され、ともに自然面を残す。ともに SX28 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 51】（第 271 図－ 6）

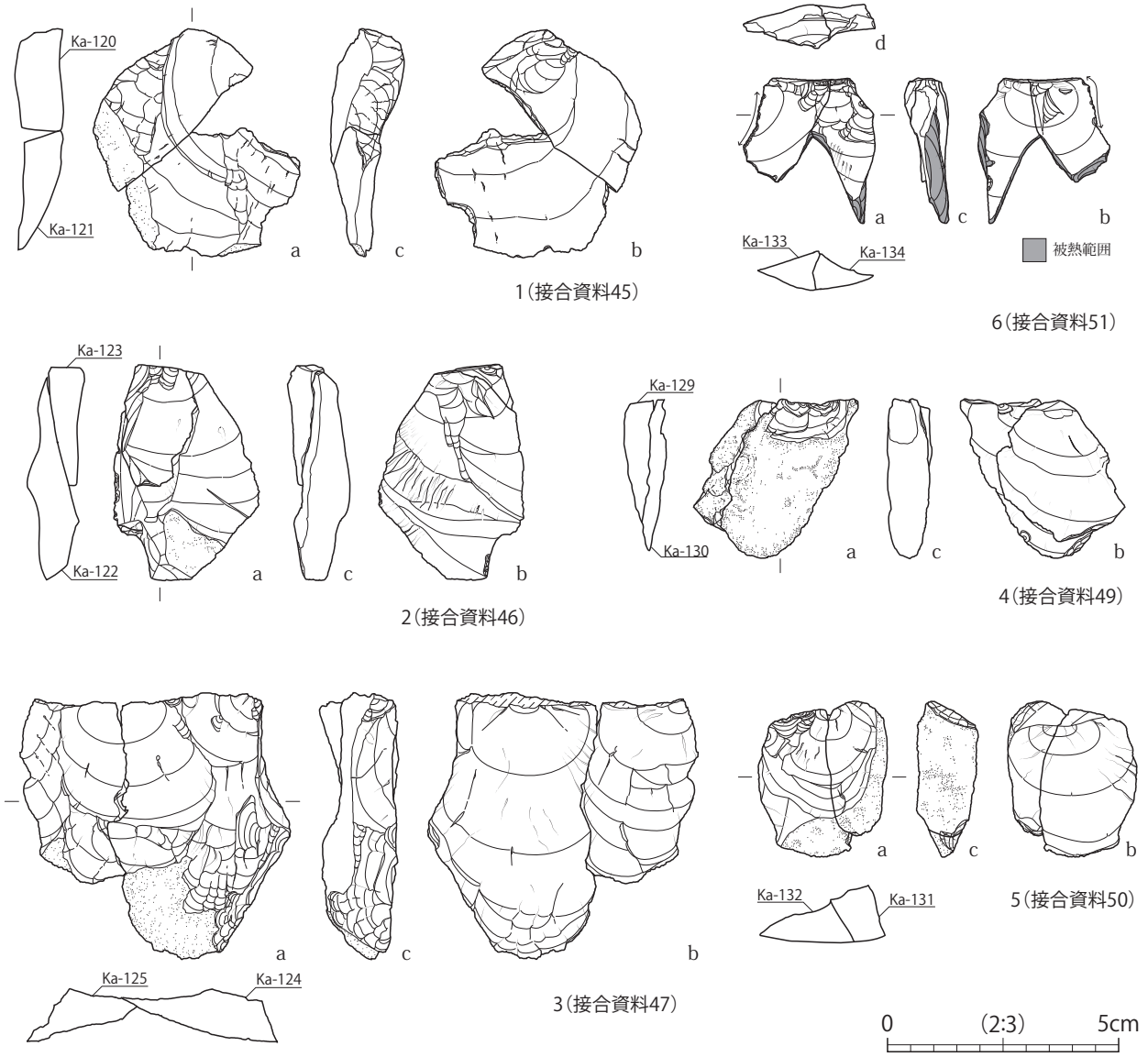
微細剥離のある剥片と剥片の接合資料である（Ka-133・134）。垂直方向の同時割れを起こしている。Ka-133 は第 9 次調査区 37 グリッド、Ka-134 は SD266 堆積土から出土した。石材はメノウである。

【接合資料 52】（第 272 図－ 2）

微細剥離のある剥片 2 点の接合資料である（Ka-135・136）。同一方向から剥離され、被熱による割れの痕跡が残る。Ka-135 は第 9 次調査区内、Ka-136 は第 9 次調査区 32 グリッドから出土した。石材は頁岩である。

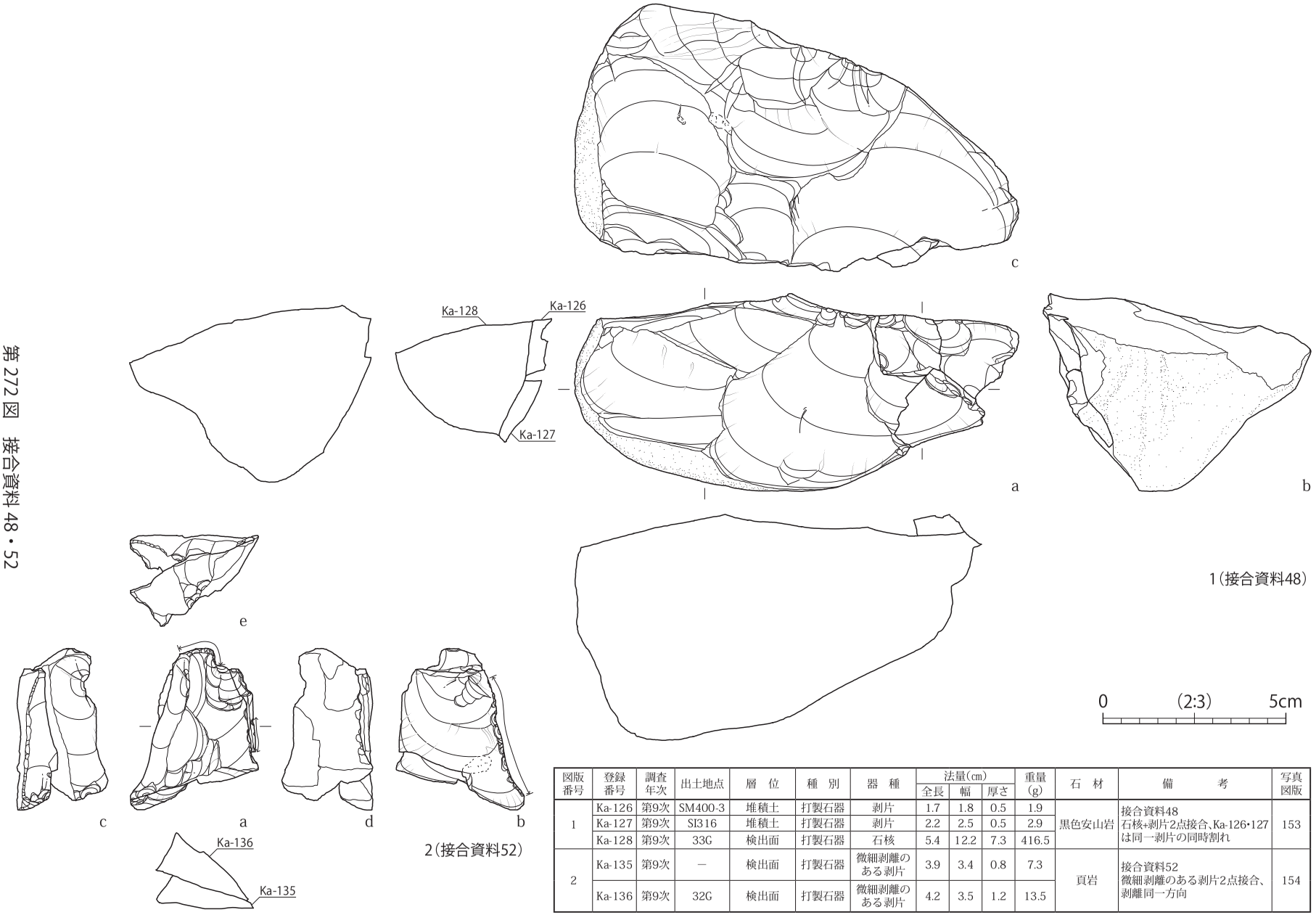
【接合資料 53】（第 273 図－ 1）

微細剥離のある剥片と剥片の接合資料である（Ka-137・138）。概ね同一方向から剥離される。Ka-137 は SI268 堆積土、Ka-138 は第 9 次調査区 32 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-120	第9次	SI339	掘り方	打製石器	剥片	3.6	3.4	1.1	11.8	流紋岩	接合資料45 剥片2点接合、同時割れ、ともに自然面残存	153
	Ka-121	第9次	33G	検出面	打製石器	剥片	2.8	3.3	0.8	8.3			
2	Ka-122	第9次	SM393-2	堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	4.5	3.2	1.2	11	頁岩	接合資料46 微細剥離のある剥片2点接合、剥離同一方向、Ka-122下端部自然面残存	153
	Ka-123	第9次	SM397-7	堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	2.6	1.6	0.8	2.4			
3	Ka-124	第9次	SD276	堆積土	打製石器	剥片	5.8	4	1.3	28.8	流紋岩	接合資料47 剥片2点の接合資料、剥離同一方向、打面節理面利用、Ka-124下端部自然面残存	153
	Ka-125	第9次	SI339	掘り方	打製石器	剥片	4	2.5	1.2	10			
4	Ka-129	第9次	SI316	堆積土	打製石器	剥片	3.1	2.8	0.9	4.2	流紋岩	接合資料49 剥片2点接合、剥離同一方向、a面自然面	153
	Ka-130	第9次	SX28	堆積土	打製石器	剥片	3.4	3	0.5	3.5			
5	Ka-131	第9次	SX28	堆積土	打製石器	剥片	3.2	2.1	1.3	5.2	流紋岩	接合資料50 剥片2点接合、剥離同一方向、ともに自然面残存	153
	Ka-132	第9次	SX28	堆積土	打製石器	剥片	2.9	1.3	0.9	5.4			
6	Ka-133	第9次	37G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	2.3	1.9	0.6	2.4	メノウ	接合資料51 微細剥離のある剥片+剥片接合、垂直方向の同時割れ	154
	Ka-134	第9次	SD266	堆積土	打製石器	剥片	3.2	1.4	0.9	2.2			

第 271 図　接合資料 45 ～ 47・49 ～ 51



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-126	第9次	SM400-3	堆積土	打製石器	剥片	1.7	1.8	0.5	1.9	黒色安山岩	接合資料48 石核+剥片2点接合、Ka-126・127は同一剥片の同時割れ	153
	Ka-127	第9次	SI316	堆積土	打製石器	剥片	2.2	2.5	0.5	2.9			
	Ka-128	第9次	33G	検出面	打製石器	石核	5.4	12.2	7.3	416.5			
2	Ka-135	第9次	—	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	3.9	3.4	0.8	7.3	頁岩	接合資料52 微細剥離のある剥片2点接合、剥離同一方向	154
	Ka-136	第9次	32G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	4.2	3.5	1.2	13.5			

第272図　接合資料48・52

【接合資料 54】（第 273 図－ 2）

二次加工のある剥片と剥片の接合資料である（Ka-139・140）。同一方向から剥離される。a 面と打面は自然面である。Ka-139 は SK285 堆積土、Ka-140 は SI315 掘り方から出土した。石材は緑色凝灰岩である。

【接合資料 55】（第 273 図－ 3）

微細剥離のある剥片と剥片の接合資料である（Ka-141・142）。同一剥片の折れ面での接合である。Ka-141 は打点部付近に一部自然面を残す。Ka-141 は第 9 次調査区 19 グリッド、Ka-142 は SI333 堆積土から出土した。石材は緑色凝灰岩である。

【接合資料 56】（第 273 図－ 4）

剥片と二次加工のある剥片の接合資料である（Ka-143・144）。概ね同一方向から剥離される。ともに第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 57】（第 273 図－ 5）

剥片と二次加工のある剥片の接合資料である（Ka-145・146）。同一方向から剥離され、ともに a 面に自然面を残す。Ka-145 は第 9 次調査区 05 グリッド、Ka-146 は同 14 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 58】（第 274 図－ 1）

微細剥離のある剥片 2 点の接合資料である（Ka-147・148）。a 面の右側縁部に連続する微細剥離が確認されるため、使用中に折損したものと考えられる。Ka-147 は SI320 堆積土、Ka-148 は SI319 掘り方から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 59】（第 274 図－ 2）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-149・150）。概ね同一位方向から剥離され、a・b 面の観察から打面を転移させながら剥離作業を行っていることが判る。Ka-149 は SD276 堆積土、Ka-150 は第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 60】（第 274 図－ 3）

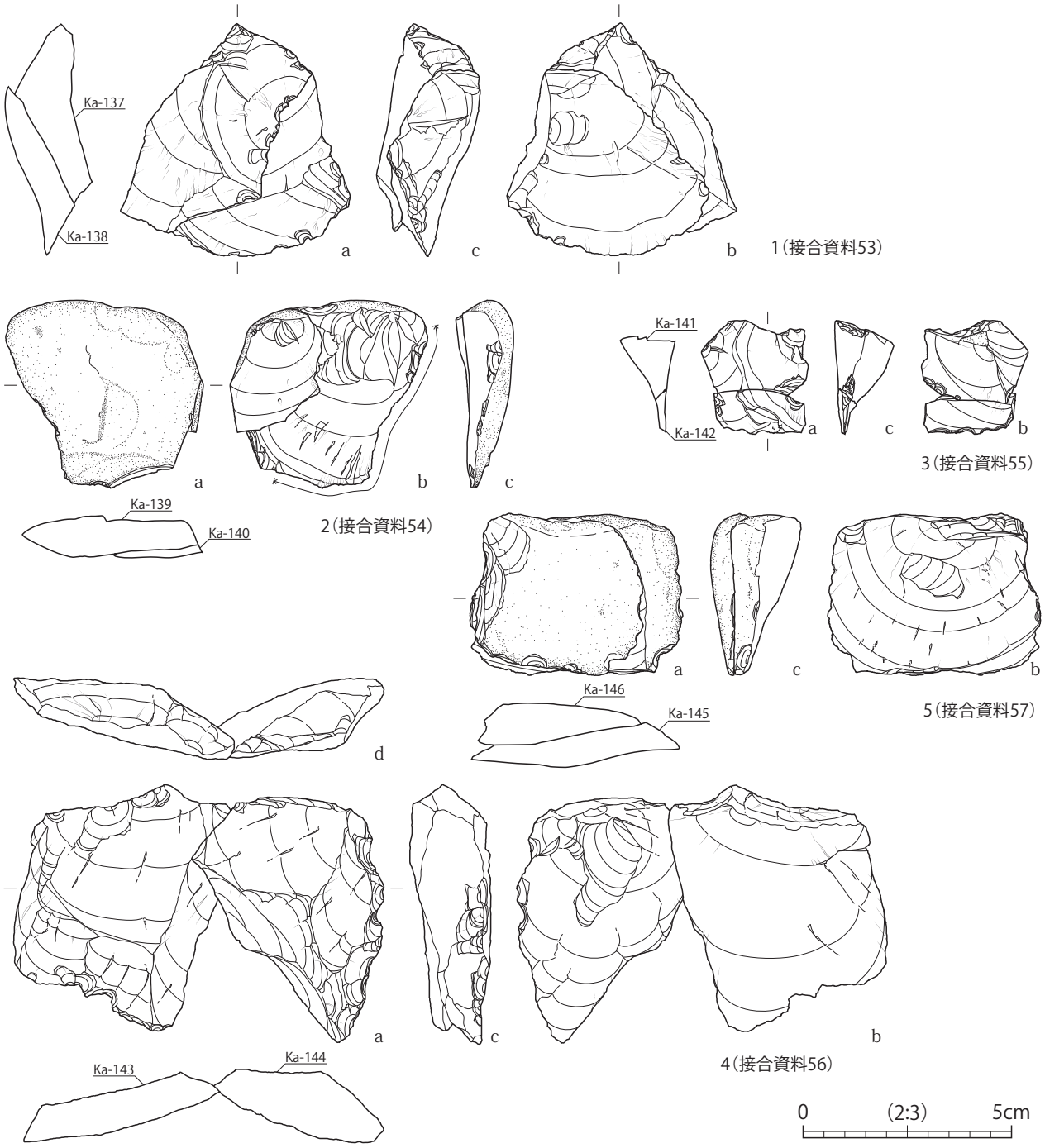
二次加工のある剥片と剥片の接合資料である（Ka-151・152）。同一方向から剥離され、a 面は自然面である。Ka-151 は SI330 堆積土、Ka-152 は SI332 － P3 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 61】（第 274 図－ 4）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-153・154）。同一剥片が同時割れを起こしたものである。a 面は自然面である。Ka-153 は SX28 堆積土、Ka-154 は SI333 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

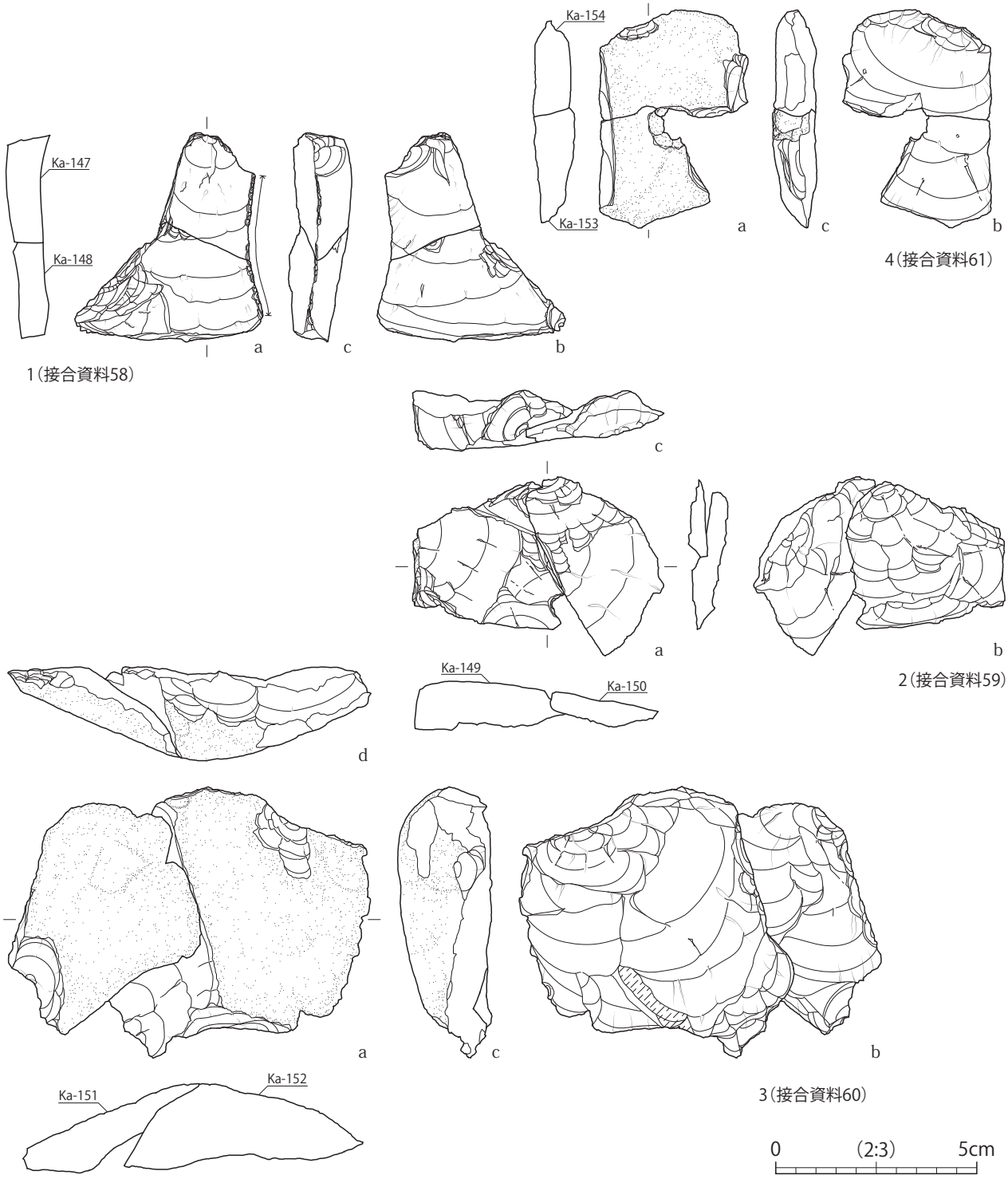
【接合資料 62】（第 275 図－ 1）

微細剥離のある剥片 2 点の接合資料である（Ka-155・156）。折れ面で接合する。a 面の観察から、打面を転移させながら剥離作業を行っていることが判る。ともに自然面を残す。Ka-155 は SD7 堆積土、Ka-156 は SI325 掘り方から出土した。石材は流紋岩である。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-137	第9次	SI268	堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	5	4.6	1.9	20.6	流紋岩	接合資料53 微細剥離のある剥片+剥片接合、剥離概ね同一方向	154
	Ka-138	第9次	32G	検出面	打製石器	剥片	4.5	4.9	1	24.9			
2	Ka-139	第9次	SK285	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	4.7	4.5	1.2	22.6	緑色凝灰岩	接合資料54 二次加工のある剥片+剥片接合、剥離同一方向、a面・打面自然面	154
	Ka-140	第9次	SI315	掘り方	打製石器	剥片	2.2	3	0.7	2.8			
3	Ka-141	第9次	19G	検出面	打製石器	剥片	1.9	2.6	1.5	5.1	緑色凝灰岩	接合資料55 微細剥離のある剥片+剥片接合、同一剥片の折れ面での接合、Ka-141打点部付近一部自然面残存	154
	Ka-142	第9次	SI333	堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	1.1	2.2	0.5	0.8			
4	Ka-143	第9次	33G	検出面	打製石器	剥片	5.9	5.3	1.5	35.3	流紋岩	接合資料56 剥片+二次加工のある剥片接合、剥離概ね同一方向	154
	Ka-144	第9次	33G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	5.9	4.6	1.6	34.1			
5	Ka-145	第9次	05G	検出面	打製石器	剥片	3.9	3.8	1.4	22.2	流紋岩	接合資料57 剥片+二次加工のある剥片接合、剥離同一方向、ともに背面自然面残存	154
	Ka-146	第9次	14G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	4	5.1	1	15.3			

第 273 図　接合資料 53 ～ 57



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-147	第9次	SI320	堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	3.2	2.4	1.5	7.7	流紋岩	接合資料58 微細剥離のある剥片2点接合、使用中に折損	154
	Ka-148	第9次	SI319	掘り方	打製石器	微細剥離のある剥片	3	4.7	1.4	14.9			
2	Ka-149	第9次	SD276	堆積土	打製石器	剥片	3.7	4	0.9	19.5	流紋岩	接合資料59 剥片2点接合、剥離概ね同一方向、打面転移多角度	155
	Ka-150	第9次	33G	検出面	打製石器	剥片	2.8	4.3	1.4	8.7			
3	Ka-151	第9次	SI330	堆積土	打製石器	二次加工のある剥片	5.8	4.8	1.2	26.5	流紋岩	接合資料60 二次加工のある剥片+剥片接合、剥離同一方向、a面自然面	155
	Ka-152	第9次	SI332	P3堆積土	打製石器	剥片	6.7	6.8	2.1	84.2			
4	Ka-153	第9次	SX28	堆積土	打製石器	剥片	3.1	2.7	1	8	流紋岩	接合資料61　剥片2点の接合資料、同一剥片の同時割れ、a面自然面残存	155
	Ka-154	第9次	SI333	堆積土	打製石器	剥片	2.8	3.7	1	12			

第 274 図　接合資料 58 ～ 61

【接合資料 63】（第 275 図－ 2）

剥片 2 点の接合資料である（Ka-157・158）。同一剥片の垂直割れを起こしたものである。Ka-158 は a 面の左側縁部に自然面を残す。ともに第 9 次調査区 33 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 64】（第 275 図－ 3）

微細剥離のある剥片と石核の接合資料である（Ka-159・160）。Ka-160 には節理面が残り、各面の剥離面の観察から、打面を頻繁に転移させて剥離作業を行っていることが判る。ともに SX28 堆積土から出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 65】（第 276 図－ 1）

石核と剥片の接合資料である（Ka-161・162）。Ka-161 の剥離面の観察から、打面を頻繁に転移させて剥離作業を行っていることが判る。ともに自然面を残す。Ka-161 は第 9 次調査区 14 グリッド、Ka-162 は同 20 グリッドから出土した。石材は黒色頁岩である。

【接合資料 66】（第 276 図－ 2）

剥片と二次加工のある剥片の接合資料である（Ka-163・164）。Ka-163 は打点部付近に自然面を残す。Ka-164 を剥離後、打面を 180°転移させて Ka-163 を剥離する。Ka-163 は第 9 次調査区 37 グリッド、Ka-164 は同 15 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 67】（第 276 図－ 3）

剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である（Ka-165・166）。同一剥片の垂直割れを起こしたものである。Ka-165 の右側縁部は折れ面であり、Ka-166 の側縁部には使用に伴う微細剥離が確認される。Ka-165 は SX28 堆積土、Ka-166 は第 9 次調査区 37 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 68】（第 276 図－ 4）

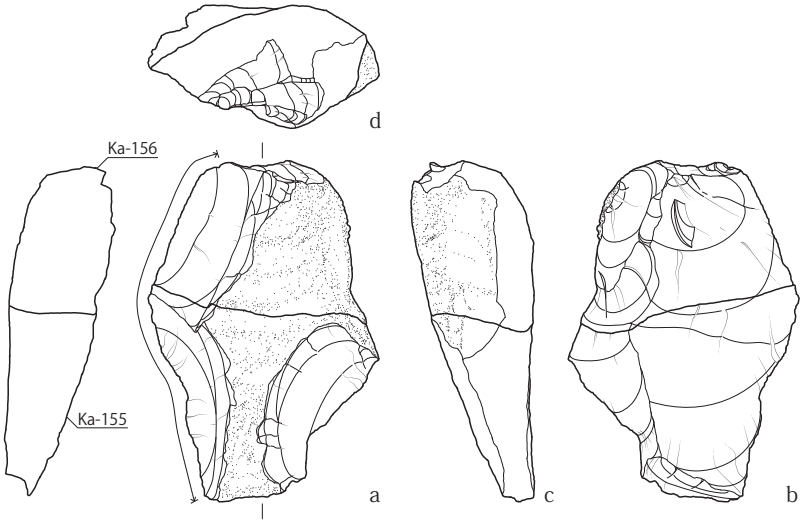
剥片 3 点の接合資料である（Ka-167・168・169）。3 点とも a 面に自然面を残す。同一剥片の同時割れと考えられる。Ka-167 は SM393 － 10 堆積土、Ka-168 は SI7 堆積土、Ka-169 は第 9 次調査区 15 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

【接合資料 69】（第 276 図－ 5）

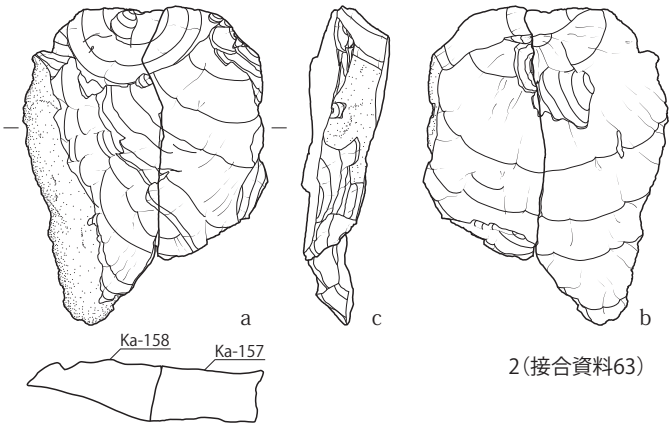
剥片 2 点の接合資料である（Ka-170・171）。Ka-171 を剥離したのち、形成された剥離面を打面として打面を 90°転移させて Ka-170 を剥離している。いずれも a 面は自然面である。Ka-170 は SI321 掘り方、Ka-171 は SI339 掘り方から出土した。石材は黒色頁岩である。

【接合資料 70】（第 276 図－ 6）

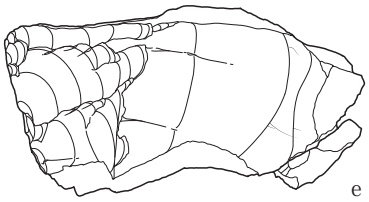
剥片と微細剥離のある剥片の接合資料である（Ka-172・173）。同一方向から剥離され、いずれも a 面に自然面を残す。Ka-172 の b 面右側縁部には、使用に伴う微細剥離が観察される。ともに第 9 次調査区 15 グリッドから出土した。石材は流紋岩である。

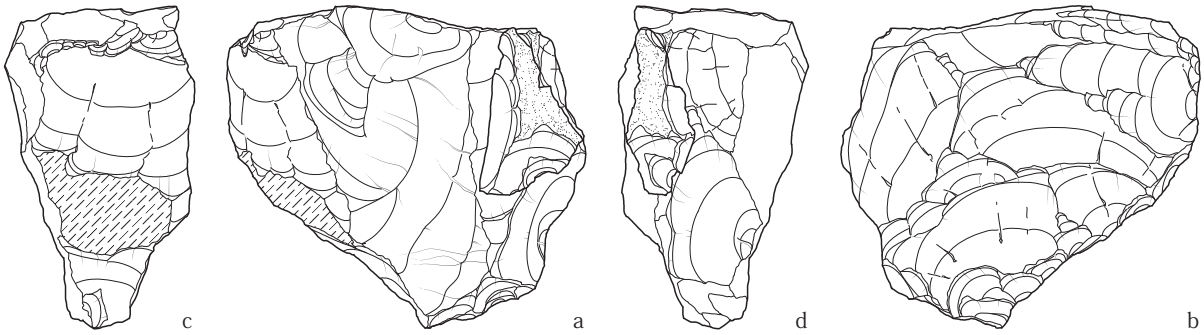


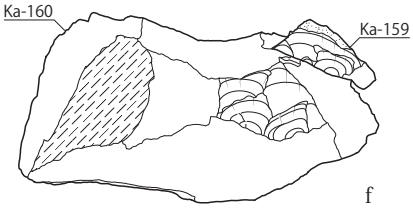
1（接合資料62）



2（接合資料63）





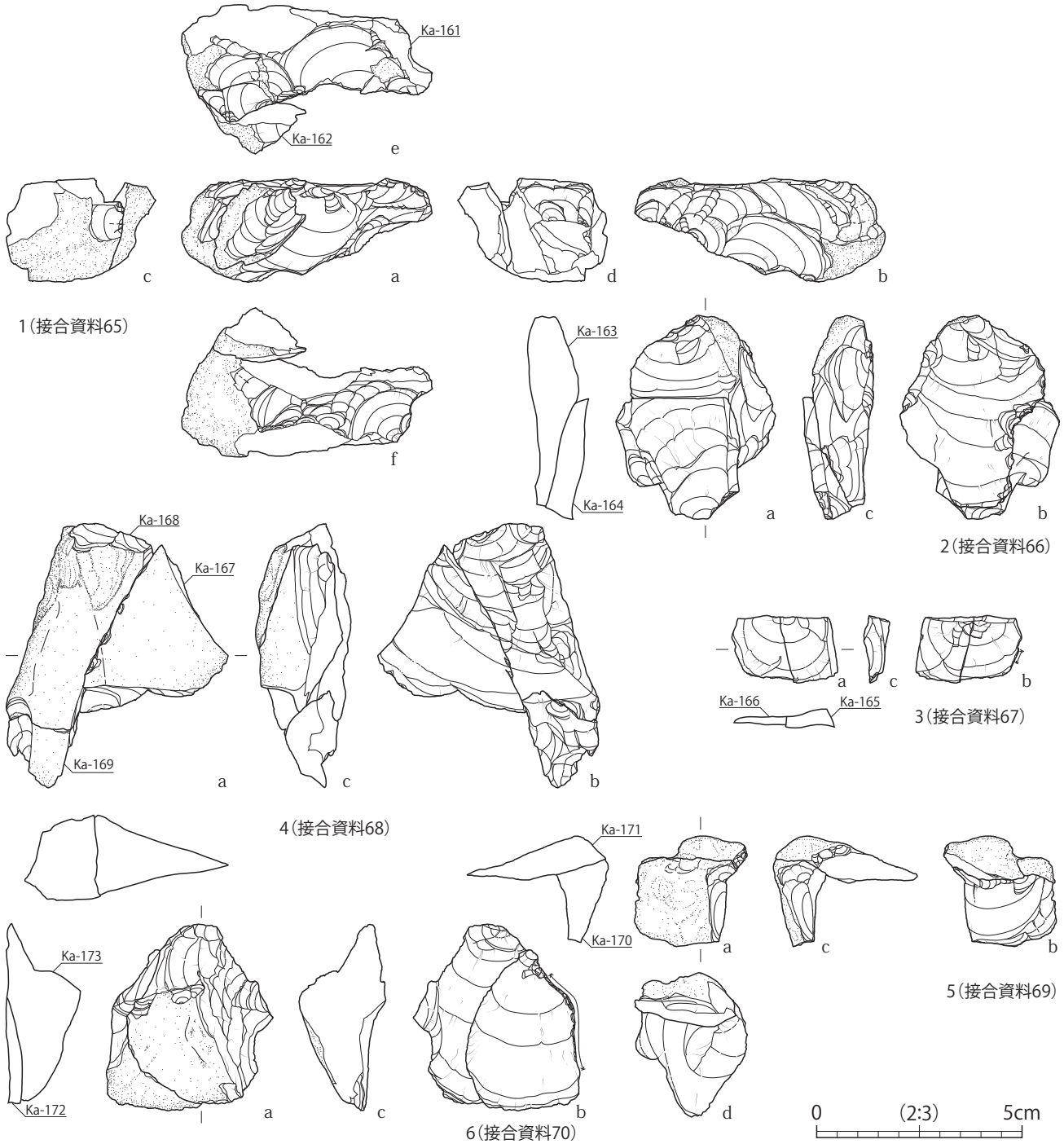


3（接合資料64）

0　（2:3）　5cm

図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層　位	種　別	器　種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石　材	備　　考	写真図版
1	Ka-155	第9次	SD7	堆積土	打製石器	剥片	4.4	4.6	1.9	26.5	流紋岩	接合資料62 剥片2点接合、同一剥片の折れ面での接合、打面転移多角度、ともに自然面残存	155
	Ka-156	第9次	SI325	掘り方	打製石器	剥片	3.5	4.3	2.3	31.1			
2	Ka-157	第9次	33G	検出面	打製石器	剥片	5.1	2.4	1.2	17.5	流紋岩	接合資料63 剥片2点接合、同一剥片の垂直割れ、Ka-158自然面残存	156
	Ka-158	第9次	33G	検出面	打製石器	剥片	6.3	2.8	1.3	18.3			
3	Ka-159	第9次	SX28	堆積土	打製石器	微細剥離のある剥片	1.8	3.4	0.9	3.9	流紋岩	接合資料64 微細剥離のある剥片+石核接合、打面転移頻繁	155
	Ka-160	第9次	SX28	堆積土	打製石器	石核	6.2	7.2	3.6	155.7			

第 275 図　接合資料 62 ～ 64



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm) 全長	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考	写真図版
1	Ka-161	第9次	14G	検出面	打製石器	石核	2.5	6.1	0.8	35.7	黒色頁岩	接合資料65 石核+剥片接合、打面転移頻繁、ともに自然面残存	156
	Ka-162	第9次	20G	検出面	打製石器	剥片	2	2.1	2.8	2.9			
2	Ka-163	第9次	37G	検出面	打製石器	二次加工のある剥片	4.4	3.7	1.4	16.2	流紋岩	接合資料66 剥片+二次加工のある剥片接合、剥離工程Ka-164→180°打面転移→Ka-163、Ka-163は打点部付近自然面残存	156
	Ka-164	第9次	15G	検出面	打製石器	剥片	3	2.9	0.8	7.4			
3	Ka-165	第9次	SX28	堆積土	打製石器	剥片	1.6	1.3	0.5	1.3	流紋岩	接合資料67 剥片+微細剥離のある剥片接合、同一剥片の垂直割れ、Ka-165の右側縁部折れ面、Ka-166側縁部微細剥離	156
	Ka-166	第9次	37G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	1.5	1.5	0.4	0.7			
4	Ka-167	第9次	SM393-10	堆積土	打製石器	剥片	4.4	3.4	2	15.2	流紋岩	接合資料68 剥片3点接合、同一剥片の衝撃割れ、全てa面自然面残存	156
	Ka-168	第9次	SI7	堆積土	打製石器	剥片	5.8	3.5	2.1	16.9			
	Ka-169	第9次	15G	検出面	打製石器	剥片	3	1.8	1.3	3.4			
5	Ka-170	第9次	SI321	掘り方	打製石器	剥片	2.4	2.2	1.3	5.9	黒色頁岩	接合資料69 剥片2点接合、剥離工程Ka-171→90°打面転移→Ka-170、a面自然面	156
	Ka-171	第9次	SI339	掘り方	打製石器	剥片	3.5	2.9	0.9	5.6			
6	Ka-172	第9次	15G	検出面	打製石器	微細剥離のある剥片	4	2.7	0.8	7	流紋岩	接合資料70 微細剥離のある剥片+剥片接合、剥離同一方向、Ka-172のb面右側縁部微細剥離、ともにa面自然面残存	156
	Ka-173	第9次	15G	検出面	打製石器	剥片	4.4	3.6	1.8	15.1			

第 276 図　接合資料 65 ～ 70

第４節　縄文時代の遺構と遺物

当該期の遺構については、各次調査を通じて検出されなかった。遺物については、第６次調査において基本層Ⅳ層から、第９次調査においてⅨ層およびⅩⅤ層から僅かだが縄文土器が出土している。図化した縄文土器のうち第 278 図－１は第６次調査の遺構検出時に出土し、２～４は第９次調査の下層調査区から出土した。

第９次下層調査の概要

第９次調査では弥生時代包含層の調査終了後、縄文時代の遺構や遺物の検出を目的として下層調査を行った。調査区は東西 15m ×南北 17m の範囲で設定し、基本層Ⅸ層上面まで重機で掘削した後に、人力でⅨ層の掘り下げを行った。Ⅸ層上面までの深さは、遺構検出面とした基本層Ⅳ層上面から 2.5m 前後である。Ⅸ層中からは第 278 図－２・３の２点を含む、縄文土器の破片が 25 点出土した。

基本層Ⅹ層以下については、下層調査区の中央に東西 3m ×南北 5m のトレンチを設定して掘り下げを行った。最終的に基本層ⅩⅩⅡ層まで掘り下げ、土層断面の記録等を行った。ⅩⅩⅡ層下面までの深さは、Ⅹ層上面から 2m 前後である。遺物はⅩⅤ層から第 278 図－４の縄文土器１点が出土した。

なお、下層調査で観察した基本層序は下記の通りである。

Ⅴ層　：黄色系統の細砂を主体とする層である。a ～ c の３層に細別される。最下層のⅤc 層はシルト化し、マンガン粒を多量含む。

Ⅵ層　：褐色シルト層である。a・b の２層に細別される。マンガン粒を含み、部分的に細砂が混じる。

Ⅶ層　：上半部はくすんだ色調を呈する細砂層で、下半部は明るい黄色系統のシルト層である。a ～ d の４層に細別される。多量の酸化鉄が含まれ、大半の層が薄いラミナ状を呈する。

Ⅷ層　：灰色系統のシルト層で、a ～ c の３層に細別される。黒色シルトを含み、Ⅷa・Ⅷb 層は粘性が強い。

Ⅸ層　：a・b の２層に細別され、黒色粘土質シルトのⅨa 層が主体である。詳細な時期は不明だが、縄文時代の遺物包含層であり、下層のⅨb 層はⅩ層の漸移層となっている。

Ⅹ層　：明緑灰色の粘土質シルト層である。

Ⅺ層　：灰色・明緑灰色のシルト層で、a・b の２層に細別される。下層のⅺb 層は層相が第Ⅹ層に近いが、粘性は弱い。

ⅩⅡ層　：黒褐色粘土層で、粘性・締まりともに強い。

ⅩⅢ層　：黄灰色粘土質シルト層で、木片を少量含む。木片は緑色に変色・硬化している。

ⅩⅣ層　：緑灰色粘土質シルト層で、ⅩⅢ層同様の木片を多量含む。

ⅩⅤ層　：黄褐色粘土質シルト層で、酸化鉄を多量含む。縄文時代後期前葉の土器が１点だけ出土している。

ⅩⅥ層　：灰色粘土質シルト層で、酸化鉄を少量含む。下半部はやや色調が暗く、a・b の２層に大別した。

ⅩⅦ層　：明緑灰色粘土層で、粘性・締まりともに強い。木片を少量含む。

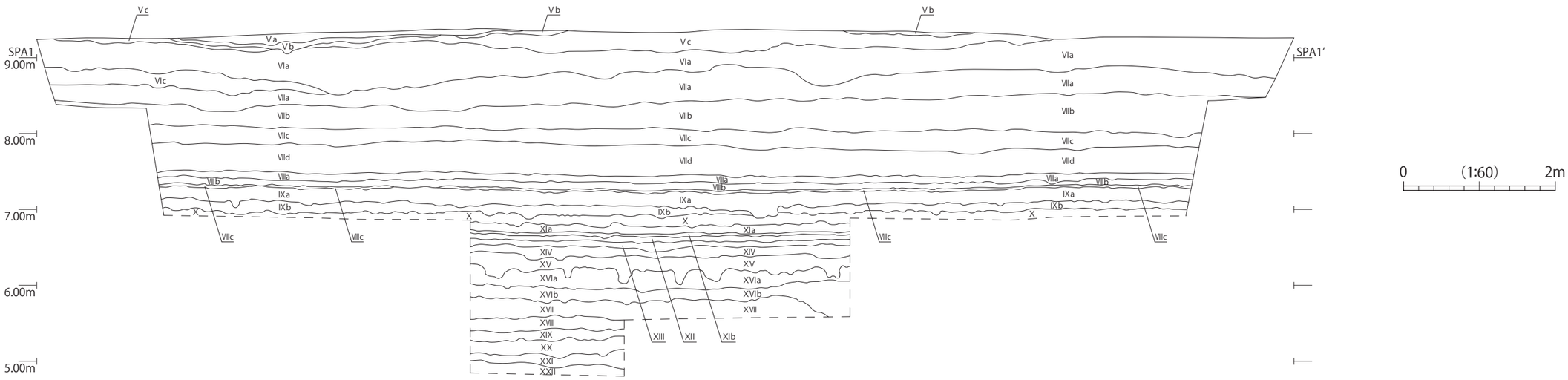
ⅩⅧ層　：灰色粘土層で、粘性・締まりともに強い。

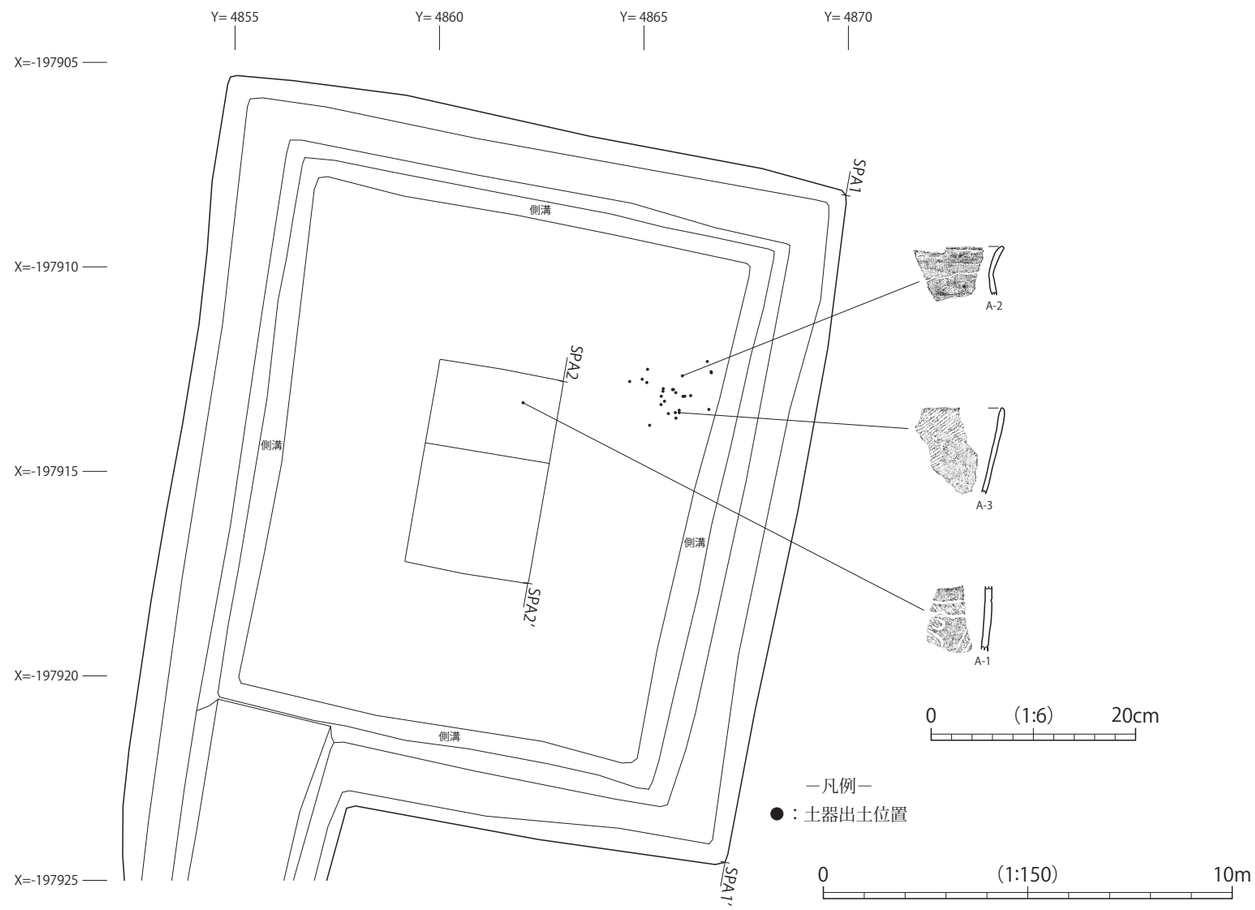
ⅩⅨ層　：灰色粘土層で粘性・締まりともに強く、暗灰色シルトを斑状に多量含む。

ⅩⅩ層　：黒色粘土層で粘性・締まりともに強く、青灰色シルトを斑状に少量含む。

ⅩⅩⅠ層　：青灰色粘土層で粘性・締まりともに強く、細砂を少量含む。

ⅩⅩⅡ層：青灰色砂礫層である。直径２～ 5cm 程度の礫と細砂で形成される。





第 9 次下層調査基本層序土層註記表 A-A'

層位	土色	土性	備考
Va	10YR5/6 黄褐色	細砂	褐色シルト（ラミナ状）少量含む。南側では茶色がかる。
Vb	10YR5/4 にぶい黄褐色	細砂	黄褐色シルト（斑状）多量含む。
Vc	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒多量、細砂部分的に含む。
VIa	10YR4/4 褐色	シルト	マンガン粒多量含む。北側では一部に細砂含む。
VIb	10YR4/4 褐色	シルト	VIa層より若干暗く、全体に細砂混じる。
VIIa	2.5YR6/4 にぶい黄色	細砂	北側では褐灰色シルトとの互層を成し、酸化鉄浸透のため茶色がかる。
VIIb	7.5YR4/4 褐色	細砂	全体に酸化鉄が浸透し、下位で集積・凝固する。部分的に灰色シルトとの互層を成す。
VIIb'	7.5YR6/1 褐灰色	微砂	にぶい黄橙色細砂と細かいラミナ状の互層を成す。酸化鉄集積層。
VIIc	7.5YR7/1 明褐灰色	シルト	灰黄色シルトと細かいラミナ状の互層を成す。酸化鉄（ブロック状）多量含む。下位に酸化鉄が集積。
VIId	2.5Y6/1 黄褐色	シルト	灰黄色シルトと細かいラミナ状の互層を成す。酸化鉄（ブロック状）少量含む。部分的に暗灰色にグライ化。
VIId'	2.5YR4/1 黄灰色	シルト	褐灰色微砂・酸化鉄と細かいラミナ状の互層を成す。酸化鉄（ブロック状）多量含む。
VIIIa	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	黒色シルト・灰黄色シルトとの混土。それぞれが不規則なブロック状に混じる。
VIIIb	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄斑少量含む。部分的に青灰色にグライ化。
VIIIc	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	IXa層との混土。それぞれが不規則なブロック状に混じる。
IXa	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	酸化鉄斑少量含む。※縄文遺物包含層
IXb	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄斑少量含む。
X	7.5GY7/1 明緑灰色	粘土質シルト	黒色シルト（ラミナ状）少量含む。
XIa	N5/0 灰色	粘土質シルト	明緑灰色シルト粒少量含む。
XIb	7.5GY7/1 明緑灰色	シルト	灰色シルト（ラミナ状）少量含む。
XII	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄斑少量含む。
XIII	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	酸化鉄斑、緑色に変色・硬化した木片少量含む。
XIV	7.5GY5/1 緑灰色	粘土質シルト	緑色に変色・硬化した木片多量含む。
XV	2.5Y6/1 黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑多量、暗灰色シルト（斑状）少量含む。※縄文遺物包含層
XVIa	7.5Y5/1 灰色	粘土質シルト	酸化鉄斑少量含む。
XVIb	7.5Y4/1 灰色	粘土質シルト	酸化鉄斑少量含む。
XVII	10GY7/1 明緑灰色	粘土	木片少量含む。
XVIII	10Y6/1 灰色	粘土	灰色シルト（斑状多量含む。
XIX	10Y5/1 灰色	粘土	暗灰色シルト（斑状）多量含む。
XX	N2/0 黒色	粘土	青灰色シルト（斑状）少量含む。
XXI	10BG5/1 青灰色	粘土	細砂少量含む。
XXII	10BG5/1 青灰色	砂礫	礫（2～5cm程度）と細砂主体。

第 277 図　第 9 次調査区縄文土器出土状況図・下層調査区基本層序

(1) 縄文土器（第 277・278 図）

縄文土器は各次調査を通じて出土量が少なく、図化できたのは第 278 図に示した 4 点のみである。このうち第 9 次調査の下層調査で出土した第 277 図－ 2・3 については、周辺から同一個体と思われる破片が若干出土しているもののいずれも接合関係は認められず、比較的残存が良好なこの 2 点を抽出した。

第 6 次調査

遺構検出時に 07 グリッドから出土した 1 点を掲載した。第 278 図－ 1 は深鉢胴部の破片である。全体的に器壁の磨滅が著しいが、口縁部と胴部の境に横位直線文、胴部に鉤付 J 字文が施文されている。文様の特徴から縄文時代後期前葉に比定される。

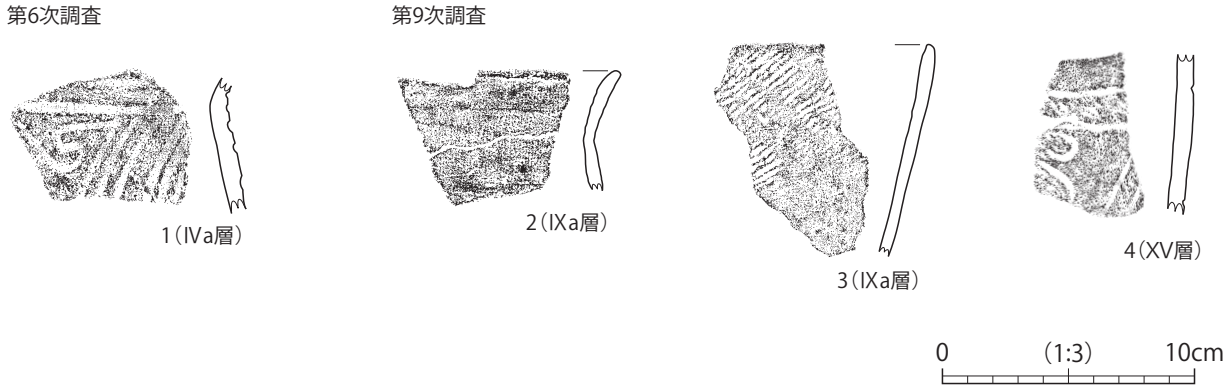
第 9 次調査

①Ⅸ層出土縄文土器

Ⅸa 層出土の 2 点を掲載した。既述の通り 25 点出土したうちの一部であるが、これ以外の縄文土器については図化できなかった。第 278 図－ 2 は、深鉢口縁部の破片である。口縁部と胴部の境が「く」字状に屈曲する器形を呈し、内外面ともにナデ調整が施されている。第 278 図－ 3 も深鉢口縁部の破片である。胴部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形を呈し、地文は無節の L 縄文である。いずれも装飾文様が施されない粗製土器のため、帰属時期は不明である。

②XV層出土縄文土器

XV層出土の 1 点を掲載した。第 278 図－ 4 は深鉢胴部の破片である。全体的に器壁の磨滅が著しいが、口縁部と胴部の境に横位直線文、胴部に蕨手状の沈線文が施文され、地文として LR 縄文が施されている。文様の特徴から縄文時代後期前葉に比定される。



図版番号	登録番号	調査年次	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考	写真図版
1	A-001	第6次	07G	古代遺構検出面	縄文土器	深鉢	体部	沈線		後期前葉 内外面摩滅	156
2	A-002	第9次	下層調査	Ⅸa層	縄文土器	深鉢	口縁	ナデ	ナデ		156
3	A-003	第9次	下層調査	Ⅸa層	縄文土器	深鉢	口縁	L縄文横位・斜位回転	ナデ		156
4	A-001	第9次	下層調査	XV層	縄文土器	深鉢	体部	沈線・LR縄文?（蕨手状）		後期前葉 内外面摩滅	156

第 278 図　第 6 次（Ⅳ層）・第 9 次（Ⅸ・XV層）調査区出土縄文土器

第６章　自然科学分析

長町駅東遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1．はじめに

東北地方中部に位置する仙台市域とその周辺には、蔵王、肘折、鳴子、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、御岳、三瓶、阿蘇、姶良など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、火山灰層が認められた長町駅東遺跡においても、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定、EPMA による火山ガラスの主成分化学組成分析を行って、指標テフラとの同定を行うことになった。調査分析の対象となった地点は、第５次調査区の河川跡Ｃトレンチである。

2．土層の層序

第５次調査区河川跡Ｃトレンチでは、下位より黄灰色砂層（層厚 7cm，Ⅸd 層）、白色軽石混じり黄灰色砂層（層厚 16cm，軽石の最大径 3mm，Ⅸc 層）、桃白色砂質細粒火山灰層（層厚 3cm，Ⅸb 層）、砂混じり灰色泥層（層厚 4cm）、暗灰色泥層（層厚 9cm）、黒泥層（層厚 2cm）、黄灰色シルト粒子に富む灰色泥層（層厚 2cm）、暗灰色泥層（層厚 5cm，以上Ⅷ層）、灰色砂層（層厚 4cm）、黒灰色泥層（層厚 6cm）、灰色砂層（層厚 1cm）、暗灰色粘質土（層厚 2cm）、灰色砂層（層厚 3cm）、暗灰色粘質土（層厚 6cm）、灰色シルト層（層厚 5cm，以上Ⅶc 層）、暗灰色粘質土（層厚 18cm，Ⅶb 層）、白色軽石混じり黄灰色砂層（層厚 11cm，軽石の最大径 3mm）、白色軽石混じり黄灰色砂質土（層厚 8cm，Ⅲd 層）、黄色砂層（層厚 3cm）、砂混じり灰色土（層厚 2cm）、黄色砂層（層厚 2cm）、砂混じり灰色土（層厚 16cm，Ⅰb 層）、白色軽石や亜円礫混じり灰色砂質土（層厚 12cm，軽石の最大径 2mm，Ⅰa 層）が認められる（図 1）。

3．火山ガラス比分析

（1）分析方法

これらのうち、Ⅸb 層の桃白色砂質細粒火山灰層（試料 8）を対象として、火山ガラス比分析を行い、火山ガラスの色調・形態別比率を求めた。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

1）試料 15g を秤量。
2）超音波洗浄により泥分を除去。
3）80℃で恒温乾燥。
4）分析篩により 1/4-1/8mm の粒子を篩別。
5）偏光顕微鏡下で 250 粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める。

（2）分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図２に、その内訳を表１に示す。試料８に含まれる火山ガラスは、量が多い順に繊維束状に発泡した軽石型（6.8％）、透明のバブル型（5.2％）、分厚い中間型（4.8％）、スポンジ状に発泡した軽石型（0.4％）である。

4．屈折率測定

（1）測定方法

試料８に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質製，MAIOT）により、屈折率（n）の測定を行った。

（2）測定結果

屈折率測定結果と仙台市域に分布する代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率（n）を表２に示す。試料８に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.500-1.509 である。

5．火山ガラスの主成分化学組成分析

（1）分析方法

指標テフラとの同定精度をさらに向上させるために、試料８に含まれる火山ガラスについて波長分散型エレクトロンプローブＸ線マイクロアナライザー（以下，WDS 型 EPMA とする）により主成分化学組成分析を行った。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子 JXA8600MWDS 型 EPMA である。加速電圧 15kV、照射電流 0.01 μ A、ビーム径５μ m の条件で行った。補正法は Oxide ZAF 法を用いた。

（2）分析結果

火山ガラスの主成分化学組成分析結果を表３に示す。さらにこの表には、本遺跡とその周辺に分布するおもな指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分化学組成を示した。

6．考察

試料８（Ⅸb 層）に含まれる火山ガラスについては、火山ガラスの形態や屈折率、さらに主成分化学組成から、従来仙台市域とその周辺で知られている代表的なテフラの中では、915 年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田ａ火山灰（To-a，町田ほか，1981，町田・新井，1992，2003）の火山ガラスにもっともよく似ているようである。したがって、Ⅸb 層については、To-a に同定される可能性が考えられる。

7．まとめ

長町駅東遺跡第５次調査区河川跡Ｃトレンチにおいて地質調査を行って層序の記載を行うとともに、細粒火山灰層（Ⅸb 層）から採取した試料について、火山ガラス比分析、屈折率測定、EPMA による火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。その結果、十和田ａ火山灰（To-a，915 年）に非常によく似ていることが明らかになり、To-a に同定される可能性が考えられた。

文献

青木かおり・新井房夫（2000）三陸沖海底コア KH94-3，LM-8 の後期更新世テフラ層序．第四紀研究，39，p.107-120.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.

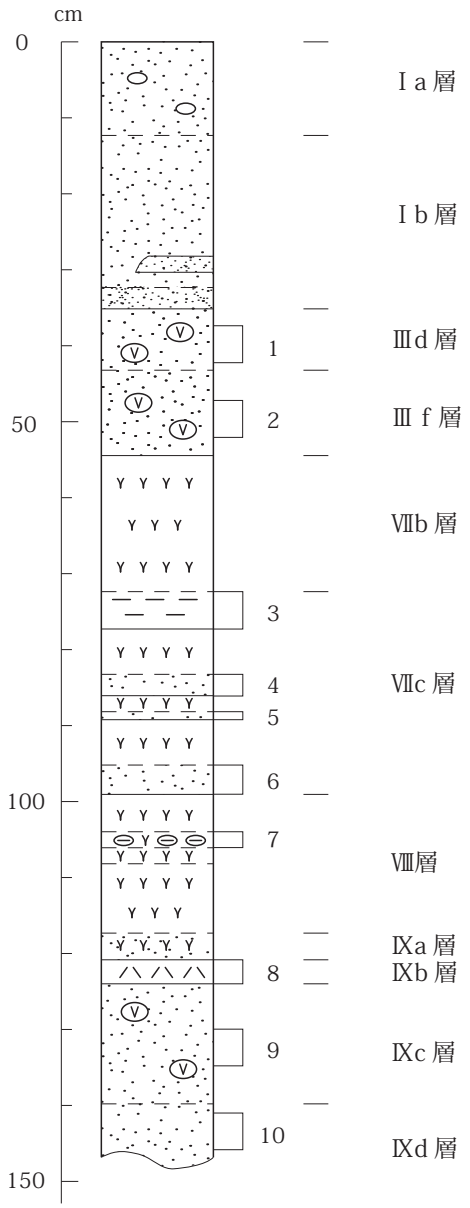
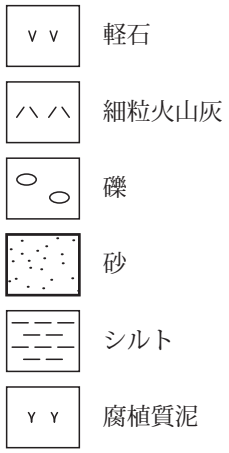
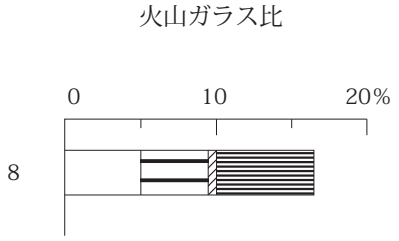


図１　第５次調査区河川跡Ｃトレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号





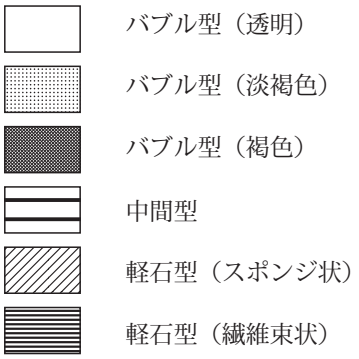


図２　火山ガラス比ダイヤグラム

第 279 図　第５次調査土層柱状図・火山ガラス比ダイヤグラム

表1　火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
53.66-54.00m	13	0	0	12	1	17	207	250

数字は粒子数. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, cl:無色透明, pb:淡褐色, br:褐色, sp:スポンジ状, fb:繊維束状.

表2　屈折率測定結果

遺跡(テフラ)	試料	火山ガラスの屈折率(n)
長町駅東遺跡	8(Ⅸb層)	1.502-1.505
十和田a(To-a, AD915)		1.496-1.508(1.500-1.508)
十和田中掫(To-Cu, 5.5k.yBP)		1.508-1.512
肘折尾花沢(Hj-O, 10k.yBP)		1.499-1.504
十和田八戸(To-H, 12-13k.yBP)		1.505-1.509
浅間草津(As-K, 13-14k.yBP)		1.502-1.504
姶良Tn(AT, 24-25k.yBP)		1.499-1.501
鳴子柳沢(Nr-Y, 41-63ka)		1.500-1.503
鳴子荷坂(Nr-N, 90ka)		1.500-1.502
肘折北原(Hj-Kth, 90-100ka)		1.499-1.502
洞爺(Toya, 112-115ka)		1.494-1.498

温度変化型屈折率測定装置(MAIOT)による. 指標テフラのデータは, 町田・新井(1992, 2003)による. K.yBP:1,000年前(^{14}C年代). Ka:1,000年前.

表3　試料と仙台周辺の代表的指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分化学組成

試料/テフラ	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	n
8(Ⅸb層)	77.42	0.37	12.50	1.73	0.09	0.39	2.09	4.00	1.38	0.03	7
	0.50	0.06	0.23	0.06	0.09	0.10	0.09	0.20	0.12	0.02	
十和田a(To-a)	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34	0.06	-
十和田八戸(To-H)	78.30	0.29	12.67	1.52	0.06	0.29	1.73	3.84	1.30	-	-
浅間草津(As-K)	78.61	0.29	11.97	1.37	0.06	0.24	1.26	3.19	2.97	0.04	-
姶良Tn(AT)	78.83	0.12	12.13	1.10	0.04	0.11	0.98	3.33	3.36	-	-
鳴子柳沢(Nr-Y)	79.67	0.16	11.94	1.30	0.06	0.17	1.31	3.62	1.78		-
鳴子荷坂(Nr-N)	79.28	0.11	12.09	1.23	0.11	0.11	1.05	4.18	1.83	0.01	-
肘折北原(Hj-Kth)	78.63	0.09	12.26	0.70	0.08	0.07	0.68	3.58	3.87	0.03	-
洞爺(Toya)	79.37	0.06	12.48	0.92	0.08	0.03	0.37	3.75	2.94	0.00	-

n:分析ポイント数. 上段が平均値, 下段は標準偏差. 指標テフラのデータは, 青木・新井(2000)および八木(未公表資料)による.

第 7 章　総括

第 1 節　古墳時代～古代の出土土器について（第 280 ～ 294 図）

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ 80 箱以上におよぶ。その大半を占めるのが古墳時代～古代の土師器・須恵器で、登録遺物 791 点のうち掲載遺物 368 点を抽出した。本節では「竪穴住居跡」出土の土師器・須恵器を中心に、当時代の土器の特徴について検討を加える。

（1）時期区分

これまでのあすと長町関係遺跡の時期区分により、1 ～ 6 期の時期区分が設定された。竪穴住居跡の時期決定については、床面資料を中心として遺構の重複関係を併せて時期区分を行った。

1 期：5 世紀後半、概ね「引田式」に並行する時期である。

2 期：6 世紀代を当期に比定した。当期はさらに 2 期に細分が可能であり、前半期：初頭～前葉を「2a 期」、後半期：中葉～末葉を「2b 期」とした。「2b 期」は「住社式期」である。

3 期：7 世紀初頭～前葉、「栗囲式」古段階に並行する時期である。

4 期：7 世紀中葉～後葉に相当する。郡山Ⅰ期官衙の時期で、その成立から廃絶までの期間を当期に比定した。

5 期：7 世紀末葉～ 8 世紀初頭の時期である。郡山Ⅱ期官衙の時期に並行する。

6 期：8 世紀前葉～末葉に相当する。当期についても 8 世紀前葉を「6a 期」、同中葉～末葉を「6b 期」に細分している。

（2）各期の様相

1 期（5 世紀後半）

該当する竪穴住居跡として、SI289・SI324・SI328 を挙げることができる。このうち、坏については全ての竪穴住居跡より出土しており、ここでは最初に当期の坏の特徴について取り上げてみたい。

SI289 の遺物は、坏 1 点のみである。その特徴をみると体部は半球状を呈し、口縁部と体部との境に明瞭な稜線が残る。底面も平底気味に成形されている。SI324 では 3 点の坏を掲載しているが、概ね二つのタイプに分けることができる。一つはこの時期に多くみられる断面半球状を呈するタイプで、口縁部と体部との境に稜線が入り、かつ口縁部は直立気味に立ち上がって端部付近で外反するといった器形である。平底に整形されている C-192 と、丸底である C-195 とに細分できる。もう一つは体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部と体部との境に僅かに稜線が入るといったタイプで、底部は高台状を呈するものである。

当期の甕については、4 点を掲載した（SI324：2 点・SI328：2 点）。SI324 の甕をみると、大型の甕 C-194 は胴部が球状を呈し、胴部の中位に最大径を有する。口縁部は「く」字状に外反する。小型の甕 C-189 は上半部分のみの残存であるため胴部形状は不明であるが、口縁部の反りは弱く、むしろ直線的に外傾する。SI328 の C-213 は胴部がやや縦長の楕円形を呈し、胴部中位に最大径を有する。口縁部は直線的に外傾する。C-218 は口縁部に最大径をもち、胴部は底部に向かって窄まるタイプである。胴部の内・外面調整としてヘラナデやヘラケズリ、さらに SI328：C-218 のように内面にハケメを施すものもみられる。

甑については、SI324 において出土した 1 点を掲載した。底部は単孔で胴部から逆「ハ」字状に窄まり、胴部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で短く外傾するといったタイプである。内・外面ともに胴部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ調整が施されている。

当期の器種として特徴的なものに、小型壺（坩）がある。SI324・SI328 からは、坏・甕といった器種と共伴

するかたちで出土している。SI324：C-193 をみると、口縁部が欠損しているものの胴部は完形に近く、その特徴は胴部最大径が中央より下方に位置するといった下膨れ状を呈し、底部は平底気味に成形されている。一方で SI328：C-217 は口縁部が残存する資料であるが、胴部下半は欠損しており、底部形状は不明である。器形の特徴は、最大径を胴部中央に有する球状を呈し、C-193 との違いが認められる。口縁部はやや内湾気味に開き、胴部の径に対し口縁部の径が若干小さいといった特徴も併せ持つ。

SI324 にみられる坏のセットや甑などの類似例として、仙台市所在南小泉遺跡（26 次調査）の SI6 や、同（30 次調査）の SI14、大崎市所在名生館遺跡の SI1315 などに求めることができ、これらの報告書によればいずれも 5 世紀後半と位置付けられている。

2 期（6 世紀代）

当期に該当する竪穴住居跡として、SI286・SI287・SI339 を 2a 期、SI283・SI288・SI314・SI349 を 2b 期に比定している。また 1 期で取り上げた SI289 も、2a 期にかかるとみられる。

2a 期に該当する竪穴住居跡出土の土器をみると大半が坏で占められており、他の器種としては甕 2 点・椀 1 点のみである。坏についてみると、SI286 以外の竪穴住居跡ではそれぞれ 1 点ずつの掲載に止まるが、SI339：C-264 以外は全て古墳時代中期以来の断面半球状を呈するタイプの坏である。口縁部の立ち上がりをみると、内傾しながら立ち上がる SI287：C-122 などが認められ、その他の形状を呈するものでは口縁部の端部が「く」字状に外反するといったタイプに分けられる。一方で SI286 の中にはこれらと同様の半球状を呈するタイプの坏以外に、C-115・119 のように須恵器模倣坏タイプも認められる。C-115 は口縁部と体部との境から直立気味に立ち上がるが、明瞭な段は認められない。逆に C-119 では明瞭な段を有し、口縁部も若干外反気味に立ち上がるといった異なる特徴を有している。断面が半球状のタイプの坏では、内面の口縁部と体部との境に明瞭な段を有するタイプ（C-116・C-117・C-120）、明瞭な段を有しないタイプ（C-112）、さらに体部と口縁部との境に括れを持たせ「S」字状に外反するといった口縁部を有するタイプ（C-113）とに細分できる。これらに共伴する甕は最大径を胴部中央に有し、直立する口縁部と胴部との境には段を有し、底部が平底気味に整形されているものであり（C-118）、このような組み合わせは名生館遺跡の SI1217・SK430 などにみることができる。

2b 期の遺物出土状況をみると、SI349 を除き比較的まとまったかたちで出土している。このうち坏・甕についてはそれぞれの竪穴住居跡から出土しており、まずは当期の坏の特徴を中心にみることにする。

当期の坏は 2a 期とは異なり、古墳時代中期以来の断面半球状を呈するタイプの坏は殆ど姿を消し、逆に須恵器模倣坏が主流になってくる。その特徴をみると、坏身の模倣を思わせる口縁部が内傾しながら立ち上がるタイプを中心に、直立状に立ち上がるタイプが認められる。一方で坏蓋の模倣を思わせる SI283：C-076 なども、僅かではあるが認められるようになる。

甕については、SI283 を例にみると大・中・小の 3 タイプに分けられ、いずれのタイプも口縁部の内・外面ともにヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ・内面ヘラナデといった調整技法が主流である。特に小・中型の甕では口縁部の径と胴部の最大径がほぼ等しく、かつ口縁部が短く外反するといった共通点を有する。こうした特徴は、SI288・SI314 でも認められることから、当期の甕の特徴として捉えられる。

3 期（7 世紀初頭～前葉）

当期の遺物を伴う竪穴住居跡として、SI265・SI340 を挙げることができる。器種としては、坏・甕・甑・鉢が存在する。坏については SI265：C-010 のみであり、2b 期より在地で製作されるようになる有段丸底坏の系譜を引くタイプである。すでに口縁部と体部との境にみられる段は退化しており、僅かに入る稜線の位置も体部の下端

に移るなどの器形的特徴を有している。内面には全面ヘラミガキ調整が施され、仕上げ技法についても内・外面ともに黒色処理が施されるといった特徴を有する。

甕については、SI265 を例にみると 2 期と同様に大・中・小といった法量分化が認められる。長胴甕の胴部形状をみると、楕円形を呈するタイプ（C-011・006）、胴部上半が円筒状を呈するタイプ（C-012）がある。いずれも口縁部内・外面ヨコナデ、胴部外面ハケメ・ハケメ＋ヘラナデ、内面ヘラナデといった調整が施されている。

甑については、SI265：C-013 がある。胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾し、逆台形に近い器形を呈するタイプで、口縁部と胴部との境が器形上明瞭ではない。外面調整は胴部ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ、内面調整は全面ヘラミガキが施されている。

鉢は SI340：C-265 の 1 点のみであるが、断面半球状を呈し、口縁部と体部との境には段を有する。口縁部は直線状に外傾し、端部で短く屈折するといった特徴を有する。調整は、口縁部内・外面ともにヨコナデ、体部外面ヘラケズリ・内面ヘラナデである。

4 期（7 世紀中葉～後葉）

当期に該当する竪穴住居跡として、SI8・SI268・SI271・SI315・SI326・SI331・SI353 を挙げることができる。

この時期の坏の特徴として、3 期までの大・中と主に 2 種類の法量が認められる様相から新たに小型の坏が加わるようになり、ここで大・中・小といった 3 種類の法量分化が成立する。SI8：C-003・SI268：C-022 などがそれらに該当する。

高坏については 3 点掲載しているが、いずれも脚部のみしか残存していない。SI268：C-025 は長方形の透孔が穿かれた短脚タイプで、下方に向かって「ハ」字状に広がり、裾部で大きく屈曲する。また、坏身部は脚部上端より 90°近く屈曲して広がるといった特徴を挙げることができる。

鉢については、SI8：C-015・SI268：C-024・SI353：C-282 の 3 点を掲載した。C-015 をみると、体部と口縁部との境に僅かな段を有し、口縁部は直線的に外傾する須恵器模倣坏を大型にしたようなタイプで、底面は平底に成形されているといった特徴を有している。一方で C-024 をみると、体部と口縁部との境に段というよりは沈線を巡らすといったタイプで、口縁部もやや内湾気味に直立するといった C-015 とは異なる特徴を有している。このことから C-024 は、この時期辺りから出現する銅鋺などの金属器の影響を受けた器種と思われる。調整技法はいずれも外面口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ、内面については全面ヘラミガキが施され、その後に黒色処理仕上げを行っている。

甕をみると、球胴甕は最大径が胴部下半に位置し、調整技法は外面ハケメ・内面ヘラナデといったタイプ（SI8：C-016・SI268：C-023）と、最大径の位置が胴部中央にあり、外面胴部ヘラケズリ・内面ヘラナデ調整を施すといったタイプがみられる。長胴甕では、胴部上半が円筒状を呈するタイプ（SI271：C-035・036、SI8：C-017）が主体を占めている。胴部の調整をみると、外面はヘラケズリとヘラナデがあり、内面はいずれもヘラナデである。

壺は、SI326：C-204 の 1 点のみの掲載に止まる。胴部から口縁部にかけての破片である。口縁部は緩やかに外反し、胴部は球状を呈するといった特徴を有する。調整は口縁部内・外面ヨコナデ、胴部外面ハケメ・内面ヘラナデである。

この時期になると、これまでの調査により須恵器の出土量が増加する傾向が指摘されているが、今回は図化できるほどの残存状況をもって出土した例は少ない。ここでは、SI331：E-054 にみられる高台付壺のみの掲載である。最大径の位置が胴部中央のやや上方に位置し、若干肩部が張るといったタイプで、頸部以上が欠損している。内・外面ともに明瞭なロクロ痕が残り、外面には全面に自然釉が付着している。

SI8 で出土した甕や坏・鉢といった一括資料と類似する事例として、仙台市所在王ノ壇遺跡の SI201 を挙げるこ

とができる。そこには、SI315・SI268 出土の坏・鉢ともに共通する特徴を有するものも認められることから、ほぼ同時期とみて良いものと思われる。なお、王ノ壇遺跡 SI201 については 7 世紀第 3 四半期末～第 4 四半期に位置付けられている。

この他にも、土師器坏にみられる法量分化や金属器を模倣した器種の出現、高坏脚部の透孔など、いずれもこの時期である 7 世紀中葉～後葉の特色として捉えられるであろう。

5 期（7 世紀末葉～ 8 世紀初頭）

当期に該当する竪穴住居跡として、SI310・SI311・SI312・SI318・SI319・SI320 がある。土師器坏をみると、これまでの有段丸底坏・関東系坏に加え、SI310：C-043・045、SI312：C-056 のような口縁部と体部との境にみられる段や稜線が不明瞭で、断面半球状ないし三日月状を呈するタイプが認められるようになる。これらは前段階の鉢にみられた金属器模倣タイプとして捉えられる器種であろう。いずれも内面調整はヘラミガキではあるが、外面についてはヘラミガキ・ヘラケズリといった異なる点も認められる。仕上げ技法をみても、C-056 以外は内・外面ともに黒色処理を施している。有段丸底坏の調整技法は、外面口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ、内面全面ヘラミガキといった定型化がみられる反面、SI320：C-151 のように内面黒色処理を施さない例も存在する。SI319：C-141 は、有段丸底坏の特徴である口縁部と体部との境の段が底部付近に位置するタイプで、この時期の特徴として捉えられる資料といえる。

この時期、SI312：C-054・055 のように底部を平底に成形するといったタイプの坏が新たに出現する。調整技法をみると、口縁部内・外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ・内面ヘラミガキである。長町駅東遺跡第 1・2 次調査の SI33、同第 4 次調査の SI146 に伴う遺物の中に、類似例を見出すことができる。各報告書によれば前者は 5 期、後者は 6 期に位置付けられている。

鉢についてみると、体部から口縁部にかけて内湾し、体部上半に最大径を持たせるタイプ（SI311：C-048）と、口縁部と体部との境に沈線を巡らせ、断面半球状を呈するタイプ（SI318：C-127）とがある。調整は、前者が内・外面ヘラミガキ、後者が外面口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ、内面全面ヘラミガキである。

甕については、全体像が分かる甕として球胴甕 1 点（SI319：C-149）と長胴甕 2 点（SI318：C-134・135）がある。球胴甕は口縁部が直線的に外傾し、最大径を胴部中央に有し、かつ口縁部と胴部との境に段を有するタイプである。調整は、口縁部内・外面ヨコナデ、胴部外面ハケメ・内面ヘラナデである。長胴甕は口縁部が直線的に外傾し、胴部上半が円筒状を呈するタイプで、口縁部と胴部との境に沈線を巡らすといった特徴を有する。

須恵器については、坏・坏蓋・甕などの器種を掲載した。出土量全体でみると、さらに 4 期よりも数量・器種ともに増加が認められる。SI319：E-032 は丸底タイプの坏である。体部下端より底部にかけてロクロ調整後にヘラケズリ調整が加えられたもので、体部の立ち上がりは直立に近い。SI318：E-031 は底部回転ヘラ切り、ロクロ調整痕を残す坏で、底部から体部への立ち上がりは丸みを持ち、体部が直線的に外傾するタイプである。

坏蓋として、SI320：E-036 がある。擬宝珠形のツマミを持つ扁平な器形で、端部は若干外方に「ハ」字状に開いて垂下する。

この時期の特徴として、土師器坏の製作技法が定型化の方向に進むとともに、新たに底部が平底に成形された坏も出現することが挙げられるであろう。

6 期（8 世紀前葉～末葉）

当期に該当する竪穴住居跡として、SI275・SI325 を 6a 期、SI321・SI333 を 6b 期に比定した。また、SI316A・316B を 6a 期～ 6b 期に比定している。ここでは SI316A・316B を除く 4 軒の例について、取り上げて

みたい。

この時期になると、土器組成に対し須恵器の占める割合が飛躍的に上がるとともに、新たな技法としてのロクロ土師器が出現するようになる。逆に、これまで土師器坏の主流であった有段丸底坏は姿を消し、SI325：C-199・SI333：C-242 のような無段・平底化したタイプが増加する。

須恵器の中で、最も多く出土する器種として坏があり、さらに甕・鉢・坏蓋・壺と続く。坏について言えば、この時期に土師器坏を上回る比率を占める竪穴住居跡も認められるようになる。SI275 より出土した坏をみると、いずれも底部回転ヘラ切り後に底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整を施すといったタイプである。これらを口縁部径 13.7 ～ 14.3cm・器高 3.1 ～ 3.6cm（器高が低いタイプ）、口縁部径 13.6 ～ 14.9cm・器高 4.0 ～ 4.4cm（器高が中程度のタイプ）、口縁部径 16.0cm・器高 6.9cm（器高が高いタイプ）と分類し、同類の坏を産出する県内及び周辺に存在する窯跡及び窯跡関連施設から出土した坏の法量を比較した結果、8 世紀第 1 ～第 2 四半期のものに近似値が求められた。これらの窯で用いられている調整技法も一致することから、器形的な特徴と併せここでは 8 世紀第 1 四半期後半～第 2 四半期前半と位置付けたい [註 1]。同様に、SI325：E-049 についても同時期と捉えている。

甕では、SI275・SI321 出土の 3 点の例を挙げる。口縁部の特徴として、上方で外反し端部に突帯を巡らすタイプ（SI321：E-039）と、短く屈曲し端部が直立して受口状を呈するタイプ（SI321：E-045）に分けられる。底部の形状が丸底タイプの例も見受けられる（SI275：E-006）。

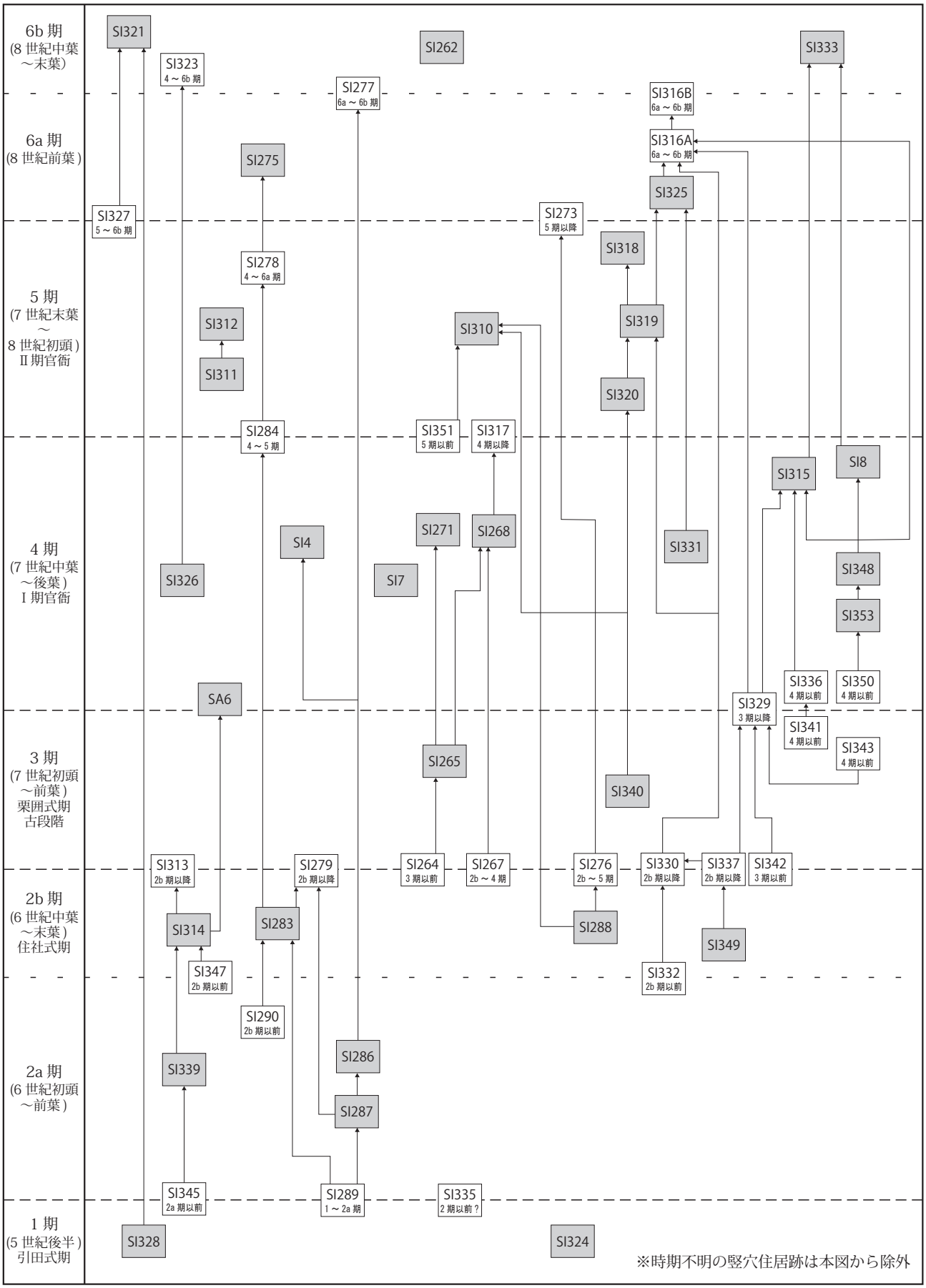
坏蓋は、SI275 以外の竪穴住居跡で出土しており、扁平なタイプ（SI325：E-048）と器高が高いタイプ（SI333：E-056・061・062）に分けることができる。

鉢については、SI333：E-067 がある。口縁部は短く外反し、口縁部と胴部との境には緩やかな段を設け、胴部は底部に向かって緩やかに窄まるといった器形を呈する。胴部外面には平行タタキ目が残るが、内面はロクロナデである。器形的な特徴から 8 世紀後半として位置付けたい。

この時期より、新たにロクロ土師器が製作されるようになる。第 9 次調査においても、SI321 から 3 点の甕が出土している。その特徴をみるといずれも口縁部は短く、大きく屈曲しながら外傾するといったタイプである。胴部は残存状況から推定すると、最大径が中央に位置し、緩やかに膨らむ楕円形状であったと思われる。異なる点では口縁部の端部外面に 1 条の沈線を巡らすタイプ（D-001）と、沈線のないタイプ（D-002）があり、さらに調整技法として前者の胴部外面に施されているヘラミガキが、後者では認められないといった特徴を指摘することができる。ロクロ土師器については、あすと長町関連遺跡の今までの調査所見などから 8 世紀後半及びそれ以降として位置付けられ、本書でも 6b 期としている。

註 1　ここでは、東北古代土器研究会が平成 20 年に刊行した『東北古代土器集成―須恵器・窯跡編―』<陸奥>から 7 世紀末～ 8 世紀代の窯跡を抽出、そこに掲載されている坏実測図を計測するといった簡便な手法で、それぞれのタイプ別に示された数値に近い窯跡ごとに列記したものである。なお、数値についてはあくまでも SI275 出土遺物の個々の数値を、当該窯跡出土遺物の計測値に当てはめたデータであることをご了承願いたい。結果は、以下の通りである。いずれも 8 世紀第 1 四半期～第 2 四半期の範疇に入る。

器高が低いタイプ	木戸窯跡・木戸 A 地点 3 号窯・萱刈場窯 A 地点 2 号窯
器高が中程度のタイプ	木戸 C 地点 1 号窯・日の出山窯 C 地点 1 号窯・鳥屋窯三角田南地区 1 号窯
器高が高いタイプ	日の出山窯 C 地点 3 号竪穴住居跡

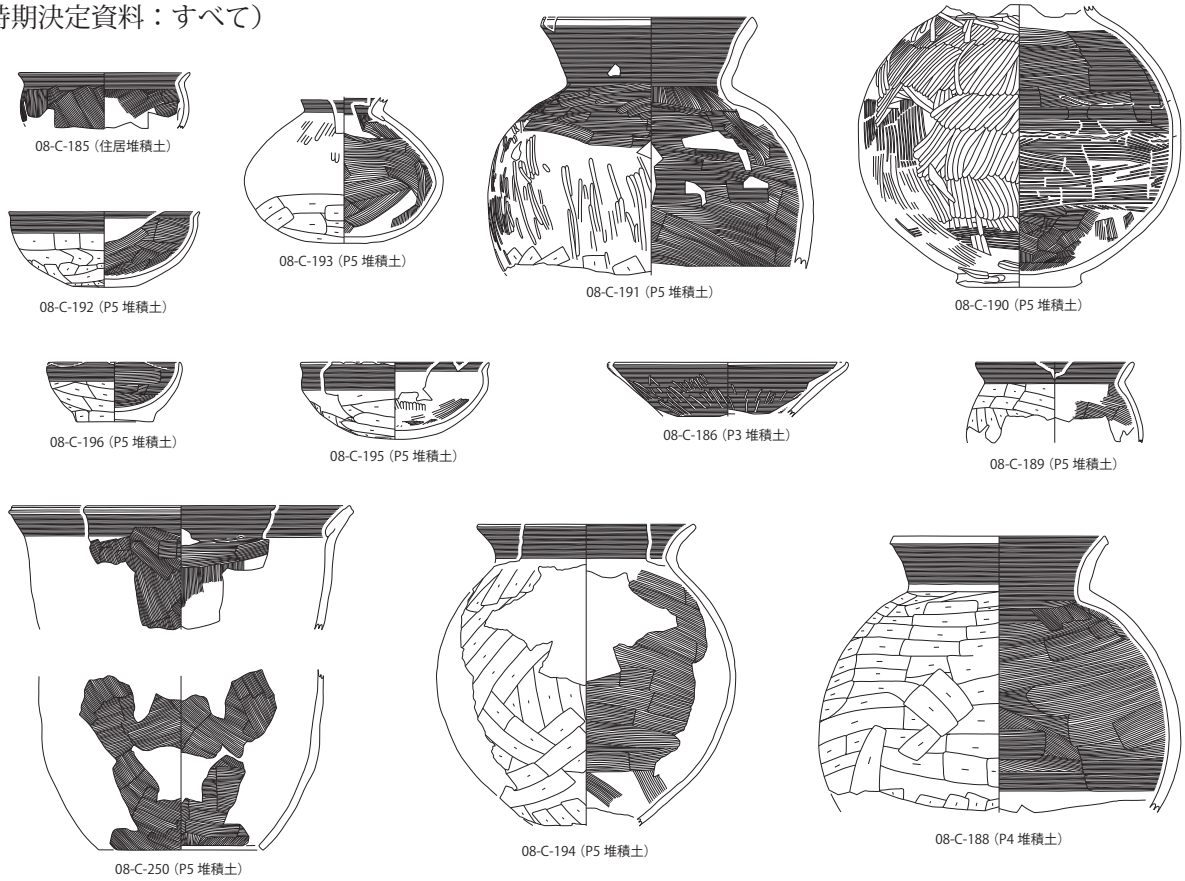


第 280 図　竪穴住居跡重複関係模式図

1 期

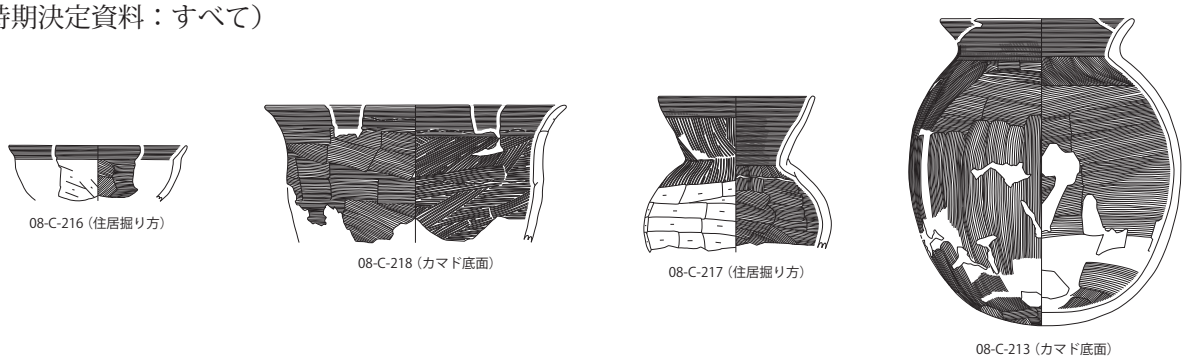
SI324 出土土器

（時期決定資料：すべて）



SI328 出土土器

（時期決定資料：すべて）



2a 期

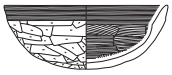
SI339 出土土器

（時期決定資料：左 2 点）

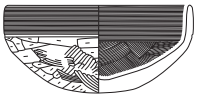
第 281 図　竪穴住居跡出土土器集成図－ 1 期・2 期（1）

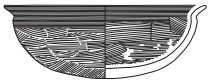
SI286 出土土器

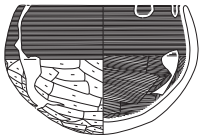
（時期決定資料：すべて）


06-C-117（床面直上）

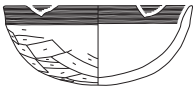
06-C-116（床面直上）


06-C-115（床面直上）


06-C-113（床面直上）


06-C-114（床面直上）

06-C-120（床面直上）

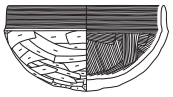

06-C-112（床面直上）

06-C-119（床面直上）

06-C-118（床面直上）

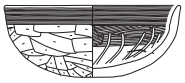
SI287 出土土器

（時期決定資料：すべて）


06-C-122（P4 堆積土上層）

SI289 出土土器（※1 ～ 2a 期）

（時期決定資料：すべて）

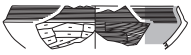

06-C-138（床面直上）

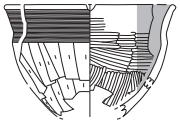
2b 期

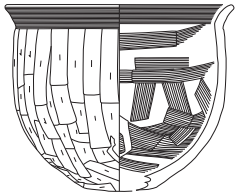
SI283 出土土器（1）

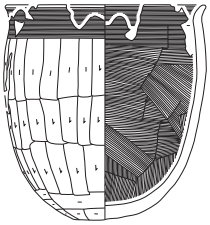
（時期決定資料：上半 7 点）

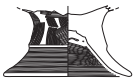
06-C-076（床面直上）

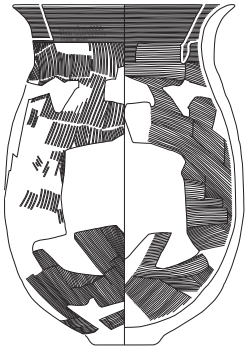

06-C-090（床面直上）


06-C-088（床面直上）


06-C-080（床面直上）


06-C-081（床面直上）

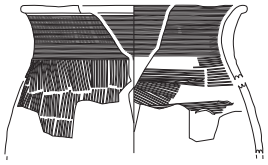

06-C-084（床面直上）


06-C-087（床面直上）

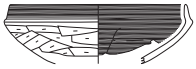
06-C-100（カマド堆積土）

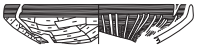
06-C-060（住居堆積土上層）

06-C-048
（住居堆積土上層）

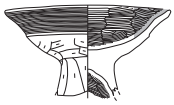

06-C-093（P11 堆積土上層）

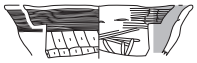
06-C-078（住居堆積土）

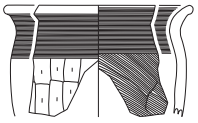

06-C-066（住居堆積土）

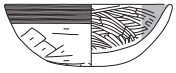

06-C-059（住居堆積土上層）

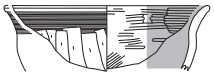
06-C-099（P12 堆積土）


06-C-092
（P13 堆積土）


06-C-102（住居掘り方）


06-C-056（住居堆積土上層）


06-C-082（住居堆積土下層）


06-C-073（住居堆積土）

0　（1:6）　20cm

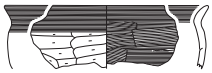
第 282 図　竪穴住居跡出土土器集成図－ 2 期（2）

SI283 出土土器（2）

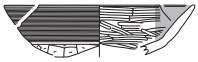
06-C-063（住居堆積土上層）

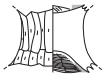
06-C-058（住居堆積土下層）

06-C-053（住居堆積土）

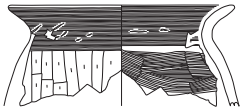

06-C-051（住居堆積土上層）

06-C-061（住居堆積土）


06-C-097（P11 堆積土）

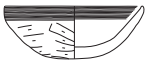

06-C-083
（住居堆積土）

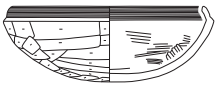
06-C-101（P15 堆積土）

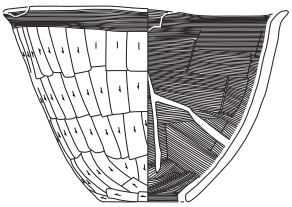

06-C-050（住居堆積土上層）

SI288 出土土器

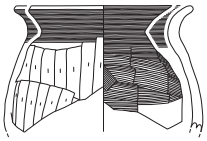
（時期決定資料：上半 13 点）

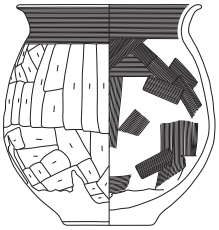

06-C-047（床面直上）

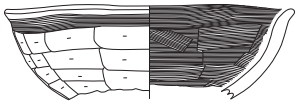

06-C-046（床面直上）

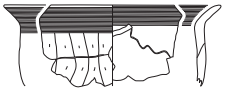

06-C-043（床面直上）

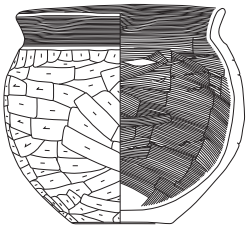
06-C-129（P9 底面）

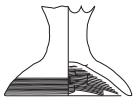

06-C-045（床面直上）


06-C-128（P9 底面）

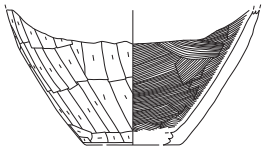

06-C-127（P9 底面）


06-C-131（P9 底面）


06-C-041（床面直上）

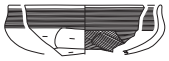

06-C-040（床面直上）

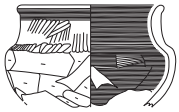
06-C-042（床面直上）

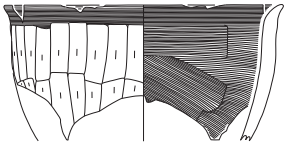

06-C-125（P4 堆積土）

06-C-126（P9 底面）

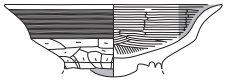
06-C-133（住居堆積土）

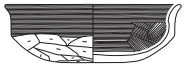

08-C-034（住居堆積土）

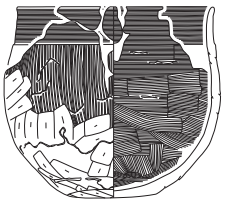

08-C-030（住居堆積土）


08-C-027（住居堆積土）

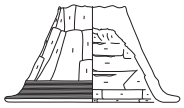
08-C-025（住居堆積土）

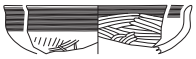

08-C-029（住居堆積土）


08-C-033（住居堆積土）


06-C-124（カマド堆積土）

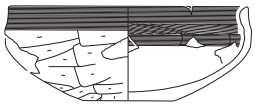
08-C-023（住居堆積土）

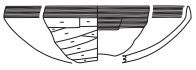

08-C-031（住居堆積土）


08-C-024（住居堆積土）

SI349 出土土器

（時期決定資料：左 1 点）


08-C-276（床面直上）


08-C-277（住居掘り方）

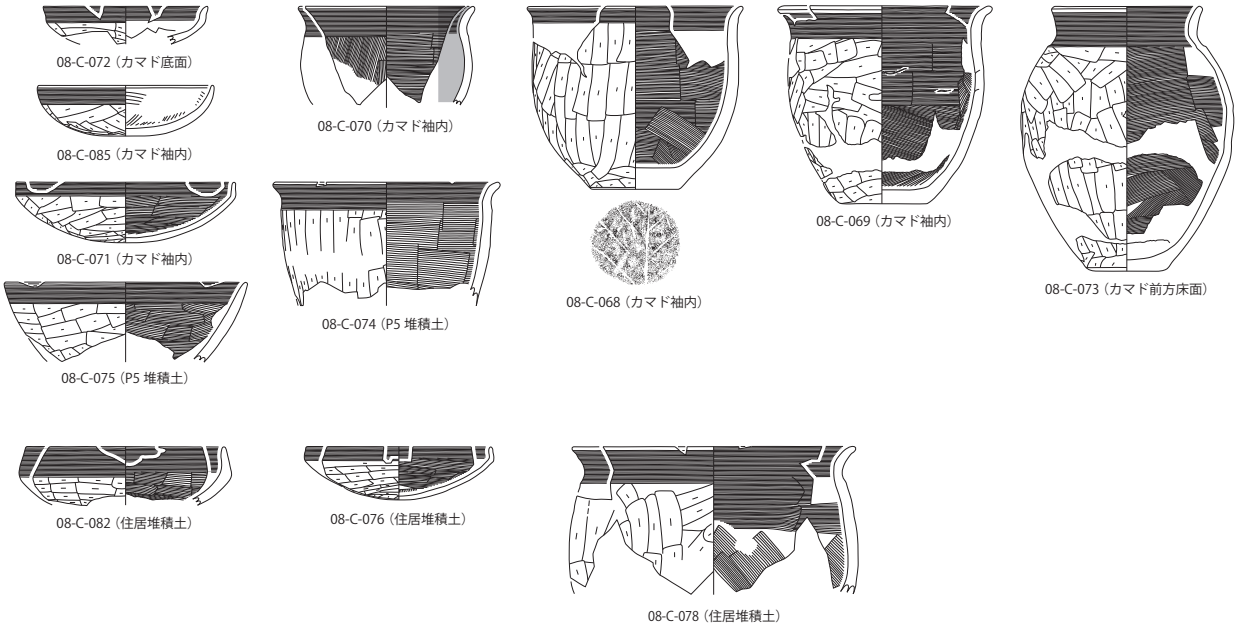
08-C-275（住居堆積土）

0　(1:6)　20cm

第 283 図　竪穴住居跡出土土器集成図－ 2 期（3）

SI314 出土土器

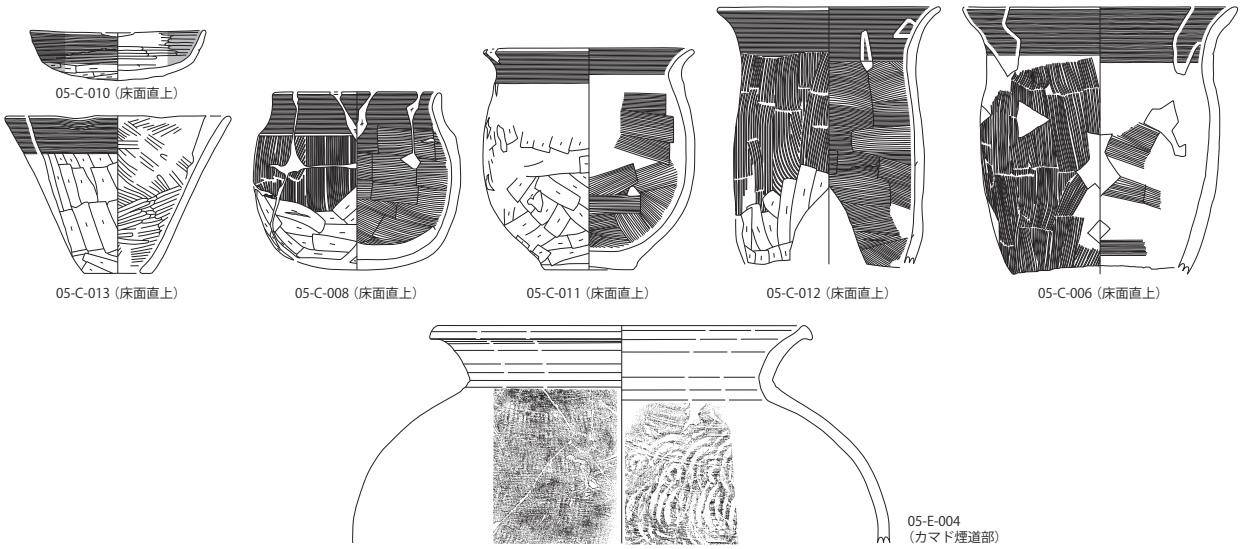
（時期決定資料：上半 9 点）



3 期

SI265 出土土器

（時期決定資料：上半 6 点）



SI340 出土土器

（時期決定資料：左 1 点）

第 284 図　竪穴住居跡出土土器集成図－ 2 期（4）・3 期

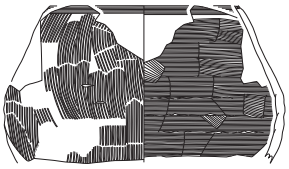
4 期

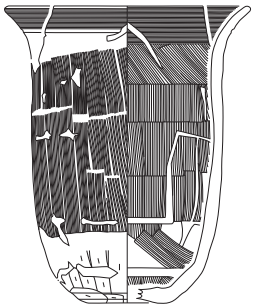
SI8 出土土器

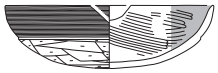
（時期決定資料：上半 7 点）

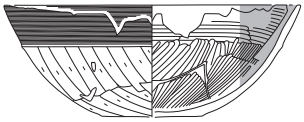
08-C-003（床面直上）

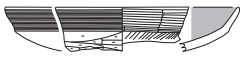
08-C-004（床面直上）


08-C-016（カマド袖内）


08-C-017（住居掘り方）


08-C-012（P5 堆積土）


08-C-015（カマド袖内）


08-C-006（P1 堆積土）

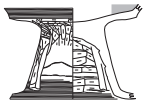
08-C-001（住居堆積土）

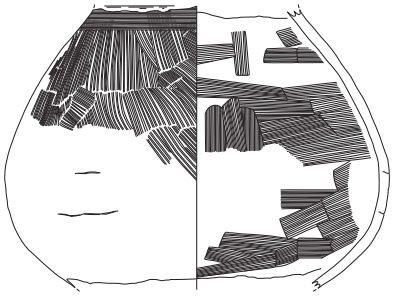
SI268 出土土器

（時期決定資料：上半 6 点）

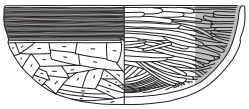
05-C-022（床面直上）

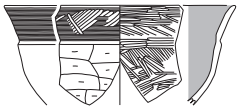
05-C-029（床面直上）


05-C-025（床面直上）


05-C-023（床面直上）

05-C-028（床面直上）


05-C-024（床面直上）

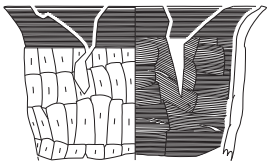

05-C-030（カマド掘り方）

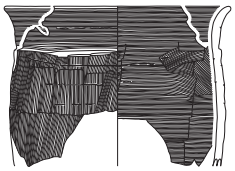
05-C-020（住居堆積土下層）

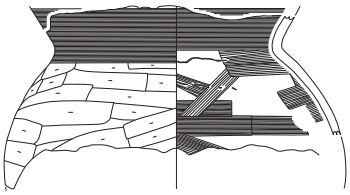
08-E-002（住居堆積土）

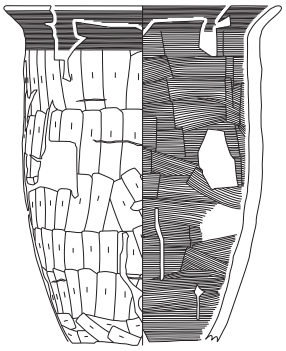
SI271 出土土器

（時期決定資料：すべて）


05-C-037（床面直上）


05-C-036（カマド堆積土）

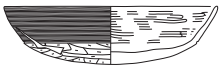

05-C-038（床面直上）


05-C-035（カマド堆積土）

0　（1:6）　20cm

第 285 図　竪穴住居跡出土土器集成図－ 4 期（1）

SI315 出土土器
（時期決定資料：上半 2 点）

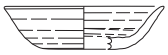

08-C-089（床面直上）

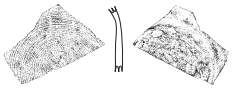
08-C-088（床面直上）

08-C-090（P2 堆積土）

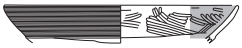
08-C-094（周溝堆積土）

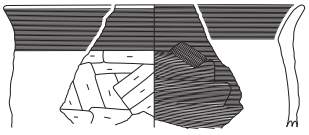
08-C-097（住居掘り方）

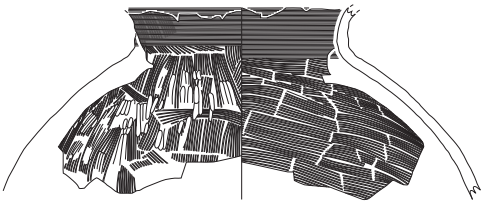

08-E-007（住居堆積土）


08-E-008（住居掘り方）

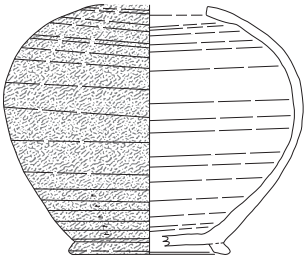
SI326 出土土器
（時期決定資料：左 2 点）


08-C-200（床面直上）

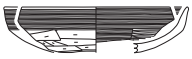

08-C-202（住居掘り方）

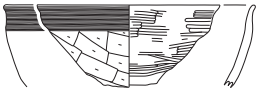

08-C-204（床面直上）

SI331 出土土器
（時期決定資料：すべて）


08-E-054（カマド煙道部）

SI353 出土土器
（時期決定資料：左 2 点）


08-C-281（床面直上）


08-C-282（床面直上）

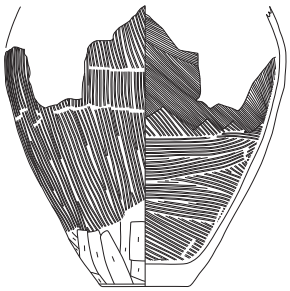
08-E-069（P3 堆積土）

5 期

SI310 出土土器
（時期決定資料：左 3 点）

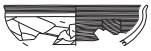
08-C-045（床面直上）

08-C-043（床面直上）


08-C-038（床面直上）

08-C-044（住居堆積土上層）

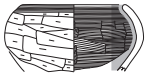
08-C-041（住居堆積土）


08-C-042（住居堆積土）

08-C-040（住居堆積土）

08-E-003
（住居堆積土）

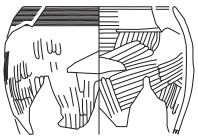
08-C-036
（住居堆積土）

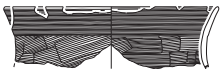

08-C-039（住居堆積土）

0　(1:6)　20cm

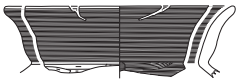
第 286 図　竪穴住居跡出土土器集成図－ 4 期（2）・5 期（1）

SI311 出土土器
（時期決定資料：左 3 点）

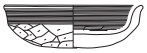

08-C-048（床面直上）


08-C-047（床面直上）

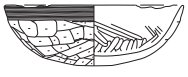
08-E-004（床面直上）

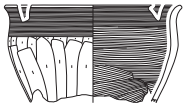

08-C-050（住居掘り方）

SI312 出土土器
（時期決定資料：左 5 点）

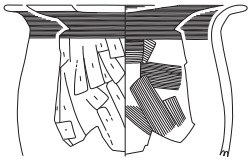

08-C-058（床面直上）

08-C-054（床面直上）

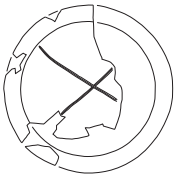

08-C-056（床面直上）


08-C-053（床面直上）

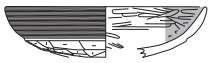
08-C-055（床面直上）

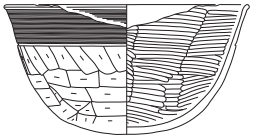

08-C-059（住居掘り方）

SI318 出土土器
（時期決定資料：上半 7 点）

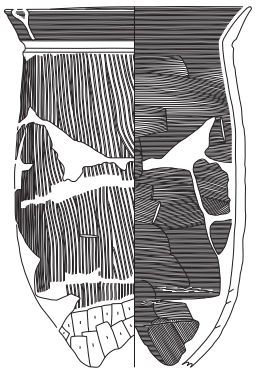

08-C-130（床面直上）

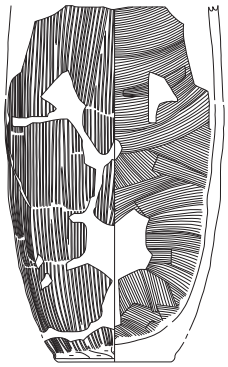
08-C-125（床面直上）

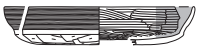

08-C-129（床面直上）

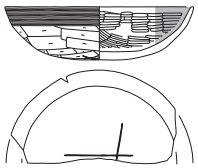

08-C-127（床面直上）

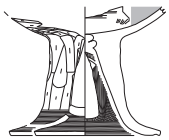
08-E-031（床面直上）


08-C-135（床面直上）


08-C-134（床面直上）


08-C-131（住居掘り方）


08-C-124（住居堆積土）

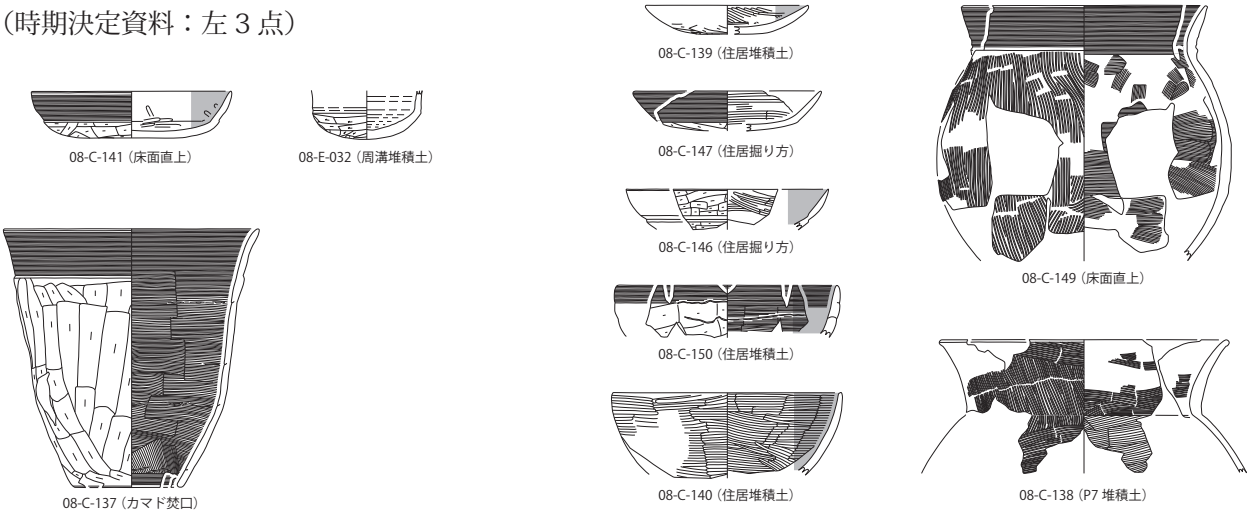

08-C-133（住居堆積土）

0　（1:6）　20cm

第 287 図　竪穴住居跡出土土器集成図－ 5 期（2）

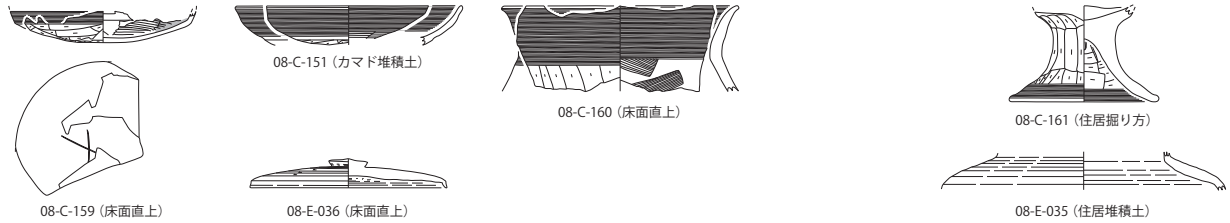
SI319 出土土器

（時期決定資料：左 3 点）



SI320 出土土器

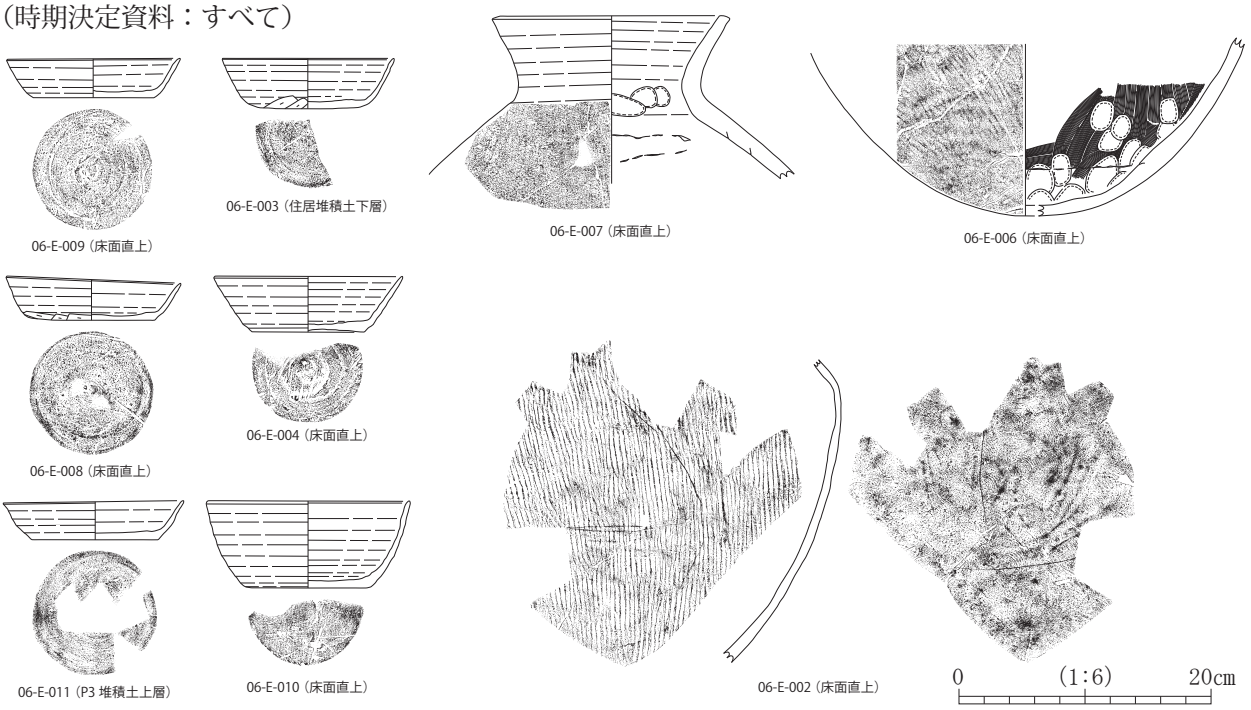
（時期決定資料：上半 4 点）



6a 期

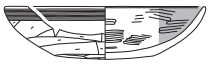
SI275 出土土器

（時期決定資料：すべて）

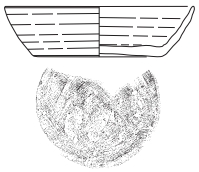


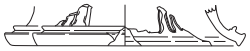
第 288 図　竪穴住居跡出土土器集成図－ 5 期（3）・6 期（1）

SI325 出土土器
（時期決定資料：左 3 点）


08-C-199（床面直上）

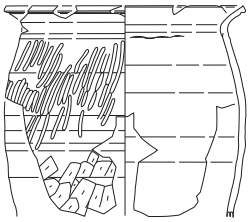
08-E-048（床面直上）

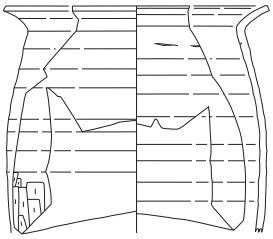

08-E-049（床面直上）


08-E-047（カマド堆積土）

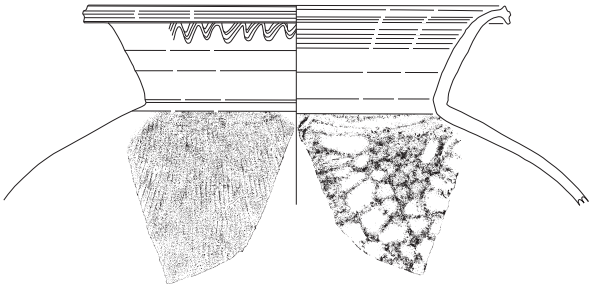
6b 期

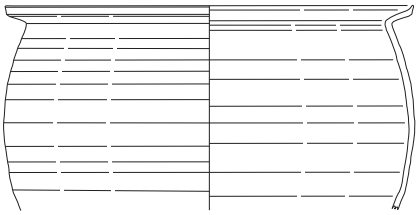
SI321 出土土器
（時期決定資料：上半 5 点）

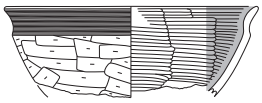

08-D-001（カマド袖内）

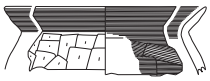

08-D-002（カマド煙道部）

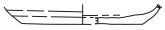
08-E-043（カマド袖内）


08-E-039（床面直上）


08-E-045（カマド煙道部）

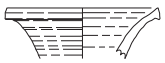

08-C-172（P4 底面）


08-C-171（P2 堆積土）


08-E-037（住居堆積土）

08-E-040（住居堆積土）

08-E-038（住居堆積土）


08-E-044（住居掘り方）

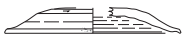
08-D-003（住居堆積土）

08-C-170（住居堆積土）

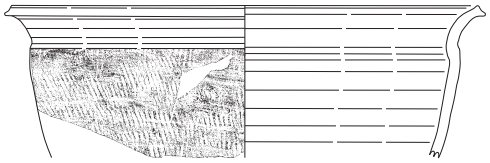
SI333 出土土器（1）
（時期決定資料：5 点）

08-C-242（床面直上）

08-E-063
（周溝堆積土）


08-E-062（周溝堆積土）

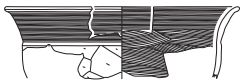
08-E-061（周溝堆積土）


08-E-067（床面直上）

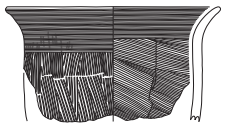
0　（1:6）　20cm

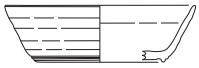
第 289 図　竪穴住居跡出土土器集成図－ 6 期（2）

SI333 出土土器 (2)


08-C-239（住居掘り方）

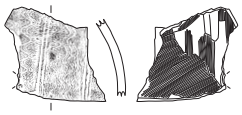
08-C-236（住居堆積土）


08-C-247（カマド煙道部）


08-E-066（住居掘り方）

08-E-056（住居堆積土）

08-E-058（住居堆積土）


08-E-065（住居掘り方）

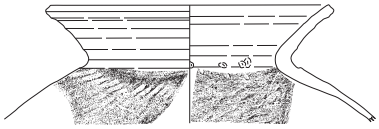
6a ～ 6b 期

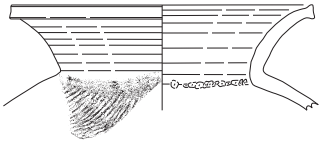
SI277 出土土器

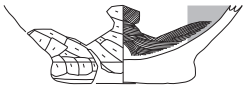
（時期決定資料：上半 5 点）

06-C-027（床面直上）

06-C-023（床面直上）


06-E-017（床面直上）


06-E-018（床面直上）


06-C-022（床面直上）

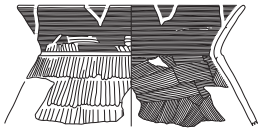
06-C-019（住居堆積土）

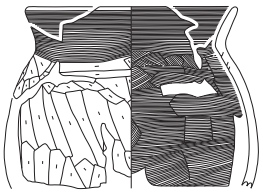
06-C-018（住居堆積土）

06-E-015（住居堆積土）

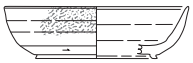
SI316A 出土土器

（時期決定資料：左 2 点）


08-C-109（周溝堆積土）


08-C-108（床面直上）

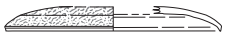
08-C-120（P4 堆積土）

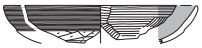

08-E-016（住居堆積土）

08-E-015（住居堆積土）

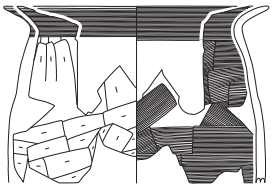
08-C-098（カマド堆積土）

08-E-012（住居堆積土）


08-E-017（住居堆積土）


08-C-106（住居堆積土）

08-E-020 (床面直上）

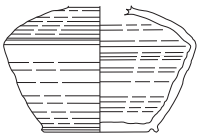

08-C-101（住居堆積土）

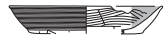
08-E-013（住居堆積土）

0　(1:6)　20cm

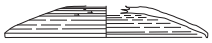
第 290 図　竪穴住居跡出土土器集成図－ 6 期（3）

SI316B 出土土器
（時期決定資料：左 1 点）


08-E-027（床面直上）


08-C-099（カマド２煙道部）

08-C-119（住居掘り方）


08-E-029（床面直上）

08-C-121（住居掘り方）

時期不確定

SI264 出土土器
（3 期以前）

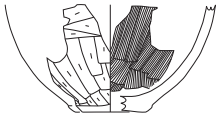
05-C-002
（住居堆積土上層）

05-C-003（住居堆積土）

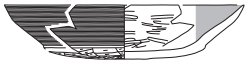
SI273 出土土器
（5 期以降）

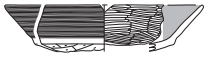
06-C-002（住居掘り方）

SI276 出土土器
（2b ～ 5 期）


06 -C-012（P8 堆積土）

06-C-017（P3 堆積土）

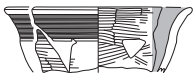

06-C-016（P7 堆積土）

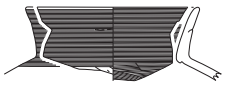

06-C-008（P1 堆積土）

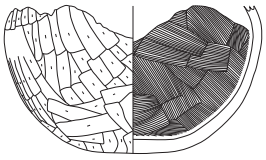
06-E-012（住居堆積土）

SI284 出土土器
（4 ～ 5 期以前）

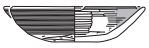
06-C-105（住居堆積土上層）

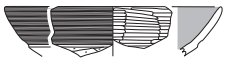

06-C-107（住居堆積土下層）


06-C-104（住居堆積土）

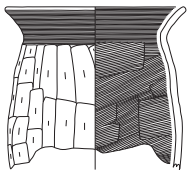

06-C-109（床面直上）

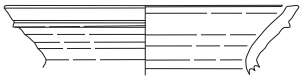
SI313 出土土器
（2b 期以降）


08-C-062（住居堆積土）


08-C-065（住居堆積土）

08-C-064（住居堆積土）


08-C-060（住居堆積土）


08-E-005（住居堆積土）

0　（1:6）　20cm

第 291 図　竪穴住居跡出土土器集成図－ 6 期（4）・時期不確定（1）

SI317 出土土器
（4 期以降）

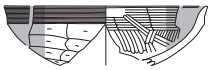
08-C-123（住居堆積土）

SI323 出土土器
（4 ～ 6b 期）

08-C-179
（住居掘り方）

08-C-182（住居掘り方）

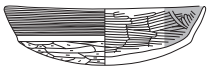
SI327 出土土器
（5 ～ 6b 期）

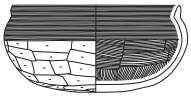

08-C-206（住居掘り方）

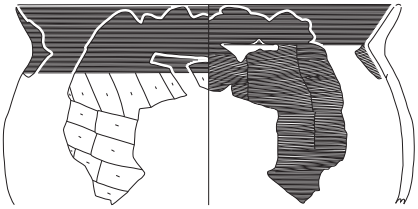
08-E-050
（住居掘り方）

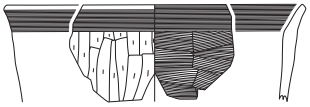
SI329 出土土器
（3 期以降）

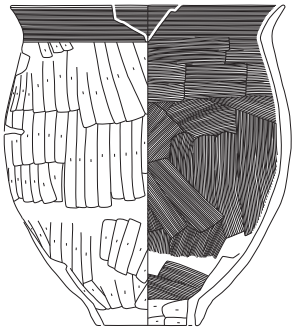
08-C-223（床面直上）

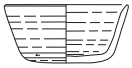

08-C-226（カマド袖内）


08-C-228（P3 堆積土）


08-C-227（P5 堆積土）

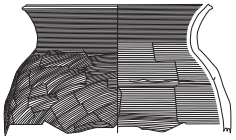

08-C-220（住居堆積土）

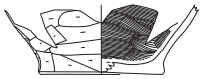

08-C-224（床面直上）


08-E-051（床面直上）

SI330 出土土器
（2b 期以降）

08-C-231（住居堆積土）


08-C-233（カマド堆積土）


08-C-232（住居堆積土）

08-E-053（住居堆積土）

0　（1:6）　20cm

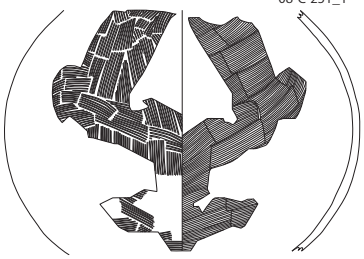
第 292 図　竪穴住居跡出土土器集成図－時期不確定（2）

SI335 出土土器
（2 期以前？）

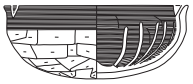
08-C-253（住居掘り方）

08-C-251_1

08-C-254（P3 堆積土上層）


08-C-251_2（住居掘り方）

SI352 出土土器
（2b 期以前）

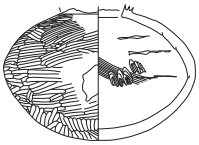

08-C-279（住居堆積土）

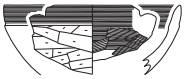
時期不明

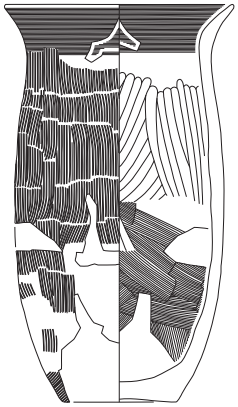
SI272 出土土器

05-C-048（住居堆積土）

SI281 出土土器


06-C-034（P7 堆積土）


06-C-029（住居堆積土）


06-C-030（住居堆積土）

SI344 出土土器

08-C-270（床面直上）

SI285 出土土器

06-C-111（P2 堆積土）

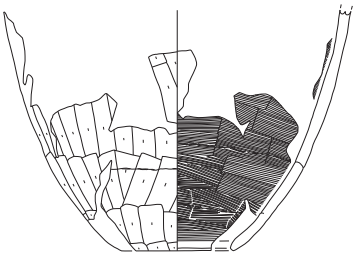
SI322 出土土器

08-C-177（住居堆積土）

08-C-178（住居掘り方）

SI338 出土土器

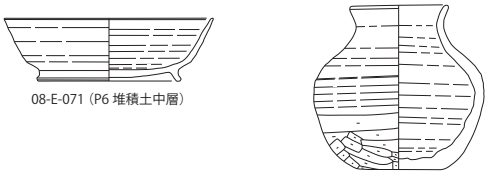
08-C-255（住居堆積土）


08-C-256（P1 堆積土）

0　(1:6)　20cm

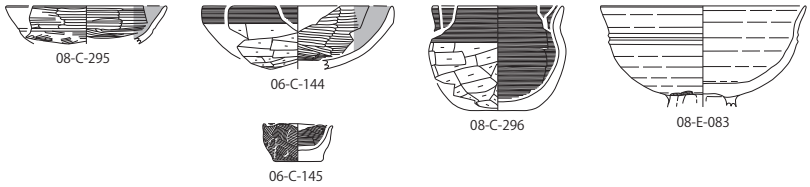
第 293 図　竪穴住居跡出土土器集成図－時期不確定（3）・時期不明

SB37 出土土器



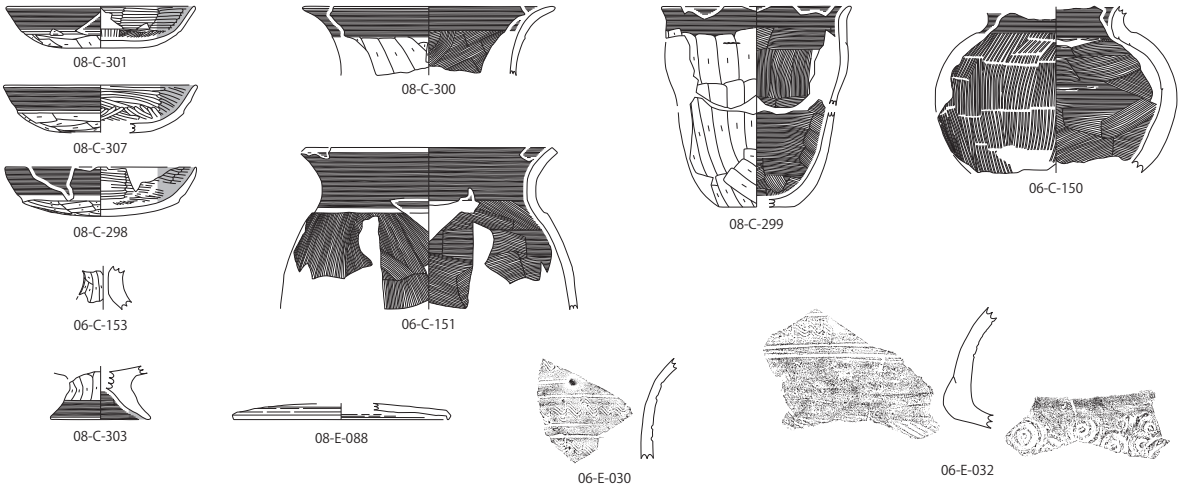
SD7 出土土器

SD180 出土土器

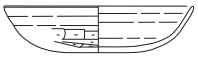


SD182 出土土器

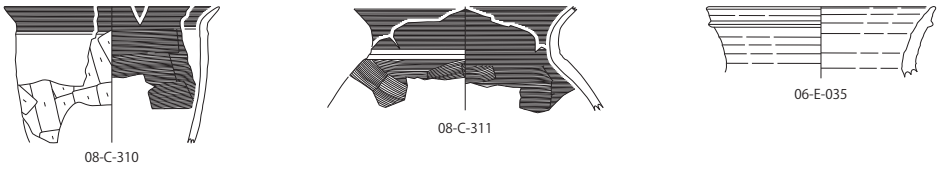
SD205 出土土器



SD224 出土土器



SD266 出土土器



※すべて堆積土から出土

0　(1:6)　20cm

第 294 図　掘立柱建物跡・溝跡出土土器集成図

第 2 節　古墳時代～古代の集落について（第 295 ～ 310 図）

古墳時代～古代の当遺跡内は、主に竪穴住居跡で構成される「集落」として機能してきた。この集落は外縁に溝跡や材木列跡、一本柱列跡といった区画施設を伴うものであり、一般的な集落とは構造を異にする。既述したが、長町駅東遺跡の集落成立には郡山官衙の造営から多賀城への機能移転に至るまでの政治的な動向が密接に絡み、在来の集落から公的な性格を帯びた拠点的集落へと整備されていったことが指摘されている。本節ではこの指摘を鑑み、集落の主要構成遺構である「竪穴住居跡」を中心にその時期的変遷を追ってみる。加えて「掘立柱建物跡」「材木列跡」といった付属的な施設についても、再度取り上げてみたい。

（1）竪穴住居跡（第 295 ～ 300 図）

今回の調査では、84 軒が検出された。遺跡全体では未調査部分も含め、400 軒を超えるものと考えられる。今回の報告部分は竪穴住居跡の密度が濃く、SI316A のように最大で 13 軒の重複関係が認められる例もある。このため残存状況が芳しくない竪穴住居跡も多数存在するが、復元部分を含み、ある程度原形の把握が可能な竪穴住居跡は 53 軒を数える。以降、これらの竪穴住居跡につき「規模･形態･方向」「床面（掘り方）」「柱穴」「カマド」「その他の施設」の 5 つの項目ごとにまとめを行うが、「周溝」については全容不明の竪穴住居跡が多いため割愛した。また、SI279 は「平地式建物跡」の可能性があり、他の竪穴住居跡とは切り離して「特殊建物跡」として記述する（「属性表」には併記）。

①竪穴住居跡の構造について

【規模・形態・方向】

確認できた平面形状は、全て方形基調である。特に正方形のプランをもつ竪穴住居跡が半数以上を占めている。SI7・287・316A・333・327 のように長方形を呈する竪穴住居跡や、SI8・265・267・268・284・310・317・318・322・328・329・348 など片方の辺が広がる不整方形の竪穴住居跡もある。

規模は、長軸 2.52（残存値）×短軸 2.42m を測る SI275 が最小規模である。この竪穴住居跡は床面の中央に浅い土坑を伴い、カマドが付設された痕跡も認められないことから、特殊な性格をもつ施設と考えられる。床面からは多量の土師器や須恵器、礫のほか、鉄滓や鞴（ふいご）の羽口などが出土している。最大規模の竪穴住居跡としては、長軸 8.42 ×短軸 6.63m の SI316A が挙げられる。SI325 → SI316B → SI316A の順で 2 回にわたって拡張されたと考えられ、SI316A はその最終的な形態といえる。これらの竪穴住居跡からは破片ではあるが円面硯や瓦、鉄鏃やその他の武器の一部とみられる棒状鉄製品・環状鉄製品が出土しており、他の竪穴住居跡とは異なる性格が考えられる。なお、今回の調査で検出された竪穴住居跡は概ね 4 ～ 5m 級の規模が主体である。

方位は真北から西に傾くものが主体である。カマドの位置を無視し、四壁の方向だけをみれば振れが 30°未満に収まるものが 30 軒、30 ～ 40°の間が 14 軒である。これは河川跡の方向性に概ね一致するものであり、地形的な制約が竪穴住居跡の方位に影響していたことが窺える。逆に東側に振れる竪穴住居跡は 30°未満が 5 軒であり、45°前後振れる竪穴住居跡は 4 軒である。

【床面（掘り方）】

殆どの竪穴住居跡で掘り方が認められた。掘り方形状は様々で、規則性は見出し難い。SI268 のように四壁際が下がり、中央部分が島状に高まるといった整然とした掘り方も存在する。SI262 の掘り方埋土は、全体が 30cm 前後の厚みを有していた。粘土のような選定された素材で構築された床は認められず、全て基本層Ⅳ層土を基本材とした混土を使用している。SI268・312・325 の底面からは、鋤先状の工具痕が検出されている。

長町駅東遺跡第５・６・９次調査　竪穴住居跡の属性一覧（1）

住居番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	平面形状・規模			軸方位		カマド			煙道部			その他の施設	時期区分	備考
		平面形状	長軸×短軸（㎝）	床面標高（m）	方位	算出基準	付設位置	燃焼部位置	袖構築材※（）は芯材	長さ（㎝）	底面	煙出し			
SI4	04	方形	593×548	9.24	N-26°-W	西壁	北壁	―	―	―	―	―		4	北西コーナー付近を検出、大半部分第1・2次調査で検出。
SI7	15	長方形	491×387	9.4	N-18°-W	東壁	―	―	―	―	―	―	―	4	北西コーナー付近を検出、大半部分第1次調査で検出。
SI8	24・25	台形?	672×583	9.61	N-29°-W	カマド	北壁	内	盛土（凝灰岩切石）	69	平坦	―	土坑7基（1基は貯蔵穴・4基はカマド関連?）	4	カマド前方～北西コーナーを検出、南東部分第1・2次調査で検出。
SI262	14	方形or長方形	（285）×（213）	9.70	N-24°-W	西壁	―	―	―	―	―	―	―	6b	南西部分を検出、大半部分調査区外。
SI263	14・20	方形or長方形	（335）×（125）	9.58	N-15°-W	南壁	―	―	―	―	―	―	―	不明	南側の一部分が残存。
SI264	13・14 19・20	方形or長方形	（560）×（134）	9.61	N-55°-E	カマド	東壁	内	盛土（芯材抜取痕?先端にピット）	90	平坦	―	―	3以前	東半部分が残存。
SI265	19・20 22・23	方形?	452×（350）	9.44	N-21°-W	カマド	北壁	やや外	盛土（凝灰岩切石）	112	やや上がる	―	―	3	西壁消失。
SI266	13・19	方形or長方形	（320）×（300）	9.34	N-23°-W	東壁	―	―	―	―	―	―	―	不明	南東部分と主柱穴が残存。
SI267	20・23	方形or長方形	（546）×（460）	9.79	N-38°-W	東壁	北壁	やや外	―	71	平坦	―	土坑1基	2b～4	カマド～南東コーナーの床面と掘り方が残存。
SI268	22・25（5次）01～04（9次）	方形	394×356	9.45	N-8°-W	カマド	北壁	やや外	盛土	185	やや下がる	ピット状	ピット2基（貯蔵穴?）	4	南西コーナー～西壁の一部が消失。
SI269	18・19 21・22	方形or長方形	（337）×（315）	9.41	N-67°-E	南壁	北壁	内	―	―	―	―	―	不明	東・西・北の壁が消失。
SI270	19・20	方形or長方形	（497）×（194）	9.50	N-22°-W	東壁	―	―	―	―	―	―	―	不明	北東部分を中心に残存。
SI271	19・22	長方形?	（397）×（352）	9.45	N-50°-E	カマド	東壁	内	盛土（凝灰岩切石）	194	平坦	―	―	4	カマド前方～南東部分が残存。
SI272	13・14	方形	446×411	9.20	N-18°-W	西壁	―	―	―	―	―	―	―	不明	北東部分調査区外。
SI273	05・07	方形or長方形	（203）×（219）	9.59	N-33°-E	西壁	―	―	―	―	―	―	土坑1基	5以降	北西コーナー付近が残存。
SI274	06	方形or長方形	（259）×（148）	9.78	N-27°-W	カマド	北壁	内?	北壁内外に芯材抜取痕?ピット一対	―	―	―	―	不明	北側掘り方のごく一部が残存。
SI275	03	方形?	（252）×242	9.68	N-19°-W	東壁	―	―	―	―	―	―	ピット1基土坑3基	6a	西壁消失。
SI276	07	方形or長方形	（418）×（352）	9.64	N-67°-W	北壁	―	―	―	―	―	―	土坑2基	2b～5	壁は北西コーナー付近が残存。
SI277	04・06	方形or長方形	（284）×（166）	9.27	N-72°-W	南壁	―	―	―	―	―	―	―	6a～6b	南西部分が残存。
SI278	03・05	方形or長方形	（303）×（205）	9.70	N-20°-W	西壁	―	―	―	―	―	―	―	4～6a	南壁付近と西壁の一部が残存。
SI279	05・06	円形?	（506）×（294）	9.79	N-39°-W	柱穴配置	―	―	―	―	―	―	―	2b以降	周溝と主柱穴を検出。「平地式建物」か。

長町駅東遺跡第５・６・９次調査　竪穴住居跡の属性一覧（2）

住居番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	平面形状・規模			軸方位		カマド			煙道部			その他の施設	時期区分	備考
		平面形状	長軸×短軸（㎝）	床面標高（m）	方位	算出基準	付設位置	燃焼部位置	袖構築材※（ ）は芯材	長さ（㎝）	底面	煙出し			
SI280	14・20	方形or長方形	（334）×（92）	9.72	N-45°-W	カマド	南壁	内	―	―	―	―	―	不明	カマドと南壁付近の床面以下が残存。
SI281	04・06	方形or長方形	510×（265）	9.35	N-38°-E	南壁	―	―	―	―	―	―	土坑1基（貯蔵穴?）	不明	南側1/3部分が残存。
SI283	03・05	方形	625×612	9.25	N-75°-W	カマド	西壁	内	盛土	―	―	―	床面から土坑5基（貯蔵穴?）掘り方から土坑2基	2b	北東コーナー消失。
SI284	05	方形	388×380	9.30	N-20°-W	カマド	北壁	内	盛土	71	やや上がる	―	土坑1基（貯蔵穴?）	4～5	北東コーナーと西壁上部が消失。床面から30㎝大の白色粘土塊3個出土。
SI285	14・20	方形?	（305）×（276）	掘り方9.68	N-33°-W	カマド	北壁	やや外	―	―	―	―	土坑2基	不明	カマド底面と掘り方が残存。
SI286	03・04 06	方形or長方形	327×（145）	9.38	N-32°-W	西壁	―	―	―	―	―	―	―	2a	南側部分が残存。
SI287	05・06	長方形	420×326	9.42	N-25°-E	西壁	北西床面	地床炉　長×短×深さ㎝ 47×31×4					土坑3基（1基は貯蔵穴?）	2a	北壁消失。
SI288	07（6次）05・09（9次）	方形	（616）×（600）	9.41	N-19°-W	カマド	北壁	内	盛土	―	―	―	土坑2基（貯蔵穴?）掘り方から土坑3基	2b	北側部分消失。
SI289	03～06	方形or長方形	（362）×（336）	9.34	N-25°-W	西壁	―	―	―	―	―	―	―	1～2a	中央～南西コーナー付近が残存。
SI290	05	方形	340×330	掘り方9.12	N-33°-W	西壁	―	―	―	―	―	―	―	2b以前	南西コーナー付近の壁と掘り方が残存。
SI310	09・14	不整方形	472×467	9.47	N-12°-W	カマド	北壁	内	盛土	（109）	平坦	―	土坑1基（貯蔵穴?）	5	北東コーナー消失。
SI311	40・44	方形or長方形	（423）×（325）	9.43	N-6°-W	西壁	―	―	―	―	―	―	―	5	東側1/3部分消失、床面以下が残存。
SI312	36・40 41・44	隅丸方形	494×488	9.48	N-23°-W	カマド	北壁	内	盛土	66	平坦	ピット状	土坑1基（貯蔵穴?）	5	床面に白色粘土範囲3箇所。
SI313	41	不整方形	325×325	9.43	N-77°-E	カマド	東壁	内	盛土	―	―	―	土坑1基（貯蔵穴?）	2b以降	東西に分断。
SI314	36・37 40・41	方形	722×688	9.47	N-18°-W	カマド	北壁	内	盛土（土師器甕）	―	―	―	土坑1基（貯蔵穴?）	2b	東西に分断。南東コーナー調査区外。
SI315	23・24 28・29 33	方形	540×535	9.69	N-39°-W	カマド	北壁	内	盛土	―	―	―	土坑6基（1基は貯蔵穴・4基はカマド関連?）	4	南北に分断。
SI316A	13・18 19・23 24	長方形	842×663	9.52	N-15°-W	カマド	北壁	内	盛土	265	やや下がる	―	土坑2基（1基は貯蔵穴?）	6a～6b	東西に分断。SI316Bの西壁を拡張した住居か。
SI316B	13・18 19・23 24	方形	702×663	9.49	N-15°-W	カマド	北壁	内	―	265	平坦	ピット状	土坑1基（貯蔵穴?）	6a～6b	東西に分断。SI325の東・南・北壁を拡張した住居か。
SI317	01・03 04	長方形?	（421）×395	9.49	N-68°-E	カマド	東壁	内	盛土	―	―	―	土坑1基（貯蔵穴?）	4以降	北西側1/3部分の床面と北壁が消失。
SI318	08・09 13・14	不整方形	427×374	9.61	N-37°-W	カマド	北壁	内	―	（155）	やや下がる	―	―	5	東西に分断。
SI319	13・14 18・19	不整方形	529×470	9.55	N-48°-W	カマド	北壁	内	盛土	―	―	―	ピット3基（2基はカマド関連?）・土坑3基（1基は貯蔵穴?）	5	東西に分断。北東コーナーと南西部分が消失。

長町駅東遺跡第５・６・９次調査　竪穴住居跡の属性一覧（3）

住居番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	平面形状・規模			軸方位		カマド			煙道部			その他の施設	時期区分	備考
		平面形状	長軸×短軸（㎝）	床面標高（m）	方位	算出基準	付設位置	燃焼部位置	袖構築材※（）は芯材	長さ（㎝）	底面	煙出し			
SI320	14・19	不整方形?	488×458	9.58	N-36°-W	カマド	北壁	内	盛土	140	やや下がる	―	土坑4基（1基は貯蔵穴?）	5	北西部分消失。
SI321	08・13	方形	500×497	9.61	N-13°-W	カマド	北壁	内	盛土※遺物混入	230	やや下がる	ピット状	土坑2基（1基は貯蔵穴?）	6b後半以降	
SI322	03・07	不整方形	329×300	9.46	N-11°-W	カマド	北壁	内	盛土	―	―	―	土坑1基（カマド関連?）	不明	北壁消失。
SI323	44・45 48・49	方形or長方形	（480）×（408）	9.68	N-12°-W	カマド	北壁	やや外	盛土	[111]	―	ピット状	土坑2基	4～6b	西・北壁消失。
SI324	07・12	方形?	（377）×（356）	9.46	N-73°-E	カマド	東壁	内	―	―	―	―	土坑4基（1基は貯蔵穴?）	1	掘り方と床面東半部分が残存。
SI325	18・19 23・24	長方形	632×535	9.33	N-13°-W	カマド	北壁	内	盛土	[175]	やや下がる	―	ピット3基（2基はカマド関連?）土坑1基	6a	大部分の壁が消失。床面全体を検出。
SI326	48・49	方形or長方形	（435）×400	9.59	N-83°-E	カマド	東壁	やや外	盛土	―	―	―	土坑1基	4	カマド付近の東壁と床面以下が残存。
SI327	07・08 12・13	長方形?	（541）×476	9.47	N-32°-W	カマド	北壁	内	―	117	やや下がる	―	ピット1基（カマド関連?）土坑3基（1基はカマド関連?）	5～6b	南半部分は掘り方が残存。
SI328	04・08	不整方形	416×354	9.62	N-83°-E	カマド	東壁	内	盛土	―	―	―	土坑1基（貯蔵穴?）	1	南壁消失。
SI329	23・28	不整方形	441×397	9.51	N-32°-W	カマド	北壁	内	盛土	―	―	―	土坑1基（貯蔵穴?）	3以降	東西に分断。南東コーナー・北東コーナー消失。
SI330	18・23	方形	353×352	9.50	N-37°-W	カマド	北壁	内	盛土	―	―	―	土坑1基（貯蔵穴?）	2b以降	南東コーナー消失。
SI331	19	不明	―	9.64	N-78°-E	カマド	東壁	―	―	（181）	やや下がる	―	―	4	カマド煙道部のみ残存。煙出し底面に半裁須恵器壺設置。
SI332	13・18	方形or長方形	（334）×（234）	9.62	N-36°-W	カマド	東壁	内	盛土	―	―	―	土坑2基	2b以前	カマド～北側部分が残存。
SI333	24・29	長方形	523×410	9.60	N-2°-W	カマド	北壁	内	盛土	197	やや下がる	ピット状	土坑3基（2基は貯蔵穴・1基はカマド関連?）	6b	東壁調査区外。
SI334	18	方形or長方形	400×（260）	9.48	N-45°-E	カマド	東壁	内?	盛土	―	―	―	土坑2基（1基は貯蔵穴?）	不明	北側部分が「コ」字状に残存。
SI335	03・07	方形or長方形	（597）×（524）	掘り方9.30	N-25°-W	東壁	―	―	―	―	―	―	土坑1基（カマド関連?）	2以前?	掘り方が残存。西側部分調査区外。
SI336	28・29 32・33	方形	410×370	9.72	N-25°-W	南壁	―	―	―	―	―	―	―	4以前	北壁消失。
SI337	18・23	方形or長方形	（344）×（172）	9.52	N-38°-W	西壁	―	―	―	―	―	―	―	2b以降	北壁消失、北西部分が残存。
SI338	28・32	方形or長方形	（316）×（307）	9.60	N-38°-W	西壁	―	―	―	―	―	―	―	不明	東・南・北壁消失。
SI339	33・37	方形?	（485）×（483）	9.56	N-18°-W	西壁	―	―	―	―	―	―	―	2a	北壁東側・南西コーナー消失。南東部分調査区外。
SI340	14・19	方形?	（639）×（627）	9.53	N-23°-W	カマド	北壁	内	盛土	―	―	―	土坑1基（貯蔵穴?）	3	西壁・床面の大部分が消失。

長町駅東遺跡第５・６・９次調査　竪穴住居跡の属性一覧（4）

住居番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	平面形状・規模			軸方位		カマド			煙道部			その他の施設	時期区分	備考
		平面形状	長軸×短軸（cm）	床面標高（m）	方位	算出基準	付設位置	燃焼部位置	袖構築材※（ ）は芯材	長さ（cm）	底面	煙出し			
SI341	29・33	不明	（161）×（36）	9.64	不明	－	－	－	－	－	－	－	－	4以前	東壁付近の一部が残存。
SI342	23・28	不明	（226）×（26）	9.55	N-59°-E	西壁	－	－	－	－	－	－	－	3以前	西壁の一部が残存。
SI343	23・24 28・29	不明	（480）×（245）	9.54	不明	－	－	－	－	－	－	－	－	4以前	床面の一部が残存。
SI344	13・18	不明	（193）×（152）	9.60	不明	－	－	－	－	－	－	－	－	不明	一部の床面以下が残存。
SI345	33	方形or長方形	（215）×（108）	9.65	N-20°-W	西壁	－	－	－	－	－	－	－	2a以前	北西コーナー付近が残存、東側部分調査区外。
SI346	24	方形or長方形	（409）×（112）	9.53	N-79°-E	南壁	－	－	－	－	－	－	－	4	南壁～東西両コーナー付近が残存。
SI347	41	不明	（106）×（96）	9.63	不明	－	－	－	－	－	－	－	－	2b以前	南壁付近の一部が残存、東側調査区外。
SI348	24・29	方形or長方形?	（520）×（454）	9.47	N-32°-W	カマド	北壁	－	－	（134）	平坦	－	－	4	南壁・北壁消失。
SI349	23	長方形or方形	（356）×（214）	9.52	N-45°-E	西壁	－	－	－	－	－	－	－	2b	北西部分が残存。
SI350	29	方形or長方形	（232）×（121）	9.62	N-7°-W	西壁	－	－	－	－	－	－	－	4以前	床面の一部が残存。
SI351	09	方形or長方形	（255）×（131）	9.56	N-38°-E	北壁	－	－	－	－	－	－	－	5以前	南壁・北壁・床面の一部が残存。
SI352	23・28	方形or長方形	（412）×（158）	9.56	N-5°-W	西壁	－	－	－	－	－	－	－	不明	西側部分が残存。
SI353	24・29	方形	650×625	9.44	N-23°-E	西壁	－	－	－	－	－	－	－	4	南側の床面・壁が消失。

※規模について、( )は現存値、[ ]は推定値を表す。
※床面標高は、各住居跡における最も低い値を示した。
※カマド燃焼部位置は、壁面の内側に構築されるものを「内」、壁面の外側に1/2程度張り出すものを「やや外」、全体が張り出すものを「外」とした。
※煙道部底面の「下る」の表記は、煙出し方向を指す。

【柱穴】

柱穴配置が明らかになった竪穴住居跡は 43 軒存在する。住居範囲の対角線上に主柱穴 4 基を配置するのが基本形態で、大半の竪穴住居跡がこれに該当する。ただし 4 基が配置される場合でも、SI340 のように柱筋が台形状に歪む例や、SI8・268・269・313・327・335・353 のように対角線上からややずれて配置される例が認められる。SI275・329・333・336・338 の主柱穴は 2 基で構成されると思われ、SI275・329・338 は住居範囲の東西軸上付近に配置されている。SI336 も東西に配置されているが、柱筋は北側に寄る。SI333 は南西コーナーと北東コーナーの対角線上に位置し、2 基ともにコーナー寄りに配置されている。SI336 と SI333 については本来 4 基が存在した可能性もあるが、これと対応するような柱穴は検出されなかった。

確認された柱痕跡の径は、15 ～ 20cm 前後である。最大は SI329 － P2 の 29cm で、SI314・SI316A・SI340 でも同等規模の柱痕跡が認められている。一部の竪穴住居跡では、柱穴の重複も認められる。根石を伴う柱穴はご

く稀であり、SI323 － P2、SI335 － P3、SI348 － P4 の 3 軒で確認された。また、SI339 － P3 もその可能性があり、堆積土上層から扁平な礫が出土している。

【カマド】

カマドは、41 軒で検出された。北壁に造り付けられる例が大半を占める。この中で SI269 のカマドはかなり東側に寄って付設されている。東壁に造り付けられる例としては SI264・271・313・317・324・326・328・331・334 があるが、軒数は少ない。また SI280 の南壁、SI283 の西壁といった稀な例もある。この傾向は、長町駅東遺跡全体を通じて共通する。なお、SI287 からはカマドではなく小規模な地床炉が検出されている。

これらのカマドの形態は、概ね下記のようにまとめられる。

a. 燃焼部

燃焼部の状況が把握できる竪穴住居跡は 36 軒である。燃焼部は壁内に位置するものが殆どで、SI265・267・268・285・323・326 のように全体の 1/2 程壁外を掘り込むカマドも存在するが、完全に壁外に位置するカマドは認められない。このため、全てのカマドには袖が伴う。袖の構築材には基本層Ⅳ層土が主に使用され、白色粘土等を用いたカマドは皆無であった。袖材には SI8・320・321・329 のように土器の破片や石器などを補強材に混入する例も存在するが、ごく少数である。焚口に芯材を用いる例としては SI8・265・271 の石材、SI314 の土師器転用材があり、前者 3 軒ではいずれも凝灰岩切石の使用が認められた。また SI274・280 では構築材の抜き取り痕とみられるピットのみが検出されている。

底面は概ね平坦にしつらえられているカマドが多く、底面を若干掘り窪めるのは SI8・264・265・269・271・319・326・333 の 8 軒である。また、SI320 ～ 322 の底面は起伏し、SI283・284・313 の底面は奥壁方向へと若干立ち上がる。SI312・328・332 では底面の中央付近に棒状礫による支脚が埋設され、SI312・332 の支脚は土器に接する面を平らに加工している。

奥壁まで残存する竪穴住居跡は 29 軒であるが、このうち煙道部へと平坦につながるカマドは 7 軒である。ほかは奥壁を介して煙道部へと繋がるが、奥壁高が 10cm 未満と低いものも 5 軒含まれる。

b. 煙道部

煙道部が検出された竪穴住居跡は、20 軒である。しかし完存する煙道部は、12 軒と少ない。部分的に残存する竪穴住居跡も含めて概ねの状況をみると、煙道部は長さが 100cm を超えるものが 12 軒あり、長町駅東遺跡全体をみてもこれが普遍的な形態である。特に SI316A・B や、SI321 の煙道部は、200cm を超える長さを有している。底面は煙出し方向に下がるか、あるいは平坦に達するものが主体である。ただし、SI265・284 のように底面が立ち上がるものも稀に存在する。煙出し部分は、ピット状に掘り込まれるものが 6 軒認められた。SI265・321・331 では、雨受けや煙突の補強材に転用されたとみられる土師器・須恵器が煙出しの底面から出土している。煙道部の構築にあたっては素掘りのものが殆どであるが、SI8・264・265・284 では掘り方を伴い、壁・天井を土材で構築している。

【その他の施設】

カマドの脇、もしくはカマドが位置する壁のコーナー付近に掘り込まれている土坑が、SI8・268・281・283・284・287・288・310・312 ～ 317・319 ～ 321・323・328 ～ 330・333・334・340 で検出されている。貯蔵穴と考えられるが、中には人為的に埋め戻されている土坑も認められる。規模・形態は様々であるが、これらを複数伴う竪穴住居跡や、掘り直しと思われる土坑の重複も一部で認められる。SI283 では 5 基が北西コーナーからカマド方向へと一列に重複し、この方向に向かって掘り直されたと考えられる。

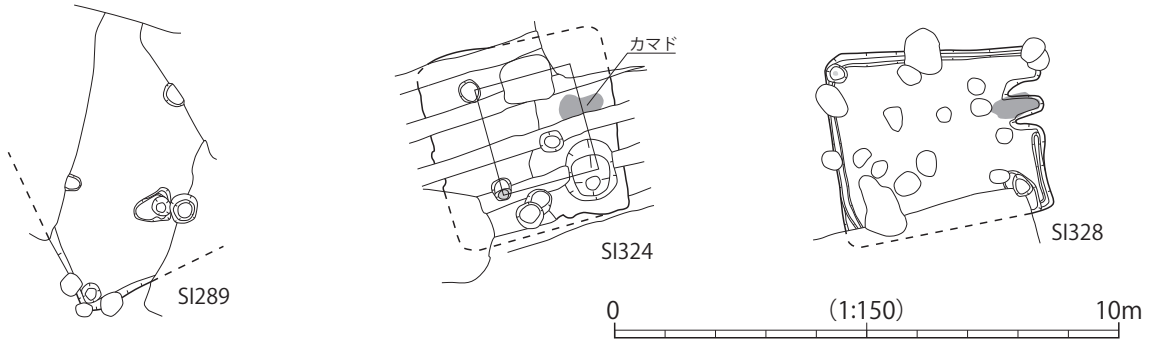
堆積土中に多量の焼土や炭化物を含む土坑（もしくはピット）を伴う、竪穴住居跡も認められる。SI8・315・319・322・325・327・333・335 がこれに該当する。カマド付近に配置されるものが多いが、やはり規模・形態に規則性は認められない。カマド内の塵灰を、処理するための施設と考えられる。

SI276 では、床面の中央付近に掘り込まれた土坑が検出されている。その底面からは敷き詰められたような状態で炭化物が検出された。しかし具体的な機能は明らかにできなかった。

②各期の様相

【1 期】（SI289・324・328）

時期が確定できた当期の竪穴住居跡は、3 軒である。このうち SI289 は 2a 期まで存続すると考えられるが、ここに示した。方位は四辺の向きでみると SI289 が 25°西に振れ、SI324 が 17°、SI328 が 7°西に振れる。規模は長軸で SI289 が 3.62m 以上、SI324 が 3.77m、SI328 が 4.16m を測る。平面形状は SI289 については不明であるが、SI324 は正方形、SI328 は西側に広がる不整方形を呈する。主柱穴の配置はいずれも不規則で、住居範囲の対角線上に 4 基が並ぶものはない。ただし、SI324 については第 295 図に示したような配置も考え得る。カマドは SI324・328 で検出され、ともに東壁に付設されている。また、SI324・328 では貯蔵穴とみられる土坑も検出されており、いずれもカマド側のコーナー部分に配置されている。SI324 ではその内部から土師器が 6 個体、潰れた状態で出土した。



第 295 図　竪穴住居跡集成図（1）－ 1 期

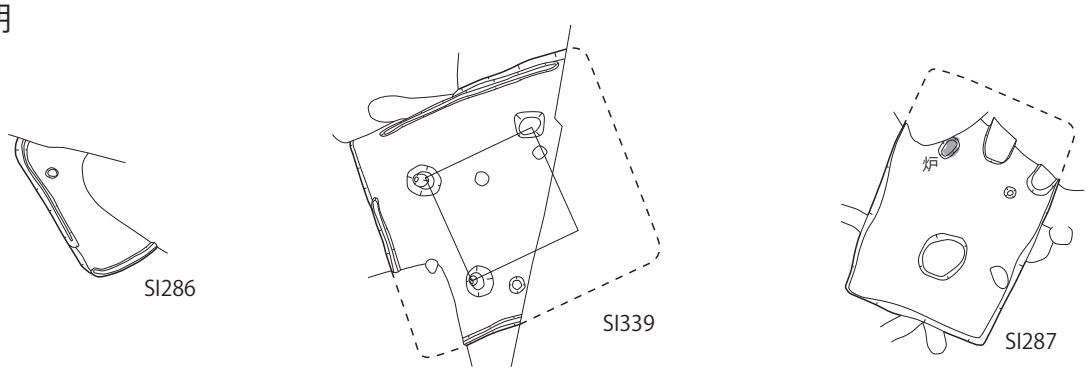
【2 期】（SI283・286 ～ 288・314・339・349）

7 軒が当期の竪穴住居跡として確定され、このうち SI286・287・339 が 6 世紀初頭～前葉の 2a 期、SI283・288・314・349 が 6 世紀中葉～末葉の 2b 期にそれぞれ比定される。方位は四辺の向きで SI283・287 が 15°～ 25°東に振れるが、ほかは西に振れる。その角度は SI286・349 が 32°～ 45°と大きいが、残りの 3 軒は 18°～ 19°とほぼ同じである。規模は 2a 期の 3 軒（SI287 含む）が長軸 3 ～ 5m 程度であるのに対し、2b 期の竪穴住居跡は 6 ～ 7m 以上の規模をもつ（SI349 は不明）。長町駅東遺跡全体をみても、当期には竪穴住居跡が大型化する傾向が窺える。平面形状は SI283・288・314・339 がほぼ正方形、SI287 が南北方向に長い長方形を呈する。SI286・349 については不明である。主柱穴は、SI283・288・314・339 では 4 基を対角線上に配置している。また SI283 では補助柱穴や壁柱穴を不規則に配置している。SI286・287・349 では主柱穴らしき柱穴は見当たらず、小規模なピットが認められるのみである。カマドは SI283・288・314 で検出され、SI283 では西壁、SI288・314 では北壁に付設されている。長町駅東遺跡全体では当期のカマドは北壁に付設されるものが殆どであり、例外として西壁に付設される例が SI283 を含み今のところ 2 軒、東壁の例が 1 軒である。また、SI314 のカ

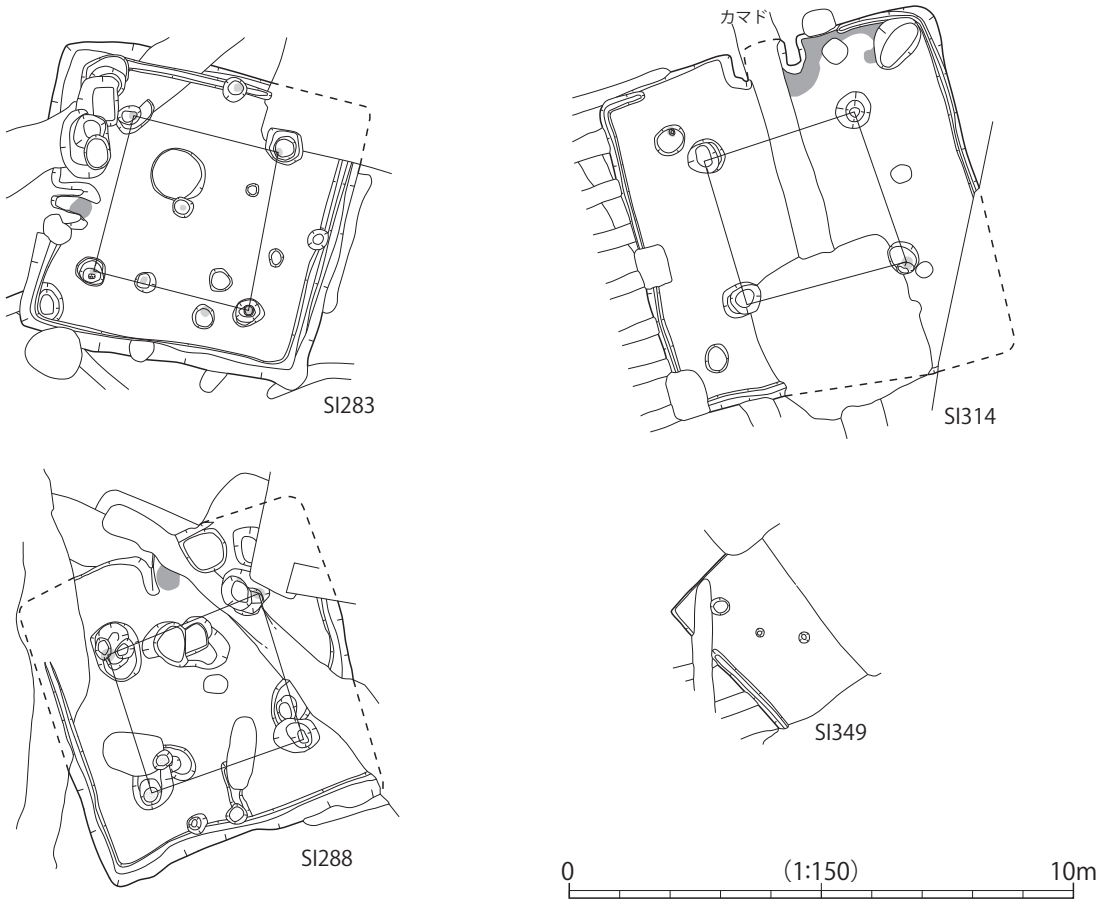
マドは袖の焚口部分に土師器甕を芯材として埋設している。長町駅東遺跡ではカマドの芯材に石材を使用する例が多く、土器の使用は少ない。実際の軒数では石材が 19 軒に対し、土器が 7 軒である。煙道部は今回いずれのカマドからも検出されておらず、形態は不明である。なお、SI287 ではカマドではなく地床炉が検出されている。

その他の施設としては、SI283・287・288・314 から貯蔵穴と思われる土坑が検出されている。いずれもカマドもしくは炉の設置方向のコーナー付近に、もしくはカマドの脇に位置している。SI288 ではその内部から 4 個体の土師器が出土している。また SI283 では北西コーナーからカマド脇にかけて 5 基が重複しながら並び、掘り直しによる重複であると考えられる。このうちの 2 基には、底面から壁面にかけて粘性のシルトが厚く貼られているのが確認されている。

2a 期



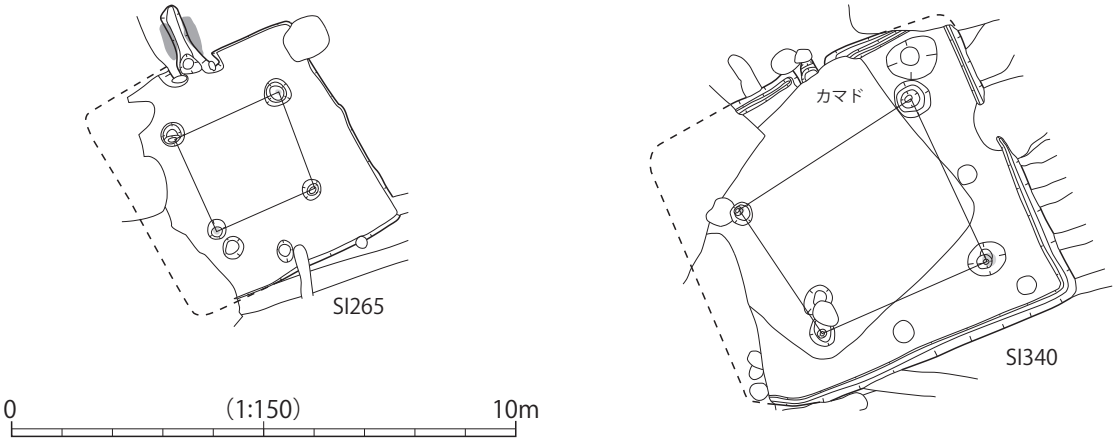
2b 期



第 296 図　竪穴住居跡集成図（2）－ 2 期

【3 期】（SI265・340）

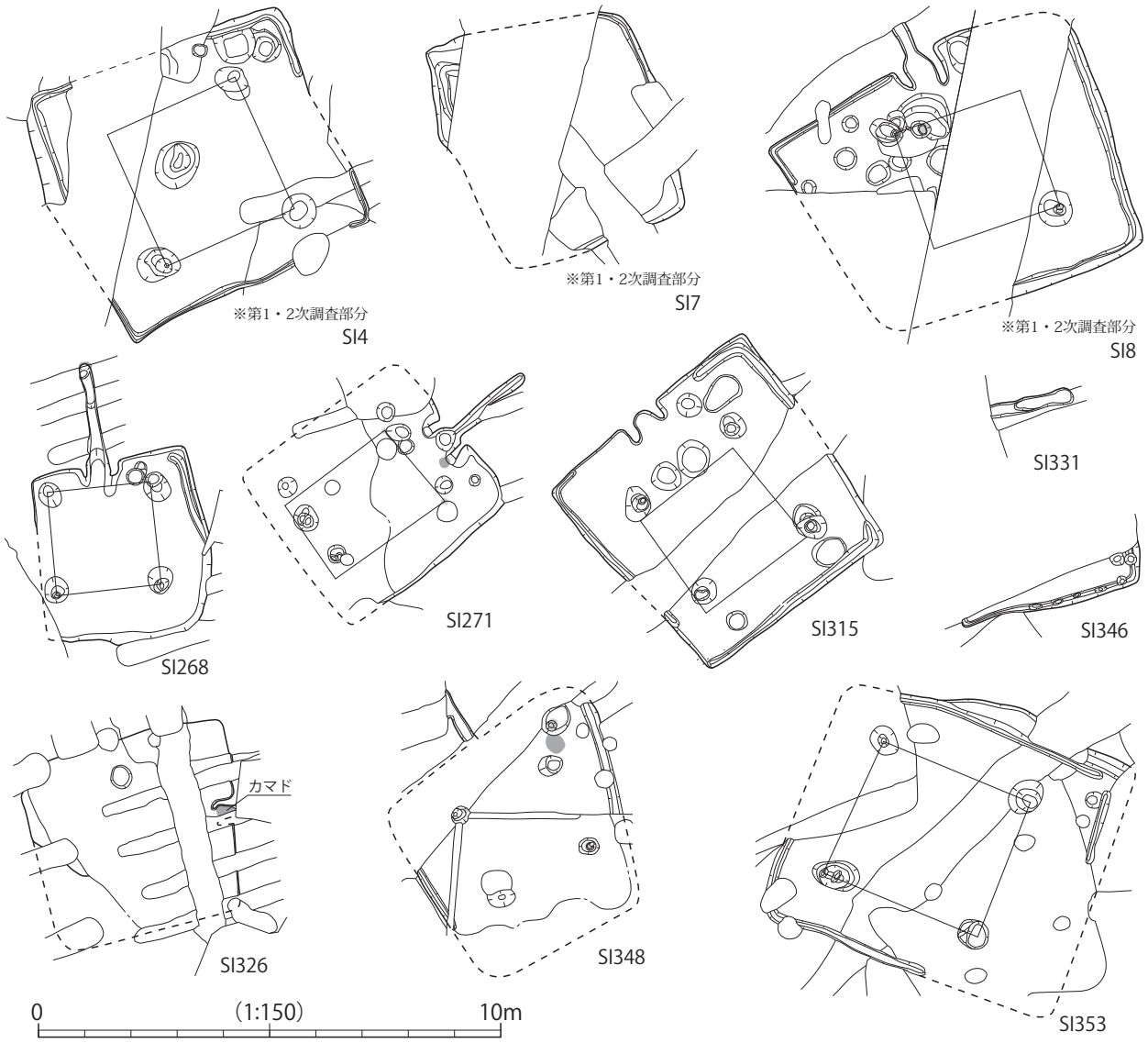
確定されたのは 2 軒のみである。方位は SI265・340 ともに N － 21 ～ 23°－ W と近い数値を示すが、長町駅東遺跡全体をみると当期の竪穴住居跡は 30 ～ 50°西側に振れるものが主体であり、これらよりは若干振れが小さいといえる。規模は長軸で SI265 が 4.52m、SI340 が 6.39m を測り、両者には 2m 近い差が認められる。実際に長町駅東遺跡における当期の竪穴住居跡の規模は、6m を超える大型のものと 4m 以下の小型のものに分かれる傾向がある。平面形状は SI265 がやや歪んだ方形、SI340 が若干東西方向に長い方形と思われる。主柱穴は SI265 の例では 4 基を対角線上に配置しており、SI340 では北西側の柱穴が偏って配置される。カマドはいずれも北壁に付設され、この付設方向が主体である点は 2 期と同じである。SI265 では焚口の芯材に円礫や凝灰岩の切石を用いているが、SI340 は焚口部分が残存しない。煙道部は SI265 で残存しており、その長さは 1.12m を測る。この規模は長町駅東遺跡において煙道部が検出された当期の竪穴住居跡としては、一般的な長さである。その他、SI340 では貯蔵穴とみられる土坑が検出されている。



第 297 図　竪穴住居跡集成図（3）－ 3 期

【4 期】（SI4・7・8・268・271・315・326・331・346・348・353）

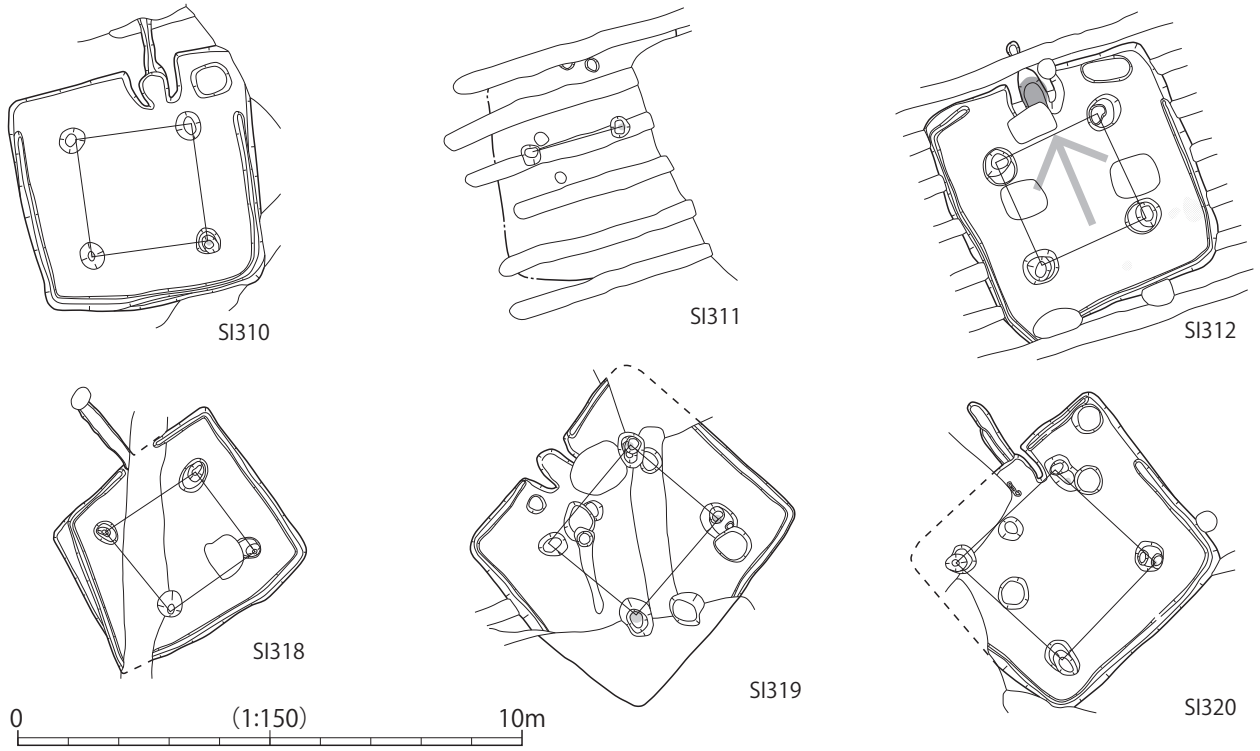
11 軒が確定された。方位は四辺が西に振れる竪穴住居跡が殆どで、東に振れるのは SI353 の 1 軒のみである。西への振れは 20 ～ 40°の間に収まる竪穴住居跡が多い。これは長町駅東遺跡全体でみても当期の竪穴住居跡における共通の方位といえ、SD66 や SA1・6 などの区画施設の方向性と概ね一致することから、これらの区画方向を意識していると考えられる。規模は、長軸で SI4 が 5.93m、SI8 が 6.72m、SI353 が 6.50m と大型であるほかは 4 ～ 5m 前後で、まとまりが認められない（SI331 は不明）。平面形状は整然とした方形ではなく、歪んだ形状を呈するものが多い。特に SI8・348 は、壁のラインが著しく歪む。主柱穴は SI4・8・268・271・315・348・353 で検出され、4 基を対角線上に配置するものが基本形態である。ただし SI8 や SI268 のように、住居の平面形状が歪むため対角線上からずれている例も認められる。また SI271 は主柱穴の南北方向の中間に別の柱穴が存在し、これを含む 6 基による主柱穴の配置も考えられる。カマドは SI7・346・353 を除く 8 軒で検出され、SI4・8・268・315・348 が北壁、SI271・326・331 が東壁に付設されている。袖材は基本層Ⅳ層土を主体としており、唯一 SI271 のみが凝灰岩切石を焚口の芯材としているが、袖に芯材を埋設するカマドは長町駅東遺跡全体では当期に増加する傾向にある。煙道部が完存するのは SI268・271 の 2 軒のみで、長さは SI268 が 1.85m、SI271 が 1.94m を測る。これも当期における長町駅東遺跡共通の傾向であり、長さが 1.5m を超える煙道部の増加が認められる。このように当期の竪穴住居跡は、形態・構造が多様化する。



第 298 図　竪穴住居跡集成図（4）－ 4 期

【5 期】（SI310 ～ 312・318 ～ 320）

当期に確定された竪穴住居跡は 6 軒である。方位は真北を基準とする傾向はなく、N － 6°～ 48°－ W と一定の方向も示さない。規模は、長町駅東遺跡全体でみると 4 期に比べて大小に分かれる傾向があり、概ね長軸 4.5 ～ 5m 程度と、3m 前後の竪穴住居跡が存在する。平面形状は正方形や長方形・不整方形と多様であり、4 期と同じ状況である。第 299 図に示した 6 軒も、SI311・312 以外は平面形状に歪みが認められる。主柱穴は 4 基を対角線上に配置するのが基本形態であるが、SI311 は 2 基しか検出されておらず、変則的な配置が想定される。カマドは SI311 を除く 5 軒で検出され、いずれも北壁に付設されている。当期は殆どのカマドが北壁に付設されるようになるが、東壁や西壁に付設される竪穴住居跡も若干残る。焚口芯材の埋設例も減少し、袖が残存する SI310・312・319・320 についてもその痕跡は認められていない。煙道部は 4 期よりもさらに長くなる傾向が窺え、全長 1.5m を超えるものが多数を占めるほか、逆に 1m 未満のものはごく僅かとなる。

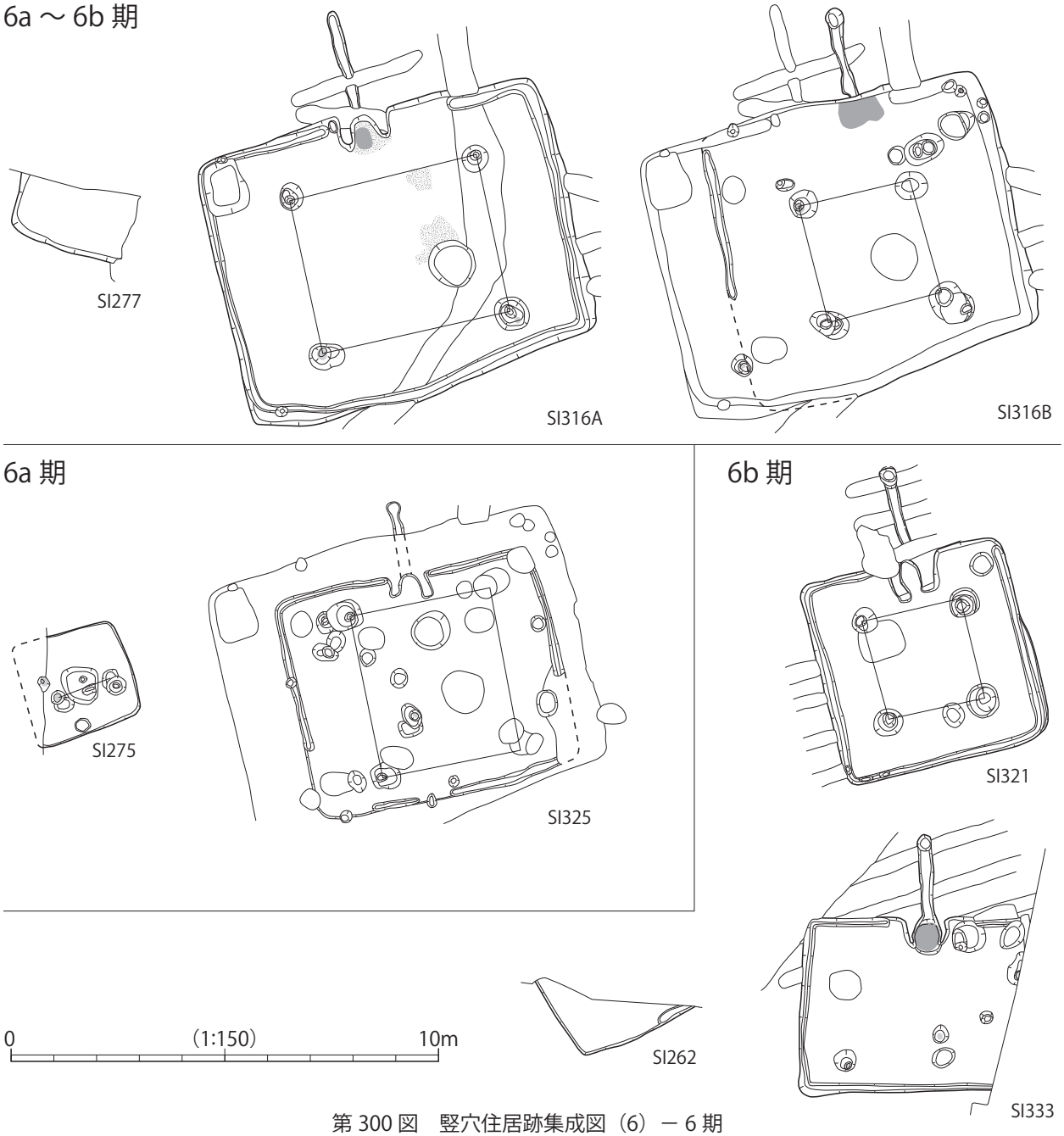


第 299 図　竪穴住居跡集成図（5）－ 5 期

【6 期】（SI262・275・277・316A・316B・321・325・333）

建て替えも含め、8 軒が確定される。8 世紀前葉の 6a 期に SI275・325 が、8 世紀中葉～末葉の 6b 期に SI262・321・333 が、6a 期～ 6b 期に SI277・316A・316B がそれぞれ比定される。当期の竪穴住居跡の方位は、四辺全体でみると 20°以下の角度で西に振れるものが多い。規模の点では長軸 5 ～ 6m と長軸 3.5m 前後の竪穴住居跡に分けられるが、5 期と比べ全体的に若干大型化することが指摘される。当期の竪穴住居跡の平面形状は方形のものが増え、一部長方形の竪穴住居跡も存在するが、全体的に整った形状が主体となる。柱穴は 4 基の主柱穴を対角線上に配置するという基本形態は変わらないが、SI275 のように 2 基を配置したものや SI333 のように不規則な配置のものも少数認められる。カマドは SI316A・316B・321・325・333 の 5 軒で検出され、いずれも北壁に付設されている。ただし長町駅東遺跡全体では、5 期と同じく東壁や西壁に付設されるカマドもあり、大きな変化は認められない。袖の構築方法についても同様で、石材や転用した土器を芯材に埋設する例が少数ではあるが存在する。SI321 では小礫や土器の破片などを土材に混入して補強を図っている。煙道部は 5 期よりもさらに延びる傾向があり、1.5 ～ 2m 以上のものが大半を占めるようになる。中でも SI316A のカマド煙道部は全長 2.65m を測り、当期の竪穴住居跡の中では最長である。

当期の竪穴住居跡の中で異質な存在とされるのが SI275、そして第 3 次調査の SI87 である。時期はともに 6a 期に属する。SI275 は長軸 2.5m 程、SI87 は長軸 3.5m 程といずれも小型の規模で、床面施設として大型の浅い土坑を伴う点で共通する。SI87 の土坑は被熱痕や炭化物、灰が内部に認められたことから「炉」として認識されているが、鍛冶関連の遺物は出土していない（仙台市教委、2009 年）。一方 SI275 は加熱の痕跡は認められなかったが、土坑内や床面上から鉄滓および鞴羽口など、鍛冶関連の遺物が出土している。明らかに居住用施設としての様相を呈してはおらず、これらの施設について今後の検討が要されるであろう。



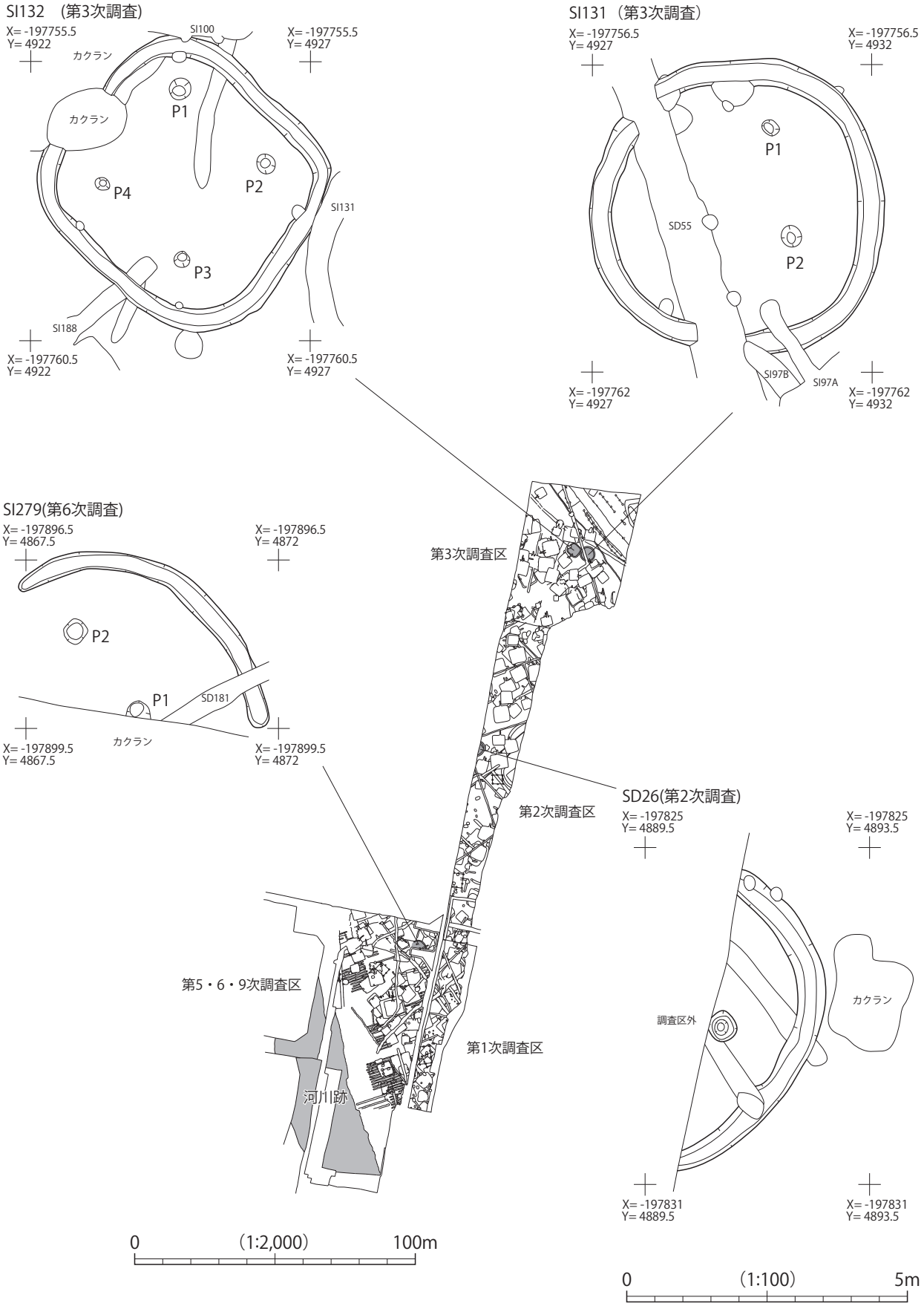
第 300 図　竪穴住居跡集成図（6）－ 6 期

（2）特殊建物跡（第 301 図）

既述の通り、SI279 は他の竪穴住居跡とは構造を異にしている。類似する形態の遺構として、第 3 次調査で検出された SI131・132 がある。掘り方をもたず、溝を巡らした内側に柱穴を配置する点で共通する。また「溝跡」として報告されているが、第 2 次調査の SD26 もその可能性が指摘される。なお、SI131・132 については同報告書の中で「平地式建物跡」の可能性が指摘されているが、本書では断定を避け、「特殊建物跡」としてまとめたい。

これらはいずれも幅 40 ～ 50cm 程度の周溝を巡らし、その走行状況は円形もしくは（隅丸）方形を呈する。周溝は SI131・132 では全周するが、SI279 では断続部が認められる。周溝内径（辺）の規模は概ね 4 ～ 4.5m の規模に収まり（SD26 は推定）、中型の竪穴住居跡程度の規模である。

柱穴は、SI132 の状況から 4 基を方形に配置するのが基本形態であると思われる。柱間は芯々で SI131 が 2m、SI132 が 2.1m、SI279 が 1.8m を測る。



第 301 図　長町駅東遺跡の特殊建物跡

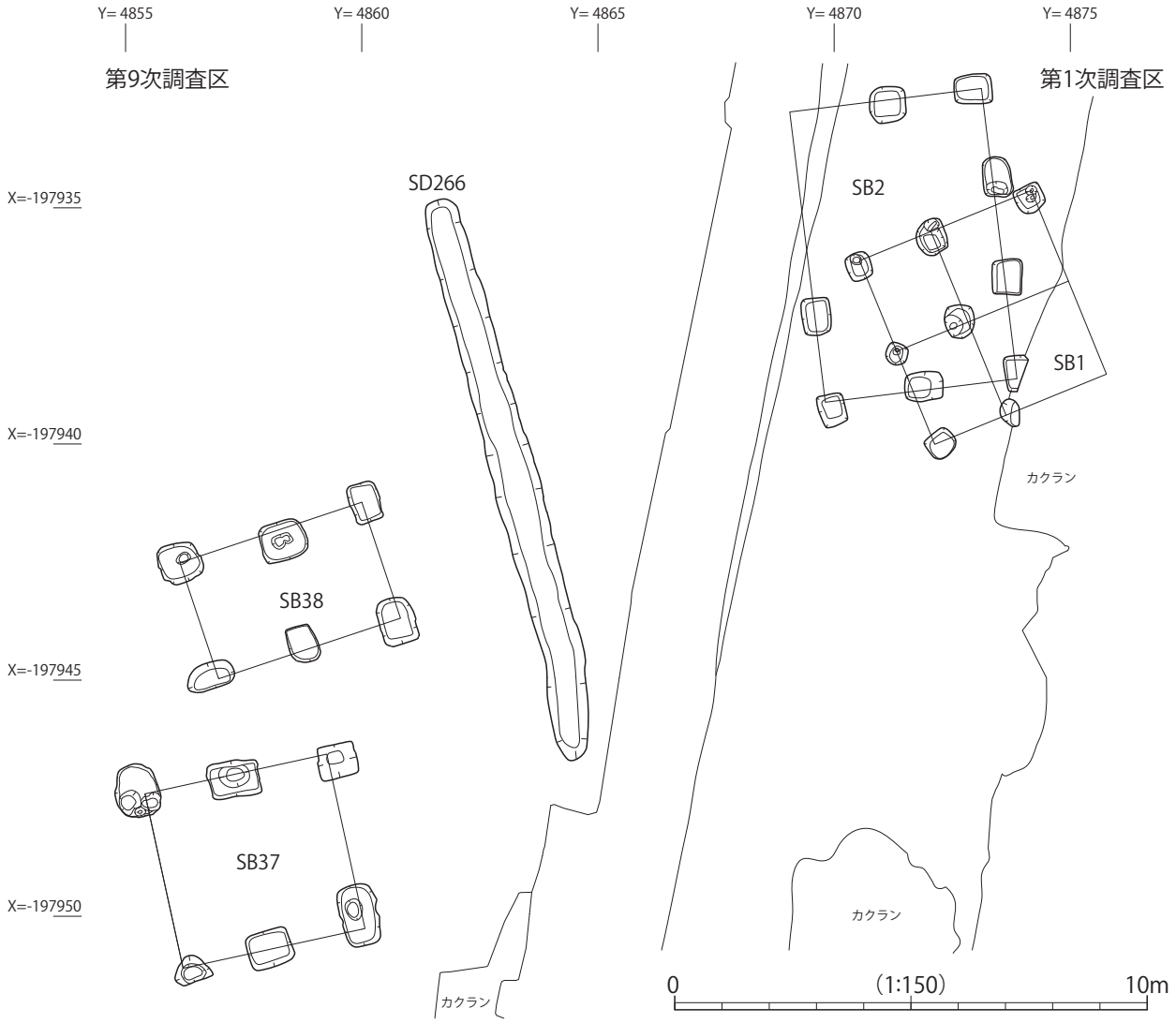
いずれも時期を決定できるような遺物は出土してないが、重複関係などから SI131・132 は 7 世紀前葉頃と考えられている（仙台市教委、2009 年）。SI279 は、本書編年の 2b 期（6 世中葉～末葉）以降としかいえない。SD26 は時期不明である。

（3）掘立柱建物跡（第 302 図）

掘立柱建物跡は、3 棟が検出された。分布上これらを竪穴住居跡と重ねると、SB39 は比較的中心寄りに位置するのに対し、SB37・38 は外縁付近に位置する。また、全ての掘立柱建物跡が竪穴住居跡を壊して構築されている。

棟方向は SB39 が N － 43°－ E と北東に面するが、SB37・38 は N － 72 ～ 79°－ E で、むしろ東に面する。3 棟ともに側柱建物で、特に SB37・38 は大型の柱穴で構成される。根石を伴う柱穴は認められなかった。

SB37・38 の東側、第 1 次調査区では SB1・2 が検出されている。その中間には、N － 15°－ W を指向する SD266 が位置している。この数値は SB37・38 の南北の柱筋方向とほぼ一致する。また SB1 は N － 25°－ W、SB2 は N － 7°－ W である、これらを含めても誤差は 10°以内に収まる。SB37・38 から SD266 までの距離は約 3 ～ 5m、SB1・2 から SD266 までの距離は 6 ～ 8m を測る。いずれも方形基調のしっかりとした柱穴を有する点や、竪穴住居跡を壊して構築されているという点でも共通性が認められる。



第 302 図　SB37・38、SD266 および周辺の掘立柱建物跡

(4) 材木列跡

今回報告する遺構の中で特筆されるのが、SA6 である。SI314 や SB37 との新旧関係から、4 期(7 世紀中葉〜末葉)に位置付けられる。これと同様の遺構が集落北辺の第 3 次および第 4 次調査区で検出されており(SA1)、本材木列跡との関係が考えられる。SA1 は N − 27 〜 36° − W を指向し(SA6 は N − 35° − W)、郡山 I 期官衙の時期に位置付けられている(仙台市教委、2007 年)。なお、この二つの材木列跡の距離は 165m 前後である。

(5) 集落の変遷(第 303 〜 310 図)

最後に、長町駅遺跡東遺跡に営まれた古墳時代〜古代の集落について、その変遷を追ってみたい。なお第 303 〜 310 図の各変遷図については、あくまで今回報告対象とした範囲に限定する。

長町駅東遺跡の集落変遷を考える上で重要なのが、北東に隣接する西台畑遺跡との対比である。同遺跡は長町駅東遺跡と同じく郡山官衙の造成や運営に関わる集落として認識されており、溝跡や材木列跡を区画施設に伴うなど、集落の構造にも共通点が多い。このため I 期官衙成立期にあたる 4 期以降については、両者を含めた検討を行うこととしたい。

1 期(引田式期)

この時期の竪穴住居跡は、3 軒(SI289・324・328)のみである。概ね高位面の北東端部から河川跡に向かうようにして点在する。各主軸方向をみると、傾斜に対して SI289 が平行、SI324・328 が直交して構築されているのが判る。今のところ長町駅東遺跡では当期の竪穴住居跡はほかに検出されていないことから、これらが集落形成の初現であると思われる。

2a 期〜 2b 期(住社式期)

時期が確定されたのは、SI283・286 〜 288・314・339・349 の 7 軒である。SI289 も 1 期から存続する可能性もあるが、便宜上ここには含めていない。6 世紀初頭〜前葉の 2a 期に比定されるのが SI286・287・339、6 世紀中葉〜後葉の 2b 期に比定されるのが SI283・288・314・349 である。当期には第 1・2 次調査の SI5・6・22・42・46、第 3 次調査の SI79、第 4 次調査の SI134・136 も構築され、さらに第 3 次調査で検出された一本柱列跡 SA4・5 も構築されるなど、2b 期を中心に区画施設を伴う集落への発展の兆しが看取される。

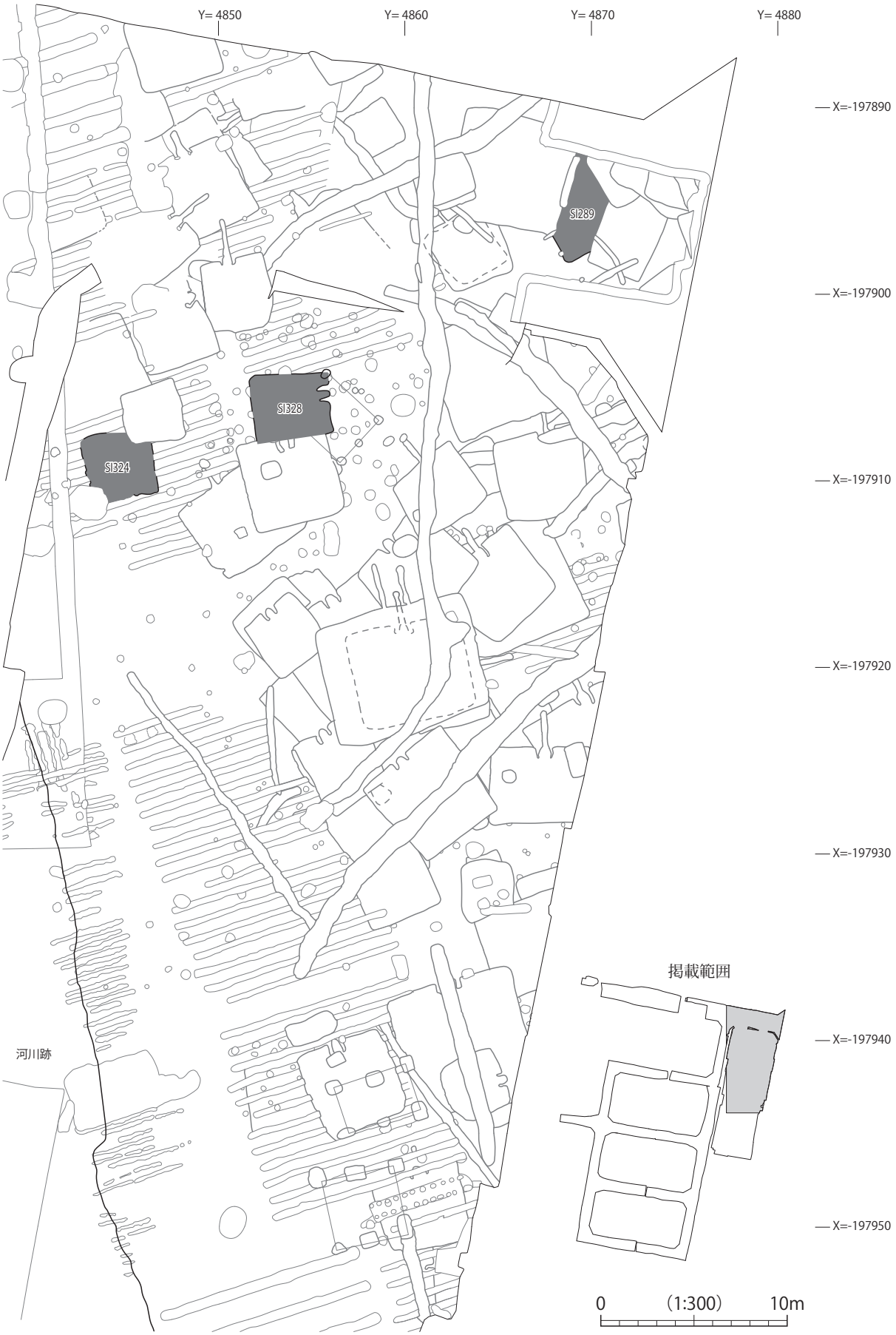
3 期(栗囲式期古段階)

SI265・340 の 2 軒のみであるが、当期には第 3 次調査区で 16 軒の竪穴住居跡が構築されている。2 期の区画施設であった一本柱列跡 SA4・5 はその機能を失うが、中型の溝跡 SD63 が掘削されており、これが新たな区画施設として代替された可能性も考えられる。

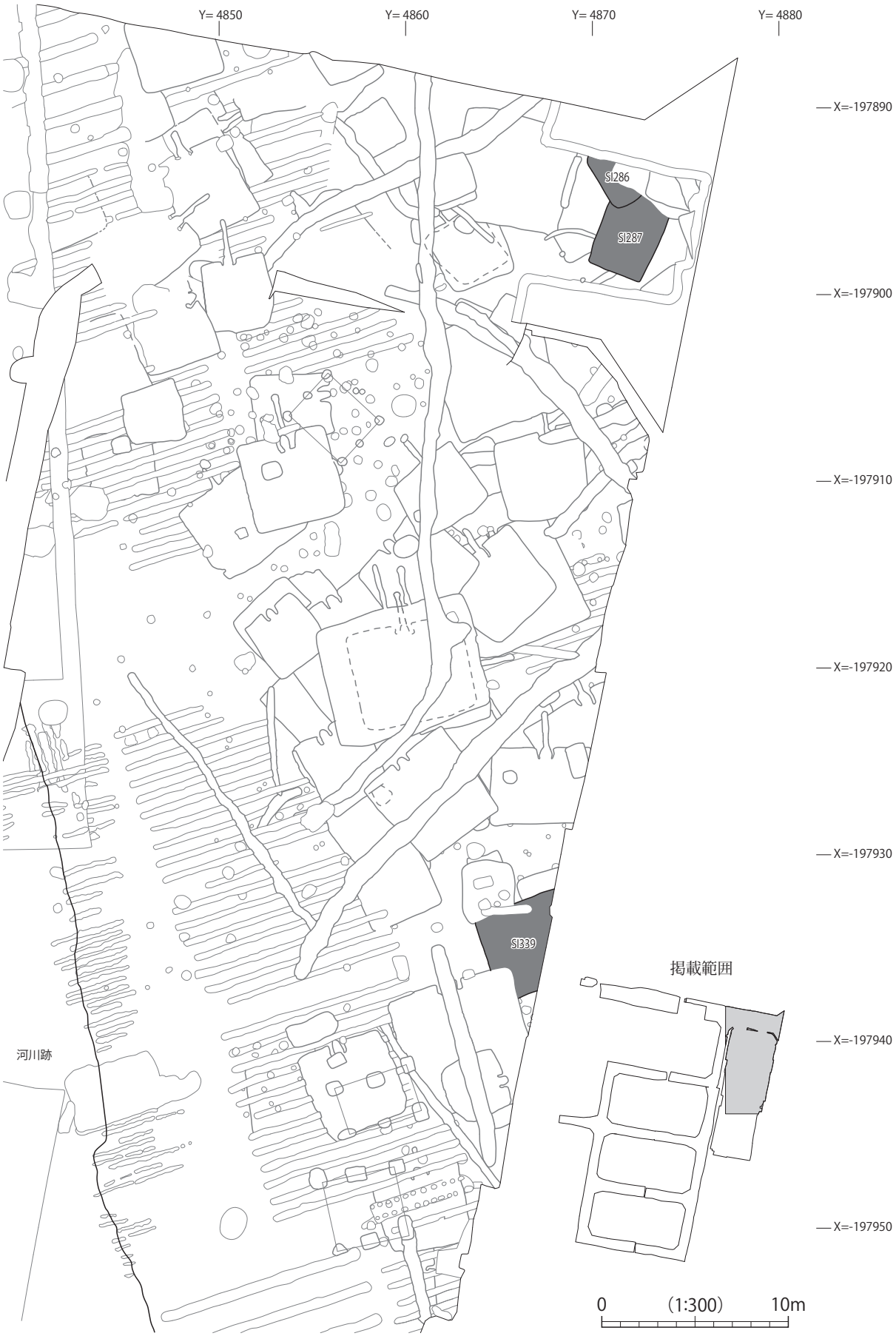
4 期(郡山 I 期官衙期)

SI4・7・8・268・271・315・326・331・346・348・353 の 11 軒がある。集落全体では、早い段階で大型の溝跡 SD66 や材木列跡 SA1 などの区画施設が集落の北側に整備され、対する南側にも今回報告した SA6 が構築される。竪穴住居跡も極端に増加し、管見では今のところ区画内で 60 軒(以上)を数えることができる。分布も区画内のほぼ全域とその北側外縁へと広がり、一つの画期をむかえる時期である。

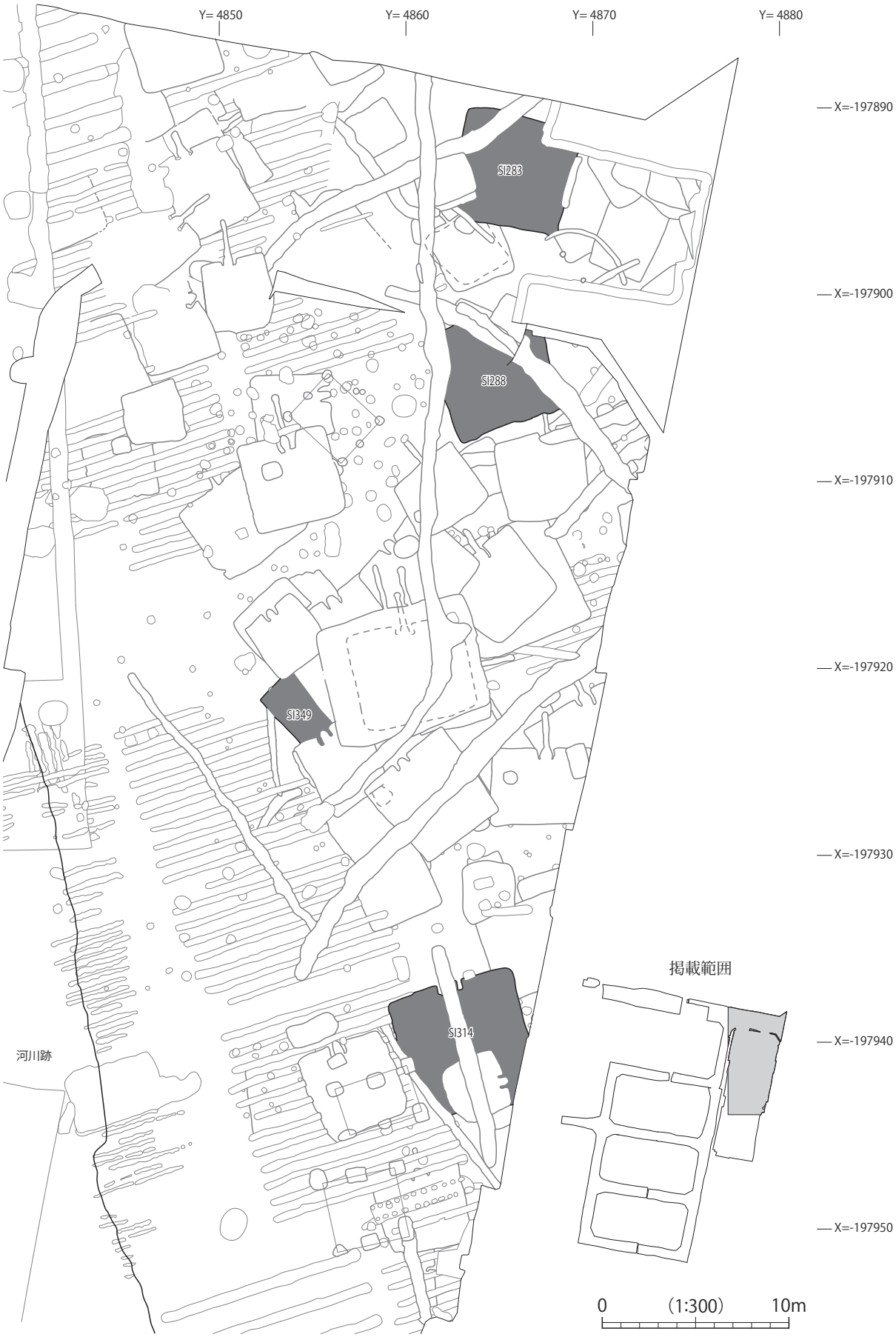
この時期には、西台畑遺跡でも同様の現象が認められる[註 1]。同遺跡では現在までに 128 軒の竪穴住居跡が調



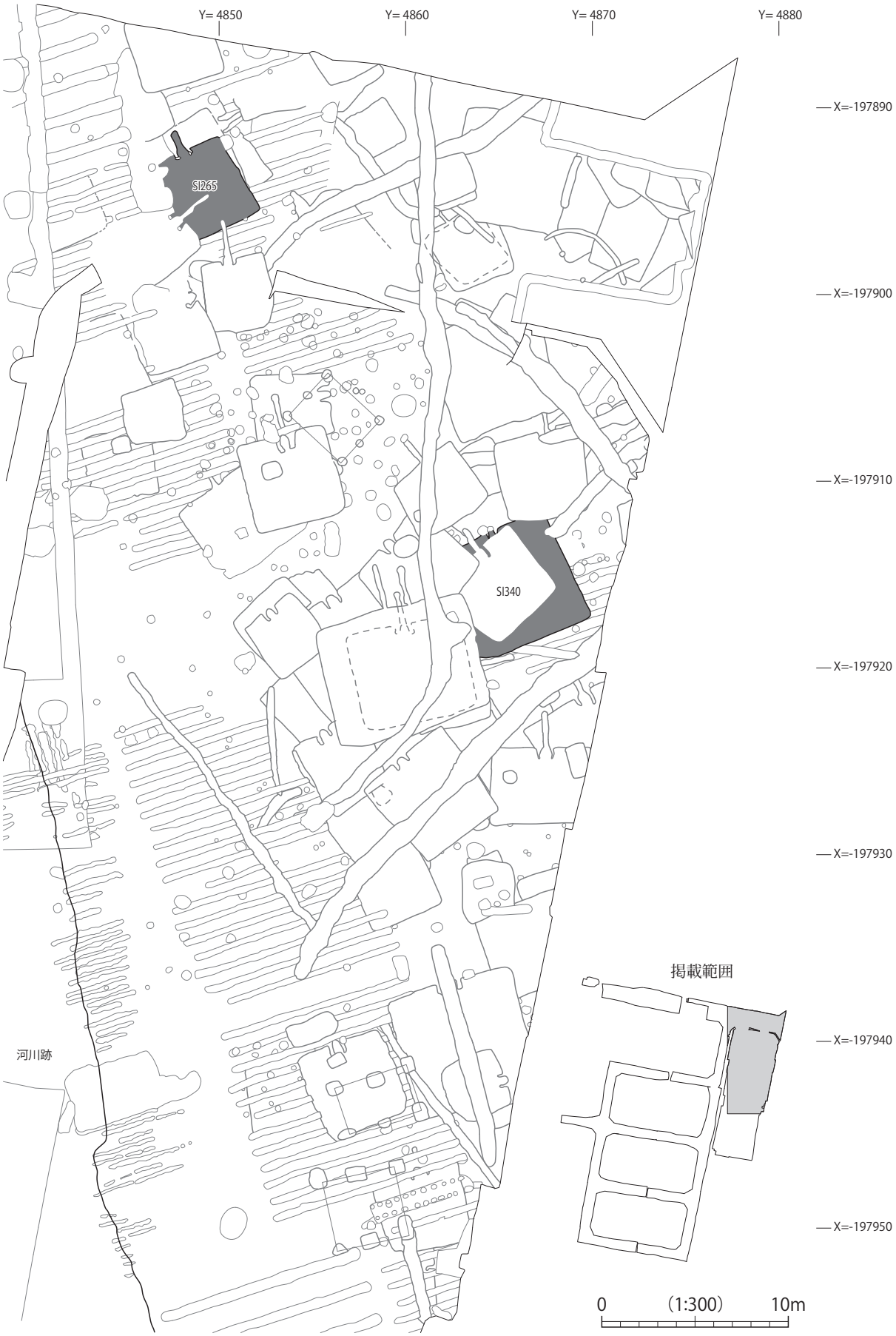
第 303 図　第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図（1 期：引田式期）



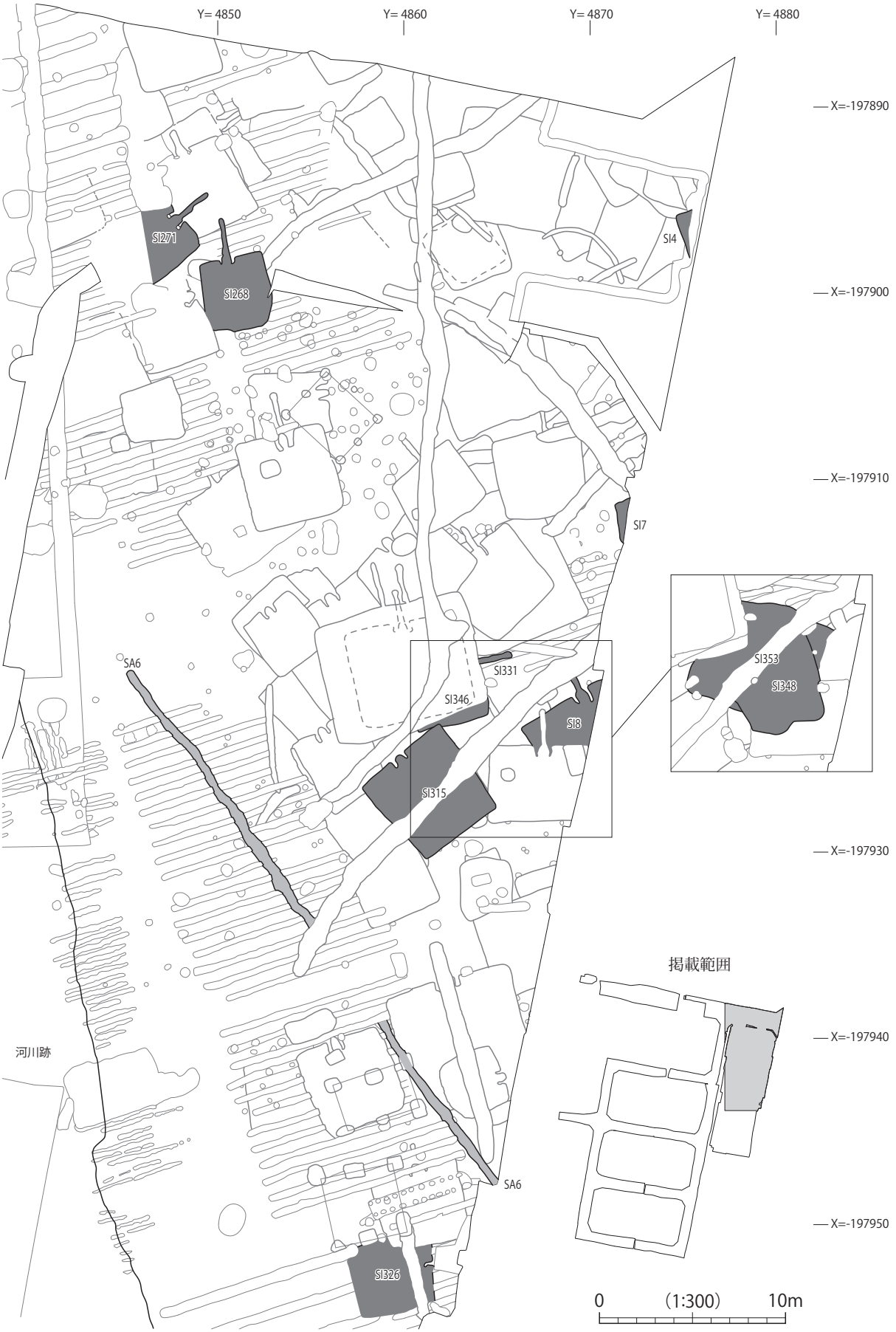
第 304 図　第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図（2a 期：6 世紀初頭～前葉）



第 305 図　第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図（2b 期：住社式期）

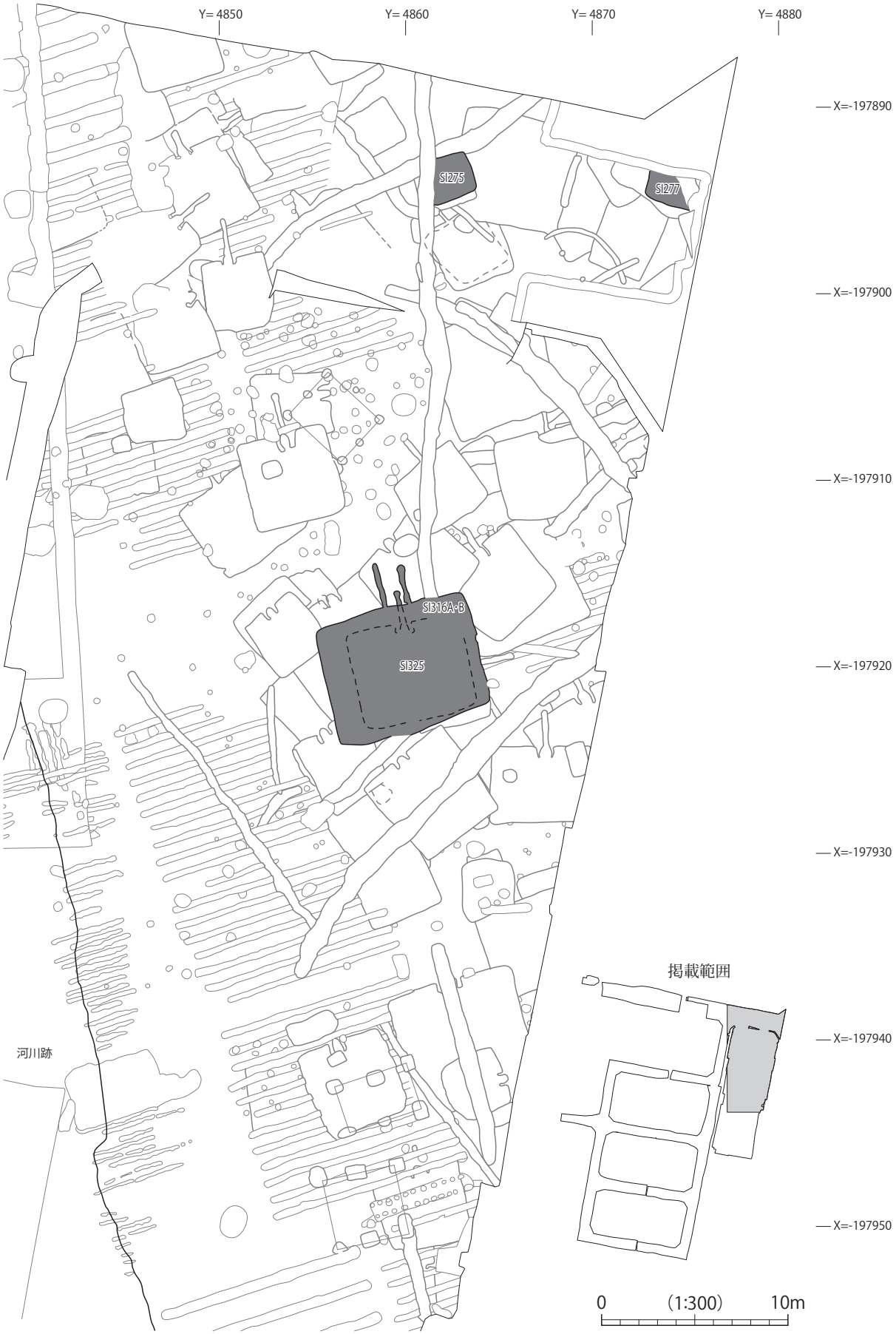


第 306 図　第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図（3 期：栗囲式期古段階）

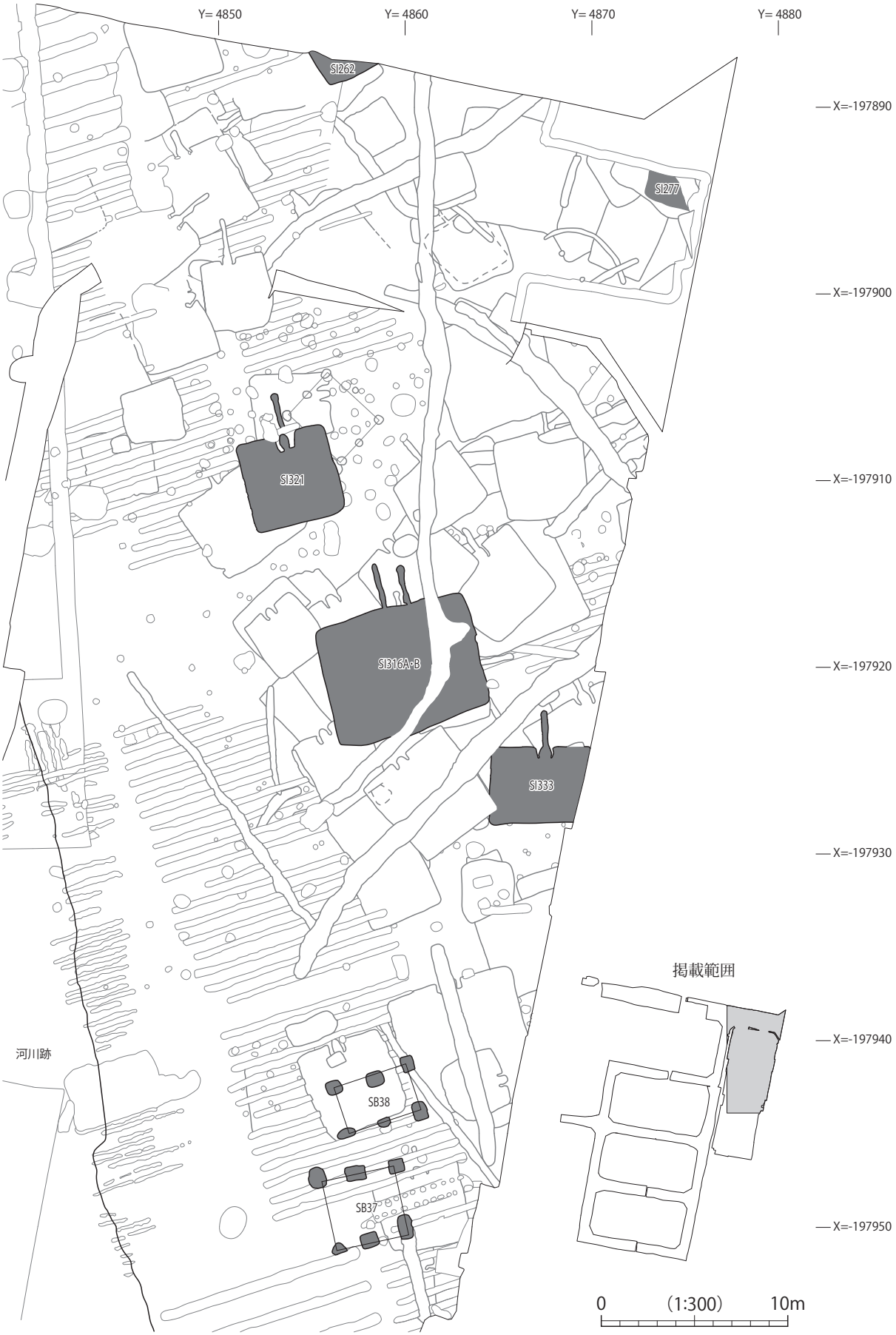


第 307 図　第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図（4 期：郡山Ⅰ期官衙期）

第 308 図　第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図（5 期：郡山 II 期官衙期）



第 309 図　第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図（6a 期：8 世紀前葉）



第 310 図　第 5・6・9 次調査古墳時代～古代集落変遷図（6b 期：8 世紀中葉～末葉）

査されている。最も遡るのは古墳時代前期後葉（塩釜式期）の竪穴住居跡 3 軒であるが、集落としての継続性が認められるのは本書の時期区分でいうところの 2b 期以降である。

5 期（郡山Ⅱ期官衙期）

SI310・311・312・318 ～ 320 の 6 軒があるが、長町駅東遺跡では竪穴住居跡の分布状況や軒数は 4 期と比べて殆ど変化はなく、この点については西台畑遺跡でも同様であるとみられる。

6 期

SI262・275・277・316A・316B・321・325・333 の 8 軒があり、このうち SI275・325 が 8 世紀前葉の 6a 期、SI262・321・333 が 8 世紀中葉～末葉の 6b 期、SI277・316A・316B が 6a 期～ 6b 期にまたがる。長町駅東遺跡では竪穴住居跡の数は 5 期よりも減少し、当期に確定されるのは 32 軒だけとなる。特に後半の 6b 期になると 9 軒しか存在しなくなる。

註 1　西台畑遺跡では、あすと長町土地区画整理事業に伴って平成 10 年度から発掘調査が実施されている。このうち第 1 ～ 8 次調査まで報告書が刊行されており、文中の竪穴住居跡の編年観についてはこれらの報告に従った。このうち本書編年の 4 期に比定されるのは SI2・4・7・32・42・55・56・62・64・67・69・74・76 ～ 78・80・84・86・90・113・120 である。

第 3 節　まとめ

今回報告した第 5･6･7･9 次調査は、河川の北岸に営まれた古墳時代～古代の集落跡を中心とした調査であった。ちなみに 40 街区南側の JR 太子堂駅前広場周辺の道路を対象とした試掘確認調査では、名取川の可能性がある大規模な河川堆積を広範囲に確認している。40 街区での調査状況から、長町駅東遺跡の西側では、北を流れる広瀬川から南の名取川方向に向かって、小規模な河川が流れを変えながら流下していたことが考えられる。こういった地勢の中に立地する長町駅東遺跡の、今回の調査成果について以下にまとめる。

（1）縄文～弥生時代

当時代については遺構が全く検出されず、遺物のみが出土している。少なくとも調査区内においては人々の生活域形成には至らず、むしろその外縁的な場所であったと考えられる。

縄文時代の遺物については、第 9 次調査で基本層 XV 層から後期前葉の土器が、IXa 層から帰属時期不明の土器が出土した。量は少なく、IXa 層では 1 個体が壊れたようなまとまりが認められたが、接合するものはなかった。

弥生時代の遺物については、第 5・6・9 次調査で土器・石器が相当数出土した。しかし古墳時代～古代の遺構検出時や遺構堆積土中の層位不明遺物が大半を占め、遺物包含層からの出土は割合的に少ない。包含層の遺物は全て基本層Ⅳ層から出土したが、遺物の分布には隔たりがある。北側の第 5・6 次調査区では数点程度の出土であったのに対し、第 9 次調査区では比較的集中して出土する傾向が窺われた。ただし第 9 次調査区では古墳時代以降の遺構が激しく重複しているため、Ⅳ層の残存範囲は部分的である。土器は殆どが中期中葉の桝形囲式期のものである。破片資料が多勢を占め、接合した個体資料はごく僅かであった。

(2) 古墳時代～古代

竪穴住居跡・竪穴遺構 76 軒、掘立柱建物跡 3 棟、材木列跡 1 条、溝跡 17 条、土坑 22 基、ピット 54 基、性格不明遺構 4 基が検出された。遺構は高位面のみに検出され、当時の低位面は河川であったと思われる。当時代の遺跡内は居住域として長期にわたって存続し、最終的には溝跡群を中心とする生産域的な様相を示すようになる。

竪穴住居跡の時期は、1 ～ 6 期に大別される。時期が確定できなかった竪穴住居跡も 35 軒存在するが、概ねの集落変遷は辿ることができた。最も遡るのは引田式期（本書 1 期）の 2 ～ 3 軒であり、長町駅東遺跡では初の発見である。その後竪穴住居跡の数が減少傾向にあるものの、郡山Ⅰ期官衙期（4 期）になると区画施設を伴う大規模な居住域を形成する。第 9 次調査で検出された材木列跡 SA6 はこの居住域の南縁を区画する施設と思われ、今回の調査における大きな成果の一つである。郡山Ⅱ期官衙期（5 期）に移行すると竪穴住居跡の数は若干減少するが、官衙に関連する居住域としての機能を維持していたと思われる。ところが官衙の機能が衰退し、さらに多賀城にその機能が移転する時期（6 期）になると竪穴住居跡の数が激減し、相対して旧区画の縁辺付近や外縁部を中心に掘立柱建物跡が構築されるようになる。なお、長町駅東遺跡の集落における最終的な廃絶時期は判然としないが、これまでの調査成果によると竪穴住居跡や掘立柱建物跡に 9 世紀代に下る遺物は認められない。

居住域としての機能が失われると、調査区内は溝跡が検出遺構の主体となる。これらの配置に規則性は認められないが、一部には地形を意識したような方向性を示すものもあり、恐らく生産域（耕作域）の土地割りや灌漑を兼ねた溝跡が大半であると思われる。重複関係から新しく位置付けられる SD7・180 の上層には灰白色火山灰が堆積しており、9 世紀を中心にこの地が耕地化していたことが窺われる。

(3) 中世～近世

掘立柱建物跡 1 棟、小溝状遺構 258 条、溝跡 61 条、井戸跡 4 基、土坑 68 基、ピット 344 基、性格不明遺構 9 基が検出された。遺構の分布は拡大し、低位面にも検出されるようになる。

当時代の遺跡内は、一貫して生産域（耕作域）の様相を呈する。小溝状遺構は大半がその耕作痕と思われ、高位面のほぼ全域と、低位面の南西寄りを中心に検出された。高位面では A 群が整然と畑の 1 区画を示すような単位で並び、これらに混じって検出された SX25 ～ 27 も、耕作関連の施設であると思われる。

当時代の遺物はごく僅かであり、遺構出土の遺物のうち図化できたのは陶磁器 3 点と木製品 1 点だけである。このうち SX27 から出土した土師質陶器の灯明具はいわゆる「秉燭（ひょうそく）」で、18 世紀のものである。今回検出された遺構は、近世を中心とするものと考えたい。

引用・参考文献

吾妻俊典　2004　「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代」『宮城考古学』第 6 号　宮城県考古学会

加藤道男　1983　「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

菊池佳子　1994　「多賀城以前の陸奥国と須恵器」『歴史』第 82 号　東北史学会

木本元治　1990　「南東北地方における歴史時代の須恵器編年Ⅰ」『伊東信雄先生追悼 考古学古代史論攷』
伊東信雄先生追悼論文集刊行会

工藤信一郎　2010　「長町駅東遺跡・西台畑遺跡の集落について」『宮城考古学』第 12 号　宮城県考古学会

国士舘大学考古学会　2009　『古代社会と地域間交流』六一書房
松本太郎「鬼高系の系譜と歴史的背景」　富田和夫「移民の携えた土器」
桜岡正信「古代東北と上野」　池田敏広「栃木県域における 6・7 世紀の土器様相」
長島榮一「官衙からみた関東系土師器」　村田晃一「律令国家形成期の陸奥北辺経営と坂東

斎野裕彦　2002　「農具・石庖丁・大型直縁刃石器・石鎌」『考古資料大観 9　石器・石製品・骨角器』小学館

櫻井友梓　2011　「古墳時代終末期から多賀城創建前後の須恵器生産の展開」『宮城考古学』第 13 号　宮城県考古学会

佐藤敏幸　2007　「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』　東北学院大学文学部

仙台市教育委員会　1992　『郡山遺跡―第 65 次発掘調査報告』仙台市文化財調査報告第 156 集
1992　『郡山遺跡―第 112 次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 222 集
1994　『南小泉遺跡―第 22・23 次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 192 集
1998　『南小泉遺跡―第 26 次調査報告書―』仙台市文化財報告書第 225 集
1998　『南小泉遺跡―第 30・31 次発掘調査報告書―』仙台市文化財報告書第 226 集
2000　『王ノ壇遺跡』仙台市文化財調査報告書第 249 集
2001　『郡山遺跡―第 124 次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 251 集
2004　『鴻ノ巣遺跡―第 7 次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 280 集
2005　『郡山遺跡発掘調査報告書―総括編―』仙台市文化財調査報告書第 283 集
2007　『長町駅東遺跡第 4 次調査』仙台市文化財調査報告書第 315 集
2008　『長町駅東遺跡第 1・2 次調査』仙台市文化財調査報告書第 324 集
2008　『南小泉遺跡他』仙台市文化財調査報告書第 326 集
2009　『長町駅東遺跡第 3 次調査』仙台市文化財調査報告書第 340 集
2010　『西台畑遺跡第 1・2 次調査』仙台市文化財調査報告書第 359 集
2010　『沼向遺跡第 4 ～ 34 次調査（第 9 分冊）』仙台市文化財調査報告書第 360 集
2011　『西台畑遺跡第 3 次調査』仙台市文化財調査報告書第 388 集
2013　『西台畑遺跡第 8 次調査』仙台市文化財調査報告書第 409 集
2013　『西台畑遺跡第 4・5・7 次調査』仙台市文化財調査報告書第 411 集
2013　『郡山遺跡第 167・180・196 次調査』仙台市文化財調査報告書第 412 集

高橋誠明　1999　「宮城県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』（第 5 号）東国土器研究会

辻　秀人　1984　「宮城の横穴と須恵器」『宮城の研究 1 考古学篇』　清文堂

東北古代土器研究会　2005　『東北古代土器集成―古墳後期～奈良・集落編―』＜福島＞　研究報告 1
2005　『東北古代土器集成―古墳後期～奈良・集落編―』＜宮城＞　研究報告 2
2008　『東北古代土器集成―須恵器・窯跡編』＜陸奥＞　研究報告 3

奈良佳子　2003　「宮城県域の 7 世紀の須恵器」『古代東北北海道研究会資料』古代東北北海道研究会

奈良文化財研究所　2003　『古代の官衙遺跡 Ⅰ遺構編』
2004　『古代の官衙遺跡 Ⅱ遺物・遺跡編』

古川市教育委員会　1991　『名生館遺跡Ⅸ』古川市文化財調査報告書８集
宮城県教育委員会　1991　『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 140 集
1994　『山王遺跡八幡地区の調査』宮城県文化財調査報告書第 162 集
1999　『名生館遺跡・下草古城本丸跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 181 集
2001　『山王遺跡八幡地区の調査 2―古墳時代後期 SD2050B 河川編―』宮城県文化財調査報告書第 186 集
村田晃一　1996　「陸奥国における７世紀の様相」『飛鳥・白鳳時代の諸問題Ⅰ』 国際古代史シンポジウム実行委員会
2000　「飛鳥・奈良時代の陸奥国北辺」『宮城考古学』第２号　宮城県考古学会
2002　「7 世紀集落研究の視点（1)」『宮城考古学』第４号　宮城県考古学会
2003　「宮城県中・南部における６～８世紀の土師器編年」『古代東北北海道研究会第１回研究資料』
古代東北北海道研究会
2007　「ｖ．宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
柳沼賢治　1999　「福島県における５世紀土器とその前後」『東国土器研究』（第５号）東国土器研究会
利府町教育委員会　2011　『硯沢窯跡Ⅱ』利府町文化財調査報告書第 13 集